

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

現代日本語における統語的述語名詞の研究

新山 聖也

2021年度

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

現代日本語における統語的述語名詞の研究

新山 聖也

2021年度

## 目次

序章 本研究の背景と目的 .....	1
1. 本研究の背景 .....	1
2. 本研究の目的 .....	2
3. 本論文の構成 .....	4
第1章 本研究の理論的背景と手法 .....	8
1. はじめに .....	8
2. モジュール形態論と統語的述語名詞 .....	8
2.1 統語的語形成と統語的述語名詞 .....	8
2.2 述語名詞と統語的述語名詞 .....	14
3. 本論文で採用する手法 .....	19
3.1 統語論的アプローチ .....	20
3.2 モジュール形態論と分散形態論 .....	21
4. 動詞句に関する理論的前提 .....	25
4.1 動詞句の構造 .....	25
4.2 動詞句の補文構造 .....	30
5. 名詞句に関する理論的前提 .....	33
5.1 名詞句と DP .....	33
5.2 名詞述語文の主語位置 .....	37
6. おわりに .....	39
第2章 統語的述語名詞の個別的な分析と統一的な分析 .....	41
1. はじめに .....	41
2. 各形式に関する先行研究 .....	41
2.1 「-ばなしだ」 .....	42
2.2 「-たてだ」 .....	44
2.3 「-すぎだ」 .....	47
2.4 「-かけだ」 .....	51
2.5 「-気味だ」 .....	54
2.6 「-放題だ」 .....	55
2.7 各形式のまとめ .....	58
3. 統語的述語名詞の形態論的特徴 .....	59

4. 統語的述語名詞の統語論的特徴	61
5. 統語的述語名詞の意味論的特徴	63
5.1 状態性	63
5.2 アスペクト性	66
6. おわりに	68
第3章 述語名詞と文末形式における内項主語構造	69
1. はじめに	69
2. 研究の背景	71
2.1 「-すぎだ」の分析（由本 2012）、「-たてだ」の分析（山田 2005）	71
2.2 複雑述語の統語構造	72
3. 受動文との比較	73
4. 単純な名詞述語文との比較	77
5. 述語名詞「-ばなした」と文末形式「-ままだ」の比較	80
6. 提案	82
6.1 内項主語構造のメカニズム	82
6.2 外項の抑制に関するメカニズム	85
7. 発展	87
7.1 「-たてだ」「-かけだ」と「-ばかりだ」「-途中だ」	87
7.2 そのほかの形式への拡張	92
8. おわりに	94
第4章 述語名詞の意味構造と統語構造	96
1. はじめに	96
2. 研究の背景	98
2.1 「-すぎる」と「-すぎだ」の意味構造	98
2.2 「-すぎる」と「-すぎだ」の統語構造	101
3. 「-すぎだ」の意味解釈に関する観察	104
4. 「-すぎだ」の構造と意味解釈	107
4.1 意味構造と頻度解釈	107
4.2 統語構造と数量解釈	108
5. 「-すぎだ」における意味構造と統語構造の関係	111
6. 議論の拡張	116
6.1 意味構造における対立	116

6.2 統語構造における対立	119
7. おわりに	121
<b>第5章 外項を主語とする述語名詞について</b>	<b>122</b>
1. はじめに	122
2. 研究の背景	123
2.1 述語名詞の統語構造	123
2.2 述語名詞の意味解釈	126
3. 外項を取る述語名詞の統語構造	129
3.1 述語名詞「-すぎだ」の統語構造	129
3.2 「他動詞+すぎだ」のメカニズム	132
3.3 議論の拡張	135
4. 外項を主語とする述語名詞の意味解釈	136
4.1 習慣文と ILP/SLP	137
4.2 外項を主語とする「-すぎだ」の意味解釈	139
4.3 外項を主語とする述語名詞の意味解釈	142
5. おわりに	145
<b>第6章 統語的複合動詞の補文構造と名詞化形式</b>	<b>146</b>
1. はじめに	146
2. 研究の背景	147
3. 名詞化と現象観察	152
3.1 複雑事象名詞と述語名詞	152
3.2 補文構造と名詞化形式の分布	156
4. 名詞化と統語構造	158
5. 統語的述語名詞と統語的複合動詞の比較	160
6. おわりに	165
<b>第7章 まとめと展望</b>	<b>167</b>
1. 本論文のまとめと課題	167
1.1 統語的述語名詞という分類の妥当性	167
1.2 統語的述語名詞に関する統語論的定式化	170
1.3 複雑述語における形態論的な名詞性と統語論的性質・意味論的性質の関係	

.....	172
1.4 本論文に残された課題 .....	175
2. 展望 .....	177
2.1 形態論的な名詞性の位置付け .....	178
2.2 文末名詞文・体言締め文との関わり .....	180
参考文献 .....	186
既発表論文・口頭発表との関係 .....	192

## 序章 本研究の背景と目的

### 1. 本研究の背景

本論文で取り扱う統語的述語名詞とは、影山（1993）が指摘した統語的な語の一種であり、かつ、伊藤・杉岡（2002）が述語名詞として取り上げた名詞に分類される形式である。統語的述語名詞の具体例としては、(1)～(3) のような形式を指す。「ばなし」であれば「壊れ**っ**ばなし」だけではなく「点き**っ**ばなし」や「開き**っ**ばなし」のように様々な動詞を取り、修飾部あるいは述部に生起することができる。

- (1) a. 壊れ**っ**ばなしの置時計  
b. 置時計が壊れ**っ**ばなしだ。
- (2) a. 採れた**た**てのミント  
b. ミントが採れた**た**てだ。
- (3) a. 混ざり**す**ぎのココア  
b. ココアが混ざり**す**ぎだ。

統語的な語形成の研究は、影山（1993）以降、由本（2005）のように、モジュール形態論の枠組みにおいて複合動詞を主な研究対象とする形で進展してきた。モジュール形態論の枠組みでは、語彙部門で形成される合成語と統語部門で形成される合成語の2種類の語形成が想定され、統語的述語名詞は統語部門で形成される語と考えられる。しかしながら本論文で統語的述語名詞として取り上げる (1)～(3) のような形式は、影山（1993）において既に句接辞の一種として指摘されていたにも拘わらず、山田（2005）の「-たてだ」、由本（2012）の「-すぎだ」のように個別の形式を取り上げる研究に対して、複数の形式を統一的に取り扱うことを試みた分析は存在しなかった。

モジュール形態論の立場に基づく複合動詞の研究においては、語彙的複合動詞については語彙概念構造（LCS）による分析、統語的複合動詞については統語論的アプローチによる補文構造の分析が中心として存在する（影山 1993, 由本 2005<sup>1</sup>）。一方で、統語的述語名詞のうち「-たてだ」を取り扱う山田（2005）、「-すぎだ」を取り扱う由本（2012）はいずれも、意味構造を分析する枠組みとして語彙概念構造を用いた分析を行っており、主な関心は意味の構造にあった。この点に関しては、伊藤・杉岡（2002）による（語彙的な）述語名詞の分析が語彙概念構造に基づくものであり、その影響とも考えられる。

<sup>1</sup> 由本（2005）による「-すぎる」の意味解釈に関する分析のように、統語的複合動詞について語彙概念構造を用いる分析も存在する。

いずれにせよ、(4) のように統語的複合動詞の研究を進展させてきた補文構造に関する統語論の問題は、(5) のように統語的述語名詞を取り扱う際には等閑視されてきた。

- (4) a. 語彙的複合動詞：語彙概念構造 (LCS) による分析
- b. 統語的複合動詞：統語論的アプローチによる補文構造の分析
- (5) a. 語彙的述語名詞：語彙概念構造 (LCS) による分析
- b. 統語的述語名詞：語彙概念構造 (LCS) による分析

よって、統語的に形成される動詞述語と名詞述語がどの程度一貫して取り扱えるのか、あるいは異なった性質を持っているのかについては関心が持たれてこなかった。特に、(6) のように他動詞の目的語が主語としてふるまう現象は、名詞述語と動詞述語の統語論的性質の違いにも関連する現象であるが、統語論的分析の対象として設定されてこなかった。

- (6) a. ランプが点けっぱなしだ。
- b. パンが焼きたてだ。
- c. ジュースが冷やしすぎだ。

本論文は、以上のような背景に基づいて、個別的な分析を越えて統語的述語名詞を体系的に取り扱い、複雑述語が形態論的に名詞としてふるまうことと統語論的・意味論的性質の関係について議論を行うものである。

## 2. 本研究の目的

本論文の目的を述べる前に、本論文の研究対象を明示しておく。(1)~(3) で提示した「-っぱなしだ」「-たてだ」「-すぎだ」に加えて、「-かけだ」「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」の合計7つの形式を本論文の研究対象とする。実際の議論においては「-っぱなしだ」あるいは「-すぎだ」等を中心的に取り上げて議論を行っていく部分もあるが、それぞれの分析を述語名詞一般に適用できるか検証することで、7つの統語的述語名詞を対象として研究を行う。(7) に本論文の研究対象を示しておく。

- (7) a. 置時計が壊れっぱなしだ。
- b. ミントが採れたてだ。
- c. ココアが混ざりすぎだ。
- d. チョコレートが溶けかけだ。
- e. ブザーが鳴りまくりだ。
- f. 窓ガラスが曇り気味だ。



g. 隙間風が入り放題だ。

前述の通り、統語的述語名詞の分析においては、意味に着目するものが多く、統語論的な議論が等閑視されてきた。そのため、統語的複合動詞のような動詞述語と比べて、統語的述語名詞のような名詞述語をどのように位置づけることができるのかという議論が不十分だった。ここで、本論文の目的を3種類の研究課題として整理しておく。

第一に、統語的述語名詞を体系的に取り扱うことに関する妥当性の問題がある。本論文の研究対象を指して言う「統語的述語名詞」という術語はあくまで本論文で規定したものである。「統語的(な語形成)」に関しては影山(1993)、「述語名詞」に関しては伊藤・杉岡(2002)を踏襲するものだが、「統語的述語名詞」という分類が正当なものであるかは、本論文の議論を持って証明する必要がある課題の一つである。よって、研究課題の一つ目を、以下のように示す。

- (i) 統語的述語名詞という語群を認めることで、日本語研究において有効な議論が可能であることを明示的に示す。

本論文で取り扱う形式は、特に理論的な先行研究において個別적으로取り扱われ、統一的に扱われることがなかった形式である。これらの形式をひとまとめにして「統語的述語名詞」として取り扱うことの妥当性は、統語論という抽象的なレベルの構造を取り扱うことで検証することができる。個々の形式が持つ語彙的な意味は多様であるが、それが統語構造のレベルで共通する構造を持っていることを示すことで、統語的述語名詞を統一的に取り扱うことの妥当性を示すことができる。また、この課題は本論文の分類が有効であるという主張に留まらず、複雑述語を取り扱う上で品詞性による分類が有効であるかという一般的な問いにも繋がっている。

第二に、反証可能性を想定した統語論的定式化の問題がある。本論文において統語論的分析を用いる理由としては、後述のように、先行研究で統語構造が定式化されている統語的複合動詞との関係を述べる目的もある。しかしながら、統語論的分析を用いるより重要な理由として、統語的述語名詞を取り扱う基盤的分析を示すという目的がある。これを二つ目の研究課題として以下に示す。

- (ii) 統語的述語名詞に関連する現象について、統語論による定式化を行い、統語的述語名詞を取り扱うための基盤的分析を示す。

本論文は、「-ばなしだ」から「-放題だ」まで7つの形式を研究対象として、統語的述語名詞の統語構造を議論するが、本論文の範囲にない全く別の形式が統語的述語名詞として認定できる場合、あるいは本論文で統語的述語名詞として認定した形式が別の統語構

造を持っていると主張する場合に、統語構造が明示的に定式化されていることが議論の道標となる。よって、本論文では、統語構造というある種抽象的なレベルの定式化を行うことによって、統語的述語名詞を取り扱うための基盤的分析を示すことを目的とする。

最後に、統語的述語名詞が「名詞」であることが統語と意味にどのような影響を与えているのかという問題がある。統語的述語名詞の中でも「すぎ」を取り扱う由本(2012)等は、動詞「すぎる」との違いを記述する形で議論を行っている。しかしながら、前述の通り統語構造の議論が行われてこなかったため、統語的複合動詞との関係等を十分に捉えることができていない。よって、三つ目の研究課題を以下に示す。

- (iii) 複雑述語における形態論的な名詞性と統語論的性質・意味論的性質の関係を明らかにする。

以降の議論で述べていく通り、統語的述語名詞は形態論的に名詞性を持つ形式であるが、「ものの名前」をあらわす典型的な名詞とも異なっている。よって、あくまで形態論的に名詞性を持つという事実が、どのような形で複雑述語の性質と関係しているかについて明らかにする必要がある。また、「-すぎだ」と「-すぎる」のように個々の語彙に着目する場合、「-すぎだ」に限定された性質を名詞性に由来する一般的な性質と誤ってしまう可能性がある。この目的を達成するためには、(i) で述べたように統語的述語名詞を統一的に取り扱う議論が有効となる。(iii) の研究課題では、統語的述語名詞の性質について記述を行うことで、複数の述語を合成した形式において形態論的な名詞性がどのように働くかを明らかにすることを目的としている。

以上の3点が本論文の課題となるが、(i) について取り扱う章、(ii) について取り扱う章というように独立して議論を行っていくわけではない。(i)、(ii)、(iii) の研究課題は有機的に関連しており、それぞれの研究課題を達成することが、他の研究課題を達成することにも繋がっている。

### 3. 本論文の構成

本論文は、序章と7章を除いて6章で構成されているが、図1の通りに1~2章・3~5章・6章、3つの部分に分かれた構成となっている。

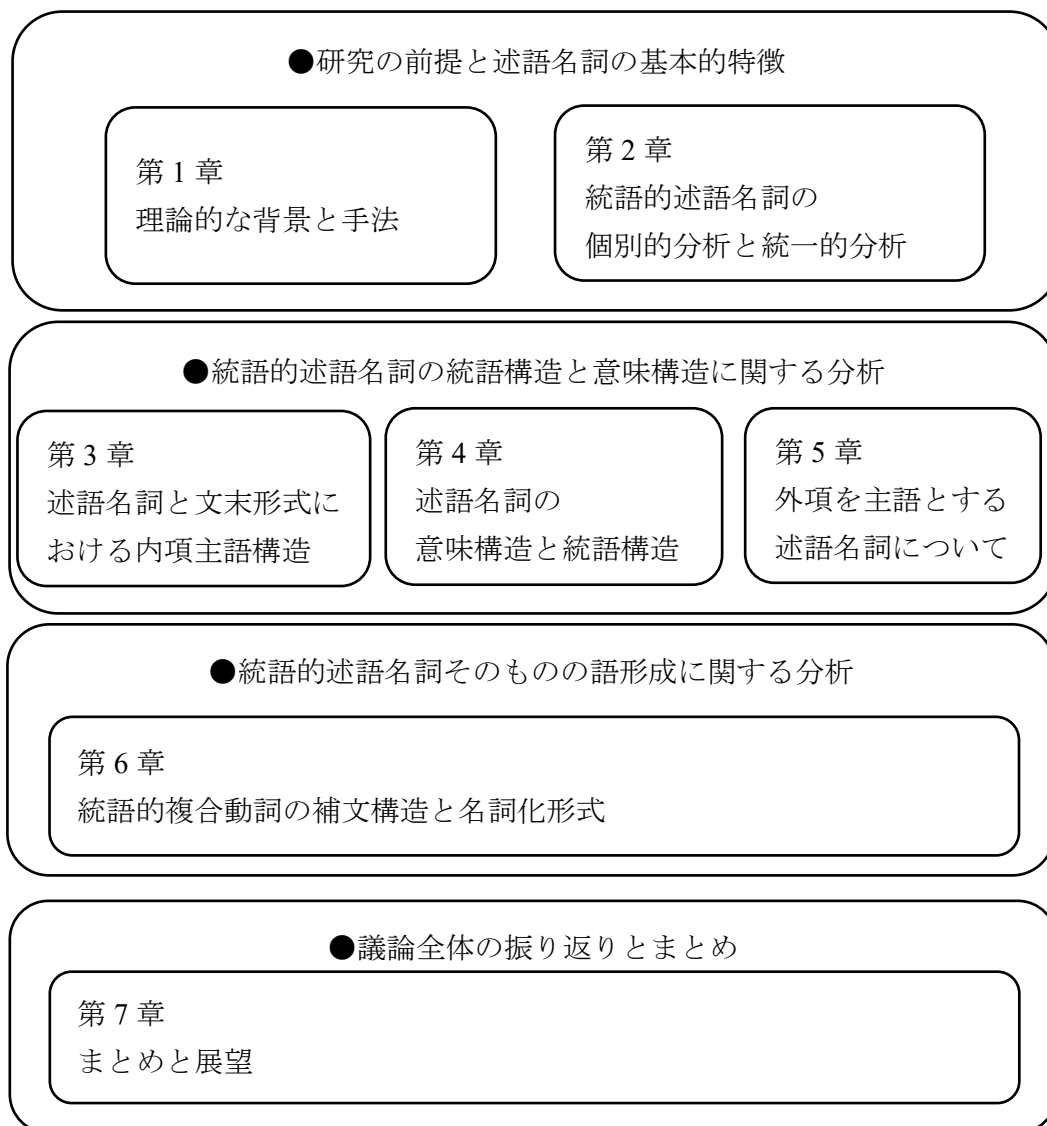


図1 本論文の構成

1章～2章においては、先行研究や研究の手法を確認するとともに、統語的述語名詞を体系的に取り扱う妥当性について述べる。3章～5章においては、統語的述語名詞の統語的・意味論的分析を行う。6章においては、統語的複合動詞の名詞化形式として統語的述語名詞について検討し、語形成のレベルで統語的述語名詞について取り扱う。以下に、本論文の構成を示す。

### 第1章 理論的な背景と手法

第1章では、本論文の理論的な背景と研究手法について述べる。理論的な背景としては、モジュール形態論の枠組みにおいて語形成の中に統語的語形成と語彙的語形成の2種

類の語形成が存在していることを概観し、統語論的述語名詞が意味論的分析の対象となる一方で統語論的分析の対象となっていないことを確認する。研究手法としては統語論的なアプローチを用いるが、先行研究の意味論的分析を参照するため、モジュール形態論の枠組みを採用することを確認する。更に、より具体的なレベルで本論文の分析に用いる動詞句/名詞句の統語構造についても概観し、本論文で用いる理論的前提について確認する。

## 第2章 統語的述語名詞の個別的 analysis と統一的分析

第2章では、本論文で取り扱う統語的述語名詞について、具体的な形式「-ばなしだ」「-たてだ」「-すぎだ」「-かけだ」「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」についての先行研究を取り上げた上で、個別的にはそれぞれに異なった意味を持つ統語的述語名詞が共通した特徴を持つことを確認する。具体的には、統語的述語名詞が形態論的特徴、統語論的特徴、意味論的特徴を共有し、「-すぎる」「-かける」のような統語的複合動詞、「-そうだ」「-たい」のような統語的形容(動)詞とは異なる特徴を持っている事実を示し、統語的述語名詞を一つのグループとして取り扱うことが妥当であることを述べる。

## 第3章 述語名詞と文末形式における内項主語構造

第3章から第5章においては、具体的な現象の分析を行う。第3章では、「本が置きっぱなしだ」のように他動詞の内項が主語相当の形式としてふるまう現象を内項主語構造として取り上げ、「本が置いたままだ」のように文末に接続する文末形式との比較によって、統語論的な定式化を行う。結論としては、内項が主語となるメカニズムは名詞性を持つ述部「-ばなしだ」「-ままだ」において共通しており、内項に相当する主語が名詞述語文の主語として導入される統語構造を提案する。第3章の議論は、他動詞の内項が主語になるという操作が、受動文のようなヴォイスによる操作とは異なり、名詞述語であることに由来するものであることを示している。

## 第4章 述語名詞の意味構造と統語構造

第4章では、「ジュースが冷えすぎだ」と「ジュースが冷やしすぎだ」のように非対格自動詞と他動詞において、いずれも内項が主語となる事例を取り上げ、統語構造と意味構造の関係について述べる。具体的には、結果状態の焦点化という操作が「他動詞+すぎだ」においては適用されるが、「非対格自動詞+すぎだ」において適用されないという分析を示す。加えて、「非対格自動詞+すぎだ」は、第3章で述べた他動詞の内項主語構造とは異なり、複合動詞「-すぎる」と同様に上昇構造を持つことを示す。第4章の議論は、統語的述語名詞に2種類の構造が存在し、他動詞の内項が主語となるような操作が存在しない場合、複合動詞と同様に上昇構造となることを示している。

### 第5章 外項を主語とする述語名詞について

第5章では、外項を主語とする統語的述語名詞を取り上げ、外項が主語となる「他動詞+すぎだ」が「非対格自動詞+すぎだ」と同様に上昇構造を持つことを主張する。また、先行研究において外項を主語とする統語的述語名詞においては、属性をあらわすという観察もあるが、個々の語彙的意味の影響であり、名詞性に由来するものではないことを指摘する。第5章の議論は、統語的述語名詞の性質は内項主語構造/上昇構造という補文構造により決定するものであり、主語が内項であるか外項であるかに左右されるものではないことを示している。

### 第6章 統語的複合動詞の補文構造と名詞化形式

第3章～第5章では、統語的述語名詞が引き起こす現象に着目するが、第6章では、統語的複合動詞の名詞化という観点から、そもそもどのような形で統語的述語名詞の後部要素が形成されるのかという点について議論を行う。具体的には、「論文の書き直し」「資料の読み忘れ」のように複雑事象名詞を形成する名詞化形式と「酒を飲みすぎだ」「チョコが溶けかけだ」のように述語名詞を形成する名詞化形式が存在し、統語的複合動詞の補文構造によって名詞化形式の性質が決定することを指摘する。更に、第6章では統語的複合動詞と統語的述語名詞の比較によって、統語的述語名詞の補文構造が述語の形態論的な名詞性に由来するものであることを明らかにする。

### 第7章 まとめと展望

最後に、第7章では、本論文の議論を振り返ることで、本論文で示された統語的述語名詞という分類の妥当性を確認し、本論文で得られた統語論的定式化をまとめ、結論として名詞性と統語論的性質・意味論的性質がどのように関係するかについて述べる。更に、本論文で行った形態論的な名詞性の位置付けについての展望を示し、述語名詞と関連する形式である文末名詞文・体言締め文との関わりを述べる。

## 第1章 本研究の理論的背景と手法

### 1. はじめに

1章では、統語的述語名詞を取り扱う前提として、本研究の理論的背景と本研究が用いる手法について述べる。

理論的背景としては、まず、統語的語形成について取り上げるモジュール形態論（影山 1993）の枠組みを概観した上で、統語的述語名詞がモジュール形態論においてどのような位置付けにあったか確認する。そして、同じくモジュール形態論を用いた述語名詞の分析を概観し、統語的述語名詞に関する意味論的分析について確認する。

本研究で用いる手法としては、統語論によって語形成を取り扱う2種類のアプローチを紹介した上で、先行研究の分析を活用できるモジュール形態論の立場を用いて議論を行うことを確認する。更に、具体的な道具立てとして、主要な分析対象となる動詞句の統語構造、名詞句の統語構造について採用する分析を提示して、本論文における統語論的分析における手法を示す。

1章で取り上げる理論的な背景に関する先行研究のほかに、「-ばなしだ」等の個別形式を取り上げる記述的な日本語研究も存在するが、そうした先行研究は主に2章で取り上げることとする。2章では、個別形式の記述を越えて統語的述語名詞を統一的に取り扱う妥当性について議論を行うが、その背景として記述的な日本語研究の紹介を行う。1章ではその前提として、理論的な枠組みを用いた統語論・形態論・意味論において、統語的述語名詞がどのように取り扱われてきたかに着目する。

### 2. モジュール形態論と統語的述語名詞

2節では、語形成が語彙部門と統語部門の2種類の部門で行われるとするモジュール形態論の概要について紹介し、その中で統語的述語名詞がどのように取り扱われているかを確認する。2.1節では統語的語形成の観点において統語的述語名詞がどのように取り扱われてきたか、2.2節では語彙概念構造による意味論的分析において統語的述語名詞がどのように取り扱われてきたかを確認する。

#### 2.1 統語的語形成と統語的述語名詞

日本語において統語的に語が形成される枠組みを分析する試みとして、生成文法の枠組みを用いた影山（1993）が提唱するモジュール形態論が存在する（影山 1993, 影山 1996, 影山・由本 1997, 伊藤・杉岡 2002, 由本 2005）。モジュール形態論の概要を先んじて述べると、語彙部門（Lexicon）と統語部門（Syntax）の双方における語形成を認め

る立場であり、語という単位が形成される過程に2種類のメカニズムを仮定する立場である。

語彙部門とは人間の記憶や知識と関わる領域であり、文を作る素材となる語彙項目 (lexical item) が収納されている領域を指す。語彙項目とは概ね「太郎」「家」「帰る」のような語のことを指す。一方、統語部門とは、素材を用いて文を生成する領域を指す。統語部門では、語彙部門に収納されている「太郎」「家」「帰る」のような語彙項目を用いて、「太郎が家に帰った」のような文が作られることになる。この前提に従えば、すべての語形成は語彙部門で行われ、語彙部門で形成された語を用いて統語部門において文を作ることになる。

しかしながら、影山 (1993) は語としてふるまうにも拘わらず、統語部門で形成されると考えざるを得ない形式群の存在を体系的に指摘することで、特に日本語においては図1のようなモジュール形態論を採用する分析が有効であることを示した。図1は、語形成に関する形態理論が語彙部門にも統語部門にも作用することを示している。

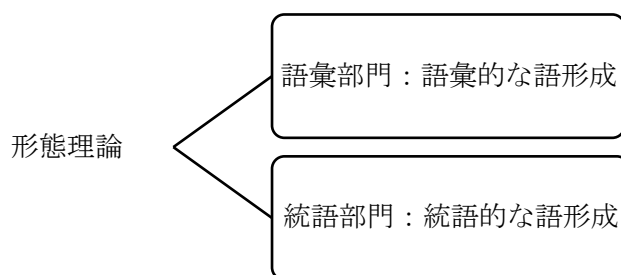


図1 モジュール形態論のモデルの概略 (影山 1993 : 6 一部改変)

ここでは、統語部門で形成される語の代表例として語彙的複合動詞と統語的複合動詞について紹介し、モジュール形態論における語彙的な語形成と統語的な語形成について概観する。前提として、複合動詞とは、(1) のような形式であり、「飛ぶ」と「上がる」のように複数の動詞が合成されて1つの語としてふるまう形式を指す。

- (1) a. 飛び上がる、泣き叫ぶ、歩き回る  
b. 食べ続ける、しゃべりまくる、食べかける

(1) を指して1つの語と述べたが、複合動詞がいずれも形態論的に緊密な語であるということを確認する。語の形態的緊密性に関して、影山 (1993) は副助詞の介在と削除を用いたテストによって検証を行っている。(2) は、A が語彙的複合動詞、B が統語的複合動詞の例であるが、いずれも副助詞「も」が介在できない。「も」が介在できないということは、2つの動詞が緊密な関係を持っているということを示している。このよう

な形態的緊密性が、語の特徴である。

- (2) A : \*飛びモ上がる、\*泣きモ叫ぶ、\*歩きモ回る  
 B : \*食べモ続ける、\*しゃべりモまくる、\*食べモかける

(影山 1993 : 76)

また、(3) では複文において従属節に生起する動詞が削除された場合に、文が成立する事実を示している。このように、文においては語の削除が許容される環境が存在する。しかしながら、(3)(4) の複合動詞の事例においては、複合動詞の後項動詞のみを削除することができない。この事実も、複合動詞において2つの動詞が形態論的に緊密であることを示している。

- (3) 兄は国立大学の法学部に~~入り~~、弟は私立大学の法学部に入った。

(影山 1993 : 76)

- (4) A : \*その夜、兄は神戸で~~飲み歩き~~、弟は大阪で~~食べ歩~~いた。

B : \*ちょうど同じ時に、姉は本を~~読み終~~え、妹はレポートを書き~~終~~えた。

(影山 1993 : 77)

このように、複合動詞はいずれも形態論的に緊密な語をなしている。これを前提として、影山は4つのテストを用いて語彙的複合動詞と統語的複合動詞が異なった部門において形成されることを主張している<sup>1</sup>。

第一に、代用形「~~そう~~する」を用いたテストを紹介する。通常、語を構成する一部分は文中の照応に参加できない (Postal 1969)。影山はこれを語彙部門における<語彙照応の制約>と捉え、(5)(6) の例を提示している。

- (5) 遊び暮らす→\*~~そう~~し暮らす、押し開ける→\*~~そう~~し開ける、追い払う→\*~~そう~~し払う、仕舞い込む→\*~~そう~~し込む、見落とす→\*~~そう~~し落とす、泣き叫ぶ→\*~~そう~~し叫ぶ

(影山 1993 : 80)

- (6) a. 太郎がまだ走っているのを見て、次郎も~~そう~~し続けた。

b. 調べ~~終~~える→~~そう~~し~~終~~える、秘密を喋りまくる→~~そう~~しまくる、食べ過ぎる→~~そう~~しまくる、手紙を出し忘れる→~~そう~~し忘れる

<sup>1</sup> 影山 (1993) の時点ではここで紹介している4つのテストのほかに、重複構文に関する観察がなされている。そこでは、重複構文が統語的複合動詞においてのみ成立するという主張がなされているが、この主張は影山 (2013) の時点で撤回され、語彙的複合動詞においても重複構文が成立するデータが提示されている。そのため、ここでは議論を省略する。



(影山 1993 : 80-81)

A類の語彙的複合動詞において照応表現である「そうする」が出現しない一方、B類の統語的複合動詞では「そうする」が出現でき、〈語彙照応の制約〉には従わない。

第二に、(7)(8)のように主語尊敬語に見られる差を観察している。

- (7) A : ノートに書きこむ→\*お書きになり込む  
手紙を受け取る→\*お受けになり取る  
泣き叫ぶ→\*お泣きになり叫ぶ
- (8) B : 歌い始める→お歌いになり始める  
しゃべり続ける→おしゃべりになり続ける。  
電車に乗り損ねる→お乗りになり損ねる

(影山 1993 : 84)

尊敬語「お V になる」は複雑な構造を有する形式であり、語彙的な語には生起できない。複合動詞の内部に尊敬語形式を埋め込めるか否かの差からも、統語的複合動詞が統語的に複雑な構造を含むことが可能な形式であることが確認できる。

第三に (9)(10) で提示される受身形に関しても同様の議論が成立する。

- (9) \*書かれ込む (cf.書き込む)、\*押され開く、(cf.押し開ける)  
(10) 名前が呼ばれ始めた、愛され続ける、殺されかけた

(影山 1993 : 87)

受身形の観察に関しては、(10)のB類の中にもものによっては差がみられ、構造の差異があるとされている。しかしながら、A類で受身形が許容されるものはなく、B類がA類より複雑な構造を持つというここまでの観察には従っている。

第四に、サ変動詞に関する観察がある。(11)がA類の語彙的複合動詞、(12)がB類の統語的複合動詞の例である。

- (11) \*壁にポスターを接着し付ける (cf.貼り付ける)  
\*柵をジャンプし越す (cf.跳び越す)  
\*吸引し取る (cf.吸い取る)  
\*沸騰し立つ (cf.沸き立つ)
- (12) 見続ける /徹夜で見物し続ける (本多勝一『カナダ・エスキモー』)  
弱りきる /衰弱しきったフーンさんは病床上を向いたまま・・・

(本多勝一『戦場の村』)

言いとおす / 「無声化母音」はよほど意識しない限り、発音し通せない  
 (柴田武『日本語の方言』)

調べ尽くす / 調査し尽くす。

手紙を出し忘れる / 投函し忘れる

TV やグラビアに登場しまくっている美女4人組 (音楽雑誌)

(影山 1993 : 88)

影山 (1993) では、サ変動詞を「動名詞 (VN) +する」と捉え、統語的なレベルで形成される語としている。ここでは「VN する」に関する詳細な議論は省くが、「VN する」が生起するか否かにおいても A 類の語彙的複合動詞と B 類の統語的複合動詞において差がみられる。

ここまでのテストから、B 類の統語的複合動詞は一貫して A 類と比較して自由な操作が可能な形式であることが確認できた。統語的複合動詞という形式は、(2)(4) のように「語」としての形態的緊密性を持ちながら、(6)(8)(10)(12) のように文を作るのと同じレベルにおける統語論的な操作 (尊敬語化、受身化) を内部で行うことができる。そして、モジュール形態論においては、語彙部門における語形成と統語部門における語形成という2種類の語形成を仮定することによって、ここまで見てきた2種類の複合動詞の違いを捉えることが可能となる<sup>2</sup>。2種類の複合動詞は同じく語を為すが、語彙部門で形成される語彙的複合動詞と統語部門で形成される統語的複合動詞は、複数の統語現象に関して異なった観察を示すことになる。

更に、影山 (1993) では、統語的複合動詞が補文構造によって分類できることを指摘して、統語的複合動詞の統語論的な議論を進展させた。影山は (13a) のように後項動詞 (「-終える」) が主語を持つ他動詞型補文構造、(13b) のように後項動詞 (「-かける」) が主語を持たない非対格型補文構造の2種類が存在することを指摘し、由本 (2005) や岸本 (2013) に続く統語的複合動詞に関する補文構造に基づく議論の基盤を示した。

(13) a. [vp 小坊主が[vp 除夜の鐘をつき]終えた]

b. [vp[vp 除夜の鐘が鳴り]かけた]

(影山 1993 : 141 改変)

影山 (1993) は、複合動詞の議論を踏まえて「S 構造複合語」「VN する」のように統語的に形成される語の事例研究を複数提示した上で、モジュール形態論という語形成の

<sup>2</sup> 語彙部門と統語部門を想定しない形態理論研究においても、語彙的な特徴を持つ形式と統語的な特徴を持つ形式の違いを捉える必要がある。そのため、語彙部門・統語部門を用いた説明はモジュール形態論という理論に依存するものだが、語彙的複合動詞と統語的複合動詞という分類は必ずしも理論に依存する分類ではない。

モデルを提唱している。「S 構造複合語」と「VN する」に関する詳細な議論は省略するが、いずれも統語的に派生される形式とされる。「VN する」は「雑談する、審査する」のようないわゆるサ変動詞を指す。「S 構造複合語」は (14) のような形式を指す。

- (14) a. 住民達は一斉に[新空港：建設]に反対した。  
 b. ここ数年間の[受験生：増加]に伴って、試験会場を拡大する必要ができた。  
 c. ジャンボ機の[成田空港：到着]が遅れた。

(影山 1993 : 226)

影山 (1993) が提唱するモジュール形態論は、統語部門と語彙部門という複数のレベルで語形成が行われると考える理論である。モジュール形態論においては、(15) のように語形成のレベルを複数仮定することによって多種多様な語形成を取り扱うことが可能になる。

(15) 語形成過程の類型化

- a. 語彙部門で適用するもの：  
 [例]甘み (cf.野菜の/\*が甘み)、同教授 (cf.\*同[大学の教授])、山登り (cf.\*[高い山]登り)、吹き飛ばす (\*そうし飛ばす)  
 b. 統語部門のサイクル内で適用するもの：  
 [例]食べさせる、食べ始める、誘われる、話し方  
 c. S 構造で適用するもの：  
 [例]研究する、北京：訪問、訪ねてみる  
 d. 語彙部門にも統語部門にも適用するもの：  
 [例]-風 (洋風/[中世のフランス]風)、-探し (宝探し/[未来のハズ]探し)、手を/の付けようがない、恋人と (の) 別れぎわに  
 e. 語彙部門にも S 構造にも適用するもの  
 [例]-さ (優しさ/金が欲しさ)

(影山 1993 : 366)

影山 (1993) においては、統語的複合動詞や S 構造複合語、「VN する」のように、統語的と考えざるを得ない語形成の事例が提示されており、語形成に複数のモジュールを仮定することは一定の説得力を持った仮説となっている。

本論文で取り扱う形式である統語的述語名詞に関しては、影山 (1993) の時点で、統語部門における語形成として (16) の中にその一部が提示されている。

- (16) [いまにも雨が降り]そう (だ)  
 [なにか言いた]げ (だ)  
 [仕事にかかり]つきり  
 [爛をし]たての酒  
 [マンションを契約]済みの人  
 [お金を借り]っぱなし  
 [仕事に追われ]ぎみ  
 [授業を休み]がち  
 [ビールを飲み]放題

(影山 1993 : 329-330)

(16) では、本論文で取り扱う「-たてだ」「-っぱなしだ」「-気味だ」という事例が既に指摘されている。影山 (1993) は、これらの形式が統語的に動詞句に後接するものでありながら動詞と後部形式 (下線部の範囲) が形態論的に語としてふるまっている事実を指摘し、この現象を句の包摂と呼んでいる。また、影山は句の包摂を起こすこれらの形式について動詞句を包摂する接辞として捉え、句接辞という呼称を用いている。句接辞も、統語的に形成される語の一種であり、統語的複合動詞と同様のテストに通過する。(17a) は受身形、(17b) は「VN する」に関する観察であり、統語的複合動詞と同様に受身形や「VN する」が許容される。

- (17) a. 太郎は怒られっぱなしだ、酒に飲まれ気味だ  
 b. ロボットが暴走しっぱなしだ、雛が孵化したてだ

しかしながら、影山 (1993) の時点において、「-たてだ」「-っぱなしだ」「-気味だ」は句接辞として取り上げられていたものの、あくまでも統語部門による語形成の存在を示す証拠の一つとして扱われていた。その後の研究においても、統語的複合動詞について補文構造に基づく分析が進展していった一方で、統語的述語名詞については統語構造に関する分析が等閑視されることになる。これを踏まえて、2.2 節では述語名詞の概要と統語的述語名詞の意味構造に関する研究について確認する。

## 2.2 述語名詞と統語的述語名詞

2.1 節では、モジュール形態論の概要を説明するとともに、統語的述語名詞の統語的な語としての側面を紹介した。続いて、述語名詞の分析を取り上げ、統語的述語名詞の述語名詞としての側面を紹介する。更に、モジュール形態論における語彙概念構造 (LCS) を用いた分析を概観し、意味の構造に関する分析において統語的述語名詞がどのように取り扱われてきたか分析する。

伊藤・杉岡（2002）は名詞に関する現象も含めて語形成を数多く取り上げてモジュール形態論による分析を進展させた研究と言える。述語名詞に関する伊藤・杉岡（2002）の分析を見る前に、モジュール形態論において語彙部門の分析で重視される語彙概念構造（LCS）について概観する。

語彙概念構造は、述語の項構造や意味に関する語彙的な情報を (18) のような構造で示す手法である。語彙概念構造においては、「ACT」「CAUSE」「BECOME」「BE」といった抽象的な意味を持つ述語を用いて、動詞があらわす意味を分解して標示する。

- (18) a. put : [[x ACT-ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT [Loc IN/ON z]]]]  
 b. break : [[x ACT-ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT [STATE BROKEN]]]]  
 c. give : [[x ACT-ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT [POSS z]]]]

(伊藤・杉岡 2002 : 24)

(18a) においては「x が y に働きかけることで、y が z という場所にある状態が引き起こされる」というように、put という動詞の意味が分解して表示されている。このとき、x、y、z は項構造に相当し、統語的に x の項、y の項、z の項が生起することになる。また、(18a) においては[Loc IN/ON z]に場所が標示されていたが、状態変化動詞である break においては[STATE BROKEN]という形で結果状態、give という所有変化動詞においては[POSS z]という形で所有者が標示される。

伊藤・杉岡（2002）では、付加詞を含む動詞由来複合語の分析の中で本論文のテーマとなる述語名詞を取り上げている。付加詞とは主語・目的語と述語のような項と述語の関係を結ばない要素のことである。「雨降り」の「雨」は「雨が降る」のような主述の関係が認められるため項と認定され、「黒こげ」の「黒」は項ではないために付加詞と認定できる。(19)(20) はいずれも付加詞を含む動詞由来の複合語であるが、「する」が後接可能で動作をあらわす (19) と、「だ」が後接可能で状態をあらわす (20) に分かれる。伊藤・杉岡（2002）においては、(20) にあたる形式を述語名詞と呼んでいる。

#### (19) 動作

肌が日焼けする、街をそぞろ歩きする、部下が早死にする、切手をのり付けする、週刊誌を立ち読みする、ドレスを手作りする

#### (20) 状態

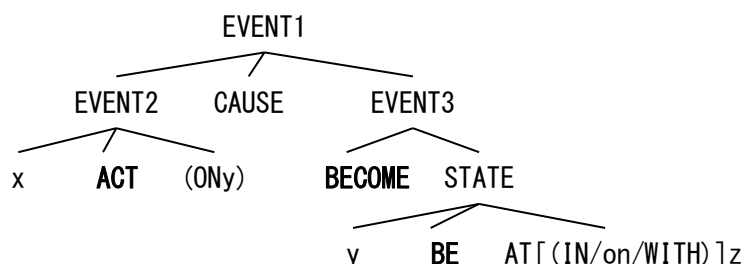
魚が黒こげだ、服がずぶ濡れだ、この廊下は板張りだ、レンガ作りの倉庫、黒塗りの壁、みじん切りの野菜

(伊藤・杉岡 2002 : 115)

ここで取り上げられている動詞由来複合語はいずれも語彙部門において形成される

語であり、語彙概念構造を用いた分析が有効となる。伊藤・杉岡（2002）は、(21) のように語彙概念構造を階層的に捉え、どの述語によって付加詞が選択されるかによって、(19) と (20) の対立が説明できると主張している。

(21)



(伊藤・杉岡 2002 : 117)

上記の語彙概念構造において、EVENT2は動作、EVENT3は状態変化、STATEは状態をあらわす。(21)のうちEVENT2あるいはEVENT3によって付加詞が選択される場合、動詞由来複合語は動作や状態変化をあらわすことになり、「する」が後接可能になる。一方、STATEによって付加詞が選択される場合、動詞としての性質が失われ、「する」が後接できず、「だ」が後接する述語名詞となる。具体的には、「黒焦げだ」においては「焦げる」という変化(EVENT2)ではなく、焦げた跡の状態(STATE)を「黒」が修飾することによって、状態をあらわす複合語が形成されることになる。このように、語彙部門において形成される述語名詞は、語彙概念構造を用いて分析されている。

この分析を踏まえると、動詞に由来する形式が「だ」を後接して状態述語としてふるまっている点で、(22)に挙げる統語的述語名詞も述語名詞の一種と認定できる。この点に関しては、2章で詳細な議論を行うが、由本(2012)も「-すぎだ」を述語名詞として取り上げていることを述べておく。

- (22) a. ランプが点きっぱなしだ。  
 b. ココアが混ぜすぎだ。

統語的述語名詞に当てはまる具体的な形式の分析として、「-たてだ」について取り上げる山田(2005)、「-すぎだ」について取り上げる由本(2012)が挙げられる。これらの研究の興味深い点は、「-すぎだ」や「-たてだ」について伊藤・杉岡(2002)のように語彙概念構造による分析を試みている点である。

山田(2005)は記述的観察として(23)のような対立を取り上げ、「-たてだ」が結果取りたてる形態素であると分析している。事実観察として、「-たてだ」には活動動詞や接触・打撃動詞が生起せず、一方で作成動詞、変化動詞、発生・出現動詞などが生起で

きる。

- (23) a. \*たたきたての肩  
 b. しぼりたてのミルク

(山田 2005 : 273-274 抜粋)

山田 (2005) は、上記の対立について語彙概念構造において STATE を持つか否かという観点から説明を行っている。「-たてだ」が成立しない活動動詞や接触・打撃動詞は語彙概念構造上に STATE を持たない一方で、「-たてだ」が成立する作成動詞や変化動詞、出現・発生动詞は語彙概念構造上に STATE を持っている。

- (24) a. 活動動詞, 接触・打撃動詞 [EVENT x ACT (on) (y) ]  
 (25) a. 作成動詞 : [EVENT x ACT (on y)] CAUSE [EVENT BECOME [STATE y BE AT-z]]  
 b. 変化動詞 : [EVENT y BECOME [STATE y BE AT-z]]  
 c. 出現・発生动詞 : [EVENT BECOME [STATE y BE AT-z]]

(山田 2005 : 281)

山田 (2005) は、「-たてだ」を語彙概念構造上にある STATE (結果状態) を取りたてる形式と仮定して、活動動詞や接触・打撃動詞は語彙概念構造上に STATE を持たないため「-たてだ」に生起できないものと説明している。この分析は、伊藤・杉岡 (2002) の分析に類似しており、付加詞との複合や「-たてだ」による取りたてによって、述語が持つ結果状態に意味論的な焦点が当たっていることになる。

この点に関してより明示的な分析を行っているのが由本 (2012) である。由本 (2012) は「-すぎだ」を述語名詞として取り上げ、語彙概念構造に関する分析を中心に議論を行っている。由本 (2012) は特に内項を叙述対象とする「-すぎだ」について、(26)(27) のように結果状態をあらわすものとしており、「\*作りすぎのクッキー」や「\*投げすぎのボール」、「\*見すぎのテレビ」のような動詞が容認されないことを指摘している。

- (26) a. 冷やしすぎのビールやゆですぎのパスタは美味しくない。  
 b. 荷物を積みすぎのトラックは通行できません。  
 c. 磨きすぎの床はすべりやすくて危険だ。  
 d. 炒めすぎの野菜はビタミンが失われています。

(由本 2012 : 131)

- (27) 冷えすぎのビール、下がりすぎの物価、伸びすぎの髭  
 太りすぎの子犬、乾燥しすぎの部屋、日焼けしすぎの肌

(由本 2012 : 133)

由本 (2012) は、「-すぎだ」について山田 (2005) と同様に語彙概念構造を用いた説明を行っている。(28) は「茹ですぎだ」の語彙概念構造であり、「-すぎだ」が語彙概念構造における STATE (結果状態) の部分を焦点化するという説明をしている。(28) においては網掛けになっている部分が焦点化されていることになる。語彙概念構造上の STATE に何らかの操作を加えるという点で、伊藤・杉岡 (2002)、山田 (2005)、由本 (2012) の分析は共通している。

(28) [[x ACT ON y] BECOME [STATE y BE [AT TOO [BOILED]]]]

(由本 2012:140 改変)

このように、「-すぎだ」「-たてだ」のように統語的な述語名詞に関しても、伊藤・杉岡 (2002) が取り上げる語彙的な述語名詞と同様に語彙概念構造を用いた分析が行われてきた。伊藤・杉岡 (2002)、山田 (2005)、由本 (2012) の分析は述語名詞がどのような形式か理解する上で重要な分析であり、分析の詳細に違いはあるものの述語名詞に共通する性質を捉えた研究とも言える。しかしながら、2.1 節で見えてきたように統語的述語名詞は統語的な形式であるにも拘わらず、その統語構造に関する分析は重視されてこなかった。由本 (2012) でも、「-すぎだ」の統語論的な分析については課題を残していることが認識されている。

残された問題は、内項を叙述対象とする①タイプを形成する概念構造上での操作が、どの段階で起こるものかということである(引用者註:(28)の語彙概念構造における STATE の焦点化を指す)。この操作によって、「V+過ぎる」と異なる項の具現形式をもつ述語となるのだから、語彙部門で起こる操作だと考えるのが自然かもしれないが、1 節で見たように、「-すぎ」が VP を補部とするという性質はこのタイプにも当てはまり、「火であぶりすぎの魚」「国に納めすぎの税金」のように補部や付加詞を表すこともできる。また、「加熱しすぎの食品」のように統語的派生によるとされる「動名詞+する」が結合できることもからも、語彙部門での派生とする分析では問題がある。

(由本 2012 : 142)

ここまで、2.2 節では、述語名詞について確認した上で語彙概念構造による統語的述語名詞の分析を概観した。統語的述語名詞の分析は、語彙部門で形成される述語名詞の分析を踏襲するような形で語彙概念構造に基づく分析が行われてきた。しかしながら、統



語構造の分析が不十分であるため、由本（2012）で指摘されているように統語論と意味論の関係に関しても疑問を残している。

2節の内容をまとめると、統語的複合動詞が統語論的分析の対象となってきた一方で、統語的述語名詞は主に意味論的分析の対象として扱われてきた。そのため、同じく統語的に形成される複雑述語でありながら、動詞述語に関する議論と名詞述語に関する議論はそれぞれ独立した議論となっており、名詞述語と動詞述語を統語論的に比較する観点は等閑視されている。

ここでは問題点を強調したが、反対に、「-たてだ」と「-すぎだ」の分析において、統語的述語名詞に関する意味論的分析の土台が既に存在している、と言い換えることもできる。本論文は、山田（2005）と由本（2012）による意味論的分析を否定するものではなく、意味論的な議論を引き継ぎつつ、統語論的側面に着目するものである。また、統語的述語名詞を体系的に取り扱うためには、意味論的な議論についても山田（2005）や由本（2012）による意味論的分析が他の形式にも拡張可能であるかも含めて検討が必要である。

### 3. 本論文で採用する手法

2節では、統語的語形成に関する先行研究や述語名詞・統語的述語名詞に関する先行研究を取り上げながら、モジュール形態論について概観した。3節では、2節で指摘した問題点を踏まえて、本論文においてどのような手法を用いて統語的述語名詞の研究を行うかについて確認する。

本論文で採用する手法について述べる前に、序章で提示した本論文の3つの研究課題について振り返る。

- (i) 統語的述語名詞という語群を認めることで、日本語研究において有効な議論が可能であることを明示的に示す。
- (ii) 統語的述語名詞に関連する現象について、統語論による定式化を行い、統語的述語名詞を取り扱うための基盤的分析を示す。
- (iii) 複雑述語における形態論的な名詞性と統語論的性質・意味論的性質の関係を明らかにする。

これらの研究課題においては特に (ii) と (iii) で統語論という言葉を用いているが、統語的述語名詞を取り扱うための手段として統語論的なアプローチを用いる点に注意が必要である。(i)～(iii)の研究課題をまとめると、統語的述語名詞という言語形式を適切に取り扱うことによって、形態論的な名詞性と言語現象の関係を明らかにすることが本論文の目的である。これまでの研究で捉えられてこなかった、統語的述語名詞が持つ抽象的なレベルにおける共通性を探る手法として本論文では統語論的アプローチを

選択する。

よって、統語論的分析を行うにせよ、どのような目的で統語論的分析を行うのか、という点について述べておく必要がある。3節では、これに関する説明を行うため、まず3.1節で本論文が用いる統語論的アプローチの射程について説明する。次に3.2節でモジュール形態論と分散形態論の2種類の枠組みについて概観し、本論文で採用する手法について述べる。4節では具体的に採用する理論的前提を提示するが、それに先立って3節において本論文が採用する方向性と枠組みについて確認する。

### 3.1 統語論的アプローチ

本論文で統語的述語名詞として取り上げる研究対象は、日本語の記述的な文法研究においては個別に形式を取り上げるか、他の形式について述べるとしても類義語との関係について述べるものが多かった<sup>3</sup>。本論文では、類義表現の比較という範囲では同時に取り扱えない形式群を同時に取り扱うために、統語論的アプローチを用いて分析を行う。

本論文では統語論的アプローチを採用する上で、連動する複数の現象を統語構造によって説明できる点、言語形式の抽象的な位置付けを明示的に行える点の2点を重視する。具体例を挙げると、影山(1993)は統語的複合動詞について(29)のように後項動詞が主語を要求する他動詞型補文構造と後項動詞が主語を要求しない非対格型補文構造の2種類に分類する<sup>4</sup>。

- (29) a. 子供が[PRO 本を読み]飽きた。(「子供」＝後項動詞「飽きる」の主語)  
 b. [本が 燃え]かけた。(「本」＝前項動詞「燃える」の主語)

この2種類の統語構造は、複数の統語現象に関与している。(30a)では他動詞型補文構造においては後項動詞が主語を要求するために、主語に意味制約が課される。一方、(30b)では非対格型補文構造においては前項動詞の主語がそのまま主語としてふるまうために主語に意味制約が課されない。この現象は、どちらの動詞が主語を要求するかという点で、前述の統語構造によって説明できる。

- (30) a. \*本が[PRO 燃え]飽きた。  
 b. [子供が本を読み]かけた。

また、(31a)では他動詞型補文構造の主語は後項動詞の主語であるために前項動詞と

<sup>3</sup> 「ばなしだ」であれば「-ままだ」との比較を行う渡邊(2000)や「-ままだ」や「-きりだ」との比較を行う藤城(2006)等が挙げられる。

<sup>4</sup> 例文における“PRO”や「非対格」が示す意味、統語的複合動詞の分類の詳細については後述する。

主語によるイディオム解釈が排除される一方、(31b) では非対格型補文構造の主語は前項動詞の主語であるためにイディオム解釈が排除されない。この現象も、どちらの動詞が主語を要求するかという点で、前述の統語構造によって説明できる。

- (31) a. #閑古鳥が[PRO 鳴き]終えた。(≠閑散とした状態が終わった)  
 b. [閑古鳥が鳴き]かけた。(=閑散とした状態になりかけた)

このように、統語論的アプローチを採用することで、主語に関する意味制約とイディオム解釈という異なった現象について、統語構造によって説明することが可能になる。また、この議論では、主語に関する意味制約とイディオム解釈という複数の現象が統語構造を介して連動していることを示しており、現象同士の関係を取り扱う上でも統語論的アプローチは有効である。

また、上記の統語構造を仮定することで、多種多様な統語的複合動詞の位置付けについて、明示的かつ統一的に取り扱うことができるようになる。統語的複合動詞には、「-始める」「-終わる」「-終える」のように開始や終了をあらわすものもあれば、「-損なう」「-忘れる」のように未遂や不成立をあらわすもの、「-すぎる」のような過剰、「-直す」のような再試行、「-飽きる」のような習慣のように多種多様な意味をあらわしている。このように多種多様な複合動詞に関して、少なくとも統語構造においては2種類のどちらかに分類するという位置付けを与えられるのが、言語形式を取り扱う上で統語論的アプローチが持つ強みと言える<sup>5</sup>。

このように、本論文では、連動する複数の統語的現象を統語構造によって説明できる点、言語形式の抽象的な位置付けを明示的に行える点を重視して統語論的アプローチを採用する。より詳しく述べると、本論文の統語論的分析においては、統語的述語名詞が形態論的に名詞性を持つことがどのような現象と連動しているか、統語的述語名詞が抽象的にどのような複雑述語として位置づけられるかという点を重視することになる。そのため、この目的に沿った枠組みを採用して分析を行うことになる。本論文で採用する具体的な前提に関しては4節と5節で述べるが、続いて3.2節では本論文で採用する形態論的な枠組みについて述べていく。

### 3.2 モジュール形態論と分散形態論

2節までで述べてきたように、本論文が研究対象とする統語的述語名詞は、モジュール形態論において統語部門で形成される語の一種として取り扱われてきた。そして、本論文においては、統語的述語名詞の統語的側面が取り扱われてこなかったことによって、

<sup>5</sup> より厳密に統語的複合動詞を分類すると6章で述べる3種類の分類あるいは4種類の分類(cf.大野 2018)となるが、後項動詞が主語を導入する構造と後項動詞が主語を導入しない構造という分類において2種類の分類が可能である点に相違はない。

複雑述語形式において動詞述語の持つ特徴と名詞述語の持つ特徴が相対化されてこなかったことを問題としている。

しかしながら、語形成という形態論的な領域に対して統語論的アプローチを行う理論的枠組みは、モジュール形態論だけではない。本論文では、モジュール形態論の枠組みを用いて議論を行うが、形態論に対して統語論的アプローチを行う理論的枠組みとして分散形態論との比較を行い、本論文の範囲内の目的を達成するためにはモジュール形態論の枠組みを用いる手法が適切であることを確認する。

まず、2節で概観したモジュール形態論 (cf.影山 1993, 由本 2005) について、図1を再掲する。図1の通り、モジュール形態論においては、語彙部門と統語部門のように、複数の部門を仮定して統語論的分析を行う。

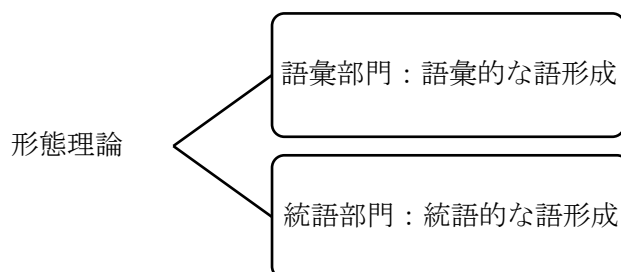


図1 モジュール形態論のモデルの概略 (影山 1993 : 6 一部改変) (再掲)

この一方で、語形成を全て統語部門で取り扱う形態論の一つとして、分散形態論 (cf. Marantz 1997, Harley and Noyer 1999) が存在する。分散形態論では、統語部門と語彙部門を区別せず、図2のように、統語部門 (Syntax) においてすべての語形成を取り扱う。モジュール形態論では語彙項目は語彙部門に記憶されることになるが、分散形態論においては語彙的な特徴を持つ語であっても、統語部門で形成されることになる。そのため、語彙部門以外の形で語の記憶に関するリストを取り扱う必要があるが、これに関しては統語論的な素性を保存する list1、音声と素性の関係を保存する list2、百科事典的知識を保存する list3 という3種類の辞書に形態論に関する情報が保存されるというモデルを仮定している。

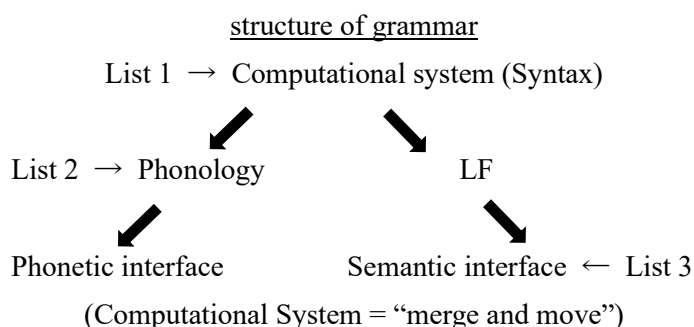


図2 分散形態論のモデルの概略 (Marantz1997 : 204)

一見して図2の内容は複雑に見えるが、モジュール形態論との比較においては、語彙に関する情報を複数の list によって取り扱うことで語彙的な語形成に関しても統語部門 (Syntax) による分析することを可能にしている点が重要である<sup>6</sup>。

分散形態論は近年主流となっている極小主義に基づく統語論研究と親和性が高く、近年の研究では、統語論的分析の前提として分散形態論 (あるいは分散形態論のような反語彙主義的なアプローチ) を想定する場合も多い。そのような研究においては、2節で取り上げたような語彙概念構造による分析を統語論によって表示するといったアイデアも見られる。

藤田・松本 (2005) では語形成を語彙部門と統語部門を区別するモジュール形態論のような枠組みにおける語彙概念構造 (LCS) と統語構造の関係を (32a)、語形成を一括して統語部門によって取り扱う分散形態論のような枠組みにおける統語構造 (シンタクス) と語彙概念構造の関係を (32b) のように説明している。

(32) a. LCS→項構造→統語構造 (深層構造)

b. シンタクス→ (語彙) 概念構造・項構造

(藤田・松本 2005 : 42, 44)

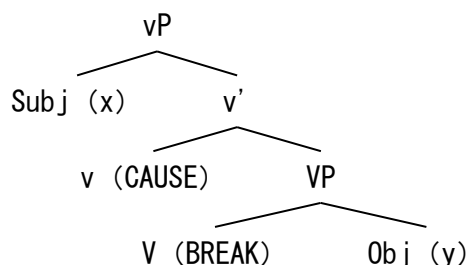
(32) の対比においては、モジュール形態論では語彙概念構造によって統語構造が決定するが、分散形態論では統語構造によって語彙概念構造に相当する構造が表示されることになる。つまり、モジュール形態論では (33a) のような語彙概念構造を仮定する一方で、分散形態論では (33b) のように語彙概念構造に相当する意味構造が統語構造

<sup>6</sup> この文における「語彙的な語形成」は、語彙部門による語形成というモジュール形態論に依存する意味ではなく、より語彙的な特徴を持つ語形成という意味を指している。分散形態論においても、√という品詞未満の単位を仮定することで、語形成が持つ語彙的な側面を取り扱う分析が存在する (cf.Arad2003)。

によって表示されているものとする。

(33) a. break : [x CAUSE [BREAK y]]

b.



(藤田・松本 2005 : 42-43)

(33b) では、動詞句が VP と vP の二層の構造として表示される。VP と vP については 4.1 節で改めて解説するが、この分析においては v が (33a) における CAUSE、V が (33a) における BREAK と対応しており、語彙概念構造を仮定せずとも、統語構造によって意味構造を取り扱うことが可能となっている。

このように、語形成に対して統語論的アプローチを用いる研究にはモジュール形態論だけでなく分散形態論のような枠組みも存在し、分散形態論は統語的アプローチとの親和性が高い枠組みと考えられている。

しかしながら、統語的述語名詞を研究対象とする本論文においてはモジュール形態論の立場を採用する。一つ目の理由としては、モジュール形態論において統語的語形成として分析される現象について分散形態論による分析を積極的に採用する必然性が薄い点が挙げられる。分散形態論はモジュール形態論において語彙部門と統語部門で切り分けられる現象を一括して取り扱うことができる点で有効な枠組みである。そのため、活用にも語形成にも関わる動詞連用形に関する分析 (田川 2009) や統語的使役にも語彙的使役にも関わる使役形式「-させる」の分析 (Harley 2008) などにおいては有効な枠組みと言える。しかしながら、本論文の範囲ではあくまで統語的述語名詞のみを取り扱うため、分散形態論の枠組みを採用する必然的な理由が存在しない。

また、二つ目の理由としては、語彙概念構造に相当するものを統語論によって取り扱う分析が必ずしも進んでいるとは言えない点が挙げられる。この論文に関係する範囲であれば、伊藤・杉岡 (2002)、山田 (2005)、由本 (2012) の分析に関係していた語彙概念構造における STATE を取り扱うためには、上記の v が CAUSE に対応し、V が BREAK に対応するという藤田・松本 (2005) で説明されていた分析だけでは不十分である<sup>7</sup>。統

<sup>7</sup> V に相当する意味としては、EVENT (BECOME) に相当する意味と STATE (BE) に相当する意味が混在している。分散形態論には V より小さい単位として品詞以前の単位である

語的述語名詞に関しては理論的分析の蓄積も少なく、語彙概念構造による分析を統語論による分析で捉え直す段階がなく、語彙概念構造を用いた分析を継承して進展させていく必要がある。よって、本論文では、モジュール形態論の枠組みを用いて統語的述語名詞の分析を行っていく。

以上のように、3節では本論文で採用する手法について述べた。3.1節で述べたように、本論文では連動する複数の統語的現象を統語構造によって説明できる点、言語形式の抽象的な位置付けを明示的に行える点を重視して統語論的アプローチを採用し、3.2節で述べたように語形成に対して統語論的アプローチを用いる研究としてモジュール形態論を採用する。

3節では本論文で採用する手法について述べたが、あくまで広い枠組みについての説明に留まっている。よって、4節と5節では、具体的に採用する理論的前提についての説明を行い、本論文で動詞句・名詞句をどのような前提に基づいて分析するかを述べていく。

#### 4. 動詞句に関する理論的前提

ここからは、統語論的分析を行う上で、前提となる統語構造について確認する。4節では、特に動詞句の統語構造を確認する。4節では動詞句の構造と動詞句が複数ある場合の補文構造について述べる。まず、4.1節で他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞について概観することで、動詞句の統語構造についての前提を確認する。続いて、4.2節で統語的複合動詞について概観し、複数の動詞句による補文構造についての前提を確認する。

##### 4.1 動詞句の構造

4.1節では、動詞の統語的な分類である他動詞・非能格自動詞・非対格自動詞について概観することで、動詞の統語構造と外項・内項の統語的位置について確認する。本論文では、他動詞の目的語となる内項が主語としてふるまう現象や、先行研究において外項と内項によって対立するとされる現象を取り扱う。そのため、動詞の統語構造と外項・内項に関する理論的前提を確認する必要がある。

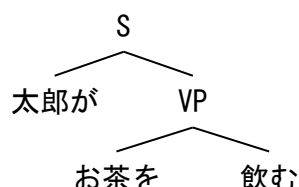
他動詞とは (34) のように主格「が」で標示される主語と対格「を」で標示される目的語を持つ形式であるが、生成統語論の枠組みにおいては、他動詞の主語と目的語は異なる構造的位置に生起すると仮定される。(34) では S が文を指し、VP が動詞句を指す。他動詞の目的語は低い位置である VP に生起するが、他動詞の主語は VP より高い位置

---

√ (語根に近い概念) も仮定されているため、√ を STATE に対応させるような分析もあり得る (cf. Harley2005)。しかしながら、このような分析においては「Root にあまりに豊かな内容を持たせると、分散形態論や統語的語彙分解が批判するいわゆる語彙主義的モデルにおける語彙範疇と実質的に変わらなくなっていってしまう (田川 2017: 93)」という問題が生じるという指摘もある。

に生起している。

- (34) 太郎がお茶を飲む。



この統語構造は、言語形式を用いたテストによって検証できる。まず、移動に関するテストを確認する。(35a) においては、「さえ」によってとりたてた動詞句「寿司を食べ」を文頭に移動させることができている。一方、(35b) のように動詞だけを抜き出して文頭に移動させることはできない。このように動詞句を移動する際には制約が存在する。

- (35) a. [VP 寿司を食べ]さえ<sub>i</sub> ジョンが t<sub>i</sub> した。  
 b. \*食べさえ<sub>i</sub> ジョンが[VP 寿司を t<sub>i</sub>]した。

(Hoji et al 1989 : 5)

このテストにおいて重要であるのは、目的語を伴わずに動詞句のみを移動する (35b) が許容されない事実に対し、主語を伴わずに動詞句のみを移動する (35a) は許容される事実である。このように、統語論的な移動という現象から、主語と目的語が異なった領域に存在することが保証される。主語のように動詞句の外にある項を外項、目的語のように動詞句の内側にある項を内項と呼ぶ。

前述のテストは他動詞の主語と目的語が異なった領域にあることが分かりやすいテストであるが、自動詞の項について検証することが難しいので、もう一つのテストを確認する。岸本 (2005, 2020) では、他動詞の主語と目的語において、「いっぱい」や「たくさん」の解釈が異なることが指摘されている。

- (36) a. 学生が、プラモデルを部屋でいっぱい作った。

(岸本 2005 : 121)

- b. 子供がご飯をたくさん食べた。

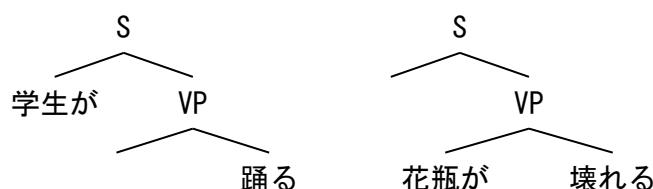
(岸本 2020 : 6)

(36) において、他動詞の目的語「プラモデル」や「ご飯」の量が多いという解釈は成立するが、他動詞の主語「学生」や「子供」の量が多いという解釈は成立しない。このように、数量副詞の解釈に関しても、他動詞の主語と目的語は異なっている。



ここまで、他動詞の主語と目的語における相違点を確認してきたが、同様の違いが自動詞の主語においても観察できることが指摘されている。つまり、自動詞の主語には、他動詞の主語のようにふるまうものと他動詞の目的語のようにふるまうものの2種類が存在する。先んじて統語構造を示すと、(37a)のように意志性を持つ自動詞の主語は動詞句の外側に生起し、(37b)のように意志性を持たない自動詞の主語は動詞句の内側に生起する。(37a)の動詞を非能格自動詞、(37b)の動詞を非対格自動詞と呼ぶ。非能格自動詞の主語と他動詞の主語は動詞句の外側に生起する外項であり、非対格自動詞の主語と他動詞の目的語は動詞句の内側に生起する内項である。

- (37) a. 学生が踊る。                      b. 花瓶が壊れる



この事実も、他動詞と同じく岸本（2005, 2020）のテストによって確認することができる。

- (38) a. 学生がステージでいっぱい踊った。

(岸本 2005 : 124)

- b. 子供がたくさん働いた。

(岸本 2020 : 6)

- (39) a. 花瓶が、地震のためいっぱい壊れた。

(岸本 2005 : 122)

- b. 魚がたくさん生まれた。

(岸本 2020 : 6)

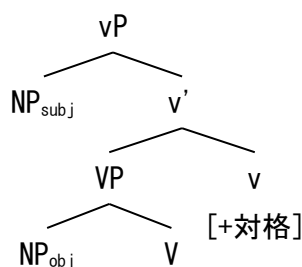
(38)において外項である「学生」や「子供」の量が多いという解釈は排除される一方で、(39)において内項である「花瓶」や「魚」の量が多いという解釈が許容されることになる。このように、動詞が持つ項は、外項と内項に分類され、統語的に区別することが可能である。

ここまで、動詞句をVP、文をSとして外項と内項について概観したが、動詞句の外側に小動詞vを主要部とするvPという構造を認める立場が存在する。本論文においては、動詞句の統語構造について、長谷川（1999）の枠組みを採用して、VPとvPの二層の構造を仮定して議論を行うことにする。この枠組みを用いることで、外項に関しても

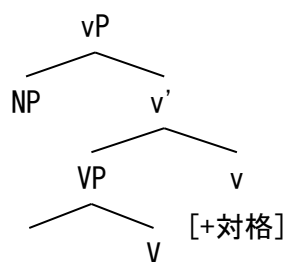
Sではなく動詞に伴って出現するvPに生起するものとしながら、動詞句において外項と内項が異なる領域に生起する事実を取り扱うことができる。

長谷川(1999)においては対格付与能力を持つvと対格付与能力を持たないvを仮定することで、動詞の統語構造を定式化している。(40)に本論文と関係する範囲における他動詞と非能格自動詞、非対格自動詞の統語構造を表示する。

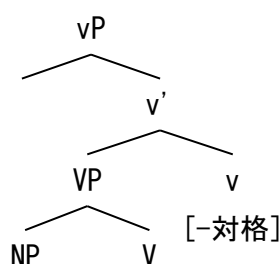
(40) a. 他動詞



b. 非能格自動詞



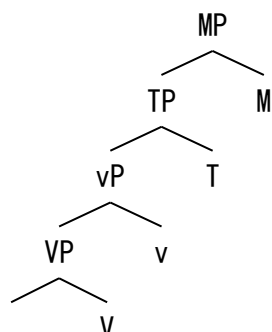
c. 非対格自動詞



この枠組みにおいては、外項はvPに生起し、内項はVPに生起することになる。また、対格を与えるvは外項を要求する一方、対格を与えないvは外項を要求しない。更に、(40)では、外項を持たない動詞においてもvP自体は存在し、動詞句が二層の構造を持つ構造が仮定されている。

ここまで動詞句の内部の構造について述べたが、動詞句の外側の構造に関する理論的前提についても確認する。本論文の範囲では、動詞句の外側には時制辞Tが生起するTPと「だろう」のようなモダリティ形式が生起するM(odal)Pが存在するものと仮定しておく。MPに関しては本論文の議論で関係する部分は少ないが、TPに関しては3章の議論で重要な主格付与(cf.竹沢・Whitman1998)と関連して議論に言及されるため、ここで前提を確認しておく。(41)に、VPからMPまでの統語構造を記す。

## (41) VP から MP の統語構造



TP や MP という領域に関しては、副詞句と否定の解釈に関する観察によって確認することができる。Koizumi (1993) や小泉・玉岡 (2006) においては、(42) のように「動詞未然形+なかった」のように動詞に否定辞が後接する事例と「ル形あるいはタ形+わけではなかった」のように時制辞に否定辞が後接する事例において、副詞句と否定の解釈に差異が出ることを指摘している。

- (42) a. [<sub>VP</sub> ワインを飲ま]なかった。  
 b. [<sub>TP</sub> ワインを飲んだ]わけではなかった。

まず、動詞に否定辞が後接する (43) の事例を見ていく。この場合、「ゆっくり」のように動作の様態に関する副詞は「ゆっくりではなかった (素早くワインを飲んだ)」のように動詞に後接する否定辞によって否定されるが、時間に関わる副詞やモダリティに関わる副詞は「昨日ではなかった (ワインを飲んだのは今日だった)」「たぶんではなかった (ワインを飲んだのは確実だった)」という解釈を持たず、動詞に後接する否定辞によって否定される対象とはならない。この事実は、動詞句 (vP) に存在する副詞と、別の領域に存在する副詞の違いを示唆しており、動詞句の外側に別の領域が存在している事実を示している。

- (43) a. [<sub>VP</sub> ゆっくりワインを飲ま]なかった。  
 b. 昨日 [<sub>VP</sub> ワインを飲ま]なかった。  
 c. たぶん [<sub>VP</sub> ワインを飲ま]なかった。

続いて、時制辞に対して否定辞が後接する (44) の事例を見ていく。この場合、「ゆっくり」は上の例と同じく否定の対象となり得るが、時間に関わる副詞について (43) とは異なる観察が得られる。時制辞に否定辞が後接する場合、時間に関わる副詞は「昨日で

はなかった (ワインを飲んだのは今日だった)」という解釈を持つが、モダリティに関わる副詞は「たぶんではなかった (ワインを飲んだのは確実だった)」という解釈を持たない。この事実は、動詞句の外側には時制辞の領域 (TP) が存在し、時間に関わる副詞も TP に生起することを示している。同時に、モダリティに関わる要素は TP の外側に存在することになり、これを MP としておく。

- (44) a. [TP ゆっくりワインを飲んだ]わけではなかった。  
 b. [TP 昨日ワインを飲んだ]わけではなかった。  
 c. [MP たぶん[TP ワインを飲んだ]わけではなかった]

このように、vP、TP、MP の存在に関しても、外項や内項と同様に統語現象によって確認することが可能である。また、ここで確認したように、統語構造は項だけではなく副詞とも関係しており、項構造だけでは取り扱えない現象についても統語構造を仮定することで取り扱うことが可能となる。

本論文では、特に外項と内項という概念については全編に渡って前提として議論を進める。そのため、4.1 節では外項と内項についてどのような事実観察によって検証できるかも含めて確認した。続いて、4.2 節では、複数の動詞句が補文構造を持つ場合に関して基本的な議論を取り扱い、本論文に関わる理論的な前提を確認する。

## 4.2 動詞句の補文構造

4.2 節では、複数の動詞句によって補文構造が形成される場合の動詞句の統語構造について確認する。特に、統語的複合動詞の統語的論分析としては、補文構造に基づく議論がなされており、統語的述語名詞の比較対象としても本論文において重要な前提となる。この部分に関しては、3.1 節で部分的に触れているが、あくまで統語論的アプローチについて確認するものだった。4.1 節の内容を前提にして再確認を行う。

影山 (1993) が取り上げる統語的複合動詞のように、複数の動詞句が補文構造を為す場合がある。この補文構造は、主にコントロール構造と上昇構造の 2 種類に分かれる。影山 (1993) はこれを指してコントロール構造に相当するものを他動詞型補文構造、上昇構造に相当するものを非対格型補文構造としているが、一般的な統語現象としての側面を踏まえ、本論文では岸本 (2005) 等を参考にコントロール構造・上昇構造という呼称を用いる。

コントロール構造と上昇構造を区別する統語現象として、影山 (1993) は主語の制約を挙げている。(45) の「-飽きる」「-そこなう」等の複合動詞はコントロール構造とされているが、無生物主語が生起できない。一方、(46) の「-かける」「-すぎる」は上昇構造とされているが、無生物主語が生起可能である。

- (45) a. \*本が燃え飽きた。  
 b. \*雨が降りそこなった。  
 (46) a. 本が燃えかけた。  
 b. 雨が降りすぎた。

この違いは、コントロール構造の場合には後項動詞が外項を要求するという統語構造の違いによるものと考えられる。(47) においては、「-飽きる」が経験主となる外項を要求するが、無生物主語と整合的ではなく非文となる。一方、「-かける」は外項を要求しないため、前項動詞が要求する項であれば文が成立する。

- (47) a. \*[本が[燃え]飽きる]  
 b. [[本が燃え]かける]

この事実観察によって、前項動詞が主語となる項を導入する複合動詞と後項動詞が主語となる項を導入する複合動詞の2種類が存在することが確認できる。

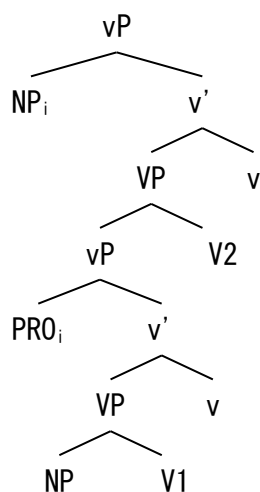
また、Nishigauchi (1993) や岸本 (2005) は、コントロール構造と上昇構造で主語を含む「閑古鳥が鳴く」のようなイディオムの解釈の可否に差が見られることを指摘している。コントロール構造の場合は (48a) のようにイディオム解釈が排除されるが、上昇構造の場合は (48b) のようにイディオム解釈が可能である。

- (48) a. #あの店は、閑古鳥が鳴きそこなっている。(店に人が来なくならなかった)  
 b. あの店は、閑古鳥が鳴きかけている。(店に人が来なくなりつつある)

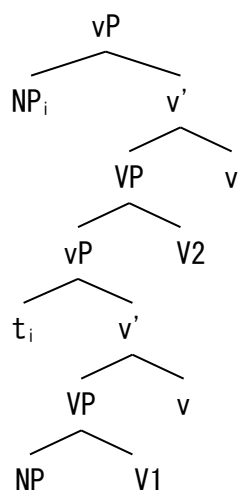
この事実に関しても、コントロール構造では前項動詞「鳴く」と主語「閑古鳥」が主述の関係を持たずに後項動詞が主語を導入し、上昇構造では前項動詞「鳴く」と主語「閑古鳥」が主述の関係を持つという構造によって説明が可能である。

ここまで見てきた統語的複合動詞に関して、4.1 節で確認した動詞句の構造を踏まえて、(49)(50) に構造を示す。

(49) コントロール構造 (「-飽きる」「-そこなう」ほか)



(50) 上昇構造 (「-かける」「-すぎる」ほか)



コントロール構造においては、前項動詞 (V1) の主語としてゼロの代名詞 **PRO** を仮定している。ゼロの代名詞には **PRO** と **pro** が存在するが、有形の代名詞が生起できない位置に生起するゼロ代名詞を **PRO** とする。コントロール構造では、後項動詞 (V2) が導入する外項が、前項動詞が導入する **PRO** と同一指示関係を持つという構造になっている。一方、上昇構造においては、前項動詞 (V1) の主語として痕跡 (**trace**) を仮定している。上昇構造では、前項動詞 (V1) の主語が痕跡 (**trace**) を残して移動し、後項動詞 (V2) の主語としてふるまう。このとき、後項動詞は外項を要求せず、前項動詞の主語がそのまま統語的複合動詞の主語となる。

統語的複合動詞の研究においては、このような補文構造に焦点を当てて統語構造の分

析が行われてきた。本論文では、動詞句の補文構造を踏まえ、統語的述語名詞の補文構造についても検討を行うことになる。

## 5. 名詞句に関する理論的前提

5節では、動詞句に続いて名詞句に関する理論的前提について確認する。4節における動詞句の議論は原則的に先行研究の内容を踏襲するものだったが、5節では述語名詞を取り扱う上でどのような前提を採用すべきであるかという議論も同時に行う。まず、5.1節で名詞句の統語構造において DP を仮定する枠組みを採用することで、述語名詞を適切に取り扱うことができることについて述べてく。続いて、5.2節で、名詞句が述語として生起する名詞述語文がどのような統語構造となるか確認する。

### 5.1 名詞句と DP

4節においては、動詞句が VP と vP の二層による構造であることを確認したが、名詞句に関しても NP と DP の二層であることを仮定することがある (cf. Abney 1987)。DP は、英語においては”the”や所有者の”John’s”に属格を与える要素とされる。NP と DP が異なる領域である事実は、以下のような現象にあらわれている。

- (51) a. John bought that [red hat], but not this *one*.  
 b. John bought the red [hat], but not green *one*.

岸本 (2005 : 15)

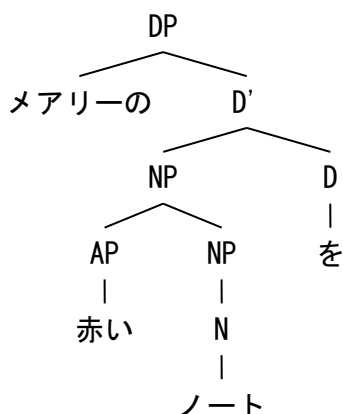
(51) においては、*one* が[that red hat]や[the red hat]のような目的語全体ではなく、目的語の一部を置き換えている。このとき、目的語となる名詞句中でも *one* が置き換えている一部を NP と仮定すると、文に生起する名詞句には DP という領域と NP という領域の2種類の領域によって成立するということになる。日本語においては、代用表現「の」を用いると、同様の観察が得られる。

- (52) a. ジョンはメアリーの[青いノート]を借りたが、トムのは借りなかった。  
 b. ジョンはメアリーの青い[ノート]を借りたが、メアリーの赤いのは借りなかった。

岸本 (2005 : 16)

これらの観察を踏まえ、岸本 (2005) では、日本語の名詞句に関して以下のような構造を仮定している。

## (53) 日本語の名詞句の構造



(岸本 2005 : 17 一部省略)

上記の統語構造においては、「ノート」という NP, 「赤いノート」という NP が存在し、それぞれ「の」と置き換えることが可能となる<sup>8</sup>。なお、岸本 (2005) は DP の主要部となる D を日本語の格助詞とする分析を取っているが、「その」「この」などの決定詞を D とする立場もある (三宅 2011)。

本論文の範囲では、格助詞を D とする岸本 (2005) の分析を採用せず、D については形態が存在しないゼロの主要部を仮定しておく。ただし、岸本 (2005) には述語名詞の分析を行う上で興味深い記述が存在する。以下に、岸本 (2005) が述語に生起する名詞における DP の存在について述べる文章を引用する。

なお、Longobardi (1994) は、名詞句が項として働くときには D を持たなければならないと主張している。Longobardi (1994) の提案では、述語として働く名詞句は DP の投射のない NP であってもよいことになる。そうすると、日本語において項として働く機能する名詞句は、通常、格助詞でマークされ、述語として働くときには、「ジョンは学生だ。」のような文における「学生」のように格助詞は現れないので、Longobardi (1994) の分析に従えば、この事実も格助詞が D の主要部として働いているとする一つの動機にすることが可能かもしれない。しかし、英語では述語として使用される名詞句にも決定詞が現れる (e.g. *John is a student*) ので、

<sup>8</sup> 本論文では格助詞を D と見なす分析を採用しないが、その場合においても「の」が DP と置き換えられない事実は、以下のように「の」が単独で生起できないことから明らかである。

- i 太郎は高い鉛筆を買ったが、次郎は安いのを買った。
- ii \*太郎が高い鉛筆を買って、次郎ものを買った。



述語として働く名詞句には DP の投射がないと考えるのには無理がある。したがって、日本語においても、述語として機能する名詞句には DP の投射がないのではなく、単に項として認可されないために格助詞が現れないと考えるのがよいであろう。

岸本 (2005 : 27)

ここでは、格助詞を D と仮定する立場を前提にして、述語となる名詞が DP を持たない可能性を指摘している。岸本 (2005) ではこの可能性を最終的に否定しているが、本論文で取り扱う述語名詞の性質を踏まえると、述語名詞が DP を持たない可能性がある。ここからは、述語名詞の統語論的性質を確認し、述語名詞における DP の有無について述べていく。

述語名詞の先行研究として、2 節では伊藤・杉岡 (2002) を確認したが、村木 (2012) においても内容が似通った形式群を取り扱っている。村木 (2012) は述語名詞という言葉を使わず、名詞というより形容詞に近い形式と見なして第三形容詞という術語を用いている。第三形容詞という命名は、「優しい」のような形容詞を第一形容詞、「親切な」のような形容動詞を第二形容詞と呼ぶ命名に由来している。第三形容詞は連体節で「の」を伴う点で名詞のように扱われるが村木 (2012) は、(54) における「真紅」のように連体節、連用節、述部での使用が可能であるという点で統語的にも形容詞と同様にふるまう事実を指摘している。

- (54) a. 赤い/真っ赤な/真紅の バラ  
 b. 赤く/真っ赤に/真紅に 咲いたバラ  
 c. そのバラは 赤い/真っ赤だ/真紅だ。

(村木 2012 : 190)

村木 (2012) は、「底なし (の)」「がらあき (の)」「ひとりよがり (の)」「泥んこ (の)」「すっぱだか (の)」「やせっぽち (の)」「人並み (の)」「逃げ腰 (の)」「百年ぶり (の)」「互角 (の)」「抜群 (の)」「真紅/深紅 (の)」「特製 (の)」のような形式を第三形容詞として取り上げ、第三形容詞の特徴を以下のようにまとめている。

- (55) a. 「-が」「-を」の形式で用いられた例がない。もしくは稀である。  
 b. 「-の」の形式で、後続の名詞を修飾限定する連体用法が多い。  
 c. 「-だ」「-だった」「-です」「-でした」といった形式で、述語としての用法がみられる。  
 d. 「-に」の形式で後続の動詞・形容詞を修飾する用法がみられる。

(村木 2012 : 190)

なお、(55c,d)の用法を持たず連体形に限定される「ひとかどの(人物)」「いっばしの(大人面)」「大の(仲良し)」のような用例の存在も指摘しており、第三形容詞であれば(55)の特徴を必ず持つというタイプの分類ではない。しかしながら(55a)に関しては第三形容詞においては重要な特徴として位置付けられ、項として生起する用例をあくまで臨時的な使用と扱っている。例えば、(56)の「インド産」という第三形容詞に関して、あくまで「インド産(のもの)を」をあらわしているとして、項としての用法が本来的なものではないと判断している。このような現象を指して村木(2012)はあくまで第三形容詞が名詞との接点を持つとしており、連続的な側面を認めつつ、形容詞として取り扱うことを主張している。

(56) 局の技術部では、ペルシャ産やトルコ産の阿片を原料として、従来のインド産を使用したものと味も外観も差のない煙膏を作るための研究を開始している。

(村木 2012 : 206)

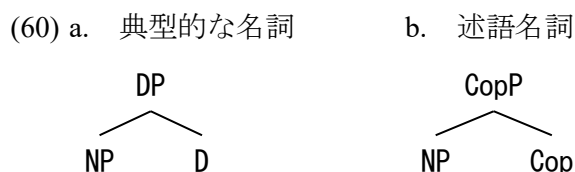
村木(2012)は第三形容詞を網羅的に取り上げ、そこには伊藤・杉岡(2002)が述語名詞とする「黒塗り」や「ずぶ濡れ」、本論文で取り上げる「-ばなしだ」「-たてだ」「-かけだ」なども取り上げられており、本論文が述語名詞と見なす語群と外延的には一致するものと思われる。村木(2012)では述語名詞が形容詞として扱われているものの、項となるような典型的な名詞の違いを指摘している点で興味深い研究である。

DPに関する議論に戻ると、岸本(2005)では項として出現する名詞がDPを持ち、述語として出現する名詞がDPを持たないという可能性が指摘されていた。この違いを位置だけの問題ではなく、述語名詞と典型的な名詞の違いと捉えると、述語名詞は述部位置においてDPを持たない名詞として捉えることが可能である。実際、(57)(58)のように述語名詞には連体節を伴いにくい性質があり、「この/その」というDPに関わる決定詞も、NPに付加する要素と考えられる「こんな/そんな」という修飾語も生起できない。このように、述語名詞は(59)のような典型的な名詞と異なった性質を示している。

- (57) a. \*太郎は {この/こんな} ずぶ濡れだった。  
 b. \*プレゼントは {その/そんな} 手作りだった。
- (58) a. \*窓が {この/こんな} 開けっぱなしだった。  
 b. \*パンが {その/そんな} 焼きたてだった。
- (59) a. 太郎は {この/こんな} 子供だった。  
 b. 太郎は {その/そんな} 学生だった。

この事実を踏まえ、本論文では、典型的な名詞と述語名詞の統語構造を(60)のように

捉える。



典型的な名詞は述部に生起する場合であっても常に DP を持つが、述語名詞はコピュラ（だ/である/です）が直接的に NP を要求する統語構造となっている<sup>9</sup>。このような統語構造を仮定することで、述語名詞を形容詞として捉える村木（2012）が指摘する典型的な名詞と述語名詞の違いを DP の有無という形で捉えることができるようになる。コピュラに関しては通常の動詞と同じく VP や vP を持つと捉えることもあるが、本論文では動詞句と名詞句の二層構造を取り扱うため、簡便のためにコピュラについては CopP を仮定しておく。

また (60) の構造を仮定することで、述語名詞が典型的な名詞があらわす「ものの名前」のような意味を持たず、あくまで形態論的に名詞性を持つ事実についても適切に捉えることができる。(60) の構造において、典型的な名詞の特徴は DP と NP の二層構造を持つ名詞の特徴と整理できるが、述語名詞は NP によって保証される形態論的な名詞性のみを持っているため、同じ名詞でありながら典型的な名詞と異なった性質を持っていることになる。

なお、ここまでの議論では、述語名詞を形容詞として捉える村木（2012）の立場に対して、述語名詞を積極的に名詞として捉えることの有効性を示していない。この点に関しては、2 章や 6 章において、統語的述語名詞とそのほかの複雑述語を比較する中で、言及していくことになる。

## 5.2 名詞述語文の主語位置

最後に、名詞句が述語に生起する場合の統語構造について確認する。名詞述語文だけでなく形容詞述語文も含めたコピュラ文の分析においては、単に主語を TP に生起するものとも考えることも多い（Nishiyama1999, 外崎 2005, 岸本 2005）。

<sup>9</sup> (56) のような省略の用例を除いても、述語名詞が項として生起しないという点には疑問があり、特に評価をあらわす述語に対して述語名詞が項として生起する事例が以下のように見られる。

- i a. いくら撮影だからといってずぶ濡れは可哀そうだ。
- b. プレゼントは手作りがうれしい。
- ii a. 窓の開けっぱなしは不用心だ。
- b. パンは焼きたてがおいしい。

よって、正確には、述語名詞は項として生起する場合には DP を持つことも可能だが、述部位置において DP を持たない形式と考える。

しかしながら、恒常的状态をあらわす文と一時的状態をあらわす文でコピュラ文の主語を異なる位置と仮定する立場 (Endo1994、鈴木 2017) も存在し、本論文では特に5章において部分的に恒常的状态と一時的状態について言及を行う。よって、本論文においては混乱を避けるため、恒常的状态をあらわす文と一時的状態をあらわす文でコピュラ文の主語が異なる位置に生起する Endo (1994) を理論的前提として採用する。

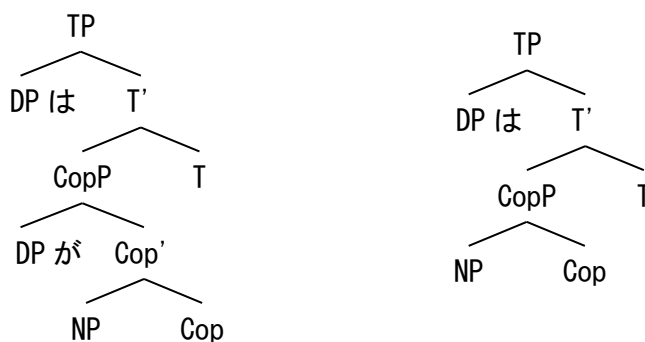
Endo (1994) は一時的状態をあらわす「病いだ」と恒常的状态をあらわす「長身だ」において主語の「が」と「は」の生起の可否に差がみられることを指摘している<sup>10</sup>。

- (61) a. アメリカ人 {は/が} 病いだ。 [主題/主格]  
 b. アメリカ人 {は/\*が} 長身だ。 [主題/\*主格]

(Endo1994 : 85)

Endo (1994) は、主題の「は」を受け取る位置を IP (本論文における TP)、主格の「が」を受け取る位置を VP と捉えることで、「は」と「が」で主語の位置が異なることを指摘している。これを踏まえると名詞述語文の統語構造は (62) のようになる。以下の統語ツリーでは本論文で採用した枠組みによるものであり、VP の代わりに CopP を用いており、名詞句が DP で表示されている。

- (62) a. アメリカ人 {は/が} 病いだ。 b. アメリカ人 {は/\*が} 長身だ。

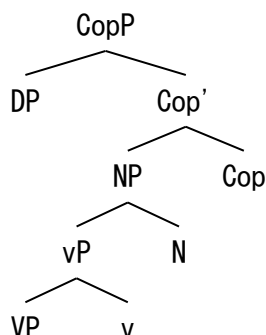


(62) の統語構造では、一時的状態をあらわす「病いだ」においては主語が TP と CopP どちらに生起することも可能だが、恒常的状态をあらわす「長身だ」においては主語が CopP に生起することはなく、常に TP に生起することになる。

ここまで、4 節と 5 節において動詞句の構造と名詞句の構造に関する理論的前提を述べてきた。本論文で採用する理論的前提を踏まえると、統語的述語名詞の基本的な構造は (63) のように表すことができる。

<sup>10</sup> 総記の「が」も含めた恒常的状态と一時的状態に関する整理としては、鈴木 (2017) も参照。

## (63) 統語的述語名詞の構造



統語的述語名詞は N が動詞句 (vP) を包摂する構造であると考えられ、(63) においても N が vP を要求する構造としている。また、述語名詞 (NP) は DP を持たず、CopP に生起する。更に主語となる項 (DP) も CopP に生起することになる。無論、この統語構造はあくまで理論的な前提から導かれるものに過ぎず、特に動詞句の内部については具体的な議論によって検証されていくことになる。

ここまで、4 節と 5 節では、動詞句と名詞句の統語構造に関して、どのような前提に立って議論を進めていくか述べてきた。名詞句に関する前提としては、述語名詞が DP を持たないという仮定を行うことで、通常の名詞と述語名詞を区別する枠組みを採用することについても述べた。また、動詞述語文と名詞述語文の統語構造を確認することで、動詞句と名詞句が合成された形式である統語的述語名詞について取り扱う前提を確認した。

## 6. おわりに

1 章では、統語的述語名詞を取り扱う前提として、本研究の理論的背景と本研究が用いる手法について述べた。

理論的背景としては、まず、統語的語形成について取り上げるモジュール形態論 (影山 1993) の枠組みを概観した上で、統語的述語名詞がモジュール形態論においてどのような位置付けにあったか確認した。そして、同じくモジュール形態論を用いた述語名詞の分析を概観し、統語的述語名詞に関する意味論的分析について概観した。それを踏まえて、統語的複合動詞の研究が統語論的分析によって行われてきたのに対して、統語的述語名詞の研究は意味論的分析によって行われてきたため、複雑述語の研究において各形式の位置付けが行われてこなかったことを指摘した。

本研究で用いる手法としては、統語論的アプローチを採用し、先行研究の分析を活用できるモジュール形態論の立場を用いて議論を行うことを確認した。更に、具体的な道具立てとして、主要な分析対象となる動詞句と名詞句の統語構造に関する理論的前提を

提示して、本論文における統語論的なアプローチで用いる手法を示した。

続いて2章では、記述的な日本語研究も含めて、本論文で統語的述語名詞として取り扱う個別形式の研究を概観した上で、統語的述語名詞を統一的に取り扱う妥当性について議論を行う。

## 第2章 統語的述語名詞の個別的分析和統一的分析

### 1. はじめに

1章では、統語的述語名詞を取り扱う前提として、理論的背景と手法について確認を行った。2章においては、まず、本論文で取り扱う統語的述語名詞に関して各形式の先行研究を取り上げ、理論的研究・記述的研究を問わず統語的述語名詞の研究がどのように行われ、どのような問題点が存在するかを確認する。そして、3章以降の統語的述語名詞に対する体系的分析に向けて、統語的述語名詞を統一的に取り扱う妥当性について議論する。

前半で行う先行研究の概観においては、「-ばなしだ」「-たてだ」「-すぎだ」「-かけだ」「-気味だ」「-放題だ」に関する先行研究を取り上げ、それぞれの研究を概観する。後半で行う統語的述語名詞を統一的に取り扱う妥当性の整理に関しては、統語的述語名詞の形態論的特徴・統語論的特徴・意味論的特徴をそれぞれ記述して、統語的述語名詞を統一的に取り扱うことが有効であることを述べる。

### 2. 各形式に関する先行研究

まず、2節において「-ばなしだ」「-たてだ」「-すぎだ」「-かけだ」「-気味だ」「-放題だ」までの先行研究を取り上げ、概要をまとめる。なお、「-まくりだ」に関しては先行研究が管見の限り存在しなかったため、ここでは取り上げない。また、先行研究においては、「-ばなしだ」の研究ではなく、「ばなし」や「ばなしの」として統語的述語名詞を取り上げることもあるが、混乱を避けるために「-ばなしだ」として統一的に表記する。

各形式の先行研究の概観に移る前に、「-ばなしだ」「-たてだ」「-すぎだ」「-かけだ」「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」という本論文では取り扱う形式の範囲について確認しておく。まず、本論文で取り扱う統語的述語名詞は、統語的に述語名詞を為す形式であるが、前部形式に動詞連用形を取るものに限る。よって、(1)のように前部形式として形容詞を取るものについては取り扱わない。前部形式に形容詞を取る形式としては「-めだ」が存在し、また「-すぎだ」が形容詞を取る事例も存在する。

- (1) a. 太郎は花子に甘めだ。  
b. 太郎は花子に甘すぎだ。

また、(2)の「-きり」「-済み」も述語名詞と考えられるが、本論文では取り扱わない。いずれも影山(1993)が句接辞として取り上げる形式の一つであるが、「-きり」に関しては「つきっきり」と「かかりっきり」のように語彙が限られており生産性が低く、「-

済み」は動詞ではなく動名詞を取る点で特徴的である。また、本論文で取り上げる「-気味だ」が動名詞を取る事例も存在する。

- (2) a. 太郎は課題にかかりつきりだ。
- b. 太郎は課題を提出済みだ。
- c. 芸能人はテレビ出演を自粛気味だ。

このような事例も興味深いが、数が少なく、本論文の範囲においては動詞連用形を取る統語的述語名詞の分析に注力する。

## 2.1 「-ばなしだ」

「-ばなしだ」に関する先行研究では、「-ばなしだ」そのものが持つ意味の問題と共起する動詞の影響に左右されるアスペクト的な意味解釈の問題が主に取り扱われてきた。

「-ばなしだ」そのものが持つ意味の問題とは、「-ばなしだ」のどの用法にも共通してみられる中心的・本質的な意味がどのような意味かという論点である。この論点は、個別の意味解釈に共通する「ばなし」の意味を探るものであるため、後述するアスペクト的な意味解釈の分析とも密接に関わっている。この論点については、森田（1989）、渡邊（2000）、小西（2001）、藤城（2006）、中村（2009）がそれぞれ整理を行っているが、ここでは (3)(4) に森田（1989）と中村（2009）の記述を示す。

- (3) 「-ばなし」は『放し』で、なすべき始末を怠って、そのままの状態にしてあること。初めの行為はいちおう最後まで完全になされたのであるが、その後始末を全くしない“……したまま放置する”状態をいう。

（森田 1989 : 298）

- (4) 「～っぱなし」の「中心的性質」: ある状態変化が起こった後、当然期待される2度目の状態変化が起こらず、その状態が継続している様子を表す。

（中村 2009 : 10-11）

このように、「-ばなしだ」はある事態の後にすべきことがなされていない、あるいは起こるはずのことが起こっていないという「放置」の意味を持っているものと理解されてきた。この「放置」という意味とアスペクト的な意味解釈の関係が、「-ばなしだ」を取り扱う研究の中心的な関心だったと言える。

続いて、アスペクト的な意味解釈の問題とは、以下のように、共起する動詞によって「-ばなしだ」があらわす継続の内容が変化することである。「-ばなしだ」が示す主な意味解釈は、(5) のように動作の継続と結果の継続の2種類に大別できる（須賀 2003、中村 2009、臼杵 2011）。



- (5) a. 子供がずっと歩きっぱなしだ。 (動作継続)  
 b. ドアが開きっぱなしだ。 (結果継続)

上記の分類のほかに、繰り返しや放置という意味解釈を別個に論じる研究もある。

臼杵 (2011) は「次々と」のような副詞によって強制される解釈として繰り返しを想定している。(6a) では花壇の花が枯れる事態が繰り返された解釈が得られるが、(6b) では花壇の花が枯れたままであるという結果継続の解釈が得られる。

- (6) a. 花壇の花が次々と枯れっぱなしだ。  
 b. 花壇の花が枯れっぱなしだ。

(臼杵 2011 : 183)

また、中村 (2009) は渡邊 (2000) や小西 (2001) の指摘を踏まえる形で「状態の放置」という用法を立て、動作の継続や結果の継続とは別個に取り扱っている。(7) の用例は、「遊び続けている」という意味解釈や「読み続けている」という意味解釈ではなく、「遊んだ後に片付けない」「漫画を読んだあとに片付けない」という意味解釈となる。

- (7) a. この子は遊んだら遊びっぱなしだ。

(小西 2001 : 126)

- b. マンガが読みっぱなしだ。

(渡邊 2000 : 16)

中村 (2009) は、動詞があらわす事態の継続をアスペクト的用法と区別して、この用法を非アスペクト的用法としている。非アスペクト的用法の「-っぱなしだ」は、「遊んだら片付ける」「読んだ漫画を本棚に戻す」というように、社会通念に沿った対処が起きていないことをあらわすものとされている。

順序が前後するが、このような意味解釈と「-っぱなしだ」そのものが持つ意味の関係を明らかにすることが、「-っぱなしだ」に関する研究の中心的な課題とされてきた。その観点と関連するが異なるアプローチとして、臼杵 (2011) は語彙概念構造を用いて「っぱなし」の意味構造の記述を行っている。臼杵は、「-っぱなしだ」が責任者という項を要求するものと仮定し、(8)(9) のような語彙概念構造を提案している。

- (8) a. 拓哉が笑いっぱなしだ。  
 b. [ x<sub>i</sub> KEEP<sub><panashi></sub> [ x<sub>i</sub> ACT (ON y) ] ]  
 (9) a. 花瓶の花が枯れっぱなしだ。

b. [c KEEP<sub><panashi></sub> [y BECOME [y BE AT-z]]]

(臼杵 2011 : 186-187)

臼杵の分析では、(8) のように動作主が文に生起する例では語彙概念構造において責任者 (xKEEP) と動作主 (xACT) が同定され、(9) のように動作主が文に生起しない例では語彙概念構造において責任者 (c) が付加されることになる。臼杵 (2011) は、責任者という語彙概念構造における項を想定することで、「ばなし」そのものが持つ意味を定式化した研究とも考えられる<sup>1</sup>。

以上が「-ばなしだ」について取り扱う主な先行研究である。ここまで見てきたように、「-ばなしだ」について取り扱う研究は、「-ばなしだ」の意味に主要な関心を向けており、「-ばなしだ」の統語的側面は分析されてこなかった。渡邊 (2000) など、他動詞の内項が主格を伴って出現する (10) のような用法について言及している研究もあるが、現象の指摘に留まっている。

(10) a. 部屋が散らかし**っ**ばなしだ。b. 洗濯物が干し**っ**ばなしだ。

(渡邊 2000 : 16 下線部は筆者による)

(11) a. 部屋を散らかした。b. 洗濯物を干した。

また、「-ままだ」との比較を行う渡邊 (2000) や「-ままだ」や「-きりだ」との比較を行う藤城 (2006) のように意味的な類似性に基づいて比較を行う研究はみられるが、統語論的な類似性に基づいて体系的分析は行われてこなかった。

このように、「-ばなしだ」においては、(10) のような統語的現象が観察されている一方で、記述的な分析にせよ、語彙概念構造による分析にせよ、意味を重視する分析が優先されており、統語論的な分析は行われてこなかった。

## 2.2 「-たてだ」

「-たてだ」に関する先行研究では、主に共起できる動詞から、「-たてだ」の意味と「-たてだ」の成立条件に関する議論が行われてきた。ここでは、まず森田 (1989) の基礎的な記述を確認した後、語彙概念構造を用いて分析を行う山田 (2005) の議論と「-たてだ」が外項を取る事例を取り扱う向坂 (2014) と山田 (2016) について確認する。

森田 (1989) は、「-たてだ」の特徴について概要を (12) のようにまとめている。森田は、動詞「たてる」との関連を述べた上で、行為によって生じる価値を取りたてる形式であることについて議論を行っている。

<sup>1</sup> 臼杵 (2011) 自身は「-ばなしだ」について取り上げている先行研究に言及していない。

- (12) a. 動詞の連用形について体言化させ、その行為がなされてからあまり時間が経っていない意を添える。  
b. 動詞「たてる」とは、静止している事物に活動を与えたり、その結果、事物を新たにある状態や位置に持っていき、固定させることでもある。この後者の意味が接尾語「たて」に発展した。  
b. 「たて」は決して終了した行為そのものを問題としているのではない。行為によって生ずる結果の価値を取りたてる意識なのである。

(森田 1989 : 662-663)

「-たてだ」が価値を取りたてる形式であることの根拠として、(13) のような対立が挙げられる。

- (13) a. 作りたての料理  
b. \*壊したての建物

(森田 1989 : 663)

作った直後であることにはあったかい、あるいは美味しいといった価値が想定できるが、建物が壊された直後であることにはそのような価値が想定せず、「-たてだ」が不適合となる。

山田 (2005) は、森田 (1989) の議論に加えて、項構造と語彙概念構造の観点から議論を行っている。山田 (2005) の時点では「-たてだ」と項構造の関係に関して、内項を取る場合に成立するという議論が行われている。のちに向坂 (2014) において「-たてだ」が外項を取る事例が取り上げられるが、まずは内項を取る場合の「-たてだ」の性質について確認する。

山田 (2005) は (14) のような対立を取り上げ、「-たてだ」について結果を取りたてる形態素であると分析している。事実観察として、「-たてだ」には活動動詞や接触・打撃動詞が生起せず、一方で作成動詞、変化動詞、発生・出現動詞などが生起できる。

- (14) a. \*たたきたての肩  
b. しばりたてのミルク

(山田 2005 : 273-274 抜粋)

山田 (2005) は、上記の対立について語彙概念構造において STATE を持つか否かという観点から説明を行っている。(15) のように活動動詞や接触・打撃動詞は語彙概念構造上に STATE を持たず、一方で (16) のように作成動詞や変化動詞、出現・発生動詞は語

彙概念構造上に STATE を持っている。「-たてだ」が成立する動詞は、語彙概念構造上に STATE を持っていることになる。

- (15) a. 活動動詞, 接触・打撃動詞 [EVENT x ACT (on) (y)]
- (16) a. 作成動詞 : [EVENT x ACT (on y)] CAUSE [EVENT BECOME [STATE y BE AT-z]]
- b. 変化動詞 : [EVENT y BECOME [STATE y BE AT-z]]
- c. 出現・発生動詞 : [EVENT BECOME [STATE y BE AT-z]]

(山田 2005 : 281)

「-たてだ」を語彙概念構造上にある STATE を取りたてる形式と仮定すると、活動動詞や接触・打撃動詞は語彙概念構造上に STATE を持たないため「-たてだ」に生起できないものと説明することが可能となる。また、この分析においては、STATE 内部に存在する項は外項 (x 項) ではなく内項 (y 項) であり、「-たてだ」が内項を取るようになる。

このように、山田 (2005) の段階では外項を取るような「-たてだ」の事例に関しては想定されていなかったが、向坂 (2014) では、外項が主語となる (17) の事例が指摘されている。

- (17) a. 薬学部を出たての新人と経験豊富なベテランが同じ評価だったため、専門職としての能力をしっかりと評価し、やる気を引き出すことにした。
- b. 大体、免許取りたての人は通りたくないというふうな実は国道なんです、これはもう長年の地元の皆さん方を中心にした御要望で、ようやくトンネルをやるうというふうな話になりました。

(朝日 2010 年 9 月 7 日 朝日新聞 朝刊)

(国会会議録衆議院・予算委員会平成 20 年 2 月 7 日)

(向坂 2014 : 44-45 抜粋)

ただし、向坂 (2014) は外項を取る「-たてだ」そのものについて分析を行っているのではなく、テイル形があらわす意味をチェックするテストフレームとして「-たてだ」を用いている。向坂 (2014) によると、外項を取る「-たてだ」が成立する「薬学部を出る」「免許を取る」のような動詞句は、(18)(19) のようにテイル形がその出来事が主語の属性に変化をもたらすような<恒常的結果状態>をあらわすとされている。

- (18) a. 太郎は薬学部を出ている。
- b. 太郎は薬学部を出たてだ。
- (19) a. 太郎は免許を取っている。
- b. 太郎は免許を取りたてだ。

山田 (2016) では、向坂 (2014) が提示した外項を取る「-たてだ」の事例を受けて山田 (2005) の分析を拡張した分析が提示されている。山田は、(20) のように動作主の位置変化・状態変化をあらわす語彙概念構造を仮定することで「-たてだ」が外項を取る事例についても山田 (2005) の分析を適用できると主張している。(20) の構造は、「出る」のように位置変化をあらわす動詞でも動作主の変化を表す場合には下位事象に STATE が存在する事を示しており、STATE 内部に動作主 (外項) をあらわす x 項と一致する x 項が存在している。そのため、「-たてだ」によって取りたてられる STATE の内部に外項が存在することになり、「薬学部を出たての太郎」という文が成立することになる。

(20) [EVENT x ACT (on y)] CAUSE [EVENT BECOME [STATE x BE FROM-z ]]

(山田 2016 : 23)

ほかに、歴史的観点に着目する工藤 (2005) の調査では、中世以前の「-たてだ」は基本的に他動詞を取る傾向があり自動詞を取りにくかったが、時代が下るにつれて自動詞を取りやすくなったことが指摘されている。ただし、「もぎたてだ」は成立するが「もげたてだ」は違和感があるというように、全ての他動詞に対応する自動詞で「-たてだ」が成立するわけではない。工藤 (2005) は「もげたてだ」について「もぐことが目的である印象を与えてしまい、結果を含意して直後を意味する<動詞+たて>にはふさわしくない (工藤 2005 : 103)」としており、他動詞の場合と自動詞の場合で許容度が異なる事例も存在する。

以上が「たてだ」について取り扱う主な先行研究である。「-たてだ」に関しては、後述する「-すぎだ」に関する由本 (2012) と共通して、語彙概念構造を用いた分析が行われている。しかしながら、後述する通り、意味構造と統語構造の関係については未整理の部分があり、また「-たてだ」を個別的に分析しているため、他の形式との関係が十分にわかっていなかった。

### 2.3 「-すぎだ」

「-すぎだ」に関しては、主に複合動詞「-すぎる」に対する比較の観点から名詞化形式として「-すぎだ」が取り上げられることが多く、部分的に「酒 {を/の} 飲みすぎだ」のように「を」と「の」の交替について取り上げる研究も存在する<sup>23</sup>。ここでは、「-すぎ

<sup>2</sup> 「昼過ぎ」のように名詞を取る「-すぎ」も存在するが、アクセントが異なる。上付きの<sup>1</sup>はアクセントの下がり目を指し、<sup>=</sup>は平板式のアクセントであることをあらわす。

i ひるすぎ<sup>1</sup>に (太郎に会った。)

ii (太郎は) たべすぎ<sup>=</sup>だ。

<sup>3</sup> 森田 (1989) にも言及があるが、「昼過ぎ」のような名詞を取る「すぎ」に関する言及の

だ」のような事例の存在に言及した Sugioka (1985) と由本 (2005) の指摘を確認した上で、由本 (2012) による「-すぎだ」に対する語彙概念構造による分析を確認する。

「-すぎる」について取り上げる Sugioka (1985) や由本 (2005) において、「-すぎる」の名詞化形式として部分的な言及が行われている。その時点では、(21) のように連用成分や対格が生起する「-すぎだ」と (22) のように連体成分や属格が生起する「-すぎ(だ)」の存在について言及されているのみであり、「-すぎだ」そのものの性質について取り上げられてはいなかった。

- (21) a. 太郎は[病気になり過ぎ]だ。  
 b. 太郎は[遅くまで会社で働き過ぎ]だ。  
 (Sugioka1985 : 206)  
 c. 太郎は[テレビを見すぎ]だ。  
 (由本 2005 : 223)
- (22) a. 本 {の/\*を} 読みすぎは目に悪い。  
 b. 工場 {での/\*で} 働きすぎが原因だ。  
 (Sugioka1985 : 207)

その後、由本 (2012) が「-すぎだ」を統語的に形成される述語名詞として取り上げ、意味構造に関する分析を中心に議論を提示している。由本は「-すぎだ」に2つのパターンが存在することを指摘しており、内項を取る場合と外項を取る場合で性質が異なっていることを主張している。(23)(24) に、「-すぎだ」が内項を取る事例を挙げる。

- (23) a. 冷やしすぎのビールやゆですぎのパスタは美味しくない。  
 b. 荷物を積みすぎのトラックは通行できません。  
 c. 磨きすぎの床はすべりやすくて危険だ。  
 d. 炒めすぎの野菜はビタミンが失われています。  
 (由本 2012 : 131)
- (24) 冷えすぎのビール、下がりすぎの物価、伸びすぎの髭  
 太りすぎの子犬、乾燥しすぎの部屋、日焼けしすぎの肌  
 (由本 2012 : 133)

由本は内項を取る「-すぎだ」について、「ある一時点の行為における結果として生じた対象あるいは場所の状態が行きすぎであることを表している。(由本 2012 : 132)」と述べている。「\*作りすぎのクッキー」や「\*投げすぎのボール」、「\*見すぎのテレビ」とい

---

中で「動詞に付く場合は『遊びすぎだ/遊びすぎる』のように動詞を造る接尾語と意味の面で共通する(森田 1989 : 545)」と述べられており、「-すぎる」との違いは強調されていない。

った例が不適格になるという由本の観察も、この記述を支持している。

由本 (2012) は、内項を取る「-すぎ」について語彙概念構造を用いた説明を行っている。(25) は「茹ですぎる」の語彙概念構造を元にしており、名詞化形式「-すぎだ」が語彙概念構造における STATE の部分を焦点化するという説明によって、「-すぎだ」の意味解釈と動詞に対する制約を説明している。この点については山田 (2005) による「-たてだ」の分析と共通しており、動詞が持つ語彙概念構造の STATE が問題となっている。

(25) [[x ACT ON y]BECOME[STATE y BE [AT TOO [BOILED]]]

(由本 2012 : 140 改変)

続いて「-すぎ」が外項を取る事例を (26)(27) に提示する。

- (26) a. 髪を伸ばしすぎの男子学生、ビールを冷やしすぎの店  
 b. ?絵を描きすぎの画家、?製品をつくりすぎの企業  
 c. テレビを見すぎの子供、漫画を読みすぎの子供  
 d. ?ボールを飛ばしすぎの選手、??電話をかけすぎのサラリーマン

(由本 2012 : 131-132)

- (27) 働きすぎの人、遊びすぎの子供、運動しすぎの人  
 ?化粧しすぎの女、車に乗りすぎの人、親に頼りすぎの子供  
 甘えすぎの子供

(由本 2012 : 133)

「-すぎだ」が外項を叙述対象とする例について、由本 (2012) は「行為の行き過ぎが慣習化・日常化しており、そのことが主語の性状を表すと解釈されている」と説明している。由本は、内項が叙述対象になる場合は結果状態としての解釈が優先され、外項が叙述対象になる場合は準属性（履歴属性）としての解釈が優先されると説明している。具体的な例として「絵を描きすぎの作家」は、絵を描きすぎたせいで画家の評価が下がったという状況ならば容認しやすいというインフォーマントの回答があったことを述べている。

「-ばなしだ」においても、他動詞の内項が主語としてふるまう事例が指摘されていたが、「-すぎだ」に関する由本 (2012) の説明においても (23) のような事例が指摘されている。「-すぎだ」が述部に生起する場合においても (28) のように同様の事例が観察できる。

- (28) a. ビールが冷やしすぎだ。

b. 床が磨きすぎだ。

由本 (2012) においては、他動詞の内項が主語としてふるまう (28) の現象についても前述の語彙概念構造によって説明している。「-すぎだ」が語彙概念構造上の STATE を焦点化するために、STATE 内に存在しない外項は背景化され、抑制されることになる。一方、この抑制のメカニズムについて、統語論的な観点からの指摘はない。この点について、由本 (2012) は以下のように述べている。

この操作 (引用者註 : (25) の語彙概念構造上の操作のこと) によって「V 過ぎる」とは異なる具現形式をもつ述語となるのだから、語彙部門で起こる操作だと考えるのが自然かもしれないが、(中略)「加熱しすぎの食品」のように統語的派生によるとされる「動名詞+する」が結合できることから、語彙部門での派生とする分析では問題がある。

(由本 2012 : 142)

由本 (2012) は外項の抑制について意味構造上の操作による分析を提示しているものの、意味構造上の操作と統語構造の関係について問題を認めている。この問題点は、山田 (2005) とも共通しており、「-ばなしだ」「-たてだ」「-すぎだ」に一貫して意味に注目した議論が行われていることがわかる。

ほかに近年の研究においては、阿久澤 (2019) が「-すぎだ」の統語論的分析を行っている。阿久澤 (2019) は、由本 (2012) において外項を主語とする「-すぎだ」が属性叙述をあらわすことを踏まえて、(29) のように「-すぎだ」が「-過ぎる」とは異なる項構造を持ち、(30) のように「-すぎだ」が「-過ぎる」とは異なる統語構造を持っていることを主張している。

- (29) a. V 過ぎる : [φ, 命題]  
 b. V すぎだ : [属性主, 命題]

(下線部=外項)

- (30) a. [太郎<sub>i</sub>が [t<sub>i</sub>寿司を食べ] すぎた]  
 b. [太郎<sub>i</sub>が [φ<sub>i</sub>寿司を食べ] すぎだ]

(阿久澤 2019 : 43)

しかしながら、阿久澤 (2019) は、内項を主語とする「-すぎだ」について研究対象から外しているため、由本 (2012) において課題となっている (28) のような現象の統語論的な側面についてはどのように分析できるか示していない。更に、外項を主語とする「-



すぎだ」が阿久澤 (2019) の主張する構造を持っているとして、内項を主語とする「-すぎだ」と同じ形式であるのか、あるいは異なった形式であるのかがわからず、あくまで限定的に複合動詞と述語名詞の対立を取り扱ったものとなっている。

ここまで Sugioka (1985) や由本 (2005) の時点で言及されていた「-すぎだ」のうち、目的語が対格を伴う事例の研究を概観したが、目的語が属格を取る事例については谷守 (2018) が言及を行っている。谷守 (2018) では、(31) のように連用的成分を伴う名詞文と連体的成分を伴う名詞文の比較を行う一環として、(32) のように「-すぎだ」における対格と属格の交替を取り扱っている。

- (31) a. 東横線は渋谷駅でお乗り換えです。  
b. 東横線は渋谷駅でのお乗り換えです。

(谷守 2018 : 164)

- (32) a. 太郎はお酒を飲みすぎだ。(ほら、太郎は酒を飲み過ぎている)  
b. 太郎はお酒の飲みすぎだ。(太郎の問題は酒の飲み過ぎだ)

(谷守 2018 : 166)

谷守 (2018) は、連用的成分を伴う場合にはより動的・流動的事態のニュアンスがあらわされ、連体的成分を伴う場合には固定化された観念があらわされるとしている。「-すぎだ」に関しては、(32) のカッコ書きの中に示した意味的な違いがあるとされている。本論文の範囲においては、他の述語名詞との統一的な分析を目指すため、(32b) のような「-すぎだ」は原則的には取り扱わないが、5章において、通常の述語名詞との対立を観察するため部分的に取り上げることになる。

## 2.4 「-かけだ」

「-かけだ」に関する研究は、「-かける」の名詞化形式として取り上げられながら、Kishimoto (1996) 以降の研究において、1章で取り扱った非対格性のテストフレームとして取り上げられることが多かった (岸本 2000, 岸本 2005, 岸本 2020)。意味論的な研究としては、Kishimoto (1996) の反論である Tsujimura and Iida (1999) や「-かける」を扱う宮腰 (2009) においても言及がある。ここでは主に Kishimoto (1996) とそれに対する Tsujimura and Iida (1999) の反論、それに対する岸本 (2000) の反論を追いかける形で議論を概観していく。

非対格性のテストフレームとしての「-かけだ」に関する分析の前に、森田 (1989) における記述的な観察を確認する。森田は「-かけだ」について「-かける」の名詞形として上で (33) のように説明しており、(34) の「腐りかけ」のように「-かけだ」が成立する自動詞と (35) の「歩きかけ」のように「-かけだ」が存在しない自動詞の対立を指摘している。

- (33) a. 自動詞に付いて、事物がその作用や状態変化に少し入り始めている意を表す。  
 b. 他動詞に付いて、ある意志的な行為を少しおこなって、途中でやめたままになっている事物の状態を表す。

(森田 1989 : 297)

- (34) a. 腐りかけの卵  
 b. 消えかけの文字  
 (35) a. \*歩きかけの人  
 b. \*笑いかけの子供

(森田 1989 : 297)

このように「-かけだ」が自動詞の種類によって成立の可否に差異がみられるが、非対格性のテストフレームとして分析においても、「-かけだ」における成立の可否に着目している。岸本による一連の研究では、(36)のように「-かけの X」において、Xに「労働者」「料理人」という外項が入る場合に「-かけだ」が成立せず、Xに「花」「ごはん」という内項が入る場合は「-かけだ」が成立するという記述的な整理を行った。この整理に基づいて Kishimoto (1996) は「-かけだ」の成立の可否によって外項と内項の対立や非能格自動詞と非対格自動詞の対立、すなわち非対格性に関するテストを行うことが可能であると主張している。

- (36) a. \*働きかけの労働者  
 b. 枯れかけの花  
 c. つくりかけの {ごはん/\*料理人}

(岸本 2020 : 5)

一方、Kishimoto (1996) に対して、Tsujimura and Iida (1999) では、上記の X に外項が入る (37c) の事例を取り上げ、「-かけだ」の成立条件について非対格性ではなく完結性の問題が関わっていると主張している。

- (37) a. 飲みかけのミルク  
 b. \*飲みかけの赤ちゃん  
 c. ミルクを飲みかけの赤ちゃん

(Tsujimura and Iida 1999 : 115)

これに対して、更に岸本（2000）の反論が存在する。岸本（2000）は現象観察のレベルにおいて、(38)のように外項を叙述対象とする「-かけだ」が成立する事実を認めつつも、非対格性のテストフレームとして有効な「-かけだ」は(39)のように動詞句を含まない名詞化表現に限られると説明している。

- (38) a. [太郎が折り]かけの折り紙  
 b. [[折り紙を折り]かけの]太郎

(岸本 2000 : 78)

- (39) a. [太郎の[読みかけの]本]  
 b. \*[本の[読みかけの]太郎]

(岸本 2000 : 79)

つまり、「-かけだ」が動詞句を取るような事例は非対格性のテストに用いることはできず、「-かけだ」が動詞のみを取る(39)の事例を用いて非対格性を検証する必要がある、ということになる。

Kishimoto (1996) や岸本 (2000) の議論は、項の統語論的な分類である外項と内項について検証を行う上で一定のテストフレームを提示しており、統語論において重要な指摘である。しかしながら、「-かけだ」そのものに対する統語論的な議論は行われておらず、(38) と (39) のような違いもあくまでテストフレームとしての「-かけだ」に都合の悪い用例を排除するものにとどまっている。また、Tsujiura and Iida (1999) の議論が意味に注目していることも含めて、「-かけだ」は統語論的に重要なデータを提供する形式ではあっても、「-かけだ」自体を統語論的に取り扱う研究は行われてこなかった。

ほかに、「-かけだ」の意味論的な分析に関しては、「-かける」の分析を行う宮腰 (2009) においても部分的に言及がみられる。宮腰 (2009) は、「-かける」が<開始前読み>と<途中読み>の2種類を持っていることを踏まえて、議論を行っている。開閉を問わず動詞でも (40a) は<途中読み>が優勢であり、(40b) は<開始前読み>が優勢であるという対立がみられる。

- (40) a. ドアが閉まりかけた。  
 b. ドアが開きかけた。 (宮腰 2009 : 39)

宮腰 (2009) は「-かける」の解釈について、始動点が事態の成立点となる場合には<開始前読み>となり、完結点が事態の成立点となる場合には<途中読み>となると主張している。つまり、ドアを閉める動作においては、事態の成立点が完結点となるため、(40a) は<途中読み>で解釈されることになるが、ドアを開ける動作においては事態の成立点が始動点となるため、(40b) のように<開始前読み>で解釈されることになる。宮腰

(2009)は「-かけだ」においても同様の分析が適用可能であることを述べており、しながら名詞化形式である「-かけだ」は一時的状態をあらわし、意味的制限が厳しくなるものと述べている。

## 2.5 「-気味だ」

「-気味だ」に関しては、森田(1989)、井上(1998)、八尾(2006)、幸田(2011)と「-がちだ」や「-やすい」との比較によって、傾向をあらわす表現としての位置付けを行う分析が多かった。ここでは、まず「-気味だ」が傾向表現としてどのような傾向をあらわすか述べた後に、「-気味だ」が持つニュアンスについて述べる。

井上(1998)では、「-がちだ」は頻度傾向、「-気味だ」は状態傾向、「-やすい」は容易性に由来する傾向をあらわすとされている。特に「-がちだ」と「-気味だ」に関しては、(41)のような対立を示している。(41)では、「-がちだ」が「風邪を引く」という動詞句を取るのに対し、「-気味だ」は「風邪を引く」という動詞句を取ることができない。井上(1998)はこのような対立について風邪を<事態>として把握するか<状態>として把握するかの違いとして述べており、「-気味だ」は事態ではなく状態の傾向をあらわすことになる。

- (41) a. 妹は風邪を引きがちだ。  
 b. \*妹は風邪を引き気味だ。  
 (cf. 妹は風邪気味だ。)

(井上 1998 : 73)

また、井上(1998)は「-気味だ」が動詞連用形に後接する事例について「動詞の連用形に接続するといっても『～ぎみだ』の場合、(17b)『遅れぎみだ』や『疲れぎみだ』『くもりぎみだ』などのように前接動詞には転成名詞とも言える名詞的なものが目立つ(井上 1998 : 68)」とし、「-気味だ」が動詞を取る場合についてもあくまで動詞から転成した名詞を取るものと説明している。状態傾向と頻度傾向の対立に関しては、八尾(2006)や幸田(2011)でも概ね共通した見解が得られている。

傾向表現とマイナス評価との関係については、森田(1989)や井上(1998)においては「-がちだ」や「-気味だ」が持つマイナス評価を持つ形式であることが言及されている。しかしながら、八尾(2006)や幸田(2011)ではマイナス評価に関しても「-がちだ」や「-気味だ」においては意味の棲みわけ存在することを指摘している。八尾(2006)は状態傾向をあらわすという井上(1998)の説明を基本的には踏襲した上で、「-気味だ」には「話し手が断定を避け、語気を和らげようとする態度をあらわす機能がある(八尾 2006 : 135)」のに対し、「-がち」にはマイナスイメージを積極的に付加する機能があり、「-やすい」には客観的な態度で事例の多さを述べる機能がある点などについて言及し

ている。幸田（2011）に関しても、動作に注目する「-がちだ」と状態に注目する「-気味だ」の対立を認めた上で、『がち』は評価を伴い、その前後に真意を述べることになる。一方『ぎみ』は普段と少し違う様子の判断であるため、前後の文に現況を詳しく述べる文が表される」とコンテキストに関する問題も含めてマイナスイメージ等についての言及が行われている。

以上の先行研究に関して、「-気味だ」が状態傾向をあらわすという記述に関しては妥当なものと言えるが、井上（1998）の観察には一部問題がある。井上（1998）は「-気味だ」に前接する動詞連用形について「転成名詞とも言える名詞的なものが目立つ」としているが、(42)のように実際には対格を伴う動詞句が「-気味だ」に前接する事例が存在する。

- (42) a. 太郎が仕事をサボり気味だ。  
 b. 太郎が時間を持て余し気味だ。  
 c. 太郎が頬を赤らめ気味だ。  
 d. 太郎は体調を崩し気味だ。

「-がちだ」に比べて「-気味だ」が動詞に制約を受けやすいことは確かだが、「-気味だ」は名詞のみを取る形式ではなく、本論文で取り上げる統語的述語名詞「-ばなしだ」「-たてだ」以下の形式と同様に、動詞句を取る形式と考えられる。

ほかに「-気味だ」に関しては「-気味だ」の歴史的変遷について取り上げる秋元（1998）が存在する。秋元（1998）によると、明治期・大正期においては連体修飾を伴って使用される名詞相当の「気味」の用例が優勢だが、昭和期になると動詞連用形や名詞を伴って語を為す接尾辞相当の「気味」の用例が優勢となっている。秋元（1998）では「-気味だ」の前身となる表現として(43)のような名詞相当の「気味」から「-気味だ」への変遷が述べられている。

- (43) a. 今初まった事では無いが、先刻から酔醒めの気味で咽喉のどが渴く。  
 (『浮雲』 M.20<sup>4</sup>)  
 b. 鈴木君は少し凹んだ気味で……  
 (『吾輩は猫である』 M.38)  
 (秋元 1998 : 7, 9)

## 2.6 「-放題だ」

「-放題だ」に関する研究としては、Namiki（2010）・竝木（2015）のように「-放題」の品詞的・形態論的性質に関する議論と畠山ほか（2018）のように格パターンに関する

<sup>4</sup> M は明治を指している。M20 は明治 20 年を指す。

議論が存在する。「-放題だ」という形式そのものに関しては研究の流れがあるわけではなく、Namiki (2010)・竝木 (2015) と畠山ほか (2018) は異なった観点から研究を行っている。

Namiki (2010)・竝木 (2015) は「-放題だ」が動詞連用形だけでなく、(44) のように「-たい」や形容動詞のように様々な形式に後接することを指摘しており、「-放題だ」が様々な形式に後接する接尾辞として用いられていると述べている。

- (44) a. 吸い殻なんて選びたい放題ってわけだ  
 b. 王弁からすると我がまま放題で何かとかみつかれた印象が強い。  
 (竝木 2015 : 119)

しかしながら、「-放題だ」は、「イイタイホウダイ」のように複合語としてのアクセントパターンを持っており、Namiki (2010)・竝木 (2015) は「-放題だ」が現代語において複合語としての性質を残している点を指摘している<sup>5</sup>。

また、「-放題 (だ)」は、(45) のような名詞を形成するだけでなく、(46) のように副詞を形成することもある。

- (45) a. どうすればアメリカのやりたい放題に終止符を打ち、…  
 b. 荒れ放題の空き家  
 (46) a. やくざ組織が好き放題暴れまわっていた。  
 b. 知事は五日間タミフルを飲み放題飲んだ。  
 (竝木 2015 : 121)

Namiki (2010)・竝木 (2015) は、英語の接尾辞 *ly* であれば「形容詞+ly」は副詞となり「名詞+ly」は形容詞になるというように、接尾辞が一定の入力に対して一定の出力を返す性質を持つものと述べ、名詞にも副詞にもなり得る「-放題だ」は接尾辞ではなく複合語の特徴を持つ形式であると指摘している。このように、Namiki (2010)・竝木 (2015) では単語と接辞の境界に位置する事例として「-放題だ」が取り上げられ、同様の事例として「サンタよろしく (まるでサンタのように)」のような「-よろしく」などが存在することを指摘している。

形態論的な観点に注目する Namiki (2010)・竝木 (2015) に対して、畠山ほか (2018) は「-放題だ」の統語論的な格パターンに関して興味深い性質を指摘している。畠山ほか (2018) によると、「-放題だ」は (47) のように主格・対格・属格の交替を起こす形式である。

<sup>5</sup> 上付きの「」はアクセントの下がり目をあらわしている。

- (47) a. ビール {が/を/の} 飲み放題  
 b. [NP[s[sc 女性がビールを飲み放題 (だ) ]]]N]

(畠山ほか 2018 : 150)

畠山ほか (2018) では (47) のような格交替に関して、Small Clause、文、名詞句が重なる構造を仮定し、格交替についての説明を行っている。

ただし、筆者の内省によると、「-放題だ」の格交替は (48) のように項位置に生起する事例と述語位置に生起する事例で異なっており、あくまで属格は項位置に生起する事例に留まった現象と考えられ、検討が必要である。

- (48) a. あの店はビール {\*が/\*を/の} 飲み放題をやっている。  
 b. 学生はビール {が/を/\*の} 飲み放題だ。

しかしながら、「-放題だ」の目的語が主格と対格の交替を起こすのは事実であり、この特徴は「-ばなしだ」以下の他の事例には存在しない。「-ばなしだ」等の内項が主語としてふるまう事例は存在するが、目的語のまま主格と対格の交替を起こすのは「-放題だ」に特有の特徴である。

「-放題だ」の格交替について、本論文では「-放題だ」の意味に由来するものだと捉えておく。「-放題だ」が可能文のように実現性 (cf. 大江 2014) に関わる意味を表す (49) では主格と対格の交替が可能であるが、実際に起こった状態をあらわす (50) には主格と対格の交替が起こらない。

- (49) a. 嘘が誰にもバレないので太郎はいくらでも嘘をつける (ついていい)。  
 b. 太郎は嘘 {が/を} つき放題だ。  
 (50) a. 特に嘘をつける状況とかは関係なく太郎は嘘をつきまくった。  
 b. 太郎は嘘 {\*が/を} つき放題だった。

よって、本論文で統語的述語名詞に関する分析において取り上げるのは、(51)(52) のように現在や未来の実現性ではなく現在の (結果) 状態について述べる事例に限る。

- (51) a. 庭が荒れ放題だ。  
 b. 太郎は部屋を散らかし放題だった。  
 (52) 部屋が散らかし放題だ。

「-放題だ」が意味によって主格と対格の交替を起こす事例が存在することを認めつつ、

本論文では、(52) のように内項が主語としてふるまう現象のように他の統語的述語名詞と共通する特徴を捉えることで、名詞性と複雑述語の関係について捉えていく。

## 2.7 各形式のまとめ

以上、2節では、統語的述語名詞の各形式の先行研究をまとめた。

統語的述語名詞の後部形式は、「-ばなしだ」「-たてだ」「-すぎだ」「-かけだ」「-まくりだ」のように動詞から名詞化した形式と「-気味だ」「-放題だ」のように漢語由来の名詞形式の2種類がある。漢語由来の名詞形式は歴史的に「-気味だ」は連体節を伴う形式名詞に由来しており、「-放題だ」は複合語の後部形式に由来している。

1章でも述べた通り、「-ばなしだ」「-すぎだ」「-たてだ」に関しては、語彙概念構造の観点から分析が行われている。しかしながら、統語構造との関連が不明瞭であり、統語構造と語彙概念構造の関係について議論を行う必要がある。他の形式についても、類義表現との比較や解釈の成立条件について注目が向いており、意味に関する議論が中心だった。

また、類義表現であるか否かという観点を除いて、統語的述語名詞は他の形式との関係についての分析の蓄積が少ない。本論文で取り上げる「-ばなしだ」「-たてだ」「-すぎだ」「-かけだ」「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」という7種類の形式は、類義であるか否かという観点において意味が近い形式とは考えられない。「-ばなしだ」であれば「-ままだ」、「-たてだ」であれば「-ばかりだ」、「-気味だ」であれば「-がちだ」のように類義表現としてはそれぞれ別の形式が挙げられる。しかしながら、意味論的に「-すぎだ」と「-たてだ」について方向性を同じくする分析が取られている。それを踏まえて、本論文では、統語論的にも「-ばなしだ」「-たてだ」「-すぎだ」「-かけだ」「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」を統一的に取り扱う分析が有効であることを主張する。

なお、より大局的に統語的述語名詞を一括して捉える研究は存在する。村木(2012)は第三形容詞として、(統語的述語名詞を含む)述語名詞と外延的に一致する形式群の記述を行っている。村木(2012)の分析において述語名詞は連体節、連用節、述部での使用が可能であるという点で統語的に形容詞に近い形式として分析されており、「-ばなしだ」「-たてだ」「-かけだ」等も第三形容詞の一種として記載されている。

- (53) a. 赤い/真っ赤な/真紅の バラ  
 b. 赤く/真っ赤に/真紅に 咲いたバラ  
 c. そのバラは 赤い/真っ赤だ/真紅だ。

(村木 2012 : 190)

しかしながら、村木の記述は第三形容詞(述語名詞)全体を取り扱うものであるため、統語的に形成される複雑述語としての統語現象等については取り上げられていない。



2節では、統語的述語名詞がそれぞれ個別に取り扱われ、意味に注目して分析を受けてきたことを確認した。統語的述語名詞を一括して扱うことの妥当性に関しては、3章～6章の分析によって論証していくことになるが、続く3節では、統語的述語名詞に共通する基本的な現象観察について、形態論・統語論・意味論の観点から確認していく。

### 3. 統語的述語名詞の形態論的特徴

2節で概観した統語的述語名詞に関する先行研究を踏まえて、ここからは統語的述語名詞に共通する特徴について確認していく。まず、3節では、統語的述語名詞の形態論的特徴について確認する。加藤(2012)においては、「ものの名前をあらわす」というような典型的な名詞性だけでなく、様々なレベルの名詞性が整理されている。まず基本的な観察ではあるが、名詞は文末で「だ」を伴い、連体形で「の」を伴う。統語的述語名詞は(54)(55)のように文末では「だ」を伴い、連体形で「の」を伴う点で、形態論的に名詞としてふるまっていることが確認できる<sup>6</sup>。

- (54) a. ランプが点きっぱなしだ。  
 b. 山菜が採れたてだ。  
 c. ジュースが冷えすぎだ。  
 (55) a. 点きっぱなし {の/\*な} ランプ  
 b. 採れたて {の/\*な} 山菜  
 c. 冷えすぎ {の/\*な} ジュース

また、音韻論的な観点からも名詞性を確認することができる。加藤(2012)では、(56)のように起伏式のアクセントを持つ「読む」のような動詞について、動詞としてふるまう連用形においては起伏式のアクセントが保持されるが、名詞化形式である連用形名詞は平板式のアクセントになることが指摘されている。

- (56) a. 読<sup>7</sup>む<sup>7</sup>  
 b. 本を読<sup>7</sup>み、勉強しよう。  
 c. 太郎の読<sup>7</sup>み=<sup>7</sup>はまだまだ甘い。

<sup>6</sup> 「-がちだ」のように、連体形において「な」と「の」がいずれも生起可能な例もある。

i 休みがち {な/の} 学生

しかしながら、筆者の内省では、以下のように「-がちだ」が動詞句を取る場合には「の」が生起しにくいものと思われる。よって、「-がちだ」に関しては本論文で主に取り扱う動詞句を取るような用例については形態論的に形容詞性を持つものと思われる。

ii [vp 授業を休み]がちな学生

iii \*?[vp 授業を休み]がちの学生

<sup>7</sup> 上付きの<sup>7</sup>はアクセントの下がり目を指し、=<sup>7</sup>は平板式のアクセントであることをあらわす。

(57)(58) のように複合動詞の場合も同様に、起伏式のアクセントを持つ動詞であれば平板式のアクセントとなる名詞化形式との対立が観察できる。

- (57) a. 飲み込<sup>↑</sup>む  
 b. 飲み込み=  
 (58) a. 掘り下げ<sup>↑</sup>る  
 b. 掘り下げ=

この観察は、統語的述語名詞の場合も同様に得られる。(59)～(62) のように「-かけだ」「-すぎだ」「-ぱなしだ」「-たてだ」のように起伏式の動詞に由来する形式であっても、統語的述語名詞としてふるまう場合は平板式のアクセントとなる。このように、統語的述語名詞はアクセントに関しても、動詞ではなく名詞としてふるまう形式であることが確認できる。

- (59) a. 飲みかけ<sup>↑</sup>る  
 b. 飲みかけ=  
 (60) a. 食いすぎ<sup>↑</sup>る  
 b. 食いすぎ=  
 (61) a. 開けはな<sup>↑</sup>す  
 b. 開けっぱなし=  
 (62) a. 塗<sup>↑</sup>りたて<sup>↑</sup>る  
 b. 塗<sup>↑</sup>りたて=

ちなみに、(63)(64) のようにもともと名詞である漢語由来の「-気味だ」と「-放題だ」に関しては、「-気味だ」が平板式となるが、「-放題だ」が後部形式の一拍目にアクセントが付与される。これに関しては、「-気味だ」が接尾辞として振舞い、「-放題だ」が複合語として振舞っていることによる違いと解釈できる (cf. 秋元 1998, Namiki2010, 竝木 2015)。

- (63) a. つかれ<sup>↑</sup>る  
 b. 気<sup>↑</sup>味  
 c. つかれ気味=  
 (64) a. 荒れる=  
 b. 荒れほ<sup>↑</sup>うだい

本論文の範囲においては、構成要素が接尾辞であるか語であるか、すなわち派生であるか複合であるかという形態論的な違いについては重視せず、最終的に出力された統語的述語名詞が共通して名詞として取り扱える点を重視して分析を行っていく。

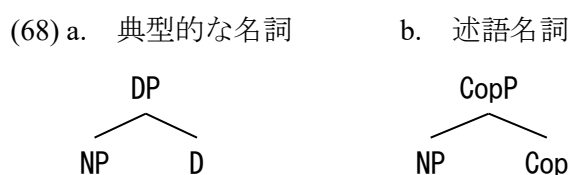
#### 4. 統語的述語名詞の統語論的特徴

続いて、4節では統語的述語名詞の統語論的特徴について確認する。統語的述語名詞の統語論に関する議論は3章以降で詳細に分析を行うが、ここでは前提となる共通項について述べるとともに、3章で扱う統語現象について観察を行っておく。

まず、1章の議論と重複するが、述語名詞は主に項として生起する典型的な名詞と異なり、(65)(66)のように述部において「この」「その」のような決定詞、「こんな」「そんな」のような修飾語を伴って底名詞としてふるまうことができない。

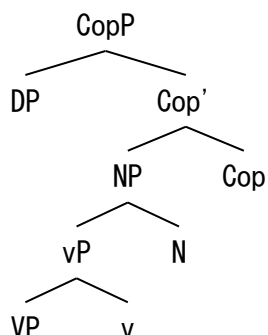
- (65) a. \*太郎は {この/こんな} ずぶ濡れだった。
- b. \*プレゼントは {その/そんな} 手作りだった。
- (66) a. \*窓が {この/こんな} 開けっぱなしだった。
- b. \*パンが {その/そんな} 焼きたてだった。
- (67) a. 太郎は {この/こんな} 子供だった。
- b. 太郎は {その/そんな} 学生だった。

1章でも述べた通り、本論文では述語名詞において決定詞や修飾語が生起できない事実について、DPを欠いていることに由来する性質と捉え、(68)のような統語構造を仮定する。



更に、統語的述語名詞は、動詞句を包摂する形式でもある。よって、統語的述語名詞の基本的な統語構造は、(69)のようなものと仮定される。

## (69) 統語的述語名詞の構造



続いて、3章では取り扱う他動詞の内項が主語としてふるまう現象について、その現象が本論文で取り扱う統語的述語名詞に共通して起こる現象であることを確認しておく。(70)のように、統語的述語名詞においては他動詞の内項が主語としてふるまう現象が観察できる。(71)(72)に見る通り、他動詞の内項が主語としてふるまう現象が一貫して起こるとい特徴は、統語的複合動詞や形容詞や形容動詞と同様の活用を持つ形容詞性の複雑述語においては観察できないものである<sup>8</sup>。

- (70) a. ランプが点けっぱなしだ。  
 b. パンが焼きたてだ。  
 c. ビールが冷やしすぎだ。  
 d. チョコレートが溶かしかけだ。  
 e. 体操着が汚しまくりだ。  
 f. 声が抑え気味だ。  
 g. 部屋が散らかし放題だ。
- (71) a. \*ビールが冷やしすぎる。  
 b. \*チョコレートが溶かしかける。
- (72) a. (私は) パンが食べたい。(主語=私)  
 b. \*ランプが点けそうだ。

特に、(72)の「-そうだ」に関しては(73)のように「-ばなしだ」や「-たてだ」と共に影山(1993)で句接辞として一括して取り扱われていた形式である。

<sup>8</sup> 大野(2018)が指摘する通り、統語的複合動詞「-終わる」において他動詞の内項が主語としてふるまうパターンが存在する。しかしながら、特定の語彙に依存する現象であるという点において、統語的述語名詞と統語的複合動詞は性質が異なっている。

i ピザが作り終わった。

- (73) [いまにも雨が降り]そう (だ)  
 [なにか言いた]げ (だ)  
 [仕事にかかり]つきり  
 [爛をし]たての酒  
 [マンションを契約]済みの人  
 [お金を借り]っぱなし  
 [仕事に追われ]ぎみ  
 [授業を休み]がち  
 [ビールを飲み]放題

(影山 1993 : 329-330)

しかしながら、他動詞の内項が主語となる現象は本論文で統語的述語名詞として規定する形式に共通する特徴であり、「-そうだ」においては観察できない。この事実は、統語的述語名詞を統語論的に同一の形式として取り扱う上で、重要な特徴と考えられる。このような現象に関しては、3章において詳細な議論を行う。

## 5. 統語的述語名詞の意味論的特徴

3節では統語的述語名詞の形態論的特徴、4節では統語的述語名詞の統語論的特徴について確認を行った。ここからは、統語的述語名詞の意味論的特徴について確認を行う。統語的述語名詞意味論的特徴については状態性とアスペクト性の2点があり、5.1節では状態性、5.2節ではアスペクト性について確認する。

### 5.1 状態性

5.1節では、統語的述語名詞の状態性について確認する。金田一(1950)で指摘されているように、動詞の分類として(74a)のようにテイルを伴わずに現在の状態をあらわすことができる状態動詞が存在し、状態動詞はテイルを後接することができない。一方、(74b)のように非状態動詞はテイルを伴って現在の状態をあらわし、当然テイルを後接することができる。

- (74) a. 太郎が今まさに公園に {いる/\*いている}。  
 b. 太郎が今まさに公園で {#走る/走っている}。

「黒焦げだ」のように語彙的な述語名詞の文も、(75)のように「である」という形でル形によって現在の状態をあらわすことが可能であり、状態的性質を持っているものと思われる。

(75) 肉が黒焦げ {である/\*であっている}

もちろん、コンピュータにテイルが後接できない事実は形態論的要因によるものという可能性もあるが、状態動詞と名詞述語が同様の性質を持っている事実は、別の現象からも保証される。(76)のように、非状態動詞は回数表現と共起することが可能であり、文があらわす出来事の回数を数え上げることが可能である。一方、状態動詞の場合、回数表現と共起できず、文があらわす出来事の回数を数え上げることができない。

- (76) a. 太郎が3回眠った。  
 b. \*?公園に小鳥が3回いた。

語彙的な述語名詞の文においても、(77)のように回数表現と共起することはできない。このように状態動詞や述語名詞は述語が状態的性質を持ち、動詞があらわす事態の回数を数え上げることができないという特徴を持っている。

- (77) a. 肉が3回焦げた。  
 b. \*?肉が3回黒焦げた。

この状態的性質は、統語的述語名詞においても引き継がれている。まず、(78)のように統語的述語名詞においてもル形が現在の状態をあらわす。そして、(79)のように統語的複合動詞が回数表現と共起できるのに対して、(80)のように統語的述語名詞の文は回数表現と共起することができない<sup>9</sup>。

- (78) a. 今のところ雨が降りっぱなしである。  
 b. 今のところビールが冷えすぎである。  
 c. 今のところココアは混ざりかけである。  
 (79) a. 雨が2回降り続けた。  
 b. パンが2回焼き終わった。

<sup>9</sup> なお、このテストを「-すぎだ」に適用する場合に「何度も」という回数表現を用いると許容度が上がる。しかしながら、「すぎ」自体が過剰の意味を持っているため、「何度も」は動詞句のイベントを数え上げているのではなく「すぎ」に対応して生起しているものと思われる。このため、「何度も」という回数表現はこのテストに適さない。

- i a. 部屋が3回散らかりすぎた。  
 b. \*?部屋が3回散らかりすぎだ。  
 ii a. 部屋が何度も散らかりすぎた。  
 b. ?部屋が何度も散らかりすぎだ。

- b. 雨が3回溶けかけた。
- (80) a. \*雨が2回降りっぱなしだ。
- b. \*パンが2回焼きたてだ。
- c. \*チョコレートが2回溶けかけた。

ここで、興味深い対立として、形容詞や形容動詞と同様の活用を持つ形容詞性の複雑述語である「-たい」と「-そうだ」を取り上げる<sup>10</sup>。(81)(82)の通りル形が現在をあらわすという点においては、「-たい」と「-そうだ」は統語的述語名詞と同様にふるまうが、統語的述語名詞とは異なり、回数表現との共起が許容される点に違いがみられる。

- (81) a. 今のところ、私だってみんなを守りたくはある。
- b. 今のところ、太郎は泣きそうである。
- (82) a. 太郎は3回水を飲みたい。
- b. 太郎は3回水を飲みそうだ。

この違いは、補文がTPを持っているか否かの違いと考えられる。(83)のように、「-たい」や「-そうだ」においては主文の時制とは異なる時間副詞が生起可能であるが、(84)のように統語的述語名詞は不可能である。

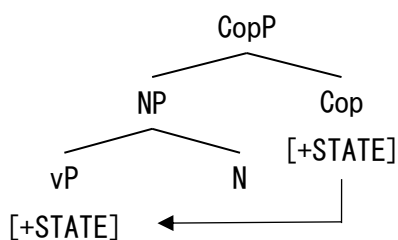
- (83) a. 私は<sub>TP</sub>明日はゆっくり寝たい。
- b. 太郎は本当は<sub>TP</sub>昨日次郎と会っていきそうだ。
- (84) a. \*太郎は<sub>VP</sub>明日寝っっぱなしだ。
- b. \*太郎は<sub>VP</sub>昨日次郎と会いすぎだ。

結果として、「-たい」や「-そうだ」は状態述語であるが、内部のイベント(統語的にTPを持つ)を数え上げることができるのに対し、統語的述語名詞は内部にイベントを持たず、文全体で状態をあらわす文をつくる。

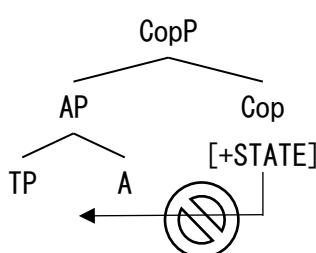
このような対立を統語的に示すと、(85)のようになる。ここでは[+STATE]という素性が継承されることによって、内部のイベント的意味が排除されるという統語論的操作を仮定している。状態性は「である」が持つものであり、[+STATE]の素性に関してもコンピュータが持つものと仮定しておく。コンピュータ文であり状態性を持っているという点では、統語的述語名詞も「-たい」や「-そうだ」も同じだが、[+STATE]が継承されるか否かにおいて統語的述語名詞と形容詞性を持つ複雑述語では異なった様相を見せる。

<sup>10</sup> 「雨が降りそうな天気」のように「-そうだ」は連体形で「な」を伴う。

(85) a. 統語的述語名詞



b. 「-たい」や「-そうだ」



この対立は補文が vP であるか TP であるかという差に由来していると考えられるが、統語的述語名詞を為す N が vP を要求するという統語的述語名詞の性質とも関係している。これに関しては、5.2 節で述べるアスペクト性とも関係する部分がある。

「-そうだ」は句接辞として「-ばなしだ」「-たてだ」等と一括して取り扱われていた形式であるが、統語的述語名詞として分類できる形式と「-そうだ」や「-たい」は状態述語として異なった性質を持っている。この事実も、統語的述語名詞を統一的に扱うことの妥当性を示す観察の一つである。

## 5.2 アスペクト性

続いて、統語的述語名詞が持つアスペクト性について述べていく。統語的複合動詞は、しばしばアスペクト的な意味を持つと指摘されている。影山（1993：140）は「統語的であると断定した動詞は「終える、続ける、まくる、かける」などアスペクトに関するものが中心となる」とし、影山（2019）では統語的複合動詞の後項動詞を総称する用語として局面動詞という言葉を用いている。これは統語的複合動詞が持つアスペクトの意味が、語彙的アスペクト (Aktionsart) も含んでいることをふまえた用語となっている。また、阿久澤（2018：91）は「全ての複合動詞がアスペクトの意味を表しているか、その周辺の意味を表している」とし、影山（1993）の意味分類を参考にしつつ複合動詞の意味を表1のように分類している。

表1 V2の意味特性による分類 (阿久澤 2018：91)

過剰 (Excess)	V 過ぎる
起動 (Inception)	V 出す、V 始める
予期 (Prospectiveness)	V かける
継続 (Continuation)	V まくる、V 続ける
習慣 (Habit)	V 慣れる、V 飽きる
未遂 (Failure)	V 忘れる、V 損ねる、V そびれる、V 残す
完了 (Completion)	V 尽くす、V 抜く、V 終える、V 終わる、V 通す、V きる
反復 (Repetition)	V 直す



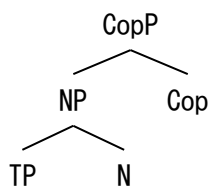
阿久澤 (2018) の基準を参考にすると、統語的述語名詞も、同じくアスペクト的意味とその周辺の意味を表していると言える。「-ばなしだ」や「-まくりだ」は継続、「-たてだ」は完了、「-すぎだ」や「-放題だ」は過剰、「-かけだ」は予期、「-気味だ」は習慣、といった意味を持つと考えられる。

ただし、「-放題」に関しては、(86) のようにアスペクトの周辺の意味となる過剰をあらわす事例もあるが、(87) のように可能や許可をあらわす文のように「ジュースを飲む/飲んでも良い」という実現性に関わる意味をあらわすこともある。このような意味は「-放題」が持つ過剰（無制限）の意味から派生的に得られる解釈と考えられる。

- (86) a. 庭が荒れ放題だ。  
 b. 太郎は文句をひたすら言い放題だった。  
 (87) この店は子供はジュースを飲み放題だ。

統語的述語名詞が持つアスペクト性は、「-たい」や「-そうだ」の違いを説明する上で、重要な意義を持つ。「-たい」や「-そうだ」がモダリティ的意味をあらわす形式であると考えれば、5.1 節で論じた内部に TP を持っている分析が自然に捉えられる<sup>11</sup>。つまり、「-たい」や「-そうだ」はモダリティ的意味を持ち、TP より大きな構造を持つが、統語的述語名詞はアスペクト的意味を持ち、TP より小さな構造を持つ。そのため、内部に TP を要求する (88) のような構造が不適格となる。

- (88) \* N が TP を要求する統語構造



つまり、[+STATE]の継承に関しては、形態論的に形容詞性を持つ複雑述語 (AP) がより大きな構造を持つ形式であるため[+STATE]の継承が阻害されるが、統語的述語名詞においては NP がより小さな構造を持つ形式であるため[+STATE]の継承が阻害されないものと考えられる。

ただし、(88) のような制約は、あくまで動詞述語と名詞述語が語を形成する統語的述語名詞のような形式に限られる制約である。当然、統語的述語名詞ではなく名詞句であ

<sup>11</sup> 「-たい」や「-そうだ」とモダリティ形式に関しては、森山 (1989) や仁田 (1991) を参照。

れば「太郎が来た理由」のように名詞句の内部に TP が生起することは可能である。

なお、阿久澤 (2018) は統語的複合動詞を動詞 (V) ではなくアスペクト形式 (Asp) として取り扱っているが、本論文においては「-すぎる」と「-すぎだ」の違いを取り扱うためにあくまで「-すぎる」であれば動詞 (V)、「-すぎだ」であれば名詞 (N) として取り扱う立場を取る。よって、統語的述語名詞がアスペクト形式と整理するのではなく、統語的述語名詞が意味論的性質としてアスペクトの意味を持つと整理することになる。

## 6. おわりに

2章では、まず、統語的述語名詞について「-ばなしだ」「-たてだ」「-すぎだ」「-かけだ」「-気味だ」「-放題だ」に関する個別の先行研究を取り上げ、意味に注目した分析が行われて他動詞の内項が主語としてふるまうような現象について統語論的アプローチを用いる分析が存在しなかったこと、特定の統語的述語名詞と他の述語名詞を関連させる分析が行われてこなかったことを指摘した。

その上で、統語的述語名詞が持つ統一的特徴を形態論・統語論・意味論の観点から指摘した。統語的述語名詞は形態論的に名詞としてふるまい、統語論的に他動詞の内項が主語としてふるまう現象が観察でき、意味論的に状態的性質とアスペクト的性質を持つ。このように、統語的述語名詞は基本的観察においても共通する特徴を持ち、統一的に取り扱う妥当性が一定程度認められるものと考えられる。

3章以降は、1章と2章で確認した前提に基づいて、統語的述語名詞について統語論と関わる現象・意味論と関わる現象の分析を行っていく。2章において、統語的述語名詞が持つ基本的特徴が共通していることを指摘したが、3章以降の分析が複数の形式に適用できることが示されれば、統語的述語名詞を同一のグループとして扱う妥当性を検証することができる。

なお、3章～6章の分析においては、本論文で取り扱っている形式が統語的述語名詞であることを前提として、述語名詞という呼称を用いることが多い。「語彙的な述語名詞」のように特段の補足がない限り、3章～6章の分析で述語名詞という呼称が用いられる際は、統語的述語名詞を指している。

## 第3章 述語名詞と文末形式における内項主語構造

### 1. はじめに

3章では、(1)のように、統語的述語名詞において他動詞の内項が主語となる現象について取り扱う。内項が主語となる場合の統語的述語名詞は、受動による内項の主語化と異なった構造を持ち、単純な名詞述語とも異なった構造を持っている。

- (1) a. ランプが点け**っ**ばなしだ。  
 b. パンが焼きた**た**だ。  
 c. ミルクココアが混ぜ**か**けだ。

(1)のように他動詞の内項が主語となる構造について、本論文では内項主語構造と呼ぶ。内項主語構造の分析を通じて、本章では、統語的述語名詞が動詞述部と名詞述部による複層的な構造を持っていることを主張する。

内項主語構造を論じる上で、比較対象となる形式として文末形式を取り上げる。文末形式とは、ル形やタ形のような時制辞に後接する「まま」「ばかり」「途中」のような形式を指す。これらの文末形式は述語名詞と同様に (2) のような内項主語構造を取ることがあり、(3) のように形態論的に名詞性を持っている。

- (2) a. ランプが点け**た**ままだ。  
 b. パンが焼い**た**ばかりだ。  
 c. ミルクココアが混ぜ**て**いる**途**中だ。  
 (3) a. 点けたま**ま**のランプ  
 b. 焼いたば**か**りのパン  
 c. 混ぜている途**中**のミルクココア

このように、内項主語構造を形成する述語名詞と上記の文末形式がいずれも名詞性を持つ点で、内項主語構造は名詞性を持つ述部形式に特徴的な現象と考えられる。3章では、述語名詞と文末形式を比較することによって、形態論的に名詞性を持つ述部形式において内項が主語となる現象を分析する。

まず、述語名詞の代表として「-ばなしだ」、文末形式の代表として「-ままだ」を取り上げ、「-ばなしだ」と「-ままだ」のペアを用いて議論を行う。その後、3章の議論が述語名詞一般に拡張できるか検証するため、7節で「-たてだ」と「-ばかりだ」のペア、「-かけだ」と「-途中だ」のペアを用いて検証を行う。

現象を改めて確認すると、「-ばなしだ」と「-ままだ」において、(4)(5)のように共通して他動詞の内項が主語としてふるまう現象が観察できる。(4)(5)の例文においては、「点ける」という他動詞の目的語となるはずの内項が主語としてふるまっている。更に、「-ばなしだ」と「-ままだ」における内項主語構造は、いずれも結果継続の意味を持ち、更にその結果が放置されているという意味においても共通している。

- (4) ランプが点けっぱなしだ。  
 cf. 太郎がランプを点けっぱなしだ。
- (5) ランプが点けたままだ。  
 cf. 太郎がランプを点けたままだ。

ただし、(6)のように、「-ばなしだ」と「-ままだ」は、外項の抑制という観点では異なったふるまいを示す。

- (6) a. \*ランプが、太郎が点けっぱなしだ。  
 b. ランプが、太郎が点けたままだ。

「-ばなしだ」の内項主語構造において顕在的な外項が生起できない一方、「-ままだ」の内項主語構造においては顕在的な外項が生起可能となる。

このように、述語名詞「-ばなしだ」と文末形式「-ままだ」には、共通点と相違点が見られる。この共通点と相違点を捉えた上で、名詞性を持つ述部形式における内項主語構造を捉える必要がある。このような事実を踏まえ、3章では、受動文と名詞性を持つ述部形式の間にある違い、名詞性を持つ述部形式の中にある違い、この二つの違いについて議論を行う。3章の研究課題は以下の通りである。

- (Q1) 「-ばなしだ」や「-ままだ」のように名詞性を持つ述部形式において、内項主語構造の統語論的特徴はどのようなものか。また、受動文による内項の主語化とどのように異なるのかを明らかにする。
- (Q2) 述語名詞「-ばなしだ」においては観察可能である外項の抑制が、文末形式「-ままだ」においては観察できない現象の要因は、どのような統語的要因によるものかを明らかにする。

以上のように3章では、「-ばなしだ」と「-ままだ」に共通して出現する内項主語構造、「-ばなしだ」と「-ままだ」で分布が異なる外項抑制の有無という観点から分析を行う。結論を先取りすると、内項主語構造と外項抑制のシステムはそれぞれ独立していることを論じ、外項抑制に関しては埋め込まれた節にTP(時制辞)が存在しない「-ばなしだ」

しだ」においてのみ起きることを主張する。

なお、3章～6章の分析においては、本論文で取り扱っている形式が統語的述語名詞であることを前提として、述語名詞という呼称を用いることが多い。「語彙的な述語名詞」のように特段の補足がない限り、3章～6章の分析で述語名詞という呼称が用いられる際は、統語的述語名詞を指している。

## 2. 研究の背景

研究の背景として、第一に「-ばなしだ」と似たふるまいを見せる「-すぎだ」と「-たてだ」に関する先行研究を概観する。第二に、動詞の項構造の変化について「-たい」のような複雑述語に関する研究を概観し、複雑述語の分析における2つの方向性について確認する。

### 2.1 「-すぎだ」の分析（由本 2012）、「-たてだ」の分析（山田 2005）

まず、「-ばなしだ」と似たふるまいを見せる「-すぎだ」と「-たてだ」の分析を概観する。「-すぎだ」においても「-たてだ」においても、「ジュースが冷やしすぎだ」や「パンが焼きたてだ」のように「-ばなしだ」と同様の内項主語構造が存在する。「-すぎだ」を扱う由本（2012）、「-たてだ」を扱う山田（2005）は、いずれも語彙概念構造（LCS）を用いた分析を行っている。

由本（2012）山田（2005）の両者は、内項が主語となる場合の「-すぎだ」あるいは「-たてだ」に出現する動詞が語彙概念構造上 STATE を持つものに限られるという観察を行っている。その観察に基づき、「-すぎだ」あるいは「-たてだ」においては、語彙概念構造において STATE（結果状態）の焦点化という操作を仮定している。(7) は「茹ですぎ」のような文において、「-すぎだ」が「茹でる」の語彙概念構造上の STATE にあたる部分を焦点化していることを示している。(8) は「-たてだ」に前接可能な動詞が語彙概念構造上に STATE を持っている動詞であることを示している。

(7) [[x ACT ON y] BECOME [EVENT BECOME [STATE y BE [AT TOO [BOILED]]]]

(由本 2012 : 140 改変)

(8) a. 作成動詞 : [EVENT x ACT (on y)] CAUSE [EVENT BECOME [STATE y BE AT-z]]

b. 出現・発生動詞 : [EVENT BECOME [STATE y BE AT-z]]

c. 変化動詞 : [EVENT y BECOME [STATE y BE AT-z]]

(山田 2005 : 281)

以上が内項主語構造に関する意味構造による分析だが、由本（2012）の時点で、語彙概念構造上の操作を統語部門のどの段階で適用するかという点に関して疑問があがっている。「茹でる」と「すぎ」が「茹ですぎ」を形成するのは統語部門であると仮定する

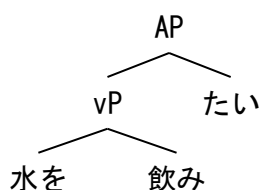
と、語彙概念構造において STATE が焦点化されていたとしても、統語部門には既に動詞句が派生しているものと考えられる。すなわち、内項主語構造と外項の抑制に関しては統語的にどのような操作が起こっているのか明示的ではなく、意味論的分析だけでなく統語論的分析も必要だと思われる。よって、3章では「-ばなした」に関して統語論的分析を行った上で、「-すぎだ」「-たてだ」と比較するという方針を採用する。

## 2.2 複雑述語の統語構造

続いて、2.2 節では複雑述語の統語構造を概観することで、内項主語構造がどのように分析できるかの指針を確認する。ここでは、複雑述語の分析として、主格目的語を取る「-たい」の分析を概観する。

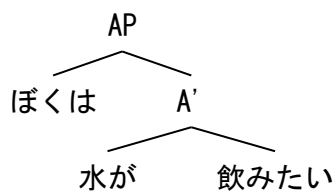
「-たい」の分析は大別して2通り存在するが、対格目的語が出現する(9)の場合はいずれの分析も動詞句の存在を想定する。見解が分かれるのは主格目的語の場合であり、再構成によって「-たい」がある種の単純形容詞のようにふるまっていると説明する(10a)のような分析(久野 1973、岸本 2005)と、動詞句の存在を仮定し項同士の同一指示関係によって項構造を説明する(10b)のような分析(Takano 2003)が存在する<sup>1</sup>。

### (9) ぼくは水を飲みたい

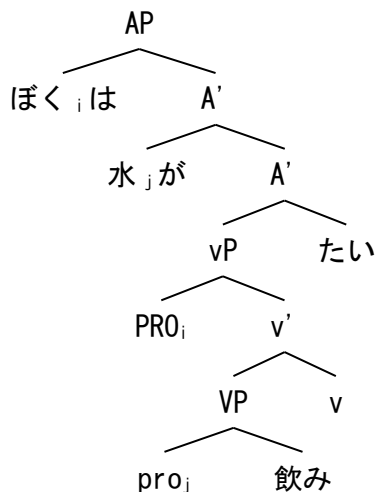


<sup>1</sup> Takano (2003) は「-たい」だけではなく主格目的語全般を論じているため、(10) の構造は Takano (2003) が提示している可能動詞文の構造を参考にしている。そのため、Takano (2003) では、vP が2重となる構造を仮定している。

(10) a. ぼくは水が飲みたい



b. ぼくは水が飲みたい



「-ばなしだ」においても、「-たい」で行われているような、2つの分析の方向性が存在する。(10a)のように単純な名詞述語としてふるまっているとすれば、動詞述語が2つの項を要求する構造が存在できず、名詞述語が1つの項を要求するため内項主語構造と外項の抑制が成立することになる。一方、(10b)のように複雑な述部を構成しているとしたら、動詞句自体は存在するものの何らかの形で内項主語構造と外項の抑制が成立することになる。

2.1 節で述べたように本章では「-ばなしだ」について統語論的観点で分析を行うが、その際に2.2 節で述べた動詞句の有無が注意すべき論点となる。また、動詞連用形に後接する「-ばなしだ」とタ形に後接する「-ままだ」を比較することによって、共通点・相違点を明らかにし、複雑述語としての性質を明らかにする。

### 3. 受動文との比較

3 節からは、「-ばなしだ」と「-ままだ」に関する現象観察を行っていく。3 節では受動文との比較、4 節では名詞述語との比較を行うことによって、目的語として生起する内項が主語となる操作のメカニズムに関する現象観察を行う。その後、5 節において「-ばなしだ」と「-ままだ」において対立が見られる外項抑制に関して現象観察を行い、6 節において3 節～5 節の現象観察を用いて統語論的な分析に入る。

3 節では、内項が主語となる点で共通する「-ばなしだ」「-ままだ」と受動文の比較を行う。(11)のように、受動文においても、「-ばなしだ」と「-ままだ」においても、他動詞の目的語となる内項が主語としてふるまう文をつくるのが可能である。

(11) a. ランプが太郎によって点けられた。

- b. ランプが {点けっぱなし/点けたまま} だ。

受動文と「-ぱなしだ」「-ままだ」にはそもそも意味に差異がある。しかしながら、現象観察を行うと、意味だけでなく、内項を主語にするメカニズムそのものに違いがあることが伺える。一例が長距離受動の可否である。前提として、(12) のように、受動文では「-させる」に埋め込まれた他動詞の内項を主語にすることができない。

- (12) a. ビルがジョンに[子供を託児所へ預け]させた。  
 b. ジョンがビルに子供を託児所へ預けさせられた。  
 c. \*子供がビルに (よって) ジョンに託児所へ預けさせられた。

(井上 1976 : 89)

(12c) の通り、直接受動文においては「-させ」に埋め込まれた他動詞の内項となる「子供」を主語にすることはできず、補文構造に埋め込まれた長距離受動は成立しない。一方、「-ぱなしだ」「-ままだ」においては、(14)(16) のように、「-させる」が介在したとしても、他動詞内項の主語化が可能である。

- (13) a. 上司は部下に[ランプを点け]させた。  
 b. \*ランプが点けさせられた。  
 (14) a. ランプが (部下に命じて) 点けさせっぱなしだった。  
 b. ランプが (部下に命じて) 点けさせたままだった。  
 (15) a. 王様は家来に[門を開け]させた。  
 b. \*門が開けさせられた。  
 (16) a. 門が (家来に命じて) 開けさせっぱなしだった。  
 b. 門が (家来に命じて) 開けさせたままだった。

長距離の内項主語構造は、「-させ」だけではなく、(18) のように、「-てもらう」のような形式においても確認できる。

- (17) 太郎は次郎に[荷物を運んで]もらった。  
 (18) a. 荷物が運んでもらっぱなしだった。  
 b. 荷物が運んでもらったままだった。

なお、「-てもらう」の場合は、そもそも受動文をつくることができないため、受動文と「-ぱなしだ」「-ままだ」によるミニマルペアによって対立をつくることはできない。し



かしながら、「-させる」以外の形式からも「-ばなしだ」と「-ままだ」における内項主語構造が埋め込みによって阻害されない事実を確認することができる。このような長距離受動に関する現象観察は内項を主語化する操作そのものに関する制約であり、内項を主語にするメカニズムそのものが異なっている可能性が示唆される。

また、外項に関しても、受動文と「-ばなしだ」「-ままだ」の間には相違点がある。(19)の受動文においては動作主が「によって」や「に」によって標示されるが、(20)の「-ばなしだ」「-ままだ」においては動作主を「によって」や「に」で標示することができない。

(19) ランプが太郎 {によって/太郎に} 点けられた。

(20) a. \*ランプが太郎 {によって/に} 点けっぱなしだ。

b. \*ランプが太郎 {によって/に} 点けたままだ。

更に、志波 (2012) で指摘されているように、受動文においては外項相当の項として原因項が生起する文が成立する。その一方で、(22)(23)のように「-ばなしだ」と「-ままだ」においては意味上の項としても原因項を想定することができず、常に動作主が要求される。

(21) a. コートが太陽に照らされていた。

b. 死体が雪に覆われていた。

(22) a. コートが照らしっぱなしだ。

(人がライトで照らす解釈/\*太陽が照らす解釈)

b. コートが照らしたままだ。

(人がライトで照らす解釈/\*太陽が照らす解釈)

(23) a. 死体が覆いっぱなしだ。

(人が布などで覆う解釈/\*雪が覆う解釈)

b. 死体が覆ったままだ。

(人が布などで覆う解釈/\*雪が覆う解釈)

外項に関しては内項を主語とする操作そのものの相違ではないが、受動文においては内項が主語となる現象と外項が降格する現象が連動したものとして捉えられてきた。それを踏まえると、外項に関する相違も、内項を主語化するメカニズムの相違を示唆している可能性がある。

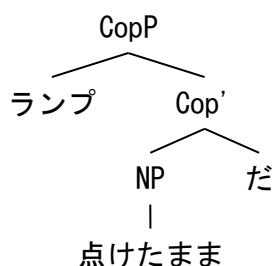
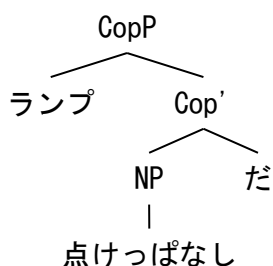
このように、「-ばなしだ」「-ままだ」においては、内項に関しても、外項に関しても、受動文と異なった現象が観察できる。(24)に観察された現象をまとめておく。

(24) 「-ばなしだ」「-ままだ」と受動文における相違点

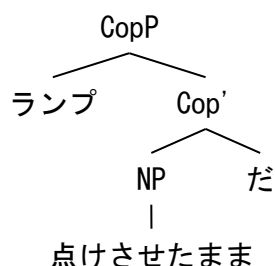
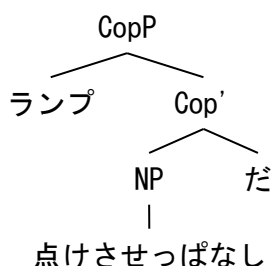
- a. 「-ばなしだ」「-ままだ」においては、内項の主語化を阻害する補文構造（埋め込み）を無視して内項の主語化を行うことができる。
- b. 「-ばなしだ」「-ままだ」においては、「によって」や「に」によって外項を標示することができず、また外項の解釈は動作主に限られる。

特に (24a) のような観察を見ると、内項主語構造を単純な名詞述語文として捉える方向の分析も一見有力に見える。(25) のようにそもそも動詞句が存在しない構造を仮定する場合、「-させる」が介在しようと、「-てもらう」が介在しようと無関係に (26) のような名詞述語文を形成できる。この分析においては、「によって」や「に」によって外項を標示できない事実を捉えることもできる。

- (25) a. ランプが点けっぱなしだ。      b. ランプが点けたままだ。



- (26) a. ランプが点けさせっぱなしだ。      b. ランプが点けさせたままだ。



(4節で否定される構造)

しかしながら、本論文ではそのような方向の分析を採用しない。まず、このような構造を想定すると、外項の解釈が動作主に限られるという制約を統語構造で捉えることはできない<sup>2</sup>。また、4節では、内項主語構造が動詞句を持つことを示す現象観察を行う。この2点の現象観察から、少なくとも動詞句が存在している事実を捉えた上で、内項が

<sup>2</sup> 外項は典型的には動作主であるため、外項位置が存在しない場合には動作主として捉える方が自然という（統語構造によらない）分析の可能性もあり得る。

主語となる事実を捉える構造を提案する必要がある。

よって次の4節では(25)(26)のような構造が棄却される要因について、単純な名詞述語文との比較によって述べていく。

#### 4. 単純な名詞述語文との比較

続いて、名詞述語文との比較から、「-ばなしだ」「-ままだ」の内項主語構造について観察を行う。前述のように、内項主語構造といっても、内項を主語とする特殊なメカニズムが働いているわけではなく、(27)のように単純な名詞述語文と同様に一項述語になっているという分析があり得る。4節では、この点についての検証を行う。

- (27) a. ベンチが黒く塗りっぱなしだ。  
 b. ベンチが黒塗りだ。

まず、副詞句の出現可否を観察することで、内項主語構造にVPが存在するか否かを検証する。通常、名詞述語文においては、(27)のようにVP副詞(cf.Koizumi1993)が出現しない。<sup>3</sup>

- (28) a. たぶん太郎は休みだ(ろう)。 (MP副詞)  
 b. 今日は太郎は休みだ。 (IP副詞)  
 c. \*太郎はゆっくり休みだ。 (VP副詞)

(28a,b)のように、モダリティと関わるMP副詞やテンスと関わるIP副詞は名詞述語文において出現可能だが、(28c)のように、動詞句レベルのVP副詞は名詞述語文に出現することができない。この観察は、(29)のように、動詞由来の複合名詞(cf.伊藤・杉岡2002)においても同様である。

- (29) a. \*この肉はばらばらに細切れた。  
 b. \*そのマフラーは丁寧に手編みだ。  
 c. \*その壁はスプレーで黒塗りだ。

一方で、「-ばなしだ」「-ままだ」はVP副詞の生起を許す。(30)(31)は結果をあらわす

<sup>3</sup> VP副詞の判定としてはKoizumi(1993)において、VP副詞であれば否定辞「-ない」のスコープに収まるというテストが提示されており、これを採用している。Koizumi(1993)においては、IP副詞について「わけではない」という否定のスコープに収まるという判定を行っており、MP副詞についてはどの否定のスコープにも収まらないという判定を行っている。

VP 副詞が、内項主語構造において出現している例である。

- (30) a. タオルがびしょびしょに濡らしっぱなしだ。  
 b. タオルがびしょびしょに濡らしたままだ。  
 (31) a. 紙がぐしゃぐしゃに丸めっぱなしだ。  
 b. 紙がぐしゃぐしゃに丸めたままだ。

上記のデータは結果副詞の用例だが、一部の様態副詞 (32) や道具デ句 (33) も問題なく出現することができる。

- (32) a. 本が無造作に {置きっぱなし/置いたまま} だ。  
 b. 着物が雑に {しまいっぱなし/しまったまま} だ。  
 (33) a. 不用心なことに、扉がつかえ棒で {閉めっぱなし/閉めたまま} だ。  
 b. 重要な書類が輪ゴムで {まとめっぱなし/まとめたまま} だ。

「-っぱなしだ」においても「-ままだ」においても一貫して VP 副詞が出現可能だが、これは内項主語構造においても VP や vP といいた投射が存在することを支持する証拠となる。

更に、「雑に」「無造作に」などの様態副詞は、動作主指向副詞でもある。(33b)(34b) のように、無生物主語の非対格自動詞においては、「雑に」「無造作に」は生起できない。

- (34) a. 凧を雑にあげた。  
 b. \*凧が雑にあがった。  
 (35) a. 煙草を無造作に落とした。  
 b. \*煙草が無造作に落ちた。

動作主指向副詞が内項主語構造に出現するというこの事実は、内項主語構造において VP だけではなく、外項が生起する他動詞の vP の存在を示唆している。

更に、内項主語構造における動詞句の存在は、数量詞遊離現象からも裏付けられる。前提として、動詞句を副詞等で区切った場合の数量詞遊離においては、(36) のように内項と外項に差があることが知られている (Miyagawa 1989)。(36a) のように非対格自動詞においては動詞句に数量詞が出現可能だが、(36b) のように非能格自動詞においては動詞句に数量詞が出現できない。

- (36) a. ドアが[<sub>VP</sub> この鍵で2つ開いた]  
 b. ?\*子供が[<sub>VP</sub> げらげらと3人笑った]

(Miyagawa1989 : 662)

この観察は、内項が動詞句内に生起していることを示している。このデータを応用すると、「-ばなしだ」においても動詞句の内部に内項が存在していることの証拠として用いることができる。(37)(38) で示すように、内項主語構造においても、動詞句内に数量詞が遊離可能である。

- (37) a. 本が[<sub>VP</sub>机の上に2冊置きっ]ばなしだ。  
 b. シャツが[<sub>VP</sub>ベランダに2枚干しっ]ばなしだ。  
 (38) a. 本が[<sub>VP</sub>机の上に2冊置い]たままだ。  
 b. シャツが[<sub>VP</sub>ベランダに2枚干し]たままだ。

数量詞が動詞句内部に出現している事実から、他動詞の内項が動詞句に存在していることが確認できる。この事実も、内項主語構造における動詞句の存在を示唆している。

なお、動詞由来の述語名詞においては、名詞「手」と動詞「編み」の間に数量詞が介入することが当然できないため、検証以前の問題として (39) のような文は不適格となる。

- (39) \*セーターが手 2着編みだ。

このように、内項主語構造が単純な名詞述語文になっているとは考えられず、動詞句の存在を認めた上で、内項が主語となるメカニズムを提案する必要がある。(40) に、4節の内容をまとめておく。

- (40) 「-ばなしだ」「-ままだ」と単純な名詞述語文における相違点  
 単純な名詞述語文は動詞句を持たないが、「-ばなしだ」「-ままだ」は動詞句を持つ。

3節では、受動文との差が説明する構造として、(41) のような構造が想定できるとしたが、4節の現象観察を踏まえると、動詞句の存在しない (41) の構造を仮定することはできない。

- (41) a. \*<sub>CopP</sub> ランプが<sub>NP</sub> 点けばなしだ  
 b. \*<sub>CopP</sub> ランプが<sub>NP</sub> 点けたままだ

よって、(41) の統語構造は棄却される。「-ばなしだ」や「-ままだ」の統語構造におい

ては、動詞句が存在する事実と3節で見た埋め込みによって阻害されない事実を同時に捉える必要がある。

5節では、「-ばなしだ」と「-ままだ」における対立を観察することで、内項主語構造と連動する現象と連動しない現象をより分ける作業を行う。この作業によって、どのような現象が内項主語構造と連動しているのか明らかになり、どのような統語構造を提案すべきか明確になるものと思われる。

### 5. 述語名詞「-ばなしだ」と文末形式「-ままだ」の比較

ここまでは「-ばなしだ」「-ままだ」と受動文や単純な名詞述語文の間に存在する相違に着目した現象観察を行ってきた。しかしながら、動詞連用形に後接する「-ばなしだ」とタ形に後接する「-ままだ」は、まったく同様にふるまうわけではなく、相違もみられる。3節と4節では「-ばなしだ」と「-ままだ」において観察が一致するケースを見てきたが、5節では「-ばなしだ」と「-ままだ」の対立に着目した現象観察を行う。

まず1節で述べた通り、「-ばなしだ」と「-ままだ」において、外項の抑制の有無に差異がある。「-ばなしだ」においては(42)のように外項が出現できないが、「-ままだ」においては(43)のように外項の出現が可能となる<sup>4</sup>。

- (42) a. \*ランプが(きのう)太郎が点けっぱなしだ。  
 b. \*雑誌が(きのう)太郎が置きっぱなしだ。  
 (43) a. ランプが(きのう)太郎が点けたままだ。  
 b. 雑誌が(きのう)太郎が置いたままだ。

なお、「-ままだ」において外項が出現可能である用例をあくまで多重主語文の一種と見なす分析もあり得る。しかしながら、主語となる内項と外項が所有関係を持たない(44)(45)を見ても、「-ばなしだ」と「-ままだ」における対立は保持される。もし多重主語文であれば、主語同士の所有関係を排除することで許容度に変化が起こることが予想されるが、(44)(45)においてはそのような変化が観察できず、変わらず「-ばなしだ」が許容できない。

- (44) a. \*花子の部屋のランプが(きのう)太郎が点けっぱなしだった。  
 b. \*花子の本が(きのう)太郎が談話室の机の上に置きっぱなしだった。  
 (45) a. 花子の部屋のランプが(きのう)太郎が点けたままだだった。

<sup>4</sup> 主格の連続は収まりが悪いため、「-ままだ」においても「きのう」のような副詞を挿入した方が許容度しやすい。しかしながら、後述する通り「-ばなしだ」においては時間副詞が許容できないため、「きのう」に関してはカッコ書きに留めておく。

- b. 花子の本が（きのう）太郎が談話室の机の上に置いていったままだった。

このように、「-ままだ」で内項主語構造においても外項が出現可能であり、この点で「-ばなしだ」と「-ままだ」は異なっている。

更に、もう一つの相違点として、主節時と異なる時間副詞の生起がある主節が「だ」という現在時を示している場合に「-ばなしだ」においては (46) のように過去の副詞が生起できない。一方、「-ままだ」においては (47) のように「きのう」「けさ」という過去の副詞が生起できる。

- (46) a. \*ランプがきのう点けっぱなしだ。  
 b. \*雑誌がけさ置きっぱなしだ。  
 (47) a. ランプがきのう点けたままだ。  
 b. 雑誌がけさ置いたままだ。

この事実は、「-ままだ」における「た」がテンスの「た」であるという証拠であり、(48) のように、「-ばなしだ」が内部に TP を含まない構造であるのに対し、「-ままだ」が内部に TP を含む構造であることを示唆している。

- (48) a. [<sub>CopP</sub>[<sub>VP</sub> 点け]っぱなしだ]  
 b. [<sub>CopP</sub>[<sub>TP</sub> 点けた]ままだ]

すなわち、「-ばなしだ」と「-ままだ」においては、外項抑制の有無・TPの有無という点において相違が見られる。(49) に、「-ばなしだ」と「-ままだ」の間にみられる相違点をまとめておく。

- (49) 「-ばなしだ」と「-ままだ」における相違点  
 a. 「-ばなしだ」における外項は義務的に出現不可能だが、「-ままだ」における外項は任意に出現することが可能である  
 b. 「-ばなしだ」は内部に主節と異なる TP を持っていないが、「-ままだ」は内部に主節と異なる TP を持っている。

竹沢・Whitman (1998) においては、主格付与は T が行うものとされている。「-ばなしだ」において生起できない外項が他動詞において主格を与えられる要素であることを踏まえると、Tの有無と外項抑制の有無が連動するという事実は示唆的である。

また、5節で行った現象観察において、「-ばなしだ」と「-ままだ」が相違を示した現

象は、外項に関与するものに限られる。すなわち、外項の出現可能性と内項の主語化は独立した現象として分析できる可能性がある。

## 6. 提案

ここまでの観察を整理すると、(50)～(52)のようにまとめることができる。

(50) 「-ばなしだ」「-ままだ」と受動文における相違点

- a. 「-ばなしだ」「-ままだ」においては、内項の主語化を阻害する補文構造（埋め込み）を無視して内項の主語化を行うことができる。
- b. 「-ばなしだ」「-ままだ」においては、「によって」や「に」によって外項を標示することができず、また外項の解釈は動作主に限られる。

(51) 「-ばなしだ」「-ままだ」と単純な名詞述語文における相違点

単純な名詞述語文は動詞句を持たないが、「-ばなしだ」「-ままだ」は動詞句を持つ。

(52) 「-ばなしだ」と「-ままだ」における相違点

- a. 「-ばなしだ」における外項は義務的に出現不可能だが、「-ままだ」における外項は任意に出現することが可能である。
- b. 「-ばなしだ」は内部に主節と異なる TP を持っていないが、「-ままだ」は内部に主節と異なる TP を持っている。

6節では、このデータを踏まえ、(i) 「-ばなしだ」と「-ままだ」は内項主語化に関しては同様の原理を持っている、(ii) 外項の抑制に関しては異なった原理を持っているという2つの仮定に基づき、提案を行う。

### 6.1 内項主語構造のメカニズム

6.1節では、まず「-ばなしだ」と「-ままだ」に共通するとみられる内項主語構造について取り扱う。本章では、(53)に基づいて内項主語構造においてVPが存在すると仮定するため、Takano (2003)の主格目的語文に関する定式化を参考にする。

(53) 太郎<sub>i</sub>は[<sub>AP</sub>水<sub>j</sub>が[<sub>VP</sub> PRO<sub>i</sub> pro<sub>j</sub> 飲み]たい]

Takano (2003)による(53)の定式化においては、「-たい」の主語と動詞の主語、「-たい」の目的語と動詞「飲む」の目的語がそれぞれ同一指示関係を持つことで、他動詞の目的語であるはずの「水」が主格を取ることが可能になっている。「-ばなしだ」「-ままだ」においても、高い位置にある述語の項と低い位置にある述語の項が同一指示関係を持つと仮定すれば、内項主語構造を説明できる。



本章で提案する構造は (54) のようになる。外項位置に関しては、次節で議論を行う。

- (54) a. [<sub>CopP</sub> ランプ<sub>i</sub> が [<sub>NP</sub> [<sub>VP</sub> PRO [<sub>VP</sub> pro<sub>i</sub> 点け] v] っぱなし (N) ] だ]  
 b. [<sub>CopP</sub> ランプ<sub>i</sub> が [<sub>NP</sub> [<sub>TP</sub> pro pro<sub>i</sub> 点けた] まま (NP) ] だ]

(54) において、「-っぱなしだ」「-ままだ」については「モノの状態」を示す名詞述語であり、「-っぱなしだ」「-ままだ」の主語位置に基底生成される CopP の名詞句は、対象の意味役割を持つ内項と同一指示解釈を受けるということを示している。(54b) では、一見、同一指示解釈を受ける pro の候補が外項と内項で2つ存在するように見えるが、「-っぱなしだ」「-ままだ」が要求する主語が「対象物」であり、同じく「対象物」である内項と同一指示解釈を受けるものだと考えられる。

(53) の主格目的語文の構造や (54) の構造では、内項が痕跡 (trace) ではなく pro となっているが、この根拠として、(55) のような例文が挙げられる。

- (55) a. 私はジョンかビルをすべての先生に紹介したい。  
or > every, every > or  
 b. 私はジョンかビルがすべての先生に紹介したい。  
or > every, \*every > or  
(Takano2003 : 827)

(55) のような文においては、対格目的語の場合は「ジョンかビル」と「すべての先生」のどちらが広い解釈も有り得るが、主格目的語の場合は常に「ジョンかビル」が広い解釈となる<sup>5</sup>。これは、主格目的語が動詞句より高い階層に基底生成することを示唆しており、同時に動詞句内部に内項が痕跡 (trace) を残して移動する構造を否定する証拠となる。(56) のように、内項主語構造においても (55b) の主格目的語と同一の解釈が得られる<sup>6</sup>。

- (56) a. ランプか燭台がすべての部屋に置きっぱなしだ。  
or > every, \*every > or

<sup>5</sup> or が every より広い解釈としては、「先生 A、先生 B、先生 C の全員にジョンを紹介する」といった解釈があり得る。また、every が or より広い解釈としては、「先生 A にジョン、先生 B にビル、先生 C にジョンを紹介する」といった解釈があり得る。

<sup>6</sup> or が every より広い解釈としては、「部屋 A、部屋 B、部屋 C すべてに燭台が置いてある」といった解釈があり得る。また、every が or より広い解釈としては、「部屋 A に燭台、部屋 B にランプ、部屋 C に燭台が置いてある」といった解釈があり得る。

- b. ランプか燭台がすべての部屋に置いたままだ。

or > every、\*every > or

この事実から、内項主語構造の主語は CopP に基底生成することが示唆され、VP 内の項についても痕跡 (trace) を残すのではなく、pro が VP に基底生成する (54) の構造が支持される<sup>7</sup>。一方、VP 内に痕跡 (trace) を残して主語に移動するような受動文の場合、(57) のように「ランプか燭台」と「すべての部屋」のどちらが広い解釈も有り得る。受動文においては、痕跡の位置でも移動後の位置でも解釈が可能であるため、2つの解釈が許される。

- (57) a. ランプ<sub>i</sub>が<sub>[passP]</sub>[VP 太郎によって<sub>[VP t<sub>i</sub> 点け]</sub>v]られ (Pass) ]た<sup>8</sup>

- b. ランプか燭台がすべての部屋に置かれた。

or > every、every > or

また、(53) の構造は、内項主語構造と直接受動文における補文構造の介在に関する (49a) の相違も説明できる。(53) の構造では、あくまで主語と内項が同一指示されている

<sup>7</sup> VP 内の内項が痕跡でないことは、直接的に VP 内に pro が存在することを導かない。ただし、PRO が有生性の制約を持つ点を考慮すると、VP 内の要素は PRO ではないと考えられ、消去法的に pro が存在するという結論に至る。Takano (2003) は主格目的語と対格目的語の両者が顕在的に出現するデータを提示しており、これが認められれば、空範疇が pro であることを直接的に支持する証拠となる。

- i 私は マリー<sub>i</sub>が [pro<sub>i</sub>/彼女の 成績]を見たい。

(Takano2003 : 829)

筆者の個人的内省判断では、i の例文は許容度が低いが、以下のような例であれば許容可能である。

- ii 私はマリーが似顔絵を描きたい。

- iii 私はパリが写真を撮りたい。

「-ばなしだ」や「-ままだ」においても主語と目的語にそれぞれ項を立てることは可能である。

- iv 兄の部屋が窓を {開けっぱなし/開けたまま} だ。

- v 自転車前輪が {畳みっぱなし/畳んだまま} だ。

しかしながら、このように顕在的に項が出現する場合、ガ格が総記の解釈を受けるという直感があり、本章で扱っている「-ばなしだ」文と同様の構造を持っているかは一考の余地がある。

<sup>8</sup> 長谷川 (2009) における受動文の構造を参考にしている。

るに過ぎず、内項が CopP に上昇する・動詞が移動する等のシステムに由来して内項が主語化している訳ではない。よって、受動文とは異なり、内項主語構造は補文構造の介在によって阻害されない。

この構造を保証する補助的なデータとして、付帯状況句においては (58a) のように内項主語構造が不適格になるという事実が観察できる。

- (58) a. \*ランプが点けたままスポーツカーが走っている。  
 b. ランプが点いたままスポーツカーが走っている。

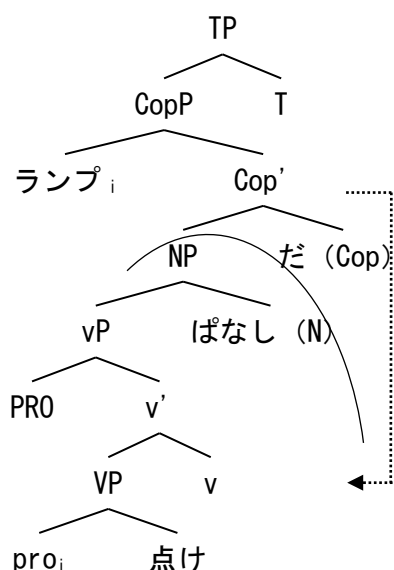
一方、(58b) の「ランプが点いたまま」のような非対格自動詞の内項がそのまま主語に出現している構造は自然に許容できる。この場合は、「-まま」の内側にある TP に主語が出現していると考えられる。一方、他動詞内項が主語となる内項主語構造においては、(53b) のように「-まま」の外側にある CopP に主語が出現する。そのため、「-まま」の外側に「だ (Cop)」および TP が存在しない付帯状況句の (58a) においては不適格な文となる。

## 6.2 外項の抑制に関するメカニズム

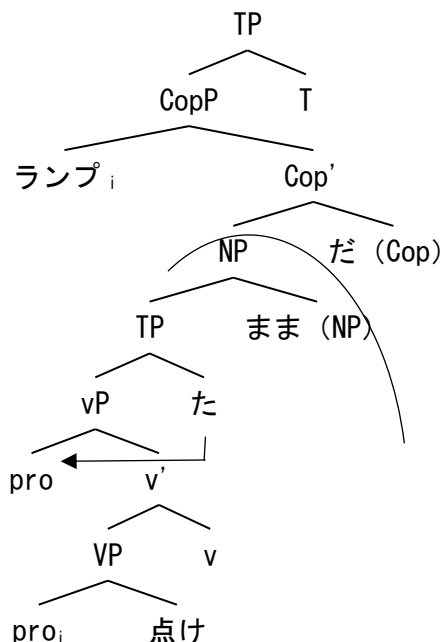
「-ばなしだ」においてのみ起こる外項の抑制に関するメカニズムに関しては、「-ばなしだ」内部の T の不在と関係していると考えられる。(54) で簡略的に前述した「-ばなしだ」と「-ままだ」の構造を (59) で樹形図により再提示する<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> (59a) における点線矢印は、T から外項への主格付与が行えないことを示し、(59b) における矢印は、T から外項への主格付与が可能であることを示している。

(59) a. ランプが点けばなしだ。



b. ランプが点けたままだ。



「-ばなしだ」の内側に VP が存在する一方で TP が存在しない根拠は (52b) に示した通りである。(59a) の樹形図においては、「ばなし」について vP を包摂する名詞要素と仮定している<sup>10</sup>。この仮定に基づくと、vP と外側の T の間を阻む境界として「ばなし」が機能することになる。主格が T によって付与されるという竹沢・Whitman (1998) や竹沢 (2015) に従えば、この構造では vP の内部に存在する外項に主格を与えられないことになる<sup>11</sup>。このようなメカニズムによって、主格を与えられない外項は具現することができなくなると考えられる。このとき、(59a) における vP には T を持たない不定形節と同じく、PRO が生起するものと仮定する。このように、「-ばなしだ」における外項の抑制は、主格を与えられないことの結果として外項が非頭在的な項である PRO としてしか生起できなくなる現象として捉えられる。一方、(59b) のように「-ままだ」においては「-ままだ」の内部にある T が外項に主格を与えられるため、外項が生起可能である。なお、同じ PRO であっても、コントロール構造の補文に生起する PRO であれば主文の外項によって同一指示関係を受けるため、外項は抑制されない。

また、この構造は 3 節で示した想定上の外項が原因項を取れず、動作主項に限られる事実についても説明を与えることができる。すなわち、外項が生起する位置が存在するからこそ、外項に対して意味解釈上の制約があると考えれば、非頭在的にも拘わらず項

<sup>10</sup> 影山 (1993) においては、「ばなし」は句接辞の一つとして取り上げられているが、本論文では統語的述語名詞が接辞であるか単語であるかに関しては問題としない。

<sup>11</sup> 主格と T (時制辞) の関係については他に Nomura (2005) も参照。

に制約が与えられることにも説明がつく。更に、岸本（2005）では PRO が有生名詞に限られることを指摘しており、原因項が排除されることを整合的に説明できる。また、「雑に」「無造作に」といった動作主指向副詞が出現することも、vP の存在を保証する。

時制辞の不在によって外項が抑制されるという本論文の提案は ad hoc なものではなく、結果状態のタ形においても同様の現象がみられる。

- (60) a. その女性が \*優れた/優れている プログラミングの能力  
 b. 優れた/優れている プログラミングの能力 （田川 2010: 195）

「優れる」は第四種の動詞であり、主節ではテイル形、名詞修飾節ではテイル形かタ形をとらないと不適格となる。田川（2010）では、テイル形に相当する状態のタを Asp と仮定しているが、このタは (60a) のように、主格を持つ「その女性が」という外項を抑制する。このタが Asp であるという仮定が正しければ、修飾部の動詞は T を欠いているということになり、T の欠如と外項の抑制を連動した現象として捉えることができる。この点でも、本論文で提案した構造の妥当性が保証される。

最後に、主格目的語の「-たい」と「-ばなしだ」の違いについても述べておく。(53) の構造の通り、主格目的語の「-たい」においては、「-たい」が外項と内項を要求しており、その2つの項は、「-たい」に埋め込まれた動詞句が導入する外項と内項とは独立に導入されるものである。そのため、動詞句内部の主語と目的語がゼロ代名詞であるにも関わらず、「-たい」が導入する外項・内項が同一指示解釈を受けることになる。つまり、「-たい」と「-ばなしだ」における差は、主文の述語が項を2つ持っているか1つしか持っていないかという相違によって左右されていると考えられる。「-ばなしだ」は名詞述語文であり項を1つしか導入しないため、動詞句の外項と内項の両者が顕在することはできないものと考えられる。

## 7. 発展

### 7.1 「-たてだ」「-かけだ」と「-ばかりだ」「-途中だ」

ここまで「-ばなしだ」と「-ままだ」に関する議論を見てきたが、7節では、他の形式に拡張できることを確認する。「-たてだ」と「-ばかりだ」、「-かけだ」と「-途中だ」のペアにおいて、同様の議論が成立するか確認する。

前提として、「-たてだ」と「-ばかりだ」は完了や完了直後の状態であることをあらわし、「-かけだ」と「-途中だ」は未完了の状態をあらわし、動詞連用形に後接する「-たてだ」「-かけだ」とタ形やル形に後接する「-ばかりだ」と「途中だ」がペアをなしている。更に、「-たてだ」「-ばかりだ」と「-かけだ」「-途中だ」は類似の意味を表すだけでなく、(61)(62)のように内項主語構造を形成する点で「-ばなしだ」「-ままだ」のペアと共通している。

- (61) a. コーヒーが淹れたてだ。  
 b. コーヒーが淹れたばかりだ。  
 (62) a. ミルクココアが混ぜかけた。  
 b. ミルクココアが混ぜている途中だ。

7.1 節では、「-たてだ」「-かけた」と「-ばかりだ」「-途中だ」においても内項主語構造の議論が拡張できるか検証する。

第一に、補文構造の介在を見る。「-たてだ」「-ばかりだ」においても、(63)～(66)のように、補文構造を介した長距離の内項主語構造が可能である。(63)の「-させる」の場合は「-たて」が肯定的評価に傾くのに対して「-させる」があらゆる使役が「人にやらせる」という意味を持つためかやや不自然にも感じられるものの、(65)のように別形式に埋め込まれた内項が主語となる文は自然に許容できる。このように、埋め込まれた内項であっても主語としてふるまうことができる事実は、受動文と異なった性質を持っていることを示している。

- (63) a. ?この地図は（後輩に頼んで）作らせたてだ。  
 b. ?この IC カードは子供に持たせたてだ。<sup>12</sup>  
 c. ?この風景画は（お抱えの作家に）描かせたてだ。  
 (64) a. この地図は（後輩に頼んで）作らせたばかりだ。  
 b. この IC カードは子供に持たせたばかりだ。  
 c. この風景画は（お抱えの作家に）描かせたばかりだ。  
 (65) a. このレシピは教えてもらいたてだ。  
 b. この髪はカットしてもらいたてだ。  
 (66) a. このレシピは教えもらったばかりだ。  
 b. この髪はカットしもらったばかりだ。

この観察は、「-かけた」と「-途中だ」においても同様であり、(67)～(70)のように補文構造の介在によって内項主語構造が阻害されない。なお、「-させる」と「-たて」の相性が悪いのと同様に、「-てもら」や「-かけ」の相性が悪く、(69)に関してはやや不自然に感じられるが、(67)の「-させる」の場合は問題なく内項主語構造が可能となる。

<sup>12</sup> 「持たせたて」は i の実例を改変したものである。

i ここで持たせたての PiTaPa も生きてくる

(<https://ameblo.jp/junpoohmayupan/entry-12055277873.html> 2021年12月9日確認)

- (67) a. このミルクは（赤ちゃんに）飲ませかけだ。  
 b. この本は（学生に）読ませかけだ。  
 c. この入れ墨は（彫り師に）彫らせかけだ。  
 (68) a. このミルクは赤ちゃんに飲ませている途中だ。  
 b. この本は学生に読ませている途中だ。  
 c. この入れ墨は彫らせている途中だ。  
 (69) a. ?あの服は仕立ててもらいかけだ。  
 b. ?あの壁画は描いてもらいかけだ。  
 (70) a. あの服は花子に仕立ててもらっている途中だ。  
 b. あの壁画は描いてもらっている途中だ。

第二に、動詞句の存在について確認する。(71)(72) のように、VP 副詞や道具デ句、場所デ句の生起から、「-たてだ」「-ばかりだ」においても動詞句の存在が保証される。これは、(73)(74) のように、「-かけだ」「-途中だ」においても同様となる<sup>13</sup>。

- (71) a. このコーヒーは手動式のミルで挽きたてだ。  
 b. このコップは強力な洗剤で洗淨したてだ。  
 c. このベンチはペンキで真っ白に塗りたてだ。  
 (72) a. このコーヒーは手動式のミルで挽いたばかりだ。  
 b. このコップは強力な洗剤で洗淨したばかりだ。  
 c. このベンチはペンキで真っ白に塗ったばかりだ。  
 (73) a. ?引っ越しの荷物はトラックで運びかけだ。  
 b. ?ババロアは冷蔵庫で冷やしかけだ。  
 c. ?人形がまっふたつに切りかけだ。  
 (74) a. 引っ越しの荷物はトラックで運んでいる途中だ。  
 b. ババロアは冷蔵庫で冷やしている途中だ。  
 c. 人形がまっふたつに切っている途中だ。

第三に、TP と外項の関係について確認する。外項の生起については、「-たてだ」と「-ばかりだ」でも、「-ばなしだ」と「-はまだ」と同様の対立が観察できる。(75) のように

<sup>13</sup> 「-かけだ」は、途中の解釈となるためか、結果句との相性が悪い。

i ??ベンチがまっくろに塗りかけだ。  
 ii ??ビールがキンキンに冷やしかけだ。

内項主語構造で許容される副詞は道具デ句であっても結果と関わるものである。そのため、副詞との共起に関して、「-かけだ」は「-ばなしだ」や「-たてだ」よりも全般的に許容度が落ちる。

「-たてだ」においては外項が出現不可能だが、(76)のように「-ばかりだ」においては外項が出現可能になる。これに関しては、(77)(78)のように、「-かけだ」と「-途中だ」の間にも同様の観察ができる。

- (75) a. \*そのパンが太郎が焼きたてだ。  
 b. \*そのコーヒーが太郎が挽きたてだ。
- (76) a. そのパンが太郎が焼いたばかりだ。  
 b. そのコーヒーが太郎が挽いたばかりだ。
- (77) a. \*その本が太郎が読みかけだ。  
 b. \*そのカレーが太郎が食べかけだ。
- (78) a. その本が太郎が読んでいる途中だ。  
 b. そのカレーが太郎が食べている途中だ。

「-たてだ」と「-ばかりだ」においては、時間副詞に関する対立も同様に観察できる。(79)のように「-たて」においては主節時と異なる過去の副詞が生起不可能だが、(80)のように「-ばかりだ」においては主節時と異なる過去の副詞が生起可能である。

- (79) a. \*そのパンがけさ焼きたてだ。  
 b. \*そのコーヒーがさっき挽きたてだ。
- (80) a. そのパンがけさ焼いたばかりだ。  
 b. そのコーヒーがさっき挽いたばかりだ。

なお、「-ままだ」や「-ばかりだ」と異なり、(82)のように「-途中だ」においては過去の副詞は生起不可能であるが、これは「-ままだ」や「-ばかりだ」においては内部のTPが過去時を指すものの、「-途中だ」においてはTPが主節と同じ現在時となるためである。(83)が示すように、内部のTPが現在時を指しているため、過去を指す時間副詞を用いた検証ができなくなっている。

- (81) a. \*この本はさっき読みかけだ。  
 b. \*このカレーはさっき食べかけだ。
- (82) a. \*この本はさっき読んでいる途中だ。  
 b. \*このカレーはさっき食べている途中だ。
- (83) a. [TP[TP 点けた (過去) ]ままだ (現在) ]  
 b. [TP[TP 焼いた (過去) ]ばかりだ (現在) ]  
 c. [TP[TP 読んでいる (現在) ]途中だ (現在) ]



このように、「-かけだ」と「-途中だ」について、時間副詞の生起によって TP の有無を検証することはできないが、ル形が生起する「-途中だ」と動詞連用形が生起する「-かけだ」というように、形態論的観点において TP と vP の差異を確認することは可能である<sup>14</sup>。

最後に、主語が CopP に生起する根拠となった or と every の解釈を観察する。もし主語が VP に生起し、痕跡を残して上昇しているとすれば、or と every のどちらが広い解釈も許容されることを予測する。しかしながら、(84) のように、「-たてだ」においても「-ばかりだ」においても、主語にある or が場所句にある every より狭い解釈は許容されず、主語が CopP に基底生成することが検証できる。

(84) a. 赤ワインか白ワインがすべての部屋に配りたてだ。

or > every, \*every > or

b. 赤ワインか白ワインがすべての部屋に配ったばかりだ。

or > every, \*every > or

(85) では、「-かけだ」と「-途中だ」について、「すべて」と「か (or)」を入れ替えて検証している。この措置「すべて」と途中の解釈の相性が悪いためか、動詞句内部に「すべて」が存在する例が不自然に感じられる点について配慮したものである。(85) の場合、主語にある every が場所句にある or より狭い解釈が許容されるとすれば、主語は VP で基底生成されることになるが、実際には every が or より広い解釈しか許容されない。「すべての荷物を実家に運んだ」or「すべての荷物を寮に運んだ」という解釈はできず、「実家に運んだ荷物も寮に運んだ荷物もある」という解釈のみが許される。

(85) a. すべての荷物が実家か寮に運びかけだ。

every > or, \*or > every

b. すべての荷物が実家か寮に運んでいる途中だ。

every > or, \*or > every

以上のように、受動文との相違、動詞句の存在、述語名詞と文末形式の対立、主語の位置等について、「-たてだ」「-かけだ」と「-ばかりだ」「-途中だ」において「-ばなしだ」「-ままだ」と共通する現象観察が可能である。このような事実は、「-ばなしだ」と「-

<sup>14</sup> 田川 (2010) で指摘されているように、タ形においては形態論的に「タ」が出現しても T (時制辞) ではなく Asp (アスペクト形式) の可能性があるため、過去の副詞の生起で検証する必要がある。終止形 (ル形) に関しても不定形と判定される可能性はあるが、「-途中だ」に出現する終止形は動詞そのものの終止形ではなくテイルの終止形であるため、ここでは T とみなす。動詞終止形と不定形の関係は、田川 (2019) を参照。

ままだ」において提案した構造が、「-たてだ」「-かけだ」と「-ばかりだ」「-途中で」においても同様に仮定できる可能性を示唆している。

## 7.2 そのほかの形式への拡張

本論文で取り扱う述語名詞においては、「-ばなしだ」と「-ままだ」、「-たてだ」と「-ばかりだ」、「-かけだ」と「-途中で」のように述語名詞と文末形式が類義のペアを為すものもあるが、そのようなペアを想定できないものもある。7.2 節では、述語名詞と文末形式のペアを想定しにくい述語名詞においても、「-ばなしだ」と同様の内項主語構造を仮定できるか確認する。

第一に、(86) のように、「-すぎだ」「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」も長距離の内項主語構造を許容する。

- (86) a. 土台が（新人に命じて）簡素に作らせすぎだ。  
 b. 落とし穴が（子供にやらせて）深く掘らせまくりだ。  
 c. 演技が（役者に指示して）抑えさせ気味だ。  
 d. 部屋が（子供の好きに）散らかさせ放題だ。

第二に、(87) のように、「-すぎだ」「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」も動詞句を持つ。

- (87) a. ベンチが赤く塗りすぎだ。  
 b. シャツが真っ黒に汚しまくりだ。  
 c. 声が小さく抑え気味だ。  
 d. 部屋がクレヨンで汚し放題だ

第三に、(88) のように、「-すぎだ」「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」も外項が生起できない。

- (88) a. \*ケーキが、太郎が冷やしすぎだ。  
 b. \*シャツが子供がまっくろに汚しまくりだ。  
 c. \*声が太郎が抑え気味だ。  
 d. \*部屋が子供が散らかし放題だ。

以上3つのテストにおいて、「-すぎだ」「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」も他の内項主語構造と同様のふるまいを見せる。ただし、過去の副詞の生起に関しては、類義の文末形式との比較ができないため、意味的に過去を示さないのか TP が存在しないために過去の副詞が生起できないのか判別できない。しかしながら、主接時と異なる時間副詞が

生起できる事実は他の形式と同じく観察できる。

- (89) a. \*このビールはきのう冷やしすぎだ。  
 b. \*シャツがきのう汚しまくりだ。  
 c. \*声がきのう抑え気味だ。  
 d. \*部屋がきのう散らかし放題だ。

なお、「-気味だ」と「-放題だ」は場所句を伴う位置変化動詞との相性が悪い。このため、「-気味だ」と「-放題だ」においては、解釈の広さに基づいて主語の生起位置を検証することはできない。しかしながら、主語位置に生起すると仮定すれば、長距離の内項主語構造が説明できる事実は、6節で示した通りである。

- (90) a. \*ポスターが壁に貼り気味だ。  
 b. \*本が部屋に置き放題だ。

「-すぎだ」「-まくりだ」に関しては、(91)(92)のような文で主語が CopP に生起することを確認できる。「-かけだ」や「途中だ」と同じく「すべて」が主語位置に生起するパターンにおいて、「すべてのポスターが高い位置に貼られすぎている、あるいはすべてのポスターが低い位置に貼られ過ぎている」という every が or より広い解釈は可能だが、「ポスターが高い位置に貼られたり低い位置に貼られたりしていて、いずれにしても高すぎたり低すぎたりする」という every が or より狭い解釈は排除される。

- (91) a. すべてのポスターが高い位置か低い位置に貼りすぎだ。  
every > or, \*or > every  
 b. すべての食器が高い棚か低い棚に置きすぎだ。  
every > or, \*or > every  
 (92) a. すべてのポスターが高い位置か低い位置に貼りまくりだ。  
every > or, \*or > every  
 b. すべての食器が高い棚か低い棚に置きまくりだ。  
every > or, \*or > every

この事実観察は、「-すぎだ」「-まくりだ」においても CopP が主語に生起することを示している。

最後に、「-すぎだ」「-たてだ」における語彙概念構造に関する分析との関係を確認する。「-すぎだ」「-たてだ」においては、(93)(94)のように語彙概念構造における STATE が焦点化される操作を仮定することで、外項の削除について分析を行っていた(山田 2005,

由本 2012)。

(93) [[x ACT ON y]BECOME]<sub>[EVENT BECOME]</sub>[STATE y BE [AT TOO [BOILED]]]

(由本 2012 : 140 改変)

(94) a. 作成動詞 : [<sub>EVENT</sub> x ACT (on y)] CAUSE [<sub>EVENT</sub> BECOME [STATE y BE AT-z]]

b. 出現・発生動詞 : [<sub>EVENT</sub> BECOME [STATE y BE AT-z]]

c. 変化動詞 : [<sub>EVENT</sub> y BECOME [STATE y BE AT-z]]

(山田 2005 : 281)

(再掲)

VP 副詞（特に動作主指向副詞や道具副詞）の生起から、STATE が焦点化されるという操作が起きる場合であっても vP は統語構造上に投射されるものと考えられる。統語構造に vP が投射されている以上、語彙概念構造上の STATE 部分のみが統語構造にあらわれるということは考えられない。このように、語彙概念構造で分析を行うとしても、統語構造のレベルでどうなっているかは別途分析を行う必要がある。3章の分析は、語彙概念構造による分析では捉えきれない事実を捉えることに成功している。

ただし、述語が持つ状態という意味と外項の削除の連動関係を捉えられているという点では、山田 (2005) や由本 (2012) の分析は本章の分析より優れているとも言える。統語構造を中心に分析した 3章と語彙概念構造を中心に分析した先行研究を対立させるのは必ずしも有効ではなく、両者を統合していく方向性が必要なのではないかと考えられる。このような統語構造と意味構造の関係については、4章で部分的な一般化の可能性を提案する。

## 8. おわりに

3章では、冒頭に以下のような課題を立てた。

(Q1) 名詞性を持つ述部形式「-ばなしだ」と「-ままだ」が持つ内項主語構造の統語的論特徴はどのようなものか。また、受動文による内項の主語化とどのように異なるのかを明らかにする。

(Q2) 名詞性を持つ述部形式「-ばなしだ」においては観察可能である外項の削除が、「-ままだ」においては観察できない現象の要因は、どのような統語的要因によるものかを明らかにする。

(Q1) に対応する解答が (95)(96) となり、(Q2) に対する解答が (97)(98) となる。

(95) 「-ばなしだ」「-ままだ」は、内項主語化に関して同一の補文構造を持つ。

(96) この構造は、「-ばなしだ/ままだ」が要求する主語が、動詞句の内項と同一指示関係を持つ構造である。本論文ではこの構造を内項主語構造と呼ぶ。

(97) 「-ばなしだ」は外項を抑制するが、「-ままだ」は外項を抑制しない。

(98) この現象は「-ばなしだ」が形成する名詞句内部に T が欠如しており、「-ままだ」が形成する名詞句内部に T が存在することに起因する。

更に、3章では、(99)(100)のように「-ばなしだ」と「-ままだ」の議論が他の形式にも拡張できることを確認した。

(99) 「-たてだ」「-かけだ」と「-ばかりだ」「-途中で」においても、「-ばなしだ」「-ままだ」と同様の対応関係がみられる。

(100) 「-すぎだ」「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」においても、「-ばなしだ」の分析が適用可能である。

3章の議論においては、名詞述語文と動詞述語文の複層的な統語構造によって、内項主語構造が成立することが示された。2章で見た通り、内項主語構造は、統語的述語名詞のように名詞性を持つ述部形式に特有の現象であるが、山田(2005)や由本(2012)の意味論的な分析だけでなく、統語論的な分析によっても内項主語構造に名詞性が関与していることがわかった。

## 第4章 述語名詞の意味構造と統語構造

### 1. はじめに

3章では、「本が置きっぱなしだ」のように他動詞の内項が主語となる現象に関して、「本が置いたままだ」のような文末形式と比較することで統語構造を分析した。結論を述べると、外項の削除と内項が主語としてふるまう現象は必ずしも連動せず、名詞述語文が動詞句を包摂する構造によって、内項が主語としてふるまう現象が成立していると主張した。

3章では、他動詞の内項が主語となる事例のみを扱ったが、統語的述語名詞においては、他動詞の内項が主語となるパターンだけではなく、非対格自動詞の内項がそのまま主語となる (1a) のようなパターンも存在する。

- (1) a. ビールが冷えすぎだ。  
b. ビールが冷やしすぎだ。

他動詞の場合には、名詞述語と動詞述語がそれぞれ項を導入するという構造を提案した。この構造は、非対格自動詞の場合においてもあり得る構造である。統語的述語名詞が動詞句とは異なる項を導入するという構造は、他動詞の内項が主語となる場合に特有のものなのか、統語的述語名詞において一般的なものなのかは3章までの議論では取り扱うことができていない。

更に、意味と統語構造の関係も議論できていない。他動詞の内項主語構造において (2b) のような非影響動詞が出現できない要因についても3章の議論では説明できない。

- (2) a. 本が置かれている。  
b. 子供が撫でられている。  
(3) a. 本が置きっぱなしだ。  
b. \*子供が撫でっぱなしだ。

よって、4章では、3章の議論を踏まえて、非対格自動詞と他動詞の内項主語構造の対立について議論を行うと共に、述語名詞の意味構造と統語構造の関係についても議論を進めていく。また、4章では、あくまで (1) のように内項が主語となるパターンに絞って議論を行うことで、同じく内項が主語である場合という条件下における他動詞と非対格自動詞の対立を取り扱う。そのため、4章においては他動詞の内項主語構造のみを取り扱い、「他動詞+すぎだ」と言ったときには「ジュースが冷やしすぎだ」のように内

項主語構造のみを想定し、「太郎がジュースを冷やしすぎだ」のように外項が主語として生起するパターンは想定しない。外項が主語として生起するパターンに関しては、5章で取り扱うこととする。

4章の議論においては、統語的述語名詞の中でも、「-すぎだ」に着目する。「-すぎだ」を議論の対象として選定する理由は、(4)(5)のような対立が観察できる点にある。

- (4) a. 最近、宿舎の水道が止まりすぎだ。
- b. \*最近、宿舎の水道が止めすぎだ。
- (5) a. 不審な荷物が一気に届きすぎだ。
- b. \*不審な荷物が一気に届けすぎだ。

(1) の場合は、非対格自動詞の (1a) も他動詞の (1b) も同様に適格な文であったが、(4) や (5) の場合は、非対格自動詞が出現する (4a)(5a) は適格となる一方で、他動詞が出現する (4b)(5b) は不適格となる。この対立は、特に頻度や主語の数量が過剰であるような解釈において観察できる。このように、「-すぎだ」を取り扱うことで、述語名詞における非対格自動詞と他動詞の対立の問題と意味解釈と統語構造の関係を同時に取り扱うことが可能になる。

また、(6) の統語的複合動詞「-すぎる」と比較すると、非対格自動詞の場合は述語名詞「-すぎだ」ではなく複合動詞「-すぎる」と同様のふるまいを見せている点も興味深い。

- (6) a. 最近、宿舎の水道が止まりすぎている。
- b. 不審な荷物が一気に届きすぎている。

上記の対立は、「-すぎだ」の中にも、複合動詞と同様にふるまうものとそうでないものが存在する可能性を示唆している。「-すぎる」と「-すぎだ」に関しては、由本 (2005) や由本 (2012) において意味構造に関する分析が提示されているが、(4)(5) のような対立は観察されていないため、由本の研究を参考にしつつ、4章では非対格自動詞と他動詞の統語構造と意味構造について議論していく。

ここまで述べてきたように、4章では、「-すぎだ」における解釈の対立を糸口として、述語名詞の意味構造・統語構造について分析を行う。4章の課題は、以下の2点である。

- (Q1) 述語名詞「-すぎだ」において、他動詞と非対格自動詞の対立は、意味構造・統語構造の問題としてどのように捉えられるかを明らかにする。
- (Q2) 述語名詞「-すぎだ」において、意味構造と統語構造はどのように関係しているかを明らかにする。

3章では文末形式と述語名詞を取り上げることで内項主語構造について議論を行ったが、4章では述語名詞内部の対立に注目する。その中で (Q1) に対する解答として複合動詞に関する議論を参照することで、述語名詞に特有の構造を持つ「他動詞+すぎだ」と複合動詞と共通する構造を持つ「非対格自動詞+すぎだ」という対立が存在することを主張する。その上で (Q2) に対する解答として意味構造における「結果状態の焦点化」という操作と内項主語構造が連動していることを主張し、述語名詞以外のデータからもこの主張が支持されることを主張する。

## 2. 研究の背景

2節では研究の背景を述べる。主に取り上げるのは「-すぎだ」に関する研究だが、特に意味構造に関しては複合動詞「-すぎる」の議論が前提となっているため、複合動詞「-すぎる」に関する議論から紹介する。2.1節では、前提となる複合動詞「-すぎる」の意味構造に関する議論を概観した上で、述語名詞「-すぎだ」の意味構造に関する由本(2012)の議論をまとめる。2.2節では、複合動詞「-すぎる」の統語構造を参照した上で、3章で述べた他動詞の内項が主語となる述語名詞の統語構造に関する議論を振り返る。

### 2.1 「-すぎる」と「-すぎだ」の意味構造

2.1節では、「-すぎる」と「-すぎだ」の意味構造に関して先行研究を概観する。まず、述語名詞「-すぎだ」の意味構造について確認する前提として、複合動詞「-すぎる」の意味構造と意味解釈について確認する。由本(2005)によると、「-すぎる」には統語的解釈と語彙的解釈の2種類が存在する。統語的解釈とは (7a) のように修飾句の内容が「-すぎる」による過剰のターゲットとなる解釈であり、語彙的解釈とは (7b) のように動詞が「-すぎる」による過剰のターゲットとなる解釈である。

- (7) a. 昨夜は遅くまで飲み過ぎた。(=飲み終わった時間が遅すぎた)  
 b. 昨夜は飲み過ぎた。(=飲んだ量が多すぎた)

由本 (2005 : 221)

統語的解釈については「統語構造内において統率する要素の中から[+gradable]素性を探し、それをターゲットとして選択する (p.264)」とされ、統語構造において顕在的な要素が段階性を持つ場合に「-すぎる」のターゲットになることを説明している。(7a) では「遅くまで」という副詞句の「遅く」が「-すぎる」のターゲットとなっている。一方、語彙的解釈については、動詞の語彙概念構造において「①事象が起こった時・空間を特定する働きを担う項 ②結果状態を表わす定項 ③事象の段階性に寄与する Theme 項 (p.253)」の3種類の要素が「-すぎる」のターゲットとなるとしている。(8) について



は、(8a) が①の場合、(8b) が②の場合、(8c) は③の場合の意味構造を示している。

- (8) a. 寝過ぎる :  $\lambda x$ TOO  $\lambda e$ [SLEEP(x)]  
 b. 太り過ぎる : [BECOME[y BE[AT TOO [FAT (+gradable)]]]]  
 c. 壊し過ぎる : [x ACT-ON y]  
     CAUSE[BECOME[TOO[THING y]BE[AT-BROKEN (+gradable)]]]  
 由本 (2005 : 248, 246, 253 下線部は筆者による)

(8a) は継続時間や頻度が過剰となる解釈における意味構造であり、この場合には時・空間を特定する働きを担う時空間項 (e) に過剰の意味 (TOO) が付与されている。(8b) は結果状態が過剰である解釈における意味構造であり、この場合には結果状態をあらわす意味構造上の定項 (FAT) に過剰の意味 (TOO) が付与されている。そして、(8c) は数量が過剰である解釈における意味構造であり、内項に当たる y に過剰の意味 (TOO) が付与されている。4 章では、頻度が過剰のターゲットとなる解釈について頻度解釈、結果が過剰のターゲットとなる解釈について結果解釈、数量が過剰のターゲットとなる解釈について数量解釈と呼ぶことにする。

数量解釈には項の制約があり、(9a,b) のように内項においては原則的に数量解釈が許容されるが、(9b,c) のように外項においては原則的に数量解釈が許容されない。「-すぎだ」においても外項が生起するパターンにおいては、(10) のように外項と内項の対立が維持される。

- (9) a. 荷物が届きすぎた。 (数量解釈 : 荷物)  
 b. 子供が荷物を届けすぎた。 (数量解釈 : \*子供/荷物)  
 c. 子供が遊びすぎた。 (数量解釈 : \*子供)  
 (10) a. 子供が荷物を届けすぎだ。 (数量解釈 : \*子供/荷物)  
 b. 子供が遊びすぎだ。 (数量解釈 : \*子供)

続いて、「-すぎだ」における過剰の解釈について確認する。由本 (2012) では、「-すぎだ」において、「-すぎる」とは異なった解釈の分布を見せることが指摘されている。由本 (2012) では、4 章で取り扱う「-すぎだ」が修飾部に生起する事例を取り上げて、結果解釈の (11) や (13) の例が容認される一方で、頻度解釈や数量解釈となる (12) や (14) の文が容認されないことを述べている。

- (11) a. 冷やしすぎのビールやゆですぎのパスタは美味しくない。  
 b. 荷物を積みすぎのトラックは通行できません。  
 c. 磨きすぎの床はすべりやすくて危険だ。

- d. 炒めすぎの野菜はビタミンが失われています。
- (12) a. \*作りすぎのクッキー (を犬にやる)、\*建てすぎのビル  
 b. \*投げすぎのボール、\*送りすぎの DM、\*出しすぎの寄付金  
 c. \*見すぎのテレビ、\*読みすぎの本、\*かけすぎの電話

(由本 2012 : 131)

- (13) 冷えすぎのビール、下がりすぎの物価、伸びすぎの髭  
 太りすぎの子犬、乾燥しすぎの部屋、日焼けしすぎの肌

- (14) \*起こりすぎの事故、?生まれすぎのアイデア、\*出すぎの煙

(由本 2012 : 133)

(11) の「冷やす」や (13) の「冷える」のように、動詞が変化量等のスケールを持っている場合は結果解釈が可能となるが、結果解釈ができない (12) の「作る」や (14) の「起こる」の場合には頻度解釈や数量解釈が許容されず、その結果として非文と判定されている。由本 (2012) の観察においては、他動詞の例である (9) であっても、非対格自動詞である (11) であっても、等しく頻度解釈や数量解釈が許容されないという観察になっている。

ただし、数量解釈に関しては (15) のように場所句が出現する場合、ヲ格で出現する内項の数量に関する解釈であれば容認可能と判定されている。

- (15) a. 荷物を入れすぎの鞆、荷物を載せすぎのトラック  
 b. 乗客が乗りすぎのバス、荷物が入りすぎの鞆

(由本 2012 : 137)

由本 (2012) は数量解釈の可否について、過剰の意味による特徴づけの問題として捉えている。例として「健は漫画を読み過ぎたために勉強が進まないのだ」という例を挙げ、この場合には過剰性によって漫画が特徴付けられるのではなく、健の行為が特徴付けられることを述べている。場所句がターゲットとなる場合には、数量解釈における過剰性が場所句を特徴付けることが可能となるため、数量解釈が可能になるとされている。

頻度解釈の可否に関しては、語彙概念構造 (LCS) を用いた説明を行っている。内項を主語とする「-すぎ」では、(16)(17) の語彙概念構造における STATE (網掛け部分) が焦点化されるため、その内部の要素に過剰の意味 (TOO) が付与されるという分析を提案している。

(16) [[x ACT ON y] CAUSE [BECOME<sub>STATE</sub> y BE [AT TOO [BOILED (+gradable)]]]]

(17) [x CONTROL[x CAUSE[BECOME<sub>STATE</sub> TOO<sub>Thing</sub> y] BE [IN z]]]]

(由本 2012 : 140)

そのため、「-すぎだ」においては、(8a)のように語彙概念構造上の STATE の外側に存在する時空間項に過剰の意味 (TOO) を付与することはできず、頻度解釈は排除されることになる。語彙概念構造において STATE を焦点化する操作は、内項が主語となる場合に外項が生起できない事実とも整合的である。本論文においては、語彙概念構造における STATE を焦点化する操作について「結果状態の焦点化 (cf. 影山 1996)」と呼称する。

しかしながら、由本 (2012) は、現象観察を修飾部に絞っている点で問題がある。冒頭に示した通り、述部の場合を見てみると、非対格自動詞に限っては頻度解釈も数量解釈も可能となる。(18a) では家の水道が何度も止まっているという頻度解釈が可能であり、(19a) では届いた荷物の量が多いという数量解釈が可能である。

- (18) a. 最近、水道が止まりすぎだ。
- b. \*最近、水道が止めすぎだ。
- (19) a. 荷物が一気に届きすぎだ。
- b. \*荷物が一気に届けすぎだ。

由本 (2012) の説明では、他動詞と非対格自動詞における (18)(19) の対立について捉えることが難しい。頻度解釈の問題に関しては、結果状態の焦点化が非対格自動詞の場合に適用されないという由本 (2012) の説明を援用した説明も可能だが、数量解釈の問題に関しては、特徴づけに関する制約が他動詞の場合にのみ成立するということになるため不自然な分析となる。

いずれにせよ、非対格自動詞と他動詞の場合に違いがあるということは、3章で議論を行った内項主語構造も含めて、統語構造と意味構造の関係について議論を行う必要がある。

## 2.2 「-すぎる」と「-すぎだ」の統語構造

続いて2.2節では、「-すぎる」と「-すぎだ」の統語構造について概観する。

「-すぎる」の統語構造に関しては、統語的複合動詞の補文構造に関する対立の中で議論が行われている。影山 (1993) や由本 (2005) によると、「-すぎる」は統語的複合動詞であり、補文構造を持つ。統語的複合動詞の補文構造には、大きく分けて、補文の主語が PRO として生起する (20a) のようなコントロール構造と、補文の主語が痕跡 (t) を残して上昇する (20b) のような上昇構造の2種類が想定される。

- (20) a. [<sub>VP</sub> 子供<sub>i</sub> が [<sub>VP</sub> PRO<sub>i</sub> プリンを食べ] 飽きる]

b. [<sub>VP</sub> プリン<sub>i</sub> が [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub> 冷え] すぎる]

コントロール構文においては、後項動詞が主語となる項を導入することによって、上昇構造とは異なった特徴を持っている。第一にコントロール構造では (21) のように主語に意味的制約が課されるという特徴を持ち、第二に (22) のように主語を含むイディオム解釈が排除されるという特徴を持つ (cf. Nishigauchi 1993, 岸本 2005)。

(21) a. \*肉が焦げ飽きた。(無生物主語)

b. 子供が肉を食べ飽きた。(有生物主語)

(22) #閑古鳥が鳴き飽きた。(≠店に人が来ない状況が終わった)

「-すぎる」の場合、(23) のように主語が意味的制約を持たず、(24) のようにイディオム解釈が可能であることから、上昇構造と判定される。

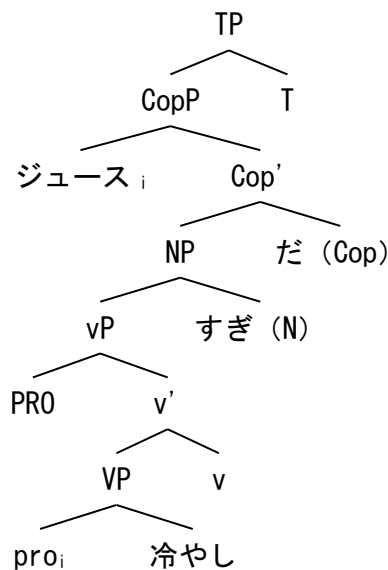
(23) a. 肉が焦げすぎた。

b. 子供が肉を食べすぎた。

(24) あの店は閑古鳥が鳴きすぎている。(店に人が来なさすぎる)

続いて、3章で述べた「他動詞+すぎだ」の統語構造を振り返る。3章では、(25) のような統語構造を提示した。

(25) ジュースが冷やしすぎだ。



(25) は、動詞句を包摂する名詞述語文として「他動詞+すぎだ」を捉えた構造であり、名詞述語文が要求する主語と動詞句の内項が同一指示関係を結んでいる。この構造は、以下のような根拠に基づいている。

まず、受動文においては (26) のように「させ」に埋め込まれた他動詞の内項が主語となることができないが、「-すぎだ」の場合は (27) のように「-させる」や「-もらう」に埋め込まれた他動詞の内項が主語となり得る。

- (26) a. ビルがジョンに[子供を託児所へ預け]させた。  
 b. ジョンがビルに子供を託児所へ預けさせられた。  
 c. \*子供がビルに (よって) ジョンに託児所へ預けさせられた。
- (27) a. 原稿が丁寧に書かせすぎだ。  
 b. ?土台が (新人に命じて) 簡素に作らせすぎだ。  
 c. ビールが冷やしてもらいすぎだ。

つまり、受動文に存在するような主語への上昇に対する制約が、内項主語構造には存在しない。3章ではこの観察に基づいて、内項が動詞句に痕跡 (trace) を残して上昇するという受動文と同様の構造ではなく、CopP に基底生成された (名詞述語文が要求した) 主語が内項と同一指示関係を持つという構造を仮定している。これは、複合動詞「-すぎる」が上昇構造を持っていることを踏まえると、述語名詞が複合動詞とは異なる特有の構造を持っている可能性を示唆している。

また、動詞句に後接する「-すぎだ」と TP に後接する「-ままだ」は、内項が主語となる現象を共有している。しかしながら、外項が生起できない現象は、(28) のように「-ばなしだ」「-すぎだ」に限られる。

- (28) a. \*プリンが、[<sub>VP</sub> 子供が冷やし]すぎだ。  
 b. プリンが、[<sub>TP</sub> (きのう) 子供が冷やした]ままだ。

3章では、「-すぎ」が包摂する動詞句において、主格を付与する T が欠如しているため外項が生起できなくなることを主張した。この観察も、内項の主語化と外項の削除を別々に扱い、「-すぎだ」を名詞述語文と捉える (25) の構造を支持している。

前述のように、3章では、非対格自動詞のようにもともと内項が主語となる場合に、「-すぎだ」がどのような統語構造を持つのかは議論ができていない。更に (29) のように、「-すぎる」において可能であり「他動詞+すぎだ」において不可能である意味解釈が、「非対格自動詞+すぎだ」においては許容されるという事実観察が存在する。

- (29) a. 最近、宿舍の水道が止まりすぎている。(頻度解釈)

- b. \*最近、宿舎の水道が止めすぎだ。(頻度解釈)
- c. 最近、宿舎の水道が止まりすぎだ。(頻度解釈)

この事実を踏まえると、「非対格自動詞+すぎだ」は統語構造においても「他動詞+すぎだ」よりも「-すぎる」に近い構造を持っている可能性も想定できる。当然、意味解釈の問題をどのように捉えるのかにも左右されるが、2.1 節で述べた通り非対格自動詞と他動詞において対立があるとすれば、内項主語構造と意味解釈が関係している可能性は十分にあり、意味構造と統語構造の関係について議論を行う必要がある。

### 3. 「-すぎだ」の意味解釈に関する観察

先行研究を踏まえて、3 節では「-すぎだ」における意味解釈の可否について観察を行う。由本 (2012) が指摘するように、「-すぎる」も「-すぎだ」も共に結果解釈は共通して容認されることがわかっている。3 節では、頻度解釈と数量解釈、更に修飾句が「-過ぎる」のターゲットになる統語的解釈における意味解釈を観察していく。

第一の観察として、「-すぎだ」における頻度解釈の可否を観察する。(30) のように、「非対格自動詞+すぎ」においては頻度解釈が可能だが、「他動詞+すぎ」においては頻度解釈ができない。

- (30) a. 宿舎の水道が {止まり/\*止め} すぎだ。(頻度解釈)
- b. アパートの鍵が {なくなり/\*なくし} すぎだ。(頻度解釈)
- c. お店の看板が {倒れ/\*倒し} すぎだ。(頻度解釈)

(30a) において、宿舎の水道が勝手に止まる頻度が過剰であるという「止まりすぎだ」は許容されるが、宿舎側の都合で水道を止める頻度が過剰であるという「止めすぎだ」は許容できない。このように、内項を主語とする場合に頻度解釈の可否に差がみられる。同じ「他動詞+すぎだ」であっても、外項を主語とする (31) では頻度解釈が許容されるため、他動詞の使用によって不適格になっているわけではなく、「他動詞+すぎだ」の内項主語構造において頻度解釈が許容されないものと考えられる。

- (31) a. 宿舎の管理者が宿舎の水道を止めすぎだ。(頻度解釈)
- b. 太郎がアパートの鍵をなくしすぎだ。(頻度解釈)
- c. 突風がお店の看板を倒しすぎだ。(頻度解釈)

第二の観察として、「-すぎだ」における数量解釈の可否を観察する。前提として、他動詞の外項と内項がそのまま出現する文において、内項が数量解釈を受けることを確認する。(32a,b) において、複合動詞「-すぎる」であっても、述語名詞「-すぎだ」であっ

でも、同様に内項が数量解釈を受けることが可能となっている。

- (32) a. 学生がクッキーを作りすぎた。(数量解釈：\*学生/クッキー)  
 b. 学生がクッキーを作りすぎだ。(数量解釈：\*学生/クッキー)

しかしながら、「-すぎだ」においては、「-すぎる」において数量解釈を受ける (33) のような動詞を観察すると、(34) のような対立を確認できる。(34) の用例は、「非対格自動詞+すぎだ」において数量解釈が許容されるが、「他動詞+すぎだ」において数量解釈が許容されないことを示している。

- (33) a. 荷物が一気に届きすぎた。  
 b. この会議でアイデアが生まれすぎた。  
 c. ビルが同じ通りに建ちすぎた。  
 (34) a. 荷物が一気に {届き/\*届け} すぎだ。  
 b. この会議でアイデアが {生まれ/\*生み} すぎだ。  
 c. あの通りは背の高いビルが {建ち/\*建て} すぎだ。

(34a) では、非対格自動詞において「届いた荷物の量が多い」という数量解釈が許容されるが、他動詞において「届けた荷物の量が多い」という数量解釈が排除される。(34) で取り上げている動詞は、結果解釈のターゲットとなる結果状態を持たない動詞であるため、頻度解釈も数量解釈も排除される「他動詞+すぎだ」は非文となる。

第三の観察として、修飾句をターゲットとする統語的解釈によって、「他動詞+すぎだ」の許容度が左右されることがある。「作りすぎ」「置きすぎ」のように数量解釈では不適格となる他動詞であっても、(35) のように、副詞句のターゲットになる場合は適格となる。

- (35) a. プリンが {甘く/\* $\emptyset$ } 作りすぎだ。(甘すぎる/\*数量解釈)  
 b. Yシャツが {雑に/\* $\emptyset$ } 畳みすぎだ。(雑すぎる/\*数量解釈)  
 c. 本が {高いところに/\* $\emptyset$ } 置きすぎだ。(高すぎる/\*数量解釈)

しかしながら、(35) の副詞句はすべて結果に関わる副詞句であり、(36) のように「素早く」「勢いよく」のように結果状態と関わらない様態副詞が過剰のターゲットとなる解釈の場合に「他動詞+すぎだ」は許容されない。(36c) に関しては、「ささいなこと」の「ささいな」が過剰のターゲットとなる例であり、この場合は警報が鳴るきっかけであってこれも結果と関わらない副詞句である。

- (36) a. 荷物が素早く {届き/\*届け} すぎだ。(素早過ぎる)  
 b. ドアが勢いよく {開き/\*開け} すぎだ。(勢いが良すぎる)  
 c. 警報がささいなことで {鳴り/\*鳴らし} すぎだ。(ささいすぎる)

このような事実は、修飾句をターゲットとする解釈においても、「他動詞+すぎだ」において過剰のターゲットとなるのは結果状態に関わる修飾句に限られることを示唆している<sup>1</sup>。

ここまでに見た「非対格自動詞+すぎだ」と「他動詞+すぎだ」の解釈は、以下の表1のようにまとめられる。

表1 内項を主語とする「-すぎだ」において許容される過剰の解釈

	結果	頻度	数量	結果と関わらない修飾句
非対格自動詞+すぎだ	○	○	○	○
他動詞+すぎだ	○	×	×	×

「非対格自動詞+すぎだ」においては、「-すぎる」において認められていた語彙的解釈と統語的解釈が容認できるのに対し、「他動詞+すぎだ」においては語彙的解釈のうち結果解釈のみが容認され、統語的解釈においても修飾句が結果と関わる場合のみ容認されることになる。

ここまでの観察は、結果状態の焦点化という操作によって「-すぎだ」のふるまいを説明する由本(2012)の分析が「他動詞+すぎだ」において一定の有効性を持っていることを示している。その一方で、前述の通りに数量解釈の可否は結果状態の焦点化によって説明することができず、由本(2012)で採用されている特徴づけによる説明も「非対格自動詞+すぎだ」と「他動詞+すぎだ」の間にある対立を説明することはできない。

以上のような事実観察について、4節では、頻度解釈の可否が「他動詞+すぎだ」と「非対格自動詞+すぎだ」の間にある意味構造の相違によって説明され、数量解釈の可否が「他動詞+すぎだ」と「非対格自動詞+すぎだ」の間にある統語構造の相違によって説明されることを主張する。

<sup>1</sup> また、「たくさん」が生起する場合、「他動詞+すぎだ」においてiのように「たくさん」が過剰のターゲットとなる形で数量解釈が可能となる場合もある。

- i a. プリンがたくさん作りすぎだ。  
 b. ビールがたくさん冷やしすぎだ。  
 c. 本がたくさん置きすぎだ。

由本(2012)で指摘されていた通り、内項の数量解釈は常に排除されるわけではなく、「トラックが荷物を載せすぎだ」のような場合には数量解釈が可能となる。「たくさん」という修飾句が過剰のターゲットとなる場合に関しても、数量が過剰であるという解釈が可能となるが、語彙的解釈とし得られる数量解釈とは過剰のターゲットが異なっている点で注意が必要である。



## 4. 「-すぎだ」の構造と意味解釈

4節では、頻度解釈の可否と数量解釈の可否に関して、それぞれ意味構造と統語構造によって説明できることを主張する。まず4.1節で意味構造と頻度解釈の関係について説明し、4.2節で統語構造と数量解釈の関係について説明する。

## 4.1 意味構造と頻度解釈

頻度解釈の可否については、由本(2012)の語彙概念構造による分析を踏襲する形で説明を行う。他動詞においては由本(2012)で仮定される結果状態の焦点化が起こっており、非対格自動詞においては結果状態の焦点化が起こらないものと考えれば、頻度解釈の可否を説明できる。

由本(2005)の枠組みにおいて、頻度解釈は以下のように定式化されている。この構造では、時空間をあらわす時空間項(e)にTOOが付与されていると仮定されている。そして、由本(2012)では、「-すぎだ」においては結果状態が焦点化されるため、結果状態(語彙概念構造上のSTATE)の外にある要素にTOOが付与できないため、頻度解釈が得られないという主張がなされていた。

(37) 寝過ぎる :  $\lambda x \text{TOO} \lambda e [\text{SLEEP}(x)]$

(由本 2005 : 248)

すなわち、頻度解釈が得られる非対格自動詞の場合には由本(2012)で仮定されていた結果状態の焦点化が起きず、頻度解釈が得られない他動詞の場合には由本(2012)で仮定されていた結果状態の焦点化が起きると考えれば、非対格自動詞と他動詞の対立を説明することが可能となる。(38)は「非対格自動詞+すぎだ」において意味構造上で結果状態の焦点化が起きていないことを示している。一方、(39)は「他動詞+すぎだ」において網掛け部分(結果状態)が焦点化されるために、頻度解釈が排除されることを示している。

(38) a. 水道が止まりすぎだ。

b.  $\lambda x \text{TOO} \lambda e [\text{BECOME}_{\text{STATE } y} \text{BE} [\text{AT} [\text{STOP}]]]]$

(39) a. \*水道が止めすぎだ。

b. \* $\lambda x \text{TOO} \lambda e [[x \text{ ACT ON } y] \text{CAUSE}$

$[\text{BECOME}_{\text{STATE } y} \text{BE} [\text{AT} [\text{STOP}]]]]$

(38)については、複合動詞「-すぎる」において頻度解釈が起こるメカニズムをそのまま採用して頻度解釈が可能となる事実を説明することができる。一方で(39)について

は結果状態の焦点化という操作によって、複合動詞「-すぎる」において可能な頻度解釈が排除される。加えて、「止める」のような動詞においては、結果をあらわす定項 (STOP) が段階性 (+gradable) を持たない。そのため、結果解釈も排除され、最終的に「他動詞+すぎだ」は非文となる。

また、2節では、「他動詞+すぎだ」で修飾句を過剰のターゲットとする統語的解釈において、「他動詞+すぎだ」は結果と関わらない修飾句を過剰のターゲットとできないことを観察している。この事実については、「他動詞+すぎだ」においてのみ結果状態の焦点化が起こることによって、結果状態と無関係の修飾句を過剰のターゲットにすることができなくなっているものとして説明が可能である。

#### 4.2 統語構造と数量解釈

数量解釈の可否は、3章で示した内項主語構造における統語構造を踏襲する形で分析を行うことができる。つまり、「他動詞+すぎだ」の内項主語構造においては内項が VP に基底生成せず、CopP に基底生成する名詞述語文の主語となるため、内項を過剰のターゲットとする数量解釈が容認されないものとする。その一方で、「非対格自動詞+すぎだ」においては内項が VP に基底生成するため、内項を過剰のターゲットにすることが可能となる。

由本 (2005) の観察によると、数量解釈は原則的に内項を過剰のターゲットとする解釈である。

- (40) a. 荷物が届きすぎた。 (数量解釈：荷物)  
 b. 子供が荷物を届けすぎた。 (数量解釈：\*子供/荷物)

3章で提案した他動詞の内項主語構造は、内項が名詞述語文の主語として CopP に基底生成するというものだった。すなわち、(41) のような他動詞の内項主語構造において、内項は VP に基底生成されないため、「-すぎだ」の数量解釈のターゲットとしての条件を統語的に満たしていないことになる。内項主語構造は、あくまでも名詞述語文の主語が VP に生起するゼロ項と同一指示解釈を受けているもので、厳密にいうと内項そのものが主語となっているわけではない<sup>2</sup>。

(41) \*<sub>[CopP 荷物<sub>i</sub>が]<sub>[NP[VP PRO pro<sub>i</sub> 届け]すぎ]だ</sub></sub>

<sup>2</sup> (41) の構造においても、内項として pro が存在しているため、内項自体は存在している。しかしながら、i のように、外項と内項が同一指示解釈となる場合、内項の数量解釈は排除される。

i 子供<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>を責めすぎだ。 (\*子供の数量解釈/\*自分の数量解釈)  
 (41) の構造においても、主語項と内項である pro が同一指示解釈を持っているため、pro の数量解釈が排除されているものと思われる。

一方、非対格自動詞の場合には数量解釈が可能となるため、他動詞と同様の統語構造は仮定できない。数量解釈が可能であるという観察は、内項が動詞句に基底生成しているということを示している。よって、「非対格自動詞+すぎだ」は、複合動詞「-すぎる」と同様に (42) のような上昇構造を持っていると考えられる。

- (42) a. [<sub>CopP</sub> 荷物<sub>i</sub> が [<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub> 届き] すぎ] る]  
 b. [<sub>CopP</sub> 荷物<sub>i</sub> が [<sub>NP</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub> 届き] すぎ] だ]

「非対格自動詞+すぎだ」が上昇構造であると仮定すると、内項が CopP に基底生成する「他動詞+すぎだ」と内項が VP に基底生成する「非対格自動詞+すぎだ」の統語構造の違いによって数量解釈の可否を説明することができる。

この説明は、場所句を主語とする「他動詞+すぎだ」において内項の数量解釈が可能という (43) の観察も適切に説明することができる。

- (43) a. 荷物を入れすぎの鞆、荷物を載せすぎのトラック  
 b. 乗客が乗りすぎのバス、荷物が入りすぎの鞆

(由本 2012 : 137)

(43) のような「-すぎだ」においては、CopP に基底生成する主語が VP の場所句と同一指示関係を持ち、内項自体は VP に基底生成している。この場合、内項が VP に基底生成されているため、数量解釈を阻害する要因が存在しない。(44) のように、「他動詞+すぎだ」の内項主語構造は、(43) において数量解釈が許容される事実を正しく予測できる。

- (44) [<sub>CopP</sub> トラック<sub>i</sub> が [<sub>NP</sub> [<sub>VP</sub> PRO pro<sub>i</sub> 荷物を載せ] すぎ] だ]

なお、「非対格自動詞+すぎだ」が上昇構造を持っているという仮定は、数量解釈を説明するためだけの ad hoc な仮定ではない。以下に示すようにイディオム解釈と主語の選択制限における現象観察も、「非対格自動詞+すぎだ」が上昇構造を持っていることを示唆している。

まず、イディオム解釈について確認する。(45) のように、上昇構造の場合には「閑古鳥が鳴く」のような主語を含むイディオム解釈が許容される。

- (45) あの店は閑古鳥が鳴きすぎている。(店に人が来なさすぎる)

ここでは非対格自動詞と他動詞における対立を確認したいため、非対格自動詞と他動詞

で対応関係を持つ (46)(47) のイディオムを使って検証を行う。また、このイディオムは、受動文においてもイディオム解釈が可能となる特殊なイディオムであるため、「他動詞+すぎだ」がもし上昇構造を持っていれば受動文と同様にイディオム解釈が可能となることが予測される (cf. Fujimaki 2005, 藤巻 2007)。

- (46) a. 田中先生によって論文に手が入っている。  
 b. 田中先生が論文に手を入れている。  
 c. 田中先生によって論文に手が入れられている。
- (47) a. 田中先生の発言によって議論に拍車がかかった。  
 b. 田中先生の発言が議論に拍車をかけた。  
 c. 田中先生の発言によって議論に拍車がかけられた。

このイディオムを「-すぎだ」と共起させると、(48b)(49b) のように「非対格自動詞+すぎだ」では上昇動詞「-すぎる」と同様にイディオム解釈が可能となる。その一方で、(48c)(49c) のように「他動詞+すぎだ」ではイディオム解釈が排除される。

- (48) a. 田中先生によって論文に手が入りすぎている。  
 b. 田中先生によって論文に手が入りすぎだ。  
 c. #田中先生によって論文に手が入れすぎだ。
- (49) a. 先生の発言によって議論に拍車がかかりすぎている。  
 b. 先生の発言によって議論に拍車がかかりすぎだ。  
 c. #先生の発言によって議論に拍車がかけすぎだ。

このように、「非対格自動詞+すぎだ」においてはイディオム解釈が許容されることから、「非対格自動詞+すぎだ」が上昇構造を持っていることを確認できる。

更に、(50) のように、上昇構造の複合動詞「-すぎる」には主語に対する選択制限を持たない。「-すぎる」自身は主語を要求せず、「-すぎる」が主語となる項に意味制限を課さないためである。

- (50) a. 肉が焦げすぎた。  
 b. 子供が肉を食べすぎた。

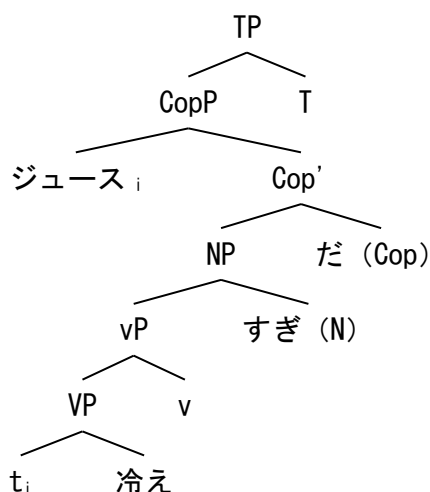
「非対格自動詞+すぎだ」においては、(51) のように複合動詞「-すぎる」と同様に主語が有生物であっても無生物であっても問題なく許容可能である。一方で、「他動詞+すぎだ」においては、(52) のように無生物が許容される一方、有生物が排除される。

- (51) a. 肉が焦げすぎだ。  
 b. 人が倒れすぎだ。  
 (52) a. {口ひも/\*泥棒} がきつく縛りすぎだ。  
 b. {生地/\*赤ちゃん} がゆっくり寝かせすぎだ。

無生物を選択する制限は、「他動詞+すぎだ」が名詞述語文として主語を要求する際に与えられる制限と考えられる。このような制限を持たないという点でも、「非対格自動詞+すぎだ」が上昇構造であることを確認できる。

このように、「非対格自動詞+すぎだ」が上昇構造であると仮定すると、数量解釈だけでなく複数の現象における連動関係を捉えることが可能となる。この事実は、「非対格自動詞+すぎだ」が上昇構造を持っていることを示唆している。(53) に、「非対格自動詞+すぎだ」の統語構造を示しておく。

- (53) ジュースが冷えすぎだ。



4 節では、「非対格自動詞+すぎだ」と「他動詞+すぎだ」の意味解釈における対立について、意味構造と統語構造の問題として説明を試みた。4 節の議論では、「非対格自動詞+すぎだ」において結果状態の焦点化が起こらず、「非対格自動詞+すぎだ」が複合動詞と同様に上昇構造を持っていることを主張した。しかしながら、4 節の段階では、意味構造の議論と統語構造の議論を独立に行っており、その関係が不明瞭である。よって、5 節では、4 節の議論を踏まえて意味構造と統語構造の関係を議論していく。

### 5. 「-すぎだ」における意味構造と統語構造の関係

4 節の主張をまとめると、「-すぎだ」の意味構造と統語構造は (54) と (55) のように

整理することができる<sup>3</sup>。

## (54) 非対格自動詞

- a. [ジュース<sub>i</sub>が<sub>N</sub>[<sub>VP</sub> <sub>t<sub>i</sub></sub> 冷え]]すぎだ  
 b. BECOME[<sub>STATE</sub> y BE [AT TOO [COLD]]]

## (55) 他動詞

- a. [ジュース<sub>i</sub>が<sub>N</sub>[<sub>VP</sub> PRO pro<sub>i</sub> 冷やし]]すぎだ  
 b. [[x ACT ON y] CAUSE [BECOME[<sub>STATE</sub> y BE [AT TOO [COLD]]]]]

非対格自動詞の場合には複合動詞「-すぎる」と同様の構造であり、他動詞の場合には内項主語構造特有の構造となっている。内項主語構造が、目的語が主語としてふるまう特殊な構造であることを踏まえれば、「他動詞+すぎだ」の場合に特有の構造を持つという結論は自然な帰結と言える。

では、どうして内項が主語となる場合に限って意味構造において結果状態の焦点化という操作が行われるのか。興味深いことに、3章でも触れた形容詞的タ形について、影山(1996)では、結果状態の焦点化を起こす形式と説明されている。影山(1996)において仮定されている結果状態の焦点化とは、「概念構造の STATE (すなわち y BE AT-z) の部分全体にハイライトを当てる(影山1996:134)」という操作であり、由本(2012)で「-すぎだ」において仮定されている結果状態の焦点化と同様の操作である。(56)と(57)に、「-すぎだ」における語彙概念構造と形容詞的タ形における語彙概念構造を提示する。

## (56) a. 茹ですぎの卵

- b. [[x ACT ON y] CAUSE [BECOME[<sub>STATE</sub> y BE [AT TOO [BOILED (+gradable)]]]]]

## (57) a. 茹でた卵

- b. [[x ACT ON y] CAUSE [BECOME[<sub>STATE</sub> y BE [AT [BOILED ]]]]]]

<sup>3</sup> 以下のように、「-すぎる」は状態的意味を持たないのに対し、「非対格自動詞+すぎだ」は状態的意味を持っている。

- i a. チョコレートが2回溶けすぎた。  
 b. \*チョコレートが2回溶けすぎだ。

あくまで(54)は、「非対格自動詞+すぎだ」が持っている状態的意味が動詞の意味構造に作用しないことを示しているのであり、文全体においては「非対格自動詞+すぎだ」が状態的意味を持っていることになる。

なお、主語がイベントを表す場合に「非対格自動詞+すぎだ」の許容度が上がるが、この場合は回数表現が動詞句のイベントに対応しているのではなく、主語のイベントを数え上げているものと思われる。

- ii a. 事故が2回起こりすぎた。  
 b. 事故が2回起こりすぎだ。

3章で述べたように、田川（2010）では、形容詞的タ形において外項が生起できないという(58)の観察があり、(59)のように述語名詞においても外項は生起できない。

- (58) a. その女性が \*優れた/優れている プログラミングの能力  
 b. 優れた/優れている プログラミングの能力 （田川 2010: 195）  
 (59) a. \*太郎が茹ですぎの卵  
 b. 茹ですぎの卵

田川（2010）では、形容詞タ形がアスペクト形式であり、統語的に外項の位置が存在しないという分析を行っている。同様に、内項主語構造においても、名詞句の内部にテンスが存在しないため、外項が生起できない。(560)では AspP の上位に TP が存在せず、(61)では NP の内部に TP が存在しないために外項が生起できないことになる。

- (60) a. [<sub>AspP</sub> 太郎が焼いた]魚  
 b. [<sub>AspP</sub> 太郎が茹でた]卵  
 (61) a. [<sub>NP</sub> 太郎が焼きすぎ]の魚  
 b. [<sub>NP</sub> 太郎が茹ですぎ]の卵

すなわち、形容詞的タ形と述語名詞の内項主語構造は T の不在による外項の抑制を起こす点と、結果状態の焦点化を起こす点で共通している<sup>4</sup>。これに基づいて、本論文では、結果状態の焦点化を、(62)のような統語論的な条件において発生する意味論的操作と仮定する。

- (62) T の不在による外項の抑制が起こったとき、[+STATE]素性の継承が VP まで適用される。それに伴って、語彙概念構造において下位事象の STATE が焦点化され、STATE 以外の部分が背景化される<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> なお、形容詞的タ形においては「-すぎだ」において観察できる非対格自動詞と他動詞の対立がみられない。しかしながら、連体節の「-すぎの」において非対格自動詞と他動詞の対立がみられないことは由本（2012）において観察されている通りである。形容詞的タ形は連体節に限られる形式であるため、述部の「-すぎだ」において観察できる対立が存在しないとしても、形容詞的タ形と「-すぎだ」を並行的に捉える上で直接的な問題とはならない。

<sup>5</sup> 以下のようなコントロール構文の用例では、外項位置にゼロ代名詞 PRO が生起しているが、明示的に出現する外項と同一指示関係にあるため、外項の抑制とは見なさない。

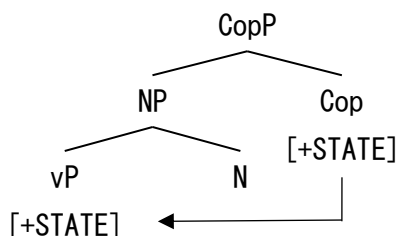
i 太郎<sub>i</sub>は[PRO<sub>i</sub> 本を読み]飽きた。

更に、ゼロ代名詞が「誰であっても」に相当する任意の解釈となる PRO<sub>arb</sub> に関しても、ゼロであることがデフォルトであるため外項の抑制とは見なさない。任意の解釈となるゼ

[+STATE]素性の継承については、2章で仮定した統語論的操作である。(64)のように統語的述語名詞においては、回数表現が共起できず、内部の動詞句のイベント性が失われている。それを踏まえて、2章では、(65)のようにコンピュータが持つ[+STATE]素性がvPに継承される統語論的操作を仮定した。

- (63) a. 雨が2回降り続けた。  
 b. 部屋が3回散らかりすぎた。
- (64) a. \*雨が2回降りっぱなしだ。  
 b. \*部屋が3回散らかりすぎだ。

(65) [+STATE]素性の継承



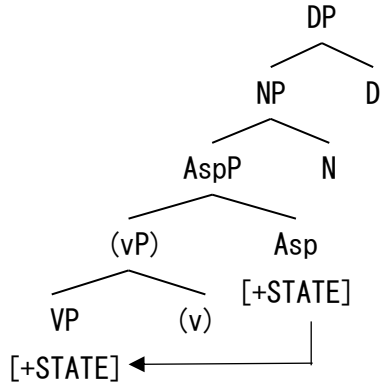
(62) ではこの操作が、形容詞的タ形や内項主語構造の「-すぎだ」に適用されている前提に基づいて、Tの不在による外項の抑制が起こった場合のみ、[+STATE]素性vPを通過してVPまで継承されるものと仮定している。すなわち、形容詞的タ形であれば、(66a)のように外項の抑制によってvPが[+STATE]素性の継承を阻害せず、VPに[+STATE]素性が継承されることになる。そして、VPに[+STATE]素性が継承される場合に、(66b)のように結果状態の焦点化が起こることになる。

口代名詞に関しては王(2008)を参照。

ii [PRO<sub>arb</sub> 煙草を吸っては]いけない。



(66) a 形容詞タ形における結果状態の焦点化

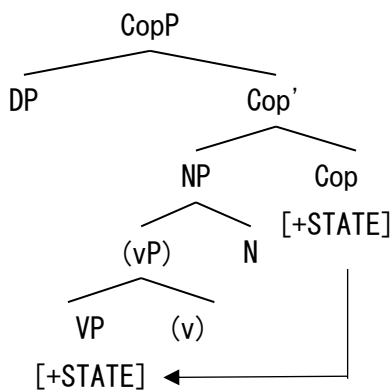


b.  $[[x \text{ ACT ON } y] \text{ CAUSE } [\text{BECOME } [\text{STATE } y \text{ BE } [\text{AT } [\text{BOILED } ]]]]]$

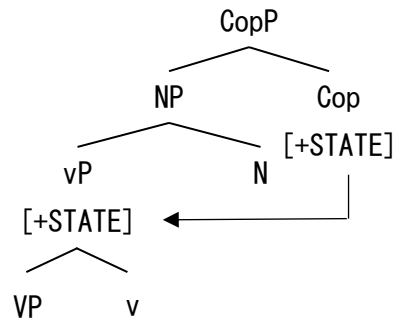
(66b) の通り、結果状態の焦点化は語彙概念構造の中でも下位事象に存在する STATE に適用される操作である。よって、動詞句の統語構造においてより低い位置である VP に対する [+STATE] 素性の継承を条件と仮定することは、それほど不自然な仮定ではない。

続いて、(67a) に内項主語構造における [+STATE] 素性の継承、(67b) に上昇構造における [+STATE] 素性の継承のメカニズムを示す。(67a) の内項主語構造では形容詞的タ形と同様に外項の抑制が起こるため、[+STATE] 素性は VP まで継承される。一方、(67b) の上昇構造では外項の抑制が起こらないため、[+STATE] 素性は vP に継承される。このような統語論的操作の結果として、内項主語構造においては結果状態の焦点化が起こる。一方、上昇構造においては結果状態の焦点化は起こらない。

(67) a. 内項主語構造



b. 上昇構造



(67) の通り上昇構造を取る「非対格自動詞+すぎだ」に関しても、[+STATE]素性の継承自体は起こっている。しかしながら、上昇構造において得られる状態性は、[+STATE]素性がvPに継承される段階で得られるものであり、[+STATE]素性がVPに継承される場合に起きる結果状態の焦点化とは異なっている。

5節では、形容詞タ形との共通点を踏まえて、統語構造と意味構造の関係を議論し、3章で議論した内項主語構造における外項の抑制が、由本(2012)が仮定する結果状態の焦点化の必要条件となっていると主張した。ここまで述語名詞の中でも「-すぎだ」に絞って議論を行ってきたが、6節においては述語名詞一般に拡張できるか検証を行う。6節の議論を通じて、4章の議論が「-すぎだ」以外の述語名詞にも適用できることを確認する。

## 6. 議論の拡張

ここまで、「-すぎだ」における対立を中心に議論を行い、「非対格自動詞+すぎだ」と「他動詞+すぎだ」における意味構造と統語構造の対立を示し、意味構造上の操作と統語構造が連動していることを示した。6節では、「-すぎだ」にみられる他動詞と非対格自動詞の対立が、それぞれの述語名詞においても観察できることを主張する。

### 6.1 意味構造における対立

4章の議論では、「非対格自動詞+すぎだ」においては結果状態の焦点化が起きるが、「他動詞+すぎだ」においては結果状態の焦点化が起らないという議論を行った。個々の述語名詞によって観察できる現象には差異があるが、「-すぎだ」以外の述語名詞においても、一貫して他動詞の場合に述語名詞の解釈が結果状態以外にかかるような解釈が排除される。

「-ばなしだ」は「-すぎだ」と異なる意味を持つ述語であるが、「-すぎだ」の頻度解釈に相当する反復的な意味解釈が許容されることがある。臼杵(2011)はこのような解釈を繰り返し読みとし、「次々と」や「次から次へと」のような副詞と共起する場合(68)のように反復的な意味解釈が得られると指摘している。

(68) 花壇の花が次々と枯れっぱなしだ。

(臼杵 2011 : 183)

臼杵(2011)が指摘する繰り返し読みは(69)~(71)のように、「非対格自動詞+ばなしだ」においては許容されるが、「他動詞+ばなしだ」においては排除される。

(69) a. 次から次へと本が倒れっぱなしだ。

- b. \*次から次へと本が倒しっぱなしだ。  
 (70) a. 次から次へと事故が起こりっぱなしだ。  
 b. \*次から次へと事故が起こりっぱなしだ。  
 (71) a. 次から次へと荷物が届きっぱなしだ。  
 b. \*次から次へと荷物が届けっぱなしだ。

ここでは、「-っぱなしだ」の語彙概念構造については詳細な議論を行わない。しかしながら、「-っぱなしだ」における繰り返し読みが「-すぎだ」における頻度解釈と同様に時空間項になんらかの操作を加えるものと仮定すると、「他動詞+っぱなしだ」において繰り返し読みが排除される事実を説明できる。すなわち、(72a)のように非対格自動詞の場合には結果状態の焦点化が起こらず時空間項 (e) を参照することができる一方で、(72b)のように他動詞の場合には結果状態の焦点化が起きるために時空間項 (e) が背景化され、時空間項が参照できず時空間項に対して意味論的な操作を適用することができなくなると考えられる<sup>6</sup>。

- (72) a.  $\lambda x\lambda e[\text{BECOME}[\text{STATE } y \text{ BE } [\text{AT } [z]]]]$   
 b.  $\lambda x\lambda e[[x \text{ ACT ON } y] \text{ CAUSE } [\text{BECOME}[\text{STATE } y \text{ BE AT } z]]]$

この分析は、「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」に関しても適用できる。「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」に関しても、(73)(75)(77)のように結果状態をあらわす解釈であれば非対格自動詞と他動詞いずれも許容されるが、(74)(76)(78)のようにイベントそのものが繰り返されるという頻度に関わる解釈では他動詞が不適格となる。

- (73) a. シャツが汚れまくりだ。  
 b. シャツが汚しまくりだ。  
 (74) a. 最近、事故が起こりまくりだ。

<sup>6</sup> 「-っぱなしだ」においては、以下のように結果状態というより進行中の事態についてあらわす内項主語構造が成立する事例も存在する。

i 音楽が流しっぱなしだ。

このような事例に関しては、結果状態 (STATE) の焦点化による分析だけでなく、過程をあらわす MOVE のような関数に関わる操作を仮定する分析があり得る (cf. 影山 2008)。いずれにせよ、内項主語構造においては、下位事象に関する意味論的操作が加わるものと考えられる。ほかに、以下のように放置をあらわす用法が存在し、これも内項主語構造を取ることが可能である (cf. 渡邊 2000, 中村 2009)。

ii 雑誌が読みっぱなしだ。

放置をあらわす用法に関しては、動詞の語彙概念構造における STATE を焦点化しているとは考えにくい、「そこに雑誌がある」という結果状態を外付けするような意味論的操作によって処理することができるかもしれない。

- b. \*最近、事故が起こしまくりだ。
- (75) a. このケーキは甘味が目立ち気味だ。  
b. このケーキは甘味が抑え気味だ。
- (76) a. 最近、水道が止まり気味だ。(水道が頻繁に止まる)  
b. \*最近、水道が止め気味だ。(水道が頻繁に止められる)
- (77) a. 部屋が散らかり放題だ。  
b. 部屋が散らかし放題だ。
- (78) a. 最近、事故が起こり放題だ。  
b. #最近、事故が起こし放題だ。

このように、他動詞において結果状態の焦点化が起こり、時空間項が関わる解釈が排除されるという事実は「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」においても観察できる。

「-かけだ」は頻度解釈に相当する解釈を持たないが、宮腰(2009)において指摘されている開始前読みという解釈の可否によって非対格自動詞と他動詞の対立を観察できる。前提として、変化の途中であるというような(79)の途中読みにおいては、「非対格自動詞+かけだ」も「他動詞+かけだ」も問題なく成立する。それに対して(80)~(82)のように変化が起こる前という開始前読みにおいて「他動詞+かけだ」が排除される。

- (79) a. チョコレートが溶けかけだ。(すこし溶けている)  
b. チョコレートが溶かしかけだ。(すこし溶かしている)
- (80) a. 火が消えかけだ。(まだ消えていない)  
b. \*火が消しかけだ。(まだ消していない)
- (81) a. 棚から本が落ちかけだ。(まだ落ちていない)  
b. \*棚から本が落としかけだ。(まだ落としていない)
- (82) a. あと一歩で事故が起こりかけだ。(まだ起きていない)  
b. \*あと一歩で事故が起こしかけだ。(まだ起こしていない)

特に(82)に関しては主語である「事故」が起こっていない以上、文が成立する時点で「事故」はまだ存在していない。このように、「-かけだ」の開始前解釈は、主語の結果状態というより、そのイベントが起こるか否かを問題にする意味解釈となっている。

この開始前読みに関しても、イベントが発生する直前であるという意味で、「-すぎだ」の頻度解釈や「-ばなしだ」の繰り返し読みと同様に時空間項が参照される必要があると仮定することができる。そして、この仮定に基づいて考えると、「-すぎだ」や「-ばなしだ」と同様に「-かけだ」における開始前読みの排除に関しても、結果状態の焦点化に

よって時空間項が背景化された結果と捉えることができる。

続いて、「-たてだ」においては時間をあらかず解釈の有無という形で非対格自動詞と他動詞の対立が確認できる。山田（2005）で指摘されているように、「-たてだ」は意味構造上に STATE を持つような作成動詞と状態変化動詞のみを取る。このため、山田（2005）は「-たて」そのものが語彙概念構造上の STATE を取りたてるという操作を持つものと分析している。しかしながら、「-たてだ」についても、主語の結果状態をあらかず解釈だけではなく、主語に変化が起こった時期をあらかず（83）のような時間解釈も存在する。そして、（83）のように非対格自動詞においては時間解釈が許容されるが、（84）のように他動詞においては当該の解釈が排除される。

- (83) a. 桜の花が開きたてのころに、太郎と次郎は出会った。  
 b. 雨が上がりたての午後に、太郎は散歩をした。  
 (cf. 花が咲き始めるころに、太郎と次郎は出会った。)
- (84) a. \*稲が収穫したてのころに、太郎と次郎は出会った。  
 b. \*カーテンが開けたての朝に、太郎は散歩をした。  
 (cf. 稲が収穫されるころに、太郎と次郎は出会った。)

「-たてだ」の時間解釈についても、時空間項が解釈に関わっているものと仮定すると、非対格自動詞と他動詞の対立を説明することができる。すなわち、「他動詞+たてだ」においては結果状態の焦点化によって、時空間項が背景化されるものと考えられる。

このように、「-ばなしだ」「-たてだ」「-すぎだ」「-かけだ」「-まくりだ」「-気味だ」の全ての述語名詞において、語彙概念構造において結果状態の焦点化という操作を仮定することで、意味解釈の対立に対して説明を与えることができる。この事実は、「-すぎだ」に関する議論が統語的述語名詞一般に拡張可能であることを示している。

続いて、6.2 節において、統語構造の観点からも非対格自動詞と他動詞の対立に関する議論が統語的述語名詞一般に適用できるか確認する。

## 6.2 統語構造における対立

4 章の議論では、「非対格自動詞+すぎだ」と「他動詞+すぎだ」において統語構造の対立が存在することを主張した。「他動詞+すぎだ」は内項主語構造を取るのに対し、「非対格自動詞+すぎだ」は「-すぎる」と同じ上昇構造となる。6.2 節では、統語構造における対立が他の述語名詞にも存在することを確認する。

ここでは、イディオム解釈によって、統語構造の対立を確認する。（85）～（90）では「拍車がかかる」「拍車をかける」、（91）～（96）では「手が入る」「手を入れる」というイディオムを用いてイディオム解釈の対立を確認している。

- (85) a. 口論に拍車がかかりっぱなしだ。  
 b. \*口論に拍車がかかけっぱなしだ。
- (86) a. この口論は（まだ）拍車がかかりたてだ。  
 b. \*この口論は（まだ）拍車がかけたてだ。
- (87) a. 口論に拍車がかかりかけた。  
 b. \*口論に拍車がかかけかけた。
- (88) a. 口論に拍車がかかりまくりだ。  
 b. \*口論に拍車がかかけまくりだ。
- (89) a. 口論に拍車がかかり気味だ。  
 b. \*口論に拍車がかかけ気味だ。
- (90) a. ?口論に拍車がかかり放題だ。  
 b. \*口論に拍車がかかけ放題だ。
- 
- (91) a. その論文には先生の手が入りっぱなしだ。  
 b. \*その論文には先生の手が入れっぱなしだ。
- (92) a. その論文は（まだ）先生の手が入りたてだ。  
 b. \*その論文は（まだ）先生の手が入れたてだ。
- (93) a. ?その論文には先生の手が入りかけた。  
 b. \*その論文には先生の手が入れかけた。
- (94) a. その論文には先生の手が入りまくりだ。  
 b. \*その論文には先生の手が入れまくりだ。
- (95) a. その論文には先生の手が入り気味だ。  
 b. \*その論文には先生の手が入れ気味だ。
- (96) a. その論文には先生の手が入り放題だ。  
 b. \*その論文には先生の手が入れ放題だ。

一部、語彙的に相性が悪いデータも存在するが、基本的に非対格自動詞においては許容されるイディオム解釈が、他動詞においては排除されている。4.2 節の議論で確認した通り、このデータは、非対格自動詞の述語名詞が上昇構造を持つという事実を示している。

このように、非対格自動詞と他動詞に関する対立は、「-すぎだ」に限定的なものではなく、「-っぱなしだ」「-かけた」「-たてだ」「-気味だ」「-放題だ」においても確認できる。この事実は、4 章の議論が述語名詞一般に拡張できることを示しているだけでなく、統語的述語名詞を同一の特徴を持つ形式として取り扱うことの妥当性を保証する事実でもある。

## 7. おわりに

4章では冒頭に以下のような課題を立てた。

- (Q1) 述語名詞「-すぎだ」において、他動詞と非対格自動詞の対立は、意味構造・統語構造の問題としてどのように捉えられるかを明らかにする。
- (Q2) 述語名詞「-すぎだ」において、意味構造と統語構造はどのように関係しているかを明らかにする。

(Q1) に対応する解答は (97)(98)、(Q2) に対応する解答は (99)(100) のようになる。更に4章では、(101) のように「-すぎだ」に関する議論が他の形式にも拡張できることを確認した。

(97) 述語名詞「-すぎだ」の意味構造において、「他動詞+すぎだ」の場合には結果状態の焦点化が起こり、「非対格自動詞+すぎだ」の場合には結果状態の焦点化が起こらない。その結果として、頻度解釈の可否が決定する。

(98) 述語名詞「-すぎだ」の統語構造において、「他動詞+すぎだ」の場合は内項主語構造となり、「非対格自動詞+すぎだ」の場合には上昇構造となる。その結果として、数量解釈の可否が決定する。

(99) 意味構造における結果状態の焦点化は、「他動詞+すぎだ」に限らず、形容詞タ形のようにTの欠如による外項の抑制と連動して起こる。

(100) 統語構造において述語名詞が持つ[+STATE]素性がVPに継承される場合、結果状態の焦点化が起こる。一方で、[+STATE]素性がvPまでしか継承されない場合、結果状態の焦点化が起こらない。

(101) 統語的述語名詞一般に、他動詞を取る場合は結果状態の焦点化によって時空間項に関わる解釈が排除される。また他動詞が内項主語構造を取るのに対し、非対格自動詞を取る述語名詞は上昇構造となる。

3章では統語的述語名詞に特有の補文構造である内項主語構造について議論を行ったが、4章では統語的述語名詞が内項主語構造だけでなく統語的複合動詞と共通する上昇構造となる事実を指摘した。また、従来の研究で指摘されていた結果状態の焦点化と内項主語構造が連動していることを指摘し、語彙概念構造上の意味論的な操作が起こる統語論的条件を明らかにした。

## 第5章 外項を主語とする述語名詞について

### 1. はじめに

3章と4章では、「ジュースが冷やしっぱなしだ」のように他動詞の目的語が主語としてふるまう事例や「ジュースが冷えすぎだ」のように非対格自動詞の目的語が主語としてふるまう事例、内項が主語となる事例を取り上げてきた。ここまでの議論では外項が主語となる事例を取り扱うことができなかったが、5章では(1)のように外項が主語となる事例を取り上げて議論を行う。

- (1) a. 太郎は本を置きっぱなしだ。  
b. 太郎はジュースを飲みすぎだ。

外項が主語となる事例に関しては、大きく分けて2つの論点が存在する。第一の論点は、他動詞が述語名詞をつくる時、(2a)(3a)のように外項が主語になる文と、(2b)(3b)のように内項が主語になる文の2種類の文が生成される要因に関する問題である。

- (2) a. 太郎は本を机に置きっぱなしだ。  
b. 本が机に置きっぱなしだ。  
(3) a. 太郎はジュースを冷やしすぎだ。  
b. ジュースが冷やしすぎだ。

また、4章では外項を主語とする述語名詞の統語構造について取り扱うことができていない。5章では、3章と4章に続いて統語論的観点から外項を主語とする述語名詞の構造について分析を行うことで、2種類の文が生成される要因についても明らかにする。

第二の論点は、外項が主語になる述語名詞における意味に関する問題である。由本(2012)によると、(1a)のように外項を主語とする「-すぎだ」は「-すぎる」とは異なり属性叙述をあらわす形式とされている。しかしながら、「-かけだ」や「-っぱなしだ」のように、外項が主語になるからといって、常に述語名詞が属性叙述をあらわすとは限らない。(4b,c)は明らかに太郎の属性をあらわす文ではなく、現在進行中の一時的状態をあらわしている。

- (4) a. 太郎は酒を飲みすぎだ。  
b. 太郎は服を脱ぎかけだ。  
c. 太郎はグラウンドを走りっぱなしだ。



由本 (2012) は「-すぎだ」が属性叙述をあらわすという観察について、名詞化に由来するものと分析しているが、他の述語名詞と共通する特徴ではなく、必ずしも名詞化が要因とは限らない。この論点に関しては、属性叙述をあらわす形式に関して構成的に分析する鈴木 (2017) を参照することで、外項を主語とする「-すぎだ」の意味解釈について分析を行う。その上で、外項を主語とする述語名詞全体の意味解釈が、それぞれどのようなメカニズムに基づいているのかを議論する。

以上、5章では外項を対象とする述語名詞を研究対象とし、外項を主語とする述語名詞の統語構造と意味解釈について議論を行っていく。5章の研究目的は以下の通りである。

- (Q1) 外項を主語とする述語名詞の統語構造を明らかにする。また、他動詞を取る述語名詞において、外項が主語となるパターンと内項が主語となるパターンの2種類が存在する事実について、統語的に説明を試みる。
- (Q2) 外項を主語とする述語名詞の意味解釈について、個別形式の特徴と述語名詞一般の特徴を明らかにし、名詞性と関係する意味解釈の範囲を明らかにする。

本論文では、3章では「-ばなしだ」、4章では「-すぎだ」のように特定の形式に着目して議論を行ってきた。5章においても、議論の都合上、まず「-すぎだ」に注目して議論を行う部分が存在する。しかしながら、特に (Q2) の論点に関しては、(4) のように複数の形式を対象とすることで得られる論点であり、統語的述語名詞という形式群を一括して取り扱うことに意義のある議論となっている。

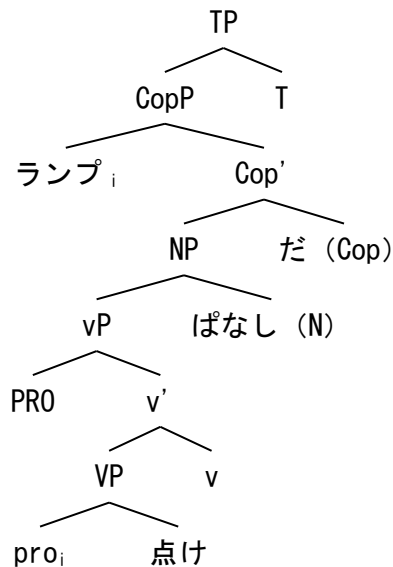
## 2. 研究の背景

2節では、本章で議論を行う前提として、外項を主語とする述語名詞について議論を行うために、3章と4章までの議論について振り返る。

### 2.1 述語名詞の統語構造

まず、3章で述べた内項主語構造を振り返る。3章では、(5) のような統語構造を提示した。

(5) ランプが点けばなしだ。



(5) は、動詞句を包摂する名詞述語文として「他動詞+ばなしだ」を捉える構造であり、名詞述語文が要求する主語と動詞句の内項が同一指示関係を結んでいる。この構造は、以下のような根拠に基づいている。

まず、受動文においては (6) のように「させ」に埋め込まれた他動詞の内項が主語となることができないが、「ばなしだ」の場合は (7) のように「-させる」や「-もらう」に埋め込まれた他動詞の内項が主語となり得る。

- (6) a. ビルがジョンに[子供を託児所へ預け]させた。  
 b. ジョンがビルに子供を託児所へ預けさせられた。  
 c. \*子供がビルに (よって) ジョンに託児所へ預けさせられた。

(井上 1976 : 89)

- (7) a. ランプが (部下に命じて) 点けさせっぱなしだった。  
 b. 門が (家来に命じて) 開けさせっぱなしだった。  
 c. 荷物が運んでもらっぱなしだった。

つまり、受動文に存在するような主語への上昇に対する制約が、内項主語構造には存在しない。3章ではこの観察に基づいて、内項が動詞句に痕跡 (trace) を残して上昇するという受動文と同様の構造ではなく、CopP に基底生成された (名詞述語文が要求した) 主語が内項と同一指示関係を持つという構造を仮定している。

また、動詞句に後接する「-ばなしだ」と TP に後接する「-ままだ」は、内項が主語となる現象を共有している。しかしながら、外項が生起できない現象は、(8) のように「-

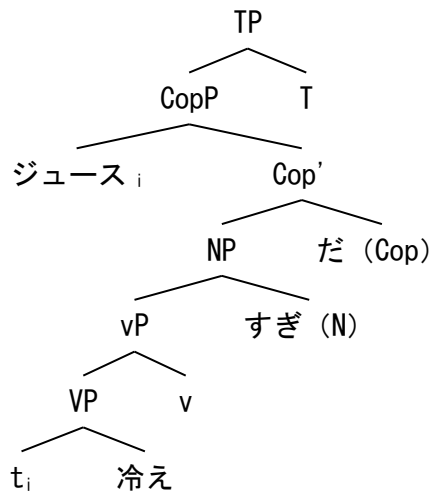
ばなしだ」に限られる。

- (8) a. \*ランプが<sub>[vp 太郎が点けっ]</sub>ばなしだ。  
 b. ランプが<sub>[TP (きのう) 太郎が点けた]</sub>ままだ。

3章では、「-ばなし」が包摂する動詞句において、主格を付与する T が欠如しているため外項が生起できなくなることを主張した。この観察も、内項の主語化と外項の削除を別個に扱い、「-ばなしだ」を名詞述語文と捉える (5) の構造を支持している。

続いて、非対格自動詞を取る述語名詞の統語構造を振り返る。4章では、「非対格自動詞+すぎだ」の統語構造について、(9) のような構造を主張した。

- (9) ジュースが冷えすぎだ。



(9) は、動詞句を包摂する名詞述語文という点では (6) と同様の構造と言えるが、動詞句の主語が名詞述語文の主語位置に繰り上がっている点で (6) の内項主語構造とは異なった統語構造となっている。

この統語構造は、(10)(11) のようにイディオム解釈によって検証することが可能である<sup>1</sup>。

- (10) a. 田中先生によって論文に手が入りすぎている。  
 b. 田中先生によって論文に手が入りすぎだ。

<sup>1</sup> なお、このテストに用いているイディオムは、「論文に手が入れられている」のように受動文でもイディオム解釈が可能な動詞句を用いている (藤巻 2007)。よって、目的語が主格で標示されているためにイディオム解釈ができないわけではなく、統語構造に由来するものと考えられる。

- c. #田中先生によって論文に手が入れすぎだ。
- (11) a. 先生の発言によって議論に拍車がかかりすぎている。
- b. 先生の発言によって議論に拍車がかかりすぎだ。
- c. #先生の発言によって議論に拍車がかけすぎだ。

「非対格自動詞+すぎだ」においてはイディオム解釈が許容されるが、「他動詞+すぎだ」においてはイディオム解釈が許容されない。すなわち、「非対格自動詞+すぎだ」においては内項と動詞が主述の関係を結んでいる一方で、「他動詞+すぎだ」においては内項と動詞が主述の関係を結ぶことができていない。この事実は、動詞句の項がそのまま主語となる (10) の上昇構造が正しいことを示している。

ここまでの議論は、内項を主語とする「-すぎだ」に2種類の構造が存在することを示している。しかしながら、外項を主語とする「-すぎだ」が全体の中でどのように取り扱われるか不明瞭であり、更に他動詞を取る述語名詞において (12) のような2通りの文が生成される事実も説明できない。

- (12) a. 太郎がジュースを冷やしすぎだ。
- b. ジュースが冷やしすぎだ。

このように外項を主語とする事例を取り扱うことができない限り、述語名詞の統語構造を体系的に説明することにはならない。よって、本章では「他動詞+すぎだ」を含めて外項を主語とする述語名詞の統語構造を明らかにすることを目的とする。

## 2.2 述語名詞の意味解釈

また、4章の議論においては、「非対格自動詞+すぎだ」と内項を主語とする「他動詞+すぎだ」を取り上げ、意味解釈に関する議論を行った。2.2節では、内項を主語とする述語名詞における意味解釈について概観するとともに、外項を主語とする述語名詞に関する由本 (2012) の分析を取り上げ、5章の論点を確認する。

内項を主語とする述語名詞においては、意味解釈に関する対立がみられる。(13) のように、「非対格自動詞+すぎだ」においては頻度が過剰である解釈が許容されるが、「他動詞+すぎだ」においては頻度や数量が過剰である解釈が排除されることになる。

- (13) a. 最近、宿舎の水道が止まりすぎだ。
- b. \*最近、宿舎の水道が止めすぎだ。

4章の議論においては、由本 (2012) で仮定されている結果状態の焦点化という操作が、「非対格自動詞+すぎだ」においては適用されず、「他動詞+すぎだ」においては適用さ

れるため、「他動詞+すぎだ」においては結果状態と関わらない頻度を過剰のターゲットとする解釈が排除されるものと主張した。

- (14) a. 水道が止まりすぎだ。  
 b.  $\lambda x \text{TOO} \lambda e [\text{BECOME}[\text{STATE } y \text{ BE } [\text{AT } [\text{STOP}]]]]]$
- (15) a. \*水道が止めすぎだ。  
 b. \* $\lambda x \text{TOO} \lambda e [[x \text{ ACT ON } y] \text{CAUSE}$   
 $[\text{BECOME}[\text{STATE } y \text{ BE } [\text{AT } [\text{STOP}]]]]]$

外項を主語とする「他動詞+すぎだ」に関しては、内項を主語とする「他動詞+すぎだ」とは異なり、(16)のように頻度解釈が許容される。この事実は、外項を主語とする場合は、内項主語構造における結果状態の焦点化という操作が行われないことを示しているものと考えられる。

- (16) a. 太郎は水道を止めすぎだ。  
 b. 太郎は同じ本を読みすぎだ。

しかしながら、結果状態の焦点化とは異なった論点において、外項を主語とする「-すぎだ」は内項と異なった意味的特徴を持っているという指摘が存在する。由本(2012)は(17)(18)のように外項を主語とする「-すぎだ」に関して主語の属性をあらゆる属性叙述形式であると分析しており、外項を叙述対称とする「-すぎだ」について「行為の行き過ぎが慣習化・日常化しており、そのことが主語の性状を表すと解釈されている(由本2012:132)」と説明している。

- (17) a. 髪を伸ばしすぎの男子学生、ビールを冷やしすぎの店  
 b. ??絵を描きすぎの画家、?製品を作りすぎの企業  
 c. テレビを見すぎの子供、漫画を読みすぎの子供  
 d. ボールを飛ばしすぎの選手、??電話をかけすぎのセールスマン
- (18) 働きすぎの人、遊びすぎの子供、運動しすぎの人、  
 ?化粧しすぎの女、車に乗りすぎの人、親に頼りすぎの子供  
 甘えすぎの女

(由本2012:131-133)

由本(2012)の主張を支える事実として、(17b)の「絵を描きすぎの画家」に関する興味深い議論がある。由本(2012)は「絵を描きすぎの画家」に関するインフォーマント・チェックにおける返答について「たとえばインフォーマント・チェックによると、

「画家が絵をあまりにたくさん描いたため評価が下がってしまった」といった状況ならば容認しやすいという返答があった（由本 2012 : 132）」と述べており、これは「-すぎだ」が属性叙述をあらわすことを支持する返答と言える。

また、由本（2012）は特定の場面について描写した「食べすぎの人」のような文が許容されることを認めている。しかしながら、この場合の「食べすぎの」は食べ過ぎた人を他の人から区別し、その場面における履歴属性を付与する用法として、由本の主張を裏付けるデータであると述べられている。

- (19) a. (ケーキバイキングからの帰り際に)  
お菓子を {食べ過ぎた/?食べすぎの} 人はこの菓を飲みなさい。  
b. {遊び過ぎた/\*遊びすぎの} 子供が疲れて寝てしまった。  
c. テレビを {見過ぎた/\*見すぎの} 子供が目を赤くしている。  
(由本 2012 : 138)

由本（2012）は、外項を主語とする場合の「-すぎだ」の統語素性と意味機能を (20) のように規定している。

- (20) 「-すぎ」: 統語素性 [+N] VP\_ <Ev^(…)>  
意味機能 VPの主要部Vが表す事象内の段階性のある要素に過剰の意味を付与する機能  
(由本 2012 : 139)

<Ev^(…)>は影山（2009）で仮定されている「出来事項の抑制」という操作である。影山（2009）では、属性叙述が出来事項の抑制によって成立していることを主張しており、由本（2012）は影山（2009）の枠組みに基づいて外項を主語とする「-すぎだ」も出来事項の抑制という統語素性を持っていると主張している。

由本（2012）の議論はあくまで「-すぎだ」に関する議論であるが、(20)の定式化においては、出来事項の抑制と名詞化という統語論的な性質を関連づけている。よって、(20)の定式化が正しいとすれば、出来事項の抑制は名詞化に伴う統語的機能と考えられる。しかしながら、属性叙述と見なし得る述語名詞は一部に限られ、例えば(21)の「-かけだ」や「-ばなしだ」は眼前の状態という一時的状態をあらわしているように思われる。

- (21) a. 太郎は酒を飲みすぎだ。  
b. 太郎は服を脱ぎかけだ。  
c. 太郎はグラウンドを走りっぱなしだ。

このような事例を踏まえると、名詞化と属性叙述の解釈は一対一で対応しているわけではなく、個々の語彙の意味と関係している可能性が想定できる。つまり、名詞化によって属性叙述という意味解釈を捉えようとする由本(2012)の枠組みでは、述語名詞一般の性質を取り扱うことが難しい。

よって、5章では外項を主語とする述語名詞の意味解釈についても議論を行う。「-すぎだ」の意味解釈が持つ固有の特徴と述語名詞一般の意味解釈の特徴を切り分けることで、名詞化(名詞性)と意味論的性質の関連を明らかにする。

### 3. 外項を取る述語名詞の統語構造

まず、3節では、外項を取る述語名詞の統語構造に関して議論を行う。3.1節では、「-すぎだ」の統語構造について取り扱う阿久澤(2019)を取り上げ、その現象観察を検討していく形で外項を主語とする述語名詞の統語構造について検討していく。その後、3.1節で議論した統語構造を踏まえて、3.2節では述語名詞が他動詞を取る場合に生成される2種類の文について議論を行う。そして、3.3節において、主に「-すぎだ」によって検討した統語構造が述語名詞一般に適用できることを確認する。

#### 3.1 述語名詞「-すぎだ」の統語構造

外項を主語とする述語名詞に関しては、「-すぎだ」を取り扱った阿久澤(2019)の議論が存在する。よって、3.1節では、「-すぎだ」に関する阿久澤(2019)の議論を検証する形で、外項を主語とする「-すぎだ」の統語構造について議論を行っていく。阿久澤(2019)は、(22)のように上昇構造となる複合動詞「-すぎる」とは異なり外項を主語とする述語名詞「-すぎだ」がコントロール構造であるということを主張している。

- (22) a. [太郎<sub>i</sub>が [t<sub>i</sub>寿司を食べ] すぎた]  
 b. [太郎<sub>i</sub>が [φ<sub>i</sub>寿司を食べ] すぎだ]

(阿久澤 2019 : 43)

阿久澤(2019)は、(23)(24)のように、イディオム解釈と数量詞の作用域に関する現象を論拠に外項を主語とする「-すぎだ」がコントロール構造であると主張している。

[イディオム解釈]

- (23) a. 閑古鳥が泣きすぎた。  
 b. #閑古鳥が泣きすぎだ。

[数量詞の作用域]

- (24) a. 全ての学生が単位を落としすぎた。

(全て>すぎる, 全てすぎだ)

- b. 全ての学生が単位を落としすぎだ。

(全て>すぎだ, \*全て<すぎだ)

(阿久澤 2019 : 41)

イディオム解釈に関しては、前述の上昇構造の「-すぎる」であれば許容されるが、阿久澤の観察においては外項を主語とする「-すぎだ」についてイディオム解釈が排除される。この観察に基づいて、「-すぎだ」がコントロール構造を持つと主張されている。

第二に、数量詞の作用域に関しては、上昇構造であれば「すぎ」より低い位置に数量詞が基底生成されるため、数量詞の解釈が固定されないことが予測される。一方で、コントロール構造であれば数量詞が「すぎ」より高い位置に基底生成されるため、数量詞が「すぎ」より小さい解釈が排除される。阿久澤 (2019) の観察では、「-すぎだ」において数量詞が「すぎ」より小さい解釈が排除されるため、コントロール構造ということになる。

しかしながら、この現象観察にはいくつか問題がある。まず、イディオム解釈に関しては「この商店街は」のように叙述対象となる要素を補うことで許容度が上がる。(25)の例文は、外項を主語とする「-すぎだ」においてイディオム解釈が構造的に排除されるわけではないことを示している。

- (25) この商店街は、閑古鳥が鳴きすぎだ。(この商店街は客が来なさすぎだ)

また、「閑古鳥が鳴く」に関しては外項のみが生起する非能格自動詞であるが、「とんびが鷹を生む」のような他動詞を含むイディオムにおいても、同様の議論が可能である<sup>2</sup>。

(26) の文においては、「あの道場の師匠はそれほどすごい人ではないが、その師匠が優秀な弟子を多数輩出している」というように「とんびが鷹を生む」のイディオム解釈が許容され、「最近のスポーツでは優秀な選手が道具にこだわりすぎだ」というように「弘法が筆を選ぶ」のイディオム解釈が許容される。

- (26) a. あの道場ではとんびが鷹を生みすぎだ。

<sup>2</sup> 「とんびが鷹を生む」や「弘法が筆を選ぶ」は慣用句というよりことわざに近いものであるという意見もあり得る。しかしながら、コントロール構造において字義通りではない特殊な解釈が排除されるという点に関しては、「閑古鳥が鳴く」と共通しているため、「とんびが鷹を生む」や「弘法が筆を選ぶ」を上昇構造とコントロール構造のテストとして用いることは可能であると考えられる。

i a. その道場では、とんびが鷹を生み続けた。(上昇)

b. #その道場では、とんびが鷹を生み終えた。(コントロール)

なお、「弘法が筆を選ぶ」に関しては、Nishigauchi (1993) でも用いられているデータである。



- b. 最近のスポーツは弘法が筆を選びすぎだ。

「-すぎだ」には (27) のように内項が対格ではなく属格を取る特別な「-すぎだ」が存在する。本論文の範囲では属格を取る「-すぎだ」について詳細な議論は行わないが、現象観察としてイディオム解釈の容認可能性に関しては、属格を取る「-すぎだ」と比較するとわかりやすい。内項が属格であられる「-すぎだ」は対格であられる「-すぎだ」と異なり、対格を付与する vP を持っていないものと考えられるが、この場合、(28) のようにイディオム解釈を容認することができない。

- (27) a. 太郎は酒の飲みすぎだ。  
 b. 太郎は本の読みすぎだ。  
 (28) a. #あの道場ではとんびが鷹の生みすぎだ。  
 b. #最近のスポーツは弘法が筆の選びすぎだ。

(28) では、「あの道場の師匠はそれほどすごい人ではないが、その師匠が優秀な弟子を多数輩出している」や「最近のスポーツでは優秀な選手が道具にこだわりすぎだ」といったイディオム解釈は不可能である。属格が生起する「-すぎだ」にそのものに関しては議論の余地があるが、この特殊な「-すぎだ」と比べた時に、通常の「-すぎだ」においてはイディオム解釈が問題なく許容できることがわかる。

続いて、数量詞の作用域の問題であるが、曖昧性のある文ではなく、数量詞が「すぎ」より小さい解釈に固定するような文において、通常の「-すぎだ」においては、数量詞が「すぎ」より小さい解釈が完全に排除されるわけではないことがわかる。以下の文は、(29a) が「すべての学生がそれぞれいろんな授業で単位を落とした」という「すぎ」が数量詞より広い解釈に固定されており、(29b) が「佐藤先生の授業ですべての学生が単位を落とすということが起こりすぎだ」という数量詞が「すぎ」より小さい解釈に文脈が限定された文であるが、いずれも非文とまでは言えない。この事実を踏まえると、阿久澤の観察はあくまでどちらの解釈が取りやすいかという程度のものであり、数量詞が「すぎ」より小さい解釈が排除されるわけではないと考えられる。

- (29) a. あの学科の一年生はすべての学生が単位を落としすぎだ。  
 (全て>すぎだ)  
 b. 佐藤先生の授業ではここ数年、全ての学生が単位を落としすぎだ。  
 (?全て<すぎだ)

この事実観察も、内項が属格を取る特殊な「-すぎだ」と比較することで明確になる。属格を取る「-すぎだ」においては、(30b) のように数量詞が「すぎ」より小さい解釈

が排除される。

- (30) a. あの学科の一年生はすべての学生が単位の落としすぎだ。  
 (全て>すぎだ)
- b. \*佐藤先生の授業ではここ数年、全ての学生が単位の落としすぎだ。  
 (\*全て<すぎだ)

このように、阿久澤 (2019) の現象観察については、特に内項に属格が生起する特殊な「-すぎだ」と比べると、通常の「-すぎだ」が上昇構造であるということが明らかになる。つまり、外項を主語とする「他動詞/非能格自動詞+すぎだ」は「非対格自動詞+すぎだ」と統語的に同様にふるまっている。続いて、3.2 節では、この議論を踏まえて「他動詞+すぎだ」が2種類の文を生成するメカニズムについて議論していく。

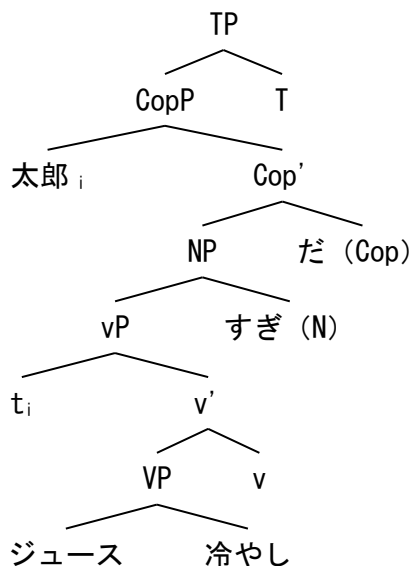
### 3.2 「他動詞+すぎだ」のメカニズム

3.1 節では、阿久澤 (2019) の議論を検証する形で、外項を取る「-すぎだ」であっても対格で内項を表示する通常のパターンであれば、上昇構造を取ることを指摘した。この結論に従えば、「他動詞+すぎだ」が内項主語と外項主語の2通りの文を生成する事実も、問題なく説明することができる。

まず、「非対格自動詞+すぎだ」に関する議論から、上昇構造の「-すぎだ」が存在することは既に明らかになっている。4.1 節の議論から、「他動詞+すぎだ」においても、外項が主語となる場合には「非対格自動詞+すぎだ」と同様の構造を取ると考えられる。

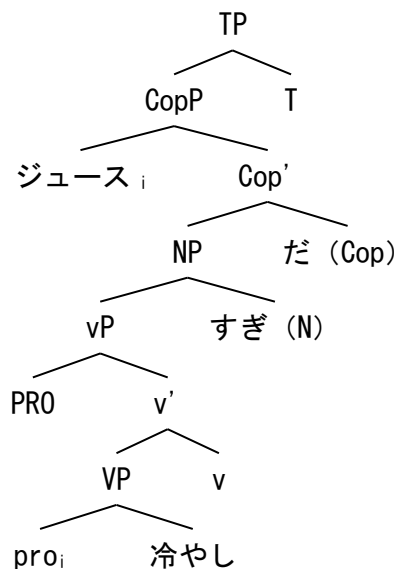
(31) に外項を主語とする「他動詞+すぎだ」の構造を示す。

(31) 太郎がジュースを冷やしすぎだ。



そして、内項が主語となる場合には、3章で議論を行った内項主語構造を取ることになる。(32) に内項が主語となる「他動詞+すぎだ」の構造を示す。

(32) ジュースが冷やしすぎだ。



すなわち、他動詞が他の動詞と同様の上昇構造を取る場合には外項が主語となり、内項主語構造という特殊な構造を取る場合には内項が主語となることになる。このように、

同じ「他動詞+すぎだ」から2種類の文が生成される事実は、統語構造の違いによって説明できる。述語名詞が2種類の統語構造を持っているため、他動詞と「すぎだ」という同じ素材から2種類の文が生成されることになる。

「-すぎだ」には上昇構造と内項主語構造が存在し、他動詞を取る場合には上昇構造であれば外項主語、内項主語構造であれば内項主語となることを確認した。このように、外項を主語とする「-すぎだ」が上昇構造であるという主張は、「他動詞+すぎだ」の分布についても正しく予測することができる。

ここで、阿久澤（2019）の議論が正しいと仮定した場合に、外項を取る「-すぎだ」がコントロール構造であると、動詞の分布を正しく予測できないことも指摘しておく。3章と4章の議論を踏まえた上で、外項を取る「-すぎだ」がコントロール構造であるとすると、動詞の分布と「-すぎだ」の関係は表1のようになる。

表1 4章と阿久澤（2019）の議論が正しいと仮定した場合の共起関係

	上昇構造	内項主語構造	コントロール構造
他動詞	×	○	○
非能格自動詞	×	×	○
非対格自動詞	○	○	×

表1では、他動詞と非能格自動詞が上昇構造の「-すぎだ」と共起できないのかということが説明できない。また「-すぎだ」の中に3種類の構造があるにも拘わらず、他動詞の「-すぎだ」は2種類の文を生成することになる。動詞と統語構造の間に意味制約が存在するにしても、統語的複合動詞の上昇構造においては存在しない制約が述語名詞において存在する理由を説明する必要が生じる。

一方、外項を主語とする「-すぎだ」が上昇構造であると仮定すると、動詞と統語構造の分布は表2のようにまとめることができる。

表2 述語名詞における動詞の種類と統語構造の関係

	上昇構造	内項主語構造	コントロール構造
他動詞	○ (外項主語)	○ (内項主語)	×
非能格自動詞	○	×	×
非対格自動詞	○	×	×

表2では、上昇構造がすべての動詞と共起可能であることになり、上昇構造に関して動詞と統語構造の共起関係の問題が解消されている。内項主語構造については目的語となる内項が主語で生起するという構造であるため、内項が存在しない非能格自動詞とは無

関係であり、内項がもともと主語である非対格自動詞とも関係がない。

このように、阿久澤 (2019) の主張を採用すると、「-すぎだ」を体系的に取り扱おうとしたとき動詞と統語構造の共起関係に関する問題が生じる。一方で、本章の主張は動詞と統語構造の共起関係に関する問題が解消され、統語的述語名詞は原則的に上昇構造を取るという形で述語名詞一般に関する体系的な取り扱いが可能となる。

### 3.3 議論の拡張

ここまでの議論は、「-すぎだ」に限らず、他の形式についても適用することができる。

3.3 節では、3 節の議論をまとめるとともに、議論の拡張を行う。

まず、イディオム解釈に関してだが、(33)(34) のように「-ばなしだ」「-かけだ」「-まくりだ」において「-すぎだ」と同様にイディオム解釈が可能となる。「-たてだ」に関しては「閑古鳥が鳴く」と共起できず、「-気味だ」に関しては「とんびが鷹を生む」と共起できないが、それぞれもう一つのイディオム解釈は排除されないため、イディオム解釈の排除ではなく語彙的な制約に由来するものと思われる。また、「-放題だ」に関しては2章で確認した通り既に起きた事態をあらわす用例にするため、文脈を整えている。

- (33) a. この商店街は、先月から閑古鳥が鳴きっぱなしだ。  
 b. \*この商店街は、閑古鳥が鳴きたてだ。  
 c. この商店街は、そろそろ閑古鳥が鳴きかけだ。  
 d. この商店街は、閑古鳥が鳴きまくりだ。  
 e. この商店街は、閑古鳥が鳴き気味だ。  
 f. この商店街は、閑古鳥が鳴き放題だった。
- (34) a. あの道場では、とんびが鷹を生みっぱなしだ。  
 b. あの道場では、とんびが鷹を生みたてだ。  
 c. あの道場では、とんびが鷹を生みかけだ。  
 d. あの道場では、とんびが鷹を生みまくりだ。  
 e. \*あの道場では、とんびが鷹を生み気味だ。  
 f. あの道場では、とんびが鷹を生み放題だった。

また岸本 (2005) で述べられている通り、コントロール構造においては有生性の制約が存在する<sup>3</sup>。(35) のように外項を主語とする「-すぎだ」の主語には無生物が生起可能で

<sup>3</sup> 阿久澤 (2019) でも、「-すぎだ」が無生物主語を取る事実に言及しており、「-すぎだ」が外項に属性主を要求するため、コントロール構造でありながら無生物主語が許容されると述べている。

i 雨が降りすぎだ。(阿久澤 2019 : 41)  
 本章の議論において外項を取る「-すぎだ」は上昇構造であるため、この議論は成立しない。

あり、これも「-すぎだ」が上昇構造であることを示している。

- (35) a. あの遊園地のアトラクションは事故を起こしすぎだ。  
 b. あのベストセラーは話題を呼びすぎだ。

無生物主語が生起する文に関しても、(36) の通り「-ばなしだ」「-たてだ」「-かけだ」「-まくりだ」「-気味だ」「-放題だ」において同様に許容される。

- (36) a. 大雪が電車を止めっぱなしだ。  
 b. その小説は芥川賞を受賞したてだ。  
 c. 波がもう家を飲み込みかけた。  
 d. 噂が噂を呼びまくりだ。  
 e. 雲が月を隠し気味だ。  
 f. 噂が噂を呼び放題だった。

このように、外項を主語とする述語名詞が上昇構造を取るとするのは、「-すぎだ」に限定された議論ではなく、述語名詞一般に拡張可能な議論である。

#### 4. 外項を主語とする述語名詞の意味解釈

3節では外項を主語とする述語名詞の統語構造について議論を行ってきたが、4節では外項を主語とする述語名詞の意味解釈について議論を行っていく。

ここでもう一度、由本(2012)の議論を確認する。由本(2012)においては外項を主語とする「-すぎだ」が主語の性質をあらわす属性叙述形式であると分析しており、外項を叙述対称とする「-すぎだ」に関して、「行為の行き過ぎが慣習化・日常化しており、そのことが主語の性状を表すと解釈されている(由本2012:132)」と説明している。

しかしながら、内項主語構造に関しては、無生物主語のコントロールのように見なせる側面もあり、興味深い。なお、内項主語構造はii bのように内項が明示的に出現可能であるため、項が明示的に出現できないPROが補文に生起するコントロールとは異なった側面も持っている。

- ii a. 自転車<sub>i</sub>が[<sub>vp</sub> pro<sub>i</sub> 折り畳み]っぱなしだ。  
 b. 自転車がその後輪を折り畳みっぱなしだ。

なお、本論文における非能格自動詞と非対格自動詞を区別するテストとしては、岸本(2005)で提示されている「たくさん」の解釈に基づくテストを採用している。非対格自動詞であれば「たくさん」と共起した際に主語の数量をあらわす解釈を取ることができる。主語が「雨」の場合には「たくさん」が主語の数量を示しているのか出来事の回数を示しているのかわかりにくい、主語を「槍」に変えると明確に主語の数量をあらわす解釈を取ることが可能である。

- iii 槍がたくさん降ってきた。(槍の数量がたくさん)  
 このため、本論文の範囲では「降る」の主語は内項であると見なされる。

- (37) a. 髪を伸ばしすぎの男子学生、ビールを冷やしすぎの店  
 b. ??絵を描きすぎの画家、?製品を作りすぎの企業  
 c. テレビを見すぎの子供、漫画を読みすぎの子供  
 d. ボールを飛ばしすぎの選手、??電話をかけすぎのセールスマン
- (38) 働きすぎの人、遊びすぎの子供、運動しすぎの人、  
 ?化粧しすぎの女、車に乗りすぎの人、親に頼りすぎの子供  
 甘えすぎの女

(由本 2012 : 131-133)

また3節で取り上げた阿久澤 (2019) においても、2種類の文法的テストを踏まえて「-すぎだ」が属性をあらわす形式であることを述べている。阿久澤 (2019) の観察によると、「-すぎだ」は (39) のように「昨日」のような時間副詞と共起することができないため、属性叙述と考えられる。また、属性叙述文では主語の数量詞遊離ができない (三原 2004) が、「-すぎだ」においても (40) のように主語の数量詞遊離が不可能である。

- (39) a. 昨日太郎が寿司を食べすぎた。  
 b. \*昨日太郎が寿司を食べすぎだった。
- (40) a. 学生が三人寿司を食べすぎた。  
 b. \*学生が三人寿司を食べすぎだった。

(阿久澤 2019 : 40)

この2つの観察から、阿久澤 (2019) も由本 (2012) の通りに「-すぎだ」が属性叙述の形式であると述べている。

4節では、属性叙述に対する構成的なアプローチを行う鈴木 (2017) の研究を参考にして、「-すぎだ」の意味解釈に関して検討を行う。

#### 4.1 習慣文と ILP/SLP

4.1節では、属性叙述に対する構成的なアプローチとして、鈴木 (2017) の議論を概観する。鈴木 (2017) では (41) のように、テイル形とル形が一見近い意味を示す習慣文を取り上げることで、属性叙述の意味解釈のメカニズムについて議論を行っている。

- (41) a. 日本人は毎日お米を食べている。  
 b. 日本人は毎日お米を食べる。

(鈴木 2017 : 90)

鈴木 (2017) は「本章で扱ったル形習慣文とテイル形習慣文は、どちらも主語に対する何らかの属性を述べるものである点では共通しており、益岡 (1987) の定義からすれば、いずれも属性叙述文と見なされるものである。(鈴木 2017 : 119)」としながら、その習慣という意味解釈のメカニズムの違いに基づいて、ル形習慣文とテイル形習慣文が異なった性質を持つと主張している。

前提として、Kratzer (1995) 等で取り上げられている述語の分類である *stage-level predicate* (SLP) と *individual-level predicate* (ILP) の違いを紹介する。SLP は日本語として訳すと場面レベル述語となり、一時的状態や活動といった意味をあらわす述語を指している。一方、ILP は日本語として訳すと個体レベル述語となり、個体が持つ恒常的状态をあらわす述語を指している。なお、SLP と ILP はあくまで述語の性質であるため、SLP が文全体として属性叙述形式となっていることもあり得ることになる。

鈴木 (2017) によると、日本語においては、SLP と ILP を主語に対する数量詞遊離によって区別することができる<sup>4</sup>。(42)(43) のように、SLP においては数量詞遊離が可能だが、ILP においては数量詞遊離が不可能である。

- (42)a. 3人の学生が裸足だ。[SLP]  
 b. 学生が3人裸足だ。  
 (43)a. 3人の学生が正直者だ。[ILP]  
 b. \*学生が3人正直者だ。

(鈴木 2017 : 57)

なお、筆者の内省では主語の数量詞遊離自体は動詞述語文の方が容認しやすい。しかしながら、名詞述語文同士を比較した際に SLP と ILP には差がみられるため、テスト自体に問題はない。

この数量詞遊離のテストを適用することで、ル形習慣文とテイル形習慣文の性質の違いを明らかにすることができる。(44) のように、ル形習慣文は数量詞遊離が不可能であり ILP として判断されるのに対し、テイル形習慣文は数量詞遊離が可能であり SLP として判断される。

- (44)a.\*日本人が3人毎日お米を食べる。  
 (cf. 3人の日本人が毎日お米を食べる。)  
 b.日本人が3人毎日お米を食べている。

(鈴木 2017 : 101)

<sup>4</sup> 恒常的状态において数量詞遊離が不可能である事実については、三原 (2004) 等を参照。鈴木 (2017) では数量詞遊離が不可能となる現象と主語の性質、述語の性質の関係について広く整理を行っている。



また、ル形習慣文とテイル形習慣文においては、期間の指定に対しても対立がみられる。(45)のようにテイル形においては「一昨年から」のように期間を指定することが可能であるが、ル形においては期間を指定することができない。この事実も、テイル形習慣文が恒常的状态をあらわす ILP ではなく、一時的状態をあらわす SLP である可能性を示している。

(45) 私は一昨年から毎朝、公園を 走っています/\*走ります。

(野田 2011 : 206)

このようにル形は ILP とテイル形は SLP と判断されるが、この事実は習慣の読みと「毎日」のような頻度副詞の関係からも裏付けられる。(46)のように、ル形の場合には頻度副詞を伴わなくても習慣的な解釈が得られるのに対し、テイル形の場合には頻度副詞を伴う場合のみ習慣的な解釈が得られる。

(46)a. 日本人はお米を食べる。

b. 日本人はお米を食べている。

(鈴木 2017 : 103)

すなわち、ル形習慣文においてはル形を取る述部自体が習慣（恒常的状态）をあらわす ILP としてふるまうが、テイル形習慣文においてはテイル形を取る述部はあくまで反復をあらわす SLP としてふるまっており、頻度副詞の貢献によって結果的に属性叙述としての解釈が可能になる。

このように、属性叙述のように解釈される文であっても、どのようなメカニズムで属性叙述形式を形成するかには差異がある。由本 (2012) は名詞化によって「-すぎだ」に対して属性叙述の読みが生まれていると主張しているが、その解釈のメカニズムに関しては検討の余地がある。

#### 4.2 外項を主語とする「-すぎだ」の意味解釈

4.2 節では、外項を主語とする「-すぎだ」の意味解釈について由本 (2012) と阿久澤 (2019) の再検討を行っていく。まず、事実観察の取り扱いについて述べる。筆者の内省によると (47)(48) の通り主語の数量詞遊離は基本的に動詞文の方が容認しやすく、名詞文の方が容認しにくい。

(47)a. 子供が3人歩いている。

b. ?子供が3人裸足だ。

- (48)a. ?子供が3人裸足だ。  
 b. \*子供が3人正直者だ。

これを踏まえると、阿久澤 (2019) の観察は、「-すぎる」という動詞文と「-すぎだ」という名詞文の比較となっている点で、SLP であるか ILP であるかとは異なる要素が容認度判定を阻害している可能性があるため、名詞文同士の比較によってテストを行う必要がある。

初めに数量詞遊離、時間副詞との共起という阿久澤 (2019) が行ったテストの確認を行う。(49) のように、外項を主語とする「-すぎだ」と ILP の名詞述語「働き者」を比較すると、「-すぎだ」においては数量詞遊離が許容されるが、ILP においては数量詞遊離が許容できない。この事実は、「-すぎだ」が SLP であることを示している。

- (49)a. ?学生が3人仕事をしすぎだ。  
 b. \*学生が3人働き者だ。

時間副詞に関しても同様である。(50) のように「-すぎだ」においては「きのう」という時間副詞が共起できるが、ILP の名詞述語においては「きのう」という時間副詞の共起が不自然である。

- (50)a. きのう太郎はさすがに生徒を責めすぎだった。  
 b. \*きのう太郎はさすがに鬼教官だった。

また、習慣文の議論で提示されていた期間の指定においても差異がみられる。(51) のように、「-すぎだ」においては期間の指定が可能だが、ILP の名詞述語においては期間の指定が不可能である。

- (51)a. 太郎は実家に帰ってきてから酒を飲みすぎだ。  
 b. \*太郎は実家に帰ってきてから酒飲みだ。

他にも知覚文の目的語への埋め込み (cf. 上山 2006) は「酒飲み」のような恒常的状态をあらわす ILP においては不可能であるが、外項を主語とする「-すぎだ」においては問題なく許容できる。

- (52)a. \*後輩が酒飲みであるのを見て、太郎は水を勧めた。  
 b. 後輩が酒を飲みすぎであるのを見て、太郎は休憩を勧めた。

このように、複数の文法的テストから、外項を主語とする「-すぎだ」は ILP と見なせず、SLP と判断される。すなわち、「-すぎだ」はル形習慣文のように述部自体が恒常的状态をあらわす形式ではなく、テイル形習慣文のように文全体の意味計算の結果として主語の属性をあらわす解釈が認められる場合もある形式であると考えられる。

ここで、「-すぎだ」の属性叙述的な読みについて考えるために、4章で見た「-すぎる」の意味解釈について振り返る。(53)のように、修飾要素が過剰のターゲットとなる解釈を除くと、「-すぎる」の解釈には、頻度の過剰をあらわす解釈、結果の過剰をあらわす解釈、数量の過剰をあらわす解釈の3つの解釈が存在する。

- (53) a. 寝過ぎる :  $\lambda x \text{TOO} \lambda e [\text{SLEEP}(x)]$   
 b. 太り過ぎる :  $[\text{BECOME}[y \text{ BE}[\text{AT } \text{TOO} [\text{FAT} (+\text{gradable})]]]]$   
 c. 壊し過ぎる :  $[x \text{ ACT-ON } y]$   
      $\text{CAUSE}[\text{BECOME}[\text{TOO}[\text{THING } y]]\text{BE}[\text{AT-BROKEN} (+\text{gradable})]]$   
 由本 (2005 : 248, 246, 253 下線部は筆者による)

(53a) は継続時間や頻度が過剰となる解釈における意味構造であり、この場合には時・空間を特定する働きを担う event 項 (e) に過剰の意味 (TOO) が付与されている。(53b) は結果状態が過剰である解釈における意味構造であり、この場合には結果状態をあらわす意味構造上の定項 (FAT) に過剰の意味 (TOO) が付与されている。そして、(53c) は数量が過剰である解釈における意味構造であり、内項に当たる y に過剰の意味 (TOO) が付与されている。4章では、頻度が過剰のターゲットとなる解釈について頻度解釈、結果が過剰のターゲットとなる解釈について結果解釈、数量が過剰のターゲットとなる解釈について数量解釈と呼んで議論を行った。

この中で (54) の頻度解釈は、特に指定がない場合におおよそ習慣文に近い解釈となり、属性叙述と見なされ得る意味解釈となる。その一方で、たった今買ってきた酒の量が多すぎるという (55) の数量解釈の場合には、属性叙述と見なすことはできない。

- (54) a. 太郎は毎日酒を飲んでいる。  
 b. 太郎は酒を飲みすぎだ。(頻度解釈)  
 (55) a. 太郎は今酒を一回の買い物で10本買ってきた。  
 b. 太郎は酒を買いすぎだ。(数量解釈)

つまり、外項を主語とする「-すぎだ」自体が恒常的状态をあらわしているわけではなく、「-すぎだ」において属性叙述の読みが過剰の解釈の1パターンとして得られるのだと考えられる。よって外項を主語とする「-すぎだ」は、形式そのものが ILP であるル形習慣文より、頻度副詞等が生起した場合に属性叙述の読みが得られるテイル形習慣文に

近い形式であると考えられる。

この議論は「-すぎだ」における属性叙述の読みが述部の名詞性に由来するものではなく、「-すぎる」と「-すぎだ」に共通する「すぎ」の語彙的意味に由来しているという結論になる。この結論からは、述語名詞が体系的に属性叙述の読みを取らない事実についても説明することが可能になる。以上の議論を踏まえ、4.3節では「-すぎだ」以外の述語名詞の意味解釈について確認し、4節の議論の妥当性を確認する。

#### 4.3 外項を主語とする述語名詞の意味解釈

4.2節の議論において、外項を主語とする「-すぎだ」の意味解釈が属性叙述として捉えられるのは、「すぎ」の語彙的意味に由来すると主張した。この主張が正しければ、外項を主語とする述語名詞の意味解釈は個々の語彙的意味によって異なったものになると予想され、(56)(57)(58)のように実際に個々の語彙的意味によってさまざまな意味解釈が得られる。

- (56) a. 太郎はグラウンドを走りっぱなしだ。(進行)
- b. 太郎はまだその本を読みかけだ。(進行)
- (57) a. 太郎は部屋の電気を点けっぱなしだ。(維持)
- b. 太郎は免許を取りたてだ。(完了)
- c. 太郎は朝っぴらから酒を飲みすぎだ。(完了)
- (58) a. 太郎は (いつもいつも) 酒を飲みすぎだ。(反復)
- b. 太郎はいつも本番でミスをしまくりだ。(反復)
- c. 太郎は仕事をサボり気味だ。(反復)

しかしながら、これらの意味解釈は、ほとんどテイル形にも存在する解釈であるという点で共通している点もある (cf. 工藤 1995)。もちろん、「-っぱなしだ」であればしかるべき処置がなされていない、「-たてだ」であれば直後であるというように、個々の語彙的な意味は個々の形式にのみ存在する。しかしながら、述語名詞もテイル形も、「非状態述語+状態述語」の合成形式であり、「非状態述語+状態述語」という合成形式における意味計算から必然的に算出される範囲の意味に限られている。

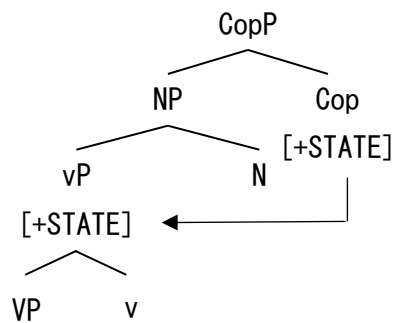
- (59) a. 太郎はグラウンドを走っている。(進行)
- b. 太郎はまだその本を読んでいる。(進行)
- (60) a. 太郎は部屋の電気を点けている。(維持)
- b. 太郎は (既に) 免許を取っている。(完了)
- c. 太郎は朝っぴらから酒を飲んでいる。(完了)
- (61) a. 太郎はいつも酒を飲んでいる。(反復)

- b. 太郎はいつも本番でミスをしている。(反復)
- c. 太郎はよく仕事をサボっている。(反復)

このような観察を踏まえて考えると、述語名詞に共通する意味解釈は状態的意味に留まるものと考えられる。この場合、主語が外項であるかどうかによって、出来事項の抑制といった意味論的操作を仮定する必用はない。

2章や4章で述べた通り、本論文の範囲において統語的述語名詞の状態的意味は、[+STATE]素性の継承という操作によって保証される。4章の議論では、内項主語構造においては[+STATE]素性がVPまで継承されるために結果状態の焦点化が起こると仮定したが、上昇構造においては(62)のようにvPに[+STATE]素性が継承されることになる。この場合、結果状態の焦点化のような特別な操作は起こらず、動詞句に状態的意味が付与されることになる。このため、外項を主語とする述語名詞においても、あくまで状態的意味の範疇において様々な意味解釈が可能となるものと思われる。

(62) 上昇構造における[+STATE]素性の継承



このような特徴は、外項を主語とする述語名詞だけでなく、内項を主語とする述語名詞においても共通している。非対格自動詞においては(63)のように結果状態をあらわすものも多いが、(64)(65)のように反復や進行をあらわすことも可能であり、意味を制限する操作が行われていない。外項が主語であっても、内項が主語であっても、上昇構造の述語名詞においては[+STATE]素性によって状態的意味が付与されるのみと考えられる。

- (63)a. 電気が点きっぱなしだ。(結果)
- b. シチューができたてだ。(結果)
- c. ジュースが冷やしすぎだ。(結果)
- d. 靴が汚れまくりだ。(結果)
- e. シャツがよれ気味だ。(結果)

- (64) a. 事故が起こりっぱなしだ。(反復)  
 b. 水道が止まりすぎだ。(反復)  
 c. 事故が起こりまくりだ。(反復)  
 d. 水道が止まり気味だ。(反復)
- (65) a. 雨が降りっぱなしだ。(進行)  
 b. 薔薇が凍りかけた。(進行)

なお、4節の議論と関連する論点として、向坂(2014)においては、(66)のように外項を主語とする「-たてだ」と共起する「免許を取る」のような動詞句は、テイル形においてその出来事が主語の属性に変化をもたらすような<恒常的結果状態>をあらわすとされている。そのため、(67)のようにテイル形が一時的な状態をあらわす動詞句は、「-たてだ」と相性が悪い。

- (66) a. 太郎は免許を取っている。  
 b. 太郎は免許を取りたてだ。
- (67) a. 太郎は(10分前に)酒を飲んでいる。  
 b. ??太郎は酒を飲みたてだ。

この事実観察を見ると、一見「-たてだ」がなんらかの形で属性叙述と関係しているようにも感じられるが、(68)のように「-たてだ」が一時的な変化をあらわすような事例も存在する。

- (68) a. (髪が濡れているのを見て)  
 太郎は風呂を上がりたてだ。  
 b. 太郎は髪を染めたてだ。

このような事例を踏まえると、「-たてだ」が属性叙述と関係しているというより、直後であるということが言及する価値を持つ場合に「-たてだ」が許容されやすいものと考えられる<sup>5</sup>。そのため、「免許を取りたてだからまだ危なっかしい」や「風呂を上がりたてだから髪が濡れている」は成立する一方、「酒を飲みたてだからまだ酔っていない」は酒を飲んだ直後であることに関係する現在の状態として言及する価値が低いために成立しないものと思われる。

このように、外項を主語とする述語名詞の意味解釈は、状態的意味という範囲におい

<sup>5</sup> 2章で見た通り、森田(1989)は「-たてだ」について『たて』は決して終了した行為そのものを問題としているのではない。行為によって生ずる結果の価値を取りたてる意識なのである。(森田1989:663)」と述べている。

て様々な意味をあらわすことができる。当然、個々の語彙的な意味は付与されているが、述語の名詞性によって出来事項の抑制が起きるといったメカニズムは存在せず、状態の意味と個々の語彙の意味の計算によって意味解釈が得られるものと考えられる。

## 5. おわりに

1節で提示した本章の研究目的は、以下の通りである。

- (Q1) 外項を主語とする述語名詞の統語構造を明らかにする。また、他動詞を取る述語名詞において、外項が主語となるパターンと内項が主語となるパターンの2種類が存在する事実について、統語的に説明を試みる。
- (Q2) 外項を主語とする述語名詞の意味解釈について、個別形式の特徴と述語名詞一般の特徴を明らかにし、名詞性と関係する意味解釈の範囲を明らかにする。

(Q1) に対応する解答は (69)(70) (Q2) に対応する解答は (71)(72) となる。

- (69) 外項が主語となる述語名詞は、非対格自動詞の場合と同様に上昇構造を取る。
- (70) 他動詞を含む述語名詞が「太郎はジュースを冷やしすぎだ」と「ジュースが冷やしすぎだ」のように2種類の文を生成するメカニズムは、述語名詞が上昇構造を取るか内項主語構造を取るかという統語構造に由来する。

- (71) 外項が主語となる「-すぎだ」に関しても、一時的状態をあらわす SLP となる。
- (72) 「-すぎだ」が属性叙述として解釈できるのは、あくまで「すぎ」の語彙の意味に由来する。述語名詞一般の特徴は、あくまで状態的意味を持つ点にある。

5章の議論では、述語名詞は目的語を主語とするような特別な操作を伴わない場合に、上昇構造を取ることということが明らかになった。また、外項が主語となる場合であっても、時空間項の抑制は起きず、ILP となるわけではないことを指摘した。

述語名詞には「-すぎる」「-かける」「-まくる」のように複合動詞の名詞化形式が含まれているが、これらの複合動詞は全て上昇構造を持つ。複合動詞の構造がそのまま反映されているという点において、上昇構造と名詞性には一見関わりがないようにも見える。しかしながら、上昇構造の複合動詞のみ名詞化によって述語名詞としてふるまうという点に着目すると、複合動詞の性質をそのまま受け継いでいるとしても、名詞性と統語構造が関係を持っているものとも考えられる。このように、6章では5章で明らかとなった述語名詞と上昇構造の関係について、複合動詞の名詞化という観点から議論を行う。

## 第6章 統語的複合動詞の補文構造と名詞化形式

### 1. はじめに

3章～5章では、「-ばなしだ」「-すぎだ」のように統語的述語名詞が動詞と合成する際に観察される統語的現象・意味論的現象を取り上げることで、統語的述語名詞の統語構造と意味構造について議論を行った。特に4章と5章の議論においては、統語的複合動詞「-すぎる」と統語的述語名詞「-すぎだ」が同様の構造を持っていることを取り上げたが、複合動詞と述語名詞がどのような関係を持っているのかについては取り上げてこなかった。

6章では、「-すぎる」と「-すぎだ」のように統語的複合動詞と語彙を共有している述語名詞について、統語的複合動詞の名詞化という観点から、統語的述語名詞に該当する形式の位置付けを明らかにすることを目的とする。具体的な研究対象としては、「-すぎだ」「-かけだ」「-まくりだ」が挙げられる。ここまで既に名詞化された形式を述語名詞として扱ってきたが、複合動詞の名詞化という観点からは、どのような複合動詞を名詞化したときに述語名詞が派生されるのかという新たな疑問が生じることになる。

日本語には、複数の動詞が複合して形成される複合動詞、動詞が連用形で名詞に派生する連用形名詞がそれぞれ存在する。6章では、統語的複合動詞に由来する連用形名詞において2種類の名詞化形式が存在することを指摘する。(1a)の「書き直し」は外項と内項が属格を伴って出現するデキゴト名詞であり、(1b)の「書きすぎ」は外項が主格、内項が対格を伴って出現する述語名詞である。

- (1) a. 太郎の論文の書き直し  
 b. 太郎が論文を書きすぎだ。

6章では、統語的複合動詞の名詞化形式について記述的観察を行うとともに、統語的複合動詞の補文構造と名詞化形式の関係について議論を行う。その上で、補文構造によって名詞化形式が決定する原理について、統語構造の観点から明らかにする。

本発表の研究目的を要約すると、以下の通りである。

- (Q1) 統語的複合動詞の名詞化形式について、統語的複合動詞の補文構造を踏まえて記述的観察を行う。  
 (Q2) 統語的複合動詞の名詞化形式について、統語的複合動詞の補文構造と名詞化形式がどのように関係しているのか、統語論的説明によって明らかにする。



3～5章の議論において、統語的述語名詞が内項主語構造を取らない場合に上昇構造を持つことを指摘したが、統語的述語名詞が上昇構造を持つ理由に関しては明らかにすることはできていない。6章では、統語的複合動詞の名詞化という観点から、上昇構造と述語名詞の関係を明らかにする。

## 2. 研究の背景

2節では、統語的複合動詞の分類を確認する。

影山(1993)が示すように、日本語の複合動詞には語彙的な性質を持つ語彙的複合動詞と統語的な性質を持つ統語的複合動詞の2種類が存在する。そのうち本章で取り上げる統語的複合動詞は、更に3種類に分かれることが指摘されている。

統語的複合動詞は、まず、主語に対する制限の有無で区別される。(2)(3)のように「-かける」「-すぎる」では主語が有生名詞であっても無生名詞であっても問題なく文が成立するが、(4)(5)のように「-そこなう」「-直す」では主語が有生名詞に制限され、無生名詞が排除される。

- (2) a. 太郎はリンゴを食べかけた。
- b. 雨が降りかけた。
- (3) a. 太郎はリンゴを食べすぎた。
- b. 雨が降りすぎた。
- (4) a. 太郎はリンゴを食べそこなった。
- b. \*雨が降りそこなった。
- (5) a. 太郎はリンゴを食べ直した。
- b. \*雨が降り直した。

統語的複合動詞は補文構造を持っており、無生物主語に対する制限は、主文となる後項動詞が主語に対して要求する制限と捉えられる。(6)のように、「-かける」「-すぎる」の場合は後項動詞が主語を要求せず、そのために主語に対する制限は課されない。一方、「-そこなう」「-直す」の場合は、動詞が要求する外項とは別に、後項動詞が項を要求するため、主語に選択制限が課される。

- (6) a. [φ[雨が 降り]すぎる]
- b. \*[雨が[降り]そこなう]

この事実観察によって、前項動詞が主語となる項を導入する複合動詞と後項動詞が主語となる項を導入する複合動詞の2種類が存在することが確認できる。

また、Nishigauchi (1993) や岸本 (2005) が指摘するように、前項動詞が主語を導入する「-かける」「-すぎる」では主語と述語が非構成的な解釈を受けるイディオム解釈が許容されるのに対し、後項動詞が主語を導入する「-直す」「-そこなう」では主語を含むイディオム解釈が許容されない。

- (7) a. あの店は、閑古鳥が鳴きかけている。(店に人が来なくなりつつある)  
 b. あの店は、閑古鳥が鳴きすぎている。(店に人が来ないにも程がある)
- (8) a. #あの店は、閑古鳥が鳴き直している。(店に再び人が来なくなっている)  
 b. #あの店は、閑古鳥が鳴きそこなっている。(店に人が来なくならなかった)

この事実も、前項動詞が主語を導入する複合動詞ではイディオムの構成要素である主語と前項動詞が主述の関係を持つ一方で、後項動詞が主語を導入する複合動詞ではイディオムの構成要素である主語と後項動詞が主述の関係を持たないことによって捉えられる。

前項動詞が主語を導入する複合動詞「-かける」「-すぎる」は、(9) のように、補文に生起する前項動詞の主語が補文に痕跡 (trace) を残して主文に上昇する上昇構造が仮定される。

- (9) a.  $[_{VP} \text{ 太郎}_i \text{ が } [_{VP} [_{VP} \text{ t}_i \text{ } [_{VP} \text{ リンゴを 食べ}]\text{v}] \text{ かけ}]\text{v}] \text{ た}$   
 b.  $[_{VP} \text{ 雨}_i \text{ が } [_{VP} [_{VP} \text{ t}_i \text{ } \text{ 降り}]\text{v}] \text{ すぎ}]\text{v}] \text{ た}$

続いて、後項動詞が主語を要求する複合動詞「-そこなう」「-直す」における差異を観察する。具体的には、長距離受動の可否において相違が観察される。長距離受動とは、後項動詞が要求する補文に埋め込まれた前項動詞の目的語が、後項動詞の受動化によって主語位置に移動する現象をさす。(10) の通り、通常、補文を埋め込む構造の場合に埋め込まれた文の目的語を主語にすることはできない。

- (10) a. ビルがジョンに[子供を託児所へ預け]させた。  
 b. ジョンがビルに子供を託児所へ預けさせられた。  
 c. \*子供がビルに (よって) ジョンに託児所へ預けさせられた。

(井上 1976 : 89)

しかしながら統語的複合動詞の場合、(11) の「-そこなう」では長距離受動が不可能である一方、(12) の「-直す」は長距離受動が可能となる。

- (11) a. 警察が太郎を逮捕しそこなった。

- b. \*太郎が警察に逮捕しそこなわれた。  
 (12)a. 警察は太郎を逮捕し直した。  
 b. 太郎が警察に逮捕し直された。

影山 (1993) は、前項動詞が主語を導入するか否かの違いによって、長距離受動の可否を分析している。この分析においては、長距離受動が不可能となる複合動詞の場合、前項動詞が頭在できないゼロの主語 PRO を導入しているものとする。一方、長距離受動が可能となる複合動詞の場合、前項動詞が主語を導入する V が最大投射を欠いており、主語が導入される VP の位置が存在しない。影山 (1993) は長距離受動が可能となる複合動詞を V'補文と捉えている。V'補文とは、(13b) のように前項動詞の補文が VP を派生せず、中間投射に留まり、補文が外項を要求しない構造であることを意味する。

- (13)a. [<sub>VP</sub> 警察が[<sub>VP</sub> PRO 太郎を逮捕し]そこねた]  
 b. [<sub>VP</sub> 警察が[<sub>V'</sub> 太郎を逮捕し]直した]

つまり、補文が主語を欠く不完全な構造であるため、補文構造を持っていても特別に長距離受動が許容されるという分析になっている。

本論文では、そもそも、vP と VP の二層構造を仮定しているため、V'補文構造をそのまま採用することはできないが、Wurmbrand (2001) は長距離受動が可能となるような述語において、補文が vP を欠くという分析を提示している。(14) においては、主文 try の vP と補文 repair の vP による二重節構造ではなく、repair が vP を欠いた構造となっている。

- (14)a. weil Hans Den Tractor zu repariren versuchte  
 since John the tractor-ACC to repair tried  
 'since John tried to repair the tractor'  
 b. [<sub>TP</sub> John[<sub>vP</sub> t<sub>subj</sub>[<sub>VP</sub> the tractor to repair][tried]]]  
 (Wurmbrand2001:17 下線は筆者による)

この場合、補文は PRO を導入せず、対格も付与しない。対格付与は主文の動詞によって行われることになる。この分析を長距離受動が可能となる統語的複合動詞に当てはめると、(15) のようになる。

- (15)a. [<sub>vP</sub> 警察<sub>i</sub>が[<sub>VP</sub> [<sub>vP</sub> PRO<sub>i</sub> [<sub>VP</sub> 太郎を逮捕し]v]そこな]v]た  
 b. [<sub>vP</sub> 警察が[<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub> 太郎を逮捕し]直し]v]た

主文の主語が補文のゼロ主語 PRO と同一指示解釈を受けるような構造をコントロール構造、補文が vP を欠き主語を導入しない構造を再構成構造と呼ぶことにする。

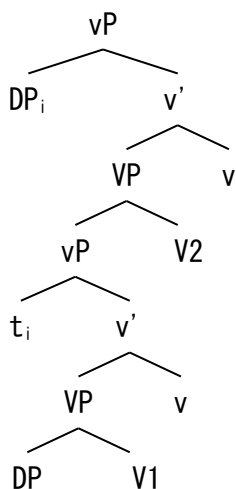
再構成構造は、外項が基底生成する位置を欠いているという点で、影山 (1993) の仮定する V'補文に関する分析を踏襲している。また、補文が PRO を導入しないということは、対格付与は後項動詞によってなされることになる。どのような形の分析を採用するにせよ、長距離受動が可能となる複合動詞は、完全な補文構造ではなく、不完全な補文構造を取るものと考えられる。

ここまで見てきた統語的複合動詞における事実観察の可否を下記の表 1 に、統語構造に関しては下記の (16) に示す。

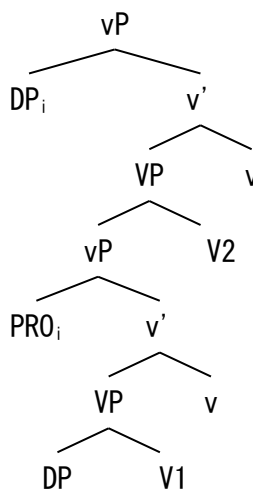
表 1 統語的複合動詞における事実観察の可否

	無生物主語	イディオム解釈	長距離受動
上昇構造 かける、すぎる、 まくる、出す……	○	○	×
コントロール構造 飽きる、慣れる、 損なう、そびれ る、疲れる……	×	×	×
再構成構造 直す、忘れる、合 う、終わる、尽く す……	×	×	○

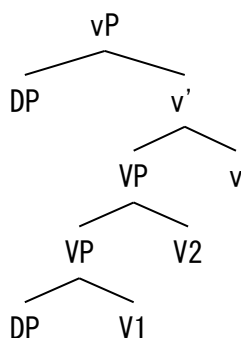
(16)a. 上昇構造



b. コントロール構造



## c. 再構成構造



このように統語的複合動詞は、補文の種類によって3種類に分かれる。一つは補文の主語が主文へと上昇する上昇構造、一つは補文の主語に PRO が生起するコントロール構造、一つは補文に主語が生起しない再構成構造である。

なお、Fukuda (2012) や阿久澤 (2018) のように、影山 (1993) に代表されるコントロール構造と上昇構造の対立を採用しない分類もある。本章の範囲では、上記の3分類を用いるが、Fukuda や阿久澤 (2018) の分析についても紹介しておく。

Fukuda (2012) や阿久澤 (2018) は、統語的複合動詞の後項動詞を動詞（語彙範疇）ではなく Asp（機能範疇）として取り扱っている。Fukuda (2012) は「-始める/続ける/終わる/終える」の4種類の後項動詞を取り上げ、後項動詞には H-Asp と L-Asp の2種類が存在することを述べている。L-Asp は長距離受動が可能であるとされ、H-Asp は受動文を補文に埋め込むことが可能であるとされる。(17)~(19) では、「終わる」が H-Asp、「終える」が L-Asp、「続ける」と「始める」が H-Asp としても L-Asp としても成立する形式と見なされる。

- (17) a. ビルが建てられ {始め/続け} た。(H-Asp/L-Asp)  
 b. ビルが建て {始め/続け} られた。(H-Asp/L-Asp)
- (18) a. ビルが建てられ終わった。(H-Asp)  
 b. \*ビルが建て終わられた。(H-Asp)
- (19) a. \*ビルが建てられ終えた。(L-Asp)  
 b. ビルが建て終えられた。(L-Asp)

Fukuda (2012) によると、(20) のように H-Asp は構造的に vP を補部を取るが、L-Asp は VP を補部を取るため統語論的な位置が異なっている。この違いによって、受動の可否を説明している。

- (20) a. [H-AspP[<sub>vP</sub>[<sub>VP</sub> V]v]H-Asp]

## b. [vP[L-Asp[VP V]L-Asp]v]

阿久澤（2018）では、「-始める/続ける/終わる/終える」以外の後項動詞についても、長距離受動ができない後項動詞は Voice より高い位置に生起し、長距離受動が可能な後項動詞は Voice より低い位置に生起すると主張している。基準が vP ではなく Voice となっているが、H-Asp と L-Asp と発想を同じくする分析を行っている。

本章の範囲では、後述する通り、上昇構造、コントロール構造、再構成構造の3分類による分析が有効となる。また、本論文では、述語名詞を Asp ではなく NP と分析しているため、統語的複合動詞を語彙範疇として見なす影山（1993）に基づく3分類を採用して議論を行う。

## 3. 名詞化と現象観察

2節では、統語的複合動詞には上昇構造、コントロール構造、再構成構造の3種類が存在することを確認した。3節では、まず3.1節で統語的複合動詞の名詞化形式について現象観察を行った後、3.2節で補文構造と名詞化形式の関係についてまとめる。

## 3.1 複雑事象名詞と述語名詞

第一に、統語的複合動詞の名詞化形式が、複雑事象名詞を形成する事例を見ていく。具体的には、(21)のように「-直す」「-忘れる」「-合う」は連用形による名詞化において複雑事象名詞を形成する。複雑事象名詞においては外項と内項が属格や連体形の後置詞によって標示される。

- (21)a. 太郎 {の/による} ビルの建て直し  
 b. 従業員 {の/による} 荷物の運び忘れ  
 c. メンバー {の/による} 責任の押し付け合い

デキゴト名詞とモノ名詞は、存在文の場所句の標示と助数詞から判別できる（影山2011）。デキゴト名詞は存在文において(22a)のように場所が「で」で標示され、またデキゴト名詞は(23a)のようにイベントを数える「回」等の助数詞と共起する。一方、モノ名詞は場所が「に」で標示され、モノを数える「つ」等の助数詞と共起する。

- (22)a. 公園 {で/\*に} 喧嘩があった。  
 b. 公園 {\*で/に} 滑り台があった。  
 (23)a. 喧嘩が {3回/\*3つ} あった。  
 b. 滑り台が {\*3回/3つ} あった。

このテストを (21) の名詞化形式に当てはめると、場所句が「で」によって標示され、イベントを数える助数詞と共起するため、デキゴト名詞として判定される。

- (24)a. 第三スタジオ {で/\*に} 撮り直しがあった。
- b. 会議室 {で/\*に} エアコンの切り忘れがあった。
- c. 公園 {で/\*に} 殴り合いがあった。
- (25)a. 撮り直しが {3回/\*3つ} あった。
- b. エアコンの切り忘れが {3回/\*3つ} あった。
- c. 殴り合いが {3回/\*3つ} あった。

また、伊藤・杉岡 (2002) では、連用形名詞が出来事をあらわす場合に、項が意味格を伴って生起する (26) の単純事象名詞と項が属格 (構造格) によって標示される (27) の複雑事象名詞が存在することを指摘している。「直す」「忘れる」「合う」においては、外項と内項を共に属格で標示することが可能であるため、複雑事象名詞であると考えられる。

- (26) 友達を誘う→友達への誘い  
    選手を励ます→選手への励まし

(伊藤・杉岡 2002:99)

- (27) 料金を払い戻した→太郎 {の/による} 料金の払い戻し  
    花火を打ち上げた→太郎 {の/による} 花火の打ち上げ

複雑事象名詞は意味格を伴わずに項が生起できる点で、項構造を保持していると考えられる。

第二に、統語的複合動詞の名詞化形式が、述語名詞を形成する事例を見ていく。(28) のように、「-すぎる」「-かける」「-まくる」は述語名詞を形成する。述語名詞においては、主語が主格、目的語が対格で標示される。

- (28)a. 太郎が酒を飲みすぎだ。
- b. 太郎がまだ論文を読みかけた<sup>1</sup>。
- c. 太郎が嘘を吐きまくりだ。

<sup>1</sup> 岸本 (2000) では、非対格性のテストに「-かけ」を用いている。しかしながら、岸本 (2000) においては「動詞+かけ」と「動詞句+かけ」が区別されており、非対格性のテストに用いられているのは前者である。後者の「動詞句+かけ」に関しては、「まだ」のように副詞を伴えば外項を主語とする文なども成立可能である。

2章で述べた通り、(29)のようにこの種の述語名詞は回数表現と共起できず、デキゴト名詞とは区別される。また、述語名詞は、(30)のように、状態動詞 (cf.金田一 1950) と同じくテイル形ではなくル形 (あるいはダ) が現在をあらわすため、状態をあらわす述語と考えられる。

- (29)a. \*太郎は3回論文を読みかけだ。  
 b. \*太郎は3回部屋を散らかしすぎだ。  
 c. \*太郎は3回仕事をしまくりだ。  
 (30)a. 太郎は現時点ではまだ論文を読みかけである。  
 b. 太郎は最近部屋を散らかしすぎである。  
 c. 太郎は今週仕事をしまくりである。

本章では、この2種類の名詞化形式について、補文構造を伴う名詞化形式として取り扱う。統語的複合動詞による複雑事象名詞と述語名詞は、いずれも外項と内項が生起可能であり、項構造を持つ。更に、(31)(32)のように動詞句によるイディオム解釈が可能であり、項と述語の関係が通常の動詞文と同様に保持されているものと思われる。

- (31)a. [腕の磨き]直し (修練のし直し)  
 b. [顔の出し]忘れ (出席のし忘れ)  
 c. [足の引っ張り]合い (迷惑のかけ合い)  
 (32)a. 太郎はまだ[腕を磨き]かけだ。(修練をしている途中)  
 b. 太郎は飲み会に[顔を出し]すぎだ。(出席をしすぎている)  
 c. 太郎は[足を引っ張り]まくりだ。(迷惑をかけまくっている)

なお、複雑事象名詞と述語名詞以外の用法として、補文構造を持たないと思われる名詞化形式も存在する。ここでは、モノ名詞の用法、時間名詞の用法、属格を伴う「-すぎ」についてまとめておく。

まず、藤巻 (2018) では、「-かけ」がモノ名詞のようにふるまう (33a) の用法が取り上げられている。モノ名詞としての用法は (33b) のように「-直し」の場合にもみられる。

- (33)a. 太郎は[リンゴの食べかけ]を手にとって食べた。  
 (藤巻 2018 : 102)  
 b. 太郎は[ (花子を書いた) 原稿の書き直し]をチェックしている。

また、副詞的用法に近いが、「-始める」「-終わる」のように時間名詞としてふるまう



(34)(35) の用法が存在する。

- (34)a. いつも話し始めに、注意すべき点を説明する。
- b. 雨の降り始めに、独特の臭いがする。
- (35)a. 桜の咲き終わりの頃に、彼女と出会った。
- b. あの歌手は歌い終わりの瞬間に満面の笑みを見せた。

更に、先ほど述語名詞として分類した「-すぎ」が一見して属格を伴って複雑事象名詞のようにふるまう用例も存在する。

(36) 酒の飲みすぎで太郎は入院した。

しかしながら、これらの事例においては、複雑事象名詞とは異なり、外項が生起することが難しく、複雑事象名詞とは異なり、項構造が保持されていないものと考えられる。

- (37)a. \*太郎 {の/による} 話し始めに、注意事項が説明された。
- b. \*花子は[太郎 {の/による} リンゴの食べかけ]を手にとって食べた。

属格を伴う「-すぎ」の事例に関しても同様である。(38a) のように一見外項が生起する事例は存在するが、(38b) のように「による」を伴うことはできず、外項ではなく所有者の項が生起しているものと考えられる。実際、5章で部分的に触れたが、(39) のように「酒の飲みすぎだ」が述語として生起する事例が存在し、(38a) は「太郎が持っている酒の飲みすぎという性質」として解釈される。

- (38)a. 太郎の酒の飲みすぎに困っている。
- b. \*太郎による酒の飲みすぎには困っている。
- (39)a. 太郎は酒の飲みすぎだ。
- b. 太郎は本の読みすぎだ。

(40) のように属格を取る「-すぎ」は場所デ句の存在文や、イベントを数える助数詞とも共起できず、少なくとも複雑事象名詞と見なすことはできない。

(40) \*居酒屋で酒の飲みすぎが3回あった。

属格の「-すぎ」に関しては述部に生起する事例も含めて興味深い事例と考えられるが、本論文においては個々の散発的な事例は今後の課題とし、項構造や補文構造を伴って

ると考えられる複雑事象名詞と述語名詞の事例を取り扱う。

### 3.2 補文構造と名詞化形式の分布

3.1 節では、補文構造を伴う統語的述語名詞の名詞化形式として、複雑事象名詞と述語名詞が存在することを確認した。3.2 節では、名詞化形式と補文構造の分布を確認していく。後項動詞の分布は (41) の通りであり、(42) のように、複雑事象名詞を形成する後項動詞は述語名詞を形成できず、逆も不可能である。

- (41)a. 複雑事象名詞「-直す」「-忘れる」「-合う」  
 b. 述語名詞「-すぎる」「-かける」「-まくる」  
 (42)a. \*太郎は本を買い忘れた。  
 b. \*暖炉で火の消えかけが3回あった。

まず、複雑事象名詞を形成する後項動詞は、(43)～(45) のように、主語の制約を持ち、イディオム解釈が排除され、長距離受動が可能である点から再構成構造と考えられる。

- (43)a. \*雨が降り直した。(主語の制約あり)  
 b. #閑古鳥が鳴き直した。(イディオム解釈不可)  
 c. 記事が書き直された。(長距離受動可能)  
 (44)a. \*雨が降り忘れた。(主語の制約あり)  
 b. #閑古鳥が鳴き忘れた。(イディオム解釈不可)  
 c. 記事が載せ忘れられた。(長距離受動可能)  
 (45)a. \*東西から風が吹き合った。(主語の制約あり)  
 b. #閑古鳥が鳴き合った。(イディオム解釈不可)  
 c. 国会で対策が話し合われた。(長距離受動可能)

続いて、述語名詞を形成する後項動詞は、(46)～(48) のように主語の意味制約が存在せず、イディオム解釈が可能であり、長距離受動が不可能である点で、上昇構造とみなされる。

- (46)a. 雨が降りかけた。(主語の制約なし)  
 b. この店は閑古鳥が鳴きかけている。(イディオム解釈可能)  
 c. \*論文が書きかけられた。(長距離受動不可能)  
 (47)a. 雨が降りすぎた。(主語の制約なし)  
 b. この店は閑古鳥が鳴きすぎている。(イディオム解釈可能)  
 c. \*本が読みすぎられた。(長距離受動不可能)

- (48)a. 雨が降りまくった。(主語の制約なし)  
 b. この店は閑古鳥が鳴きまくっている。(イディオム解釈可能)  
 c. \*本が盗みまくられた。(長距離受動不可能)

なお、再構成構造の後項動詞であれば常に複雑事象名詞を形成できるわけではなく、上昇構造の後項動詞であれば常に述語名詞を形成できるわけではない。

- (49)a. \*太郎による論文の書き終え  
 b. \*太郎は酒を飲み出した。

よって、名詞化自体は通常の連用形名詞と同様に非生産的なものと考えられる。しかしながら、非生産的ではあっても、補文構造と名詞化形式には一定の対応関係が存在していることも事実である。

更に、(50)のようにコントロール構造を持つ「-飽きる」「-損なう」においては一貫して補文構造を伴う名詞化形式が排除される。(51)(52)の通り、コントロール構造の複合動詞は複雑事象名詞も述語名詞も形成しない。すなわち、再構成構造が複雑事象名詞、上昇構造が述語名詞、コントロール構造が名詞化不可能という形で、コントロール構造の場合にも補文構造と名詞化形式の対応関係が確認できる。

- (50)a. \*雨が降り飽きた。(主語の制約あり)  
 b. \*切符が取り損なわれた。(長距離受動不可)  
 (51)a. \*太郎 {の//による} 論文の書き飽き  
 b. \*太郎は論文を書き飽きだ。  
 (52)a. \*太郎 {の//による} 切符の取りそこない  
 b. \*太郎は切符を取りそこないだ。

これを踏まえると、統語的複合動詞の補文構造と名詞化形式の分布は以下の表2のようにまとめられる。

表2 補文構造と名詞化形式の関係

	上昇	コントロール	再構成
複雑事象名詞	×	×	○
述語名詞	○	×	×

このように、補文構造を伴う名詞化形式のふるまいは、統語的複合動詞の補文構造と連動している。この事実は、統語構造と名詞化形式が関係を持っていることを示しており、

上昇構造・コントロール構造・再構成構造による3種類の分類の妥当性を示している。続いて、4節において統語構造に関する議論を行い、名詞化形式と補文構造の関係について明らかにする。

#### 4. 名詞化と統語構造

3節では、統語的複合動詞の補文構造と名詞化形式の対応関係を記述することで、名詞化形式の分布が補文構造と関係していることを確認した。4節では、補文構造と名詞化の対応関係について、どのような統語的メカニズムが働いているのかについて分析する。

3節の議論から、複雑事象名詞はコントロール構造・上昇構造において排除され、述語名詞はコントロール構造・再構成構造において排除される。排除される補文構造と名詞化できる補文構造の特徴をまとめると、(53)(54)のようになる。

(53) 複雑事象名詞は、完全な補文構造を持つコントロール構造・上昇構造において排除される。一方で、複雑事象名詞を形成できる再構成構造は、補文が **vP** を欠く不完全な補文構造である。

(54) 述語名詞は、後項動詞が主語を要求するコントロール構造・再構成構造において排除される。一方で、述語名詞を形成できる上昇構造は、後項動詞が主語を要求しない構造である。

まず、複雑事象名詞に関しては、**bi-clausal** な補文構造に対して統語論的な制約が働いているものと考えられる。この発想は、(55)のように、補文構造を持たない通常の動詞の名詞化においても複雑事象名詞が形成される事実と整合的である。

(55)a. 太郎の花火の打ち上げ (補文構造を持たない語彙的複合動詞)

b. 太郎の論文の書き直し (再構成構造の複合動詞)

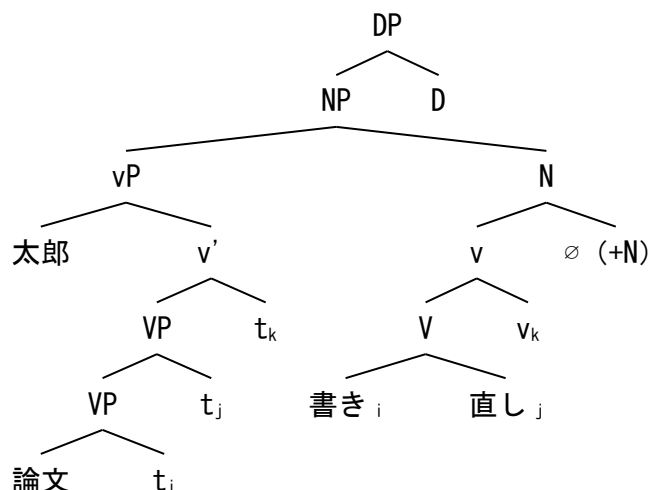
すなわち、連用形による名詞化は、通常は **mono-clausal** な構造において適用されるものであり、**bi-clausal** な構造に対しては適用されないものとする。つまり、再構成構造に関しては、あくまで例外的に名詞化を適用できているものとする。この統語的条件を (56) のようにまとめておく。

(56) 連用形による名詞化においては **v** を複数持つ **bi-clausal** な構造に対して名詞化を適用することはできない。そのため、単文構造の動詞あるいは補文が **vP** を

欠く再構成構造にのみ適用することができる<sup>2</sup>。

これを踏まえて (57) に統語的な名詞化形式「-方」に対する Kishimoto (2005) の分析を参考にして、複雑事象名詞の統語構造を示す。

(57) 太郎の論文の書き直し



上記の構造は、動詞が名詞化を適用されるも、NP に動詞句が生起する構造となっており、動詞句の項が属格によって標示されることになる。この構造においては、ゼロの名詞化接辞があくまで単独の v に対して適用されているため、名詞化が排除されることはない。

一方で、複雑事象名詞とは異なり、(58) のように述語名詞が通常の複合動詞の名詞化によって形成されることはない。しかしながら、述語名詞においては、「ばなし(放す)」や「たて(立てる)」のように動詞が名詞化された形式が述語名詞を形成する (59)(60) のような事例が存在する。この場合には、「飲みっぱなす」や「覚えてる」という複合動詞から名詞化しているわけではなく、名詞化した「ばなし」や「たて」という形式が動詞句を要求しているものと考えられる。

- (58)a. 太郎は酒を飲み干した。
- b. \*太郎は酒を飲み干した。
- (59)a. \*太郎は酒を飲みっぱなした。
- b. 太郎は酒を飲みっぱなした。

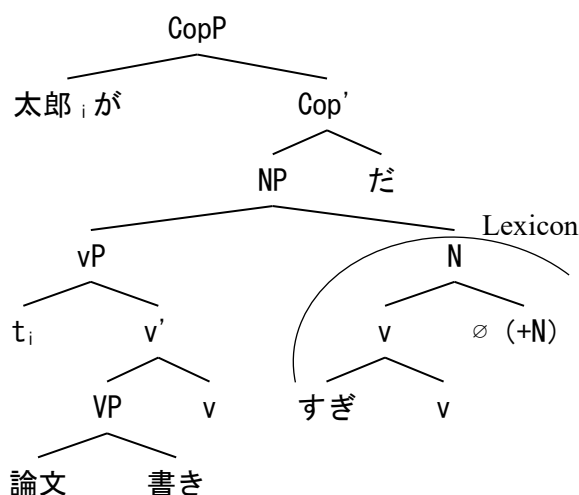
<sup>2</sup> Shimamura and Wurmbrand (2014) においては、再構成構造の補文も  $v_R$  という特別な v を持つ構造が仮定されている。しかしながら、PRO を持たず、対格付与も行わないためやはり通常の v を複数持たない構造と考えられる。

- (60)a. \*太郎は剣術を覚えてた。  
 b. 太郎は剣術を覚えてただ。

この事実を踏まえると、述語名詞においては複合動詞全体を名詞化することによって名詞化が起きるのではなく、名詞化された後項動詞が動詞句を要求されるものと考えられる。この事実は、述語名詞が後項動詞の項構造にのみ制約を課す事実とも整合的である。

この発想を踏まえて、述語名詞に関して (61) のような統語構造を仮定する。以下の構造は、名詞述語文の名詞句の内部に動詞述語文が埋め込まれたような構造となっている。

- (61) 太郎が論文を書きすぎだ。



(61) の構造においては、「すぎ」という名詞は語彙部門 (Lexicon) であらかじめ生成されるものと考えられる。このため、(61) の構造は、(56) の制約に違反しない構造となっている。この構造では、あくまで名詞化が適用されているのは後項動詞のみであり、v を複数含む補文構造の名詞化は起こっていないことになる。

なお、(61) の構造は、後項動詞が主語を要求するコントロール構造・再構成構造において述語名詞が形成されない理由に関する説明としては不十分である。コントロール構造・再構成構造において述語名詞が形成されない要因を説明するためには、本論文の議論を総括しながら統語的述語名詞と統語的複合動詞の比較を行う必要がある。よって、5 節において、統語的述語名詞と統語的複合動詞の比較を行い、統語的述語名詞が上昇構造から派生される要因について説明する。

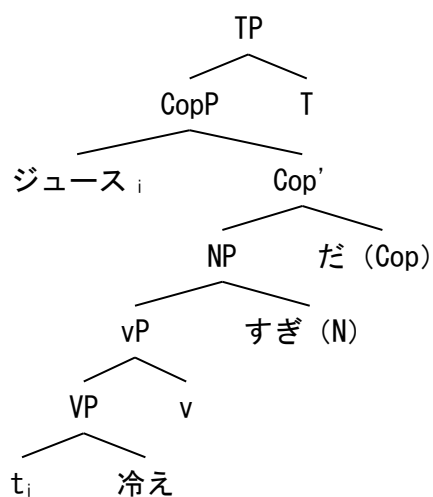
## 5. 統語的述語名詞と統語的複合動詞の比較

5 節では、統語的述語名詞と統語的複合動詞の比較を行うことで、統語的述語名詞が

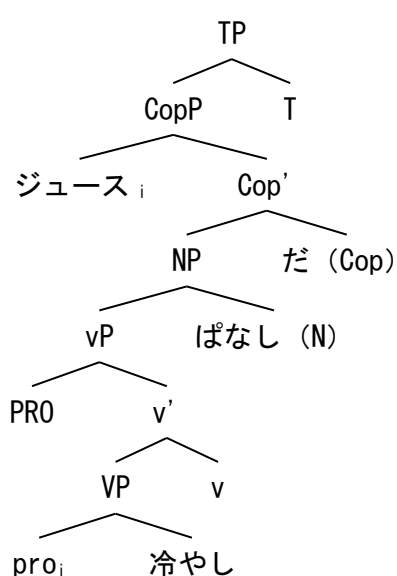
上昇構造の複合動詞から名詞化する要因について明らかにする。そして、その議論と並行する形で、統語的述語名詞が一般に上昇構造を持つ要因についても明らかにする。

まず、3章～5章において議論してきた統語的述語名詞の補文構造を確認する。統語的述語名詞においては、(62)のように上昇構造と内項主語構造の2種類の構造が存在する。

(62)a. ジュースが冷えすぎだ。



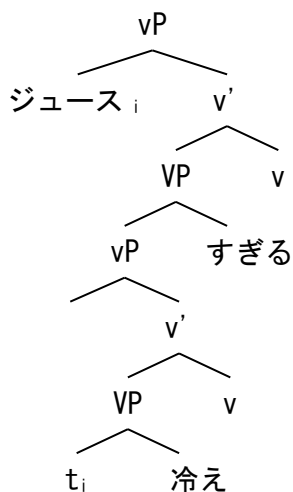
b. ジュースが冷やしすぎだ。



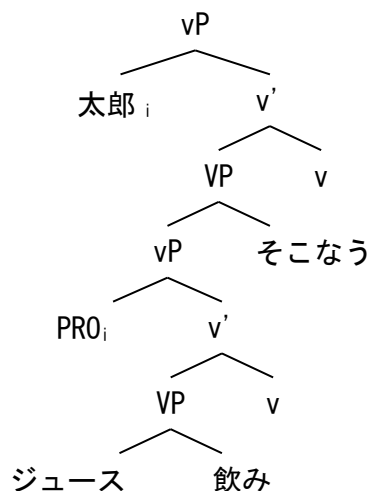
また、(62)において「-すぎだ」が上昇構造と内項主語構造の2パターンを持っていることからわかるように、統語的述語名詞においては名詞形式の語彙情報によって統語構造が決定するわけではない。

一方で、統語的複合動詞においては動詞の語彙情報によって、上昇構造と広義のコントロール構造（再構成構造含む）に分かれる。(63)が「-すぎる」と「-そこなう」で異なる構造を持っていることからわかるように、統語的複合動詞は統語的述語名詞とは異なり、動詞の語彙情報によって統語構造が決定する。

(63)a. ジュースが冷えすぎる。



b. 太郎がジュースを飲みそこなう。



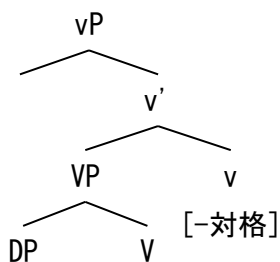
上昇構造とコントロール構造の違いは、 $v$  が外項を要求するか否かの違いである。すなわち、複合動詞の補文構造は動詞が外項を要求するか否かによって左右されるものと考えられる。

前述の通り、統語的述語名詞の統語構造においては、名詞部分によって補文構造が決定しない。では何によって補文構造が決定するかというと、コンピュータが主語を要求するか否かによって左右される。つまり、統語的述語名詞においてはコンピュータが統語構造を指定していることになる。よって、統語的述語名詞において「ばなし」「たて」「すぎ」「かけ」「まくり」のような動詞の名詞化形式自体は項構造を持つことができない。統語的述語名詞は補文構造を決定しないため、項構造を持つ動詞は統語的述語名詞としては不適格となる。そのため、述語名詞は項を要求しない上昇構造の複合動詞によってのみ形成されるものと考えられる。

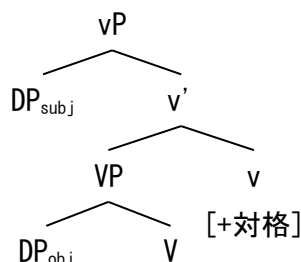
このような補文構造の違いは、単文における動詞述語文と名詞述語文の性質の違いが反映されているものと思われる。(64) のように動詞文においては  $v$  が外項を導入するか否かを決定する。この違いは、後項動詞が外項を持つコントロール構造と後項動詞が外項を持たない上昇構造の違いとも共通しており、動詞述語文の統語構造が統語的複合動詞の補文構造と連動しているものと思われる。



(64)a. 非対格自動詞

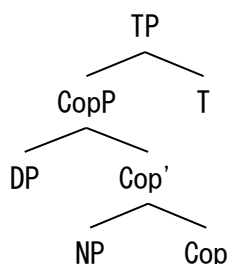


b. 他動詞



一方、(65) のように名詞述語文の統語構造においては名詞項の導入を決定しているのは N ではなく Cop である。統語的述語名詞においてもこの性質が反映されており、NP が項を指定するのではなく、Cop が項を指定するものと思われる。このように、動詞句が補文構造を決定する統語的複合動詞とコピュラ句が補文構造を決定する統語的述語名詞の違いは動詞述語文（単文）と名詞述語文（単文）の性質の違いによって説明することができる。

(65) 名詞述語文の構造

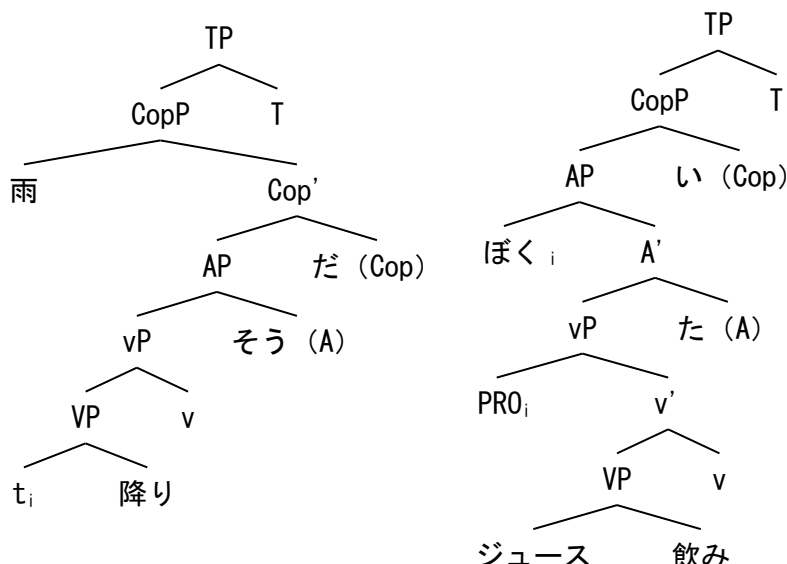


なお、複合動詞と述語名詞のみを比較すると、動詞述語と名詞述語の違いというより、コピュラの有無の違いと解釈できるかもしれない。しかしながら、形容詞性を持つ複雑述語の事例を観察すると、ここまで述べてきた特徴が述語名詞の性質であると確認できる。形容詞性を持つ複雑述語においては、形容詞のように活用する「-たい」に関しても「食べたくはある」のようにコピュラを持ち、形容動詞のように活用する「-そうだ」に関しても「サボりそうである」のようにコピュラを持っている (cf. Nishiyama1999)。しかしながら、形容詞性を持つ複雑述語の補文構造は、述語名詞のように共通の補文構造を持つとは考えにくい。例えば、(66) のように、「-たい」では無生物主語が制限されるのに対して、(67) のように「-そうだ」においては無生物主語が制限されない。この事実は、「-たい」と「-そうだ」がコントロール構造と上昇構造のように異なった構造を持っている可能性を示唆している。

- (66)a. ぼくはジュースを飲みたい。  
 b. \*雨が降りたい。  
 (67)a. 太郎はジュースを飲みそうだ。  
 b. 雨が降りそうだ。

本論文の範囲において形容詞性を持つ複雑述語の補文構造において厳密な議論を行うことはしないが、名詞述語文との違いという観点から、(68) のような構造を持つと想定しておく<sup>3</sup>。「-そうだ」においては AP に主語が生起せず、「-たい」においては AP に主語が生起するという違いによって、異なる補文構造が派生される。

- (68)a. 雨が降りそうだ。                      b. ぼくはジュースを飲みたい<sup>4</sup>。



単文の形容詞においても、外崎 (2005) のように属性形容詞と感情形容詞で異なる構造を仮定することがある<sup>5</sup>。実際、(69) のように「欲しい」のような感情形容詞は経験者となる主語や対象となる目的語を取る点で項構造を持っているものと考えられる。

<sup>3</sup> 「-そうだ」の構造に関しては竹沢 (2016)、「-たい」の構造に関しては Takano (2003) 等を参照。

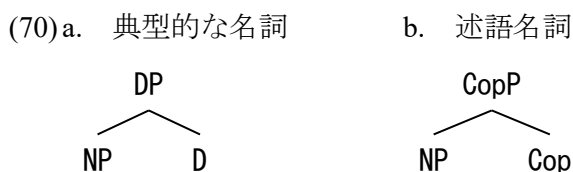
<sup>4</sup> 厳密に言うと、形容詞の「い」がコピュラと言えるかは難しい。形態論的に「である」の縮約形式と見なされることがある「だ」についても同様である。コピュラの形態論に関しては、Nishiyama (1999) や田川 (2009) を参照。

<sup>5</sup> 外崎 (2005) は分散形態論に基づいて品詞未満の単位である√を用いた分析を行っている。そのため、(68b) のように AP に経験主が基底生成する分析とはなっていないが、分散形態論を用いずに分析するとすれば AP に経験者が導入される (68) の構造は不自然なものではない。

- (69)a. 太郎は賢い。  
b. ぼくは水が欲しい。

すなわち、形容詞性を持つ複雑述語は、コンピュータを持つという点では統語的述語名詞と共通しているものの、各形式の語彙情報によってそれぞれの補文構造が決定する形式であり、むしろ統語的複合動詞に近い。この事実は、コンピュータが補文構造を決定するという統語的述語名詞の統語論的性質が、名詞性に由来していることを示唆している。

更に同じ名詞であっても、DPを持つ複雑事象名詞は項構造を持つことが可能であるが、述語名詞は CopP に生起し名詞項を要求しないという点で異なっている。1章で述べた通り、DPを持つ典型的な名詞と述語名詞は異なった性質を持っており、本論文では(70)のような構造を仮定している。



2章や4章で確認した通り、述語名詞は状態性に関してもコンピュータの影響を強く受けている。それを踏まえて考えると、名詞は典型的には項として用いられる形式であり、名詞句として項構造を持つことはあり得るが、述語としての性質に関しては CopP に依存する面が強いものと考えられる。そのため、項として用いられることが典型的ではない述語名詞においては、それ自体が項構造を持つことができないと考えられる。

## 6. おわりに

本章の研究目的は、以下の通りである。

- (Q1) 統語的複合動詞の名詞化形式について、統語的複合動詞の補文構造を踏まえて記述的観察を行う。  
(Q2) 統語的複合動詞の名詞化形式について、統語的複合動詞の補文構造と名詞化形式がどのように関係しているのか、統語論的説明によって明らかにする。

(Q1) に対応する解答は(71)、(Q2)に対応する解答は(72)となる。

(71) 統語的複合動詞の名詞化形式においては、再構成構造の複合動詞が複雑事象名詞を形成し、上昇構造の複合動詞が述語名詞を形成する。

- (72)再構成構造の複合動詞は **mono-clausal** な構造に近い形式であるため複雑事象名詞を形成することができ、上昇構造の複合動詞は名詞項を要求しない構造であるため述語名詞を形成することができる。

更に、6章では、本論文全体の内容を踏まえて、(73)(74)のように統語的述語名詞と統語的複合動詞の補文構造の違いについて、単文となる名詞述語文と動詞述語文の統語構造の違いによって説明を行った。

- (73)統語的複合動詞は動詞の種類によって補文構造が決定するのに対して、統語的述語名詞は動詞の種類によって補文構造が決定するわけではない。どの統語的述語名詞に関しても、常に内項主語構造と上昇構造の2種類が存在する。

- (74)vPにおける外項の有無が補文構造を決定する統語的複合動詞に対して、統語的述語名詞では CopPにおける項の有無によって補文構造が決定される。この違いは単文となる動詞述語文の構造と名詞述語文の構造の違いを反映したものととなっている。

4章・5章の議論において述語名詞が上昇構造を持つことが明らかになっていたが、6章ではこの点に関して動詞の名詞化形式に関する分析を踏まえて、統語的述語名詞の性質を確認することができた。

## 第7章 まとめと展望

### 1. 本論文のまとめと課題

本論文では統語的述語名詞を研究対象として、統語論的アプローチを中心に議論を行ってきた。7章では、まず1節で本論文の内容を振り返り、1章～6章の議論によって得られた結論と課題について述べる。次に2節では、本論文の成果が日本語研究・言語研究においてどのような研究領域と関係し、どのような発展の方向を持っているかについて述べる。

本論文の内容を振り返る前に、本論文の研究目的として提示した3つの研究課題を再掲する。

- (i) 統語的述語名詞という語群を認めることで、日本語研究において有効な議論が可能であることを明示的に示す。
- (ii) 統語的述語名詞に関連する現象について、統語論による定式化を行い、統語的述語名詞を取り扱うための基盤的分析を示す。
- (iii) 複雑述語における形態論的な名詞性と統語的論性質・意味論的性質の関係を明らかにする。

(i)～(iii)の研究課題は、それぞれ有機的に関連しており、特定の章で特定の研究課題に対する解答を提示しているわけではない。そこで、1.1節～1.3節では3つの研究課題について本論文でどのような解答を得られたか改めて振り返ることで、本論文を通じて得られた結論を示す。

また、本論文を通じて得られた結論を踏まえて、1.4節に今後の課題を示す。1.4節では、本論文の範囲で解決できなかった問題や今後検討が必要となる論点について確認し、本論文が達成した成果と本論文に残された課題の範囲について明らかにする。

#### 1.1 統語的述語名詞という分類の妥当性

まず、1.1節では、統語的述語名詞という分類の妥当性について確認する。2章で議論を行った通り、統語的述語名詞として認定した形式群は、(1)のように形態論的に名詞と同様にふるまう。

- (1) a. 点きっぱなし {の/\*な} ランプ
- b. 採れたて {の/\*な} 山菜
- c. 冷えすぎ {の/\*な} ジュース

ただし、統語的述語名詞は名詞といっても、(2) のように、「この/その」という決定詞に相当する形式や「こんな/そんな」という修飾語を伴うことができない。この特徴は、(3) のように項を為す典型的な名詞とは異なったものである。

- (2) a. \*窓が {この/こんな} 開けっぱなしだった。
- b. \*パンが {その/そんな} 焼きたてだった。
- (3) a. 太郎は {この/こんな} 子供だった。
- b. 太郎は {その/そんな} 学生だった。

続いて、3章～5章で議論した通り、統語的述語名詞は統語論的に2種類の補文構造を持つ。詳細な補文構造については1.2節で確認するが、統語的述語名詞には、(4) のように動詞の項がそのまま主語として生起する上昇構造と(5) のように他動詞の目的語となる内項が主語として生起する内項主語構造の2種類の補文構造が存在する。(5) の内項主語構造においては、主語が名詞述語文の主語として、コピュラ句に基底生成される。

- (4) a. [<sub>VP</sub> プリンが冷え]すぎだ
- b. [<sub>VP</sub> 子供が歩き]すぎだ
- c. [<sub>VP</sub> 子供がプリンを食べ]すぎだ
- (5) [<sub>CopP</sub> プリンが[<sub>NP</sub> 冷やしすぎ]だ]

更に、2章で議論を行った通り、統語的述語名詞は共通した意味論的性質を持つ。状態性を持ち、(6)～(7) のように内部の動詞句のイベントを数え上げることができない。

- (6) a. \*雨が2回降りっぱなしだ。
- b. \*パンが2回焼きたてだ。
- (7) a. 雨が2回降り続けた。
- b. パンが2回焼き終わった。

また、統語的述語名詞は意味論的にアスペクト意味とその周辺的な意味を持つ。阿久澤(2019)における統語的複合動詞の整理に倣うと、「-ぱなし」や「-まくり」は継続、「-たて」は完了、「-すぎ」や「-放題」は過剰、「-かけ」は予期、「-気味」は習慣、といった意味を持つものと考えられる。

この状態性とアスペクト性は、4章と5章で議論を行った通り、統語構造に応じて2パターンの意味解釈としてあらわれる。まず、上昇構造の場合は、(8)～(10)のように

それぞれの語彙に応じて幅広い意味を示す。このような意味の分布は外項を主語とする文においてわかりやすく、アスペクト形式であるテイル形があらわす様々な意味とも共通している。

- (8) a. 太郎はグラウンドを走りっぱなしだ。(進行)
- b. 太郎はまだその本を読みかけだ。(進行)
- (9) a. 太郎は部屋の電気を点けっぱなしだ。(維持)
- b. 太郎は免許を取りたてだ。(完了)
- c. 太郎は朝っぴらから酒を飲みすぎだ。(完了)
- (10) a. 太郎は(いつもいつも)酒を飲みすぎだ。(反復)
- b. 太郎は仕事をサボり気味だ。(反復)

一方で、内項主語構造の場合は、意味論的に結果状態の焦点化が起こるため、述語の意味が結果に関わる意味に制限される。そのため内項主語構造においては、「-すぎ」が頻度(反復)をあらわすような(11)の文は成立せず、(12)のように結果状態をあらわす意味解釈のみが成立する。

- (11) a. 最近、宿舍の水道が止まりすぎだ。(上昇構造：頻度)
- b. \*最近、宿舍の水道が止めすぎだ。(内項主語構造：\*頻度)
- (12) a. ジュースが冷えすぎだ。(上昇構造：結果状態)
- b. ジュースが冷やしすぎだ。(内項主語構造：結果状態)

このように、統語的述語名詞というグループを設定することで、複数の形式が持っている形態論的性質・統語論的性質・意味論的性質の連動関係を統一的に捉えることができるようになる。この結果は、統語的述語名詞という分類が妥当性を持ち、この分類によって日本語研究において有効な議論が可能であることを示すものである。以下に、研究課題(i)とそれに対する解答を示す。

#### 研究課題(i)

統語的述語名詞という語群を認めることで、日本語研究において有効な議論が可能であることを明示的に示す。

#### 研究課題(i)に対する解答

統語的述語名詞という語群を認めることで、形態論的性質・統語論的性質・意味論的性質が共通する形式を一つのグループにまとめることが可能となった。更に、統語構造と意味解釈の関係を示すことで、統語的述語名詞という語群が持つ形態論的性質・統語論的性質・意味論的性質が連動することを明らかにし

た。

1.2 統語的述語名詞に関する統語論的定式化

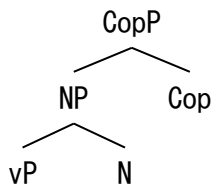
続いて、1.2 節では、本論文で行った統語論的定式化について振り返る。1 章と 2 章で述べた通り、(13) のように、項として生起するような通常の名詞が DP を持つのに対して、本論文においては述語名詞が DP を持たずにコピュラが直接的に NP を要求する構造を仮定している。

- (13)a. 典型的な名詞                      b. 述語名詞



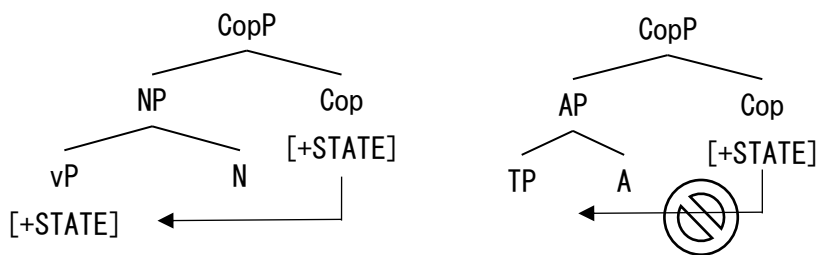
また、1 章と 2 章で確認した通り、本論文で取り扱う統語的述語名詞は、名詞述語が動詞述語を要求する構造であり、統語的述語名詞の基本的な構造が (14) のような構造であると仮定した。

- (14) 統語的述語名詞の構造



更に、2 章では、統語的述語名詞においてコピュラが持つ[+STATE]の素性が vP に継承されるという統語論的操作を仮定した。この操作を仮定することによって、統語的述語名詞が持つ状態性を統語論的に取り扱うことが可能となる。

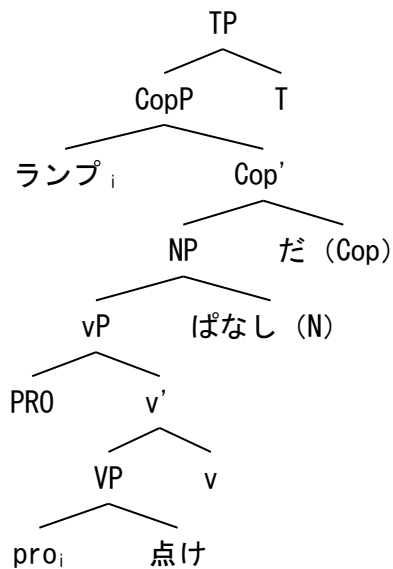
- (15)a. 統語的述語名詞                      b. 「-たい」や「-そうだ」



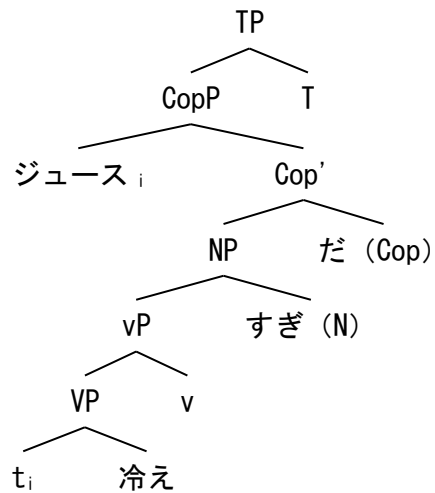


上記の議論を踏まえて、3章～5章では、統語的述語名詞の補文構造に関する議論を行った。統語的述語名詞には、(16a)の内項主語構造と(16b)の2種類の補文構造が存在する。(16)に示した2種類の構造は、(14)に示した統語的述語名詞の構造において設定されている動詞句(VP/vP)、名詞句(NP)、コピュラ句(CopP)から導かれる構造となっている。内項主語構造と上昇構造の違いは、コピュラが主語を要求するか否かによって左右されることになる。

(16) a. 内項主語構造

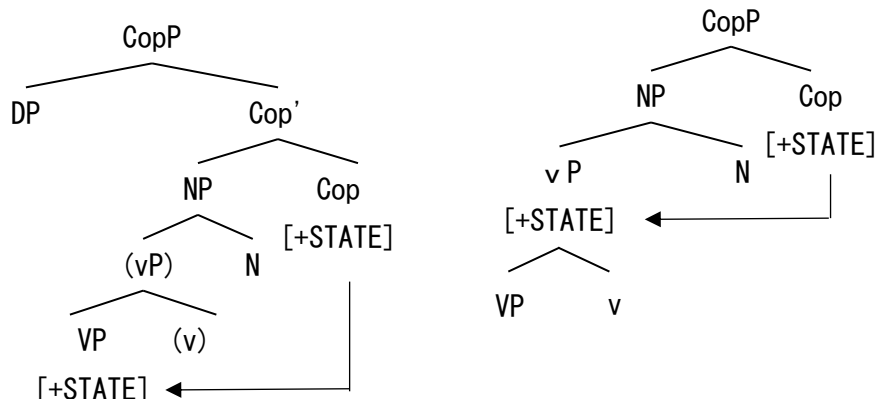


b. 上昇構造



更に、4章では、語彙概念構造上で想定される結果状態の焦点化という操作と補文構造の関係について議論を行った。本論文では、(15)における[+STATE]素性の継承に関して、内項主語構造と上昇構造で異なった操作が適用されることを仮定した。具体的には、内項主語構造のように外項の抑制が起こる場合、[+STATE]素性はvPを越えてVPまで継承される一方で、上昇構造のように外項の抑制が起こらない構造では[+STATE]の素性はvPに継承されるものと仮定した。この定式化においては、[+STATE]が構造上のより低い位置であるVPに継承される場合に限って、語彙概念構造において結果状態の焦点化という操作が適用されることになる。

- (17)a. 内項主語構造と[+STATE]      b. 上昇構造と[+STATE]



このように、本論文で行った定式化によって、統語的述語名詞に関連する現象をどのように位置づけるかについて一定の方向性を示すことができた。本論文で行った定式化には現時点で問題点や不明な点も存在するが、現象同士の関係を整理する手段としては統語論的アプローチによる定式化という目的を達成した。以下に、研究課題 (ii) とそれに対する解答を示す。

#### 研究課題 (ii)

統語的述語名詞に関連する現象について、統語論による定式化を行い、統語的述語名詞を取り扱うための基盤的分析を示す。

#### 研究課題 (ii) に対する解答

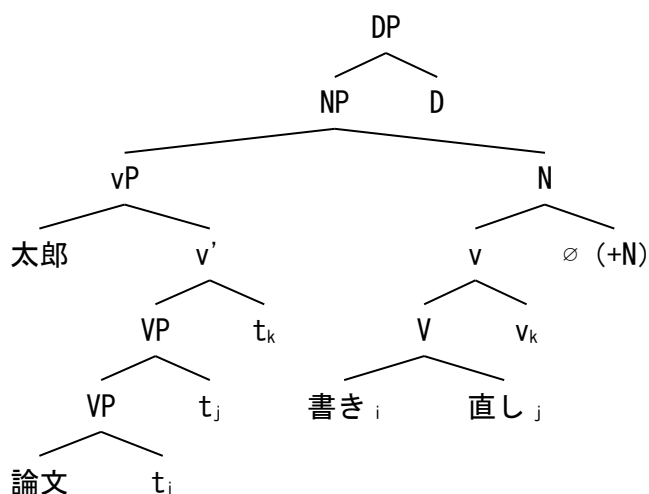
コンピュータが直接的に名詞句を要求し、名詞句が動詞句を要求する構造を仮定することで、統語的述語名詞における2種類の補文構造を取り扱うことが可能であることを示した。また、統語的述語名詞における意味論的操作に関しても、統語構造によって決定することを示した。

### 1.3 複雑述語における形態論的な名詞性と統語論的性質・意味論的性質の関係

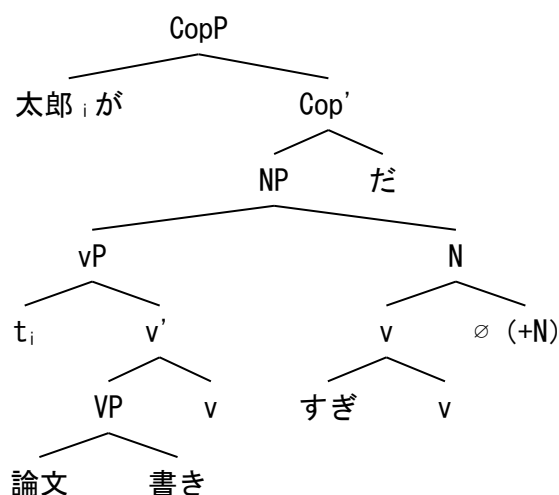
最後に、1.3節では複雑述語における形態論的な名詞性と統語論的性質・意味論的性質の関係について振り返る。特に6章では、統語的複合動詞の名詞化について取り扱うことで、統語的複合動詞の補文構造と名詞化形式の関係について議論を行った。

6章の議論では、外項を導入する統語的複合動詞が(18a)のようにDPを持つ名詞化形式を形成するが、名詞項を導入しない上昇構造の統語的複合動詞が(18b)のようにコンピュータがNPを要求する述語名詞を形成することを指摘した。

(18)a. 複雑事象名詞となる名詞化構造



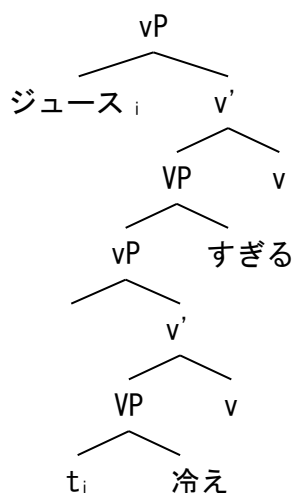
b. 述語名詞となる名詞化構造



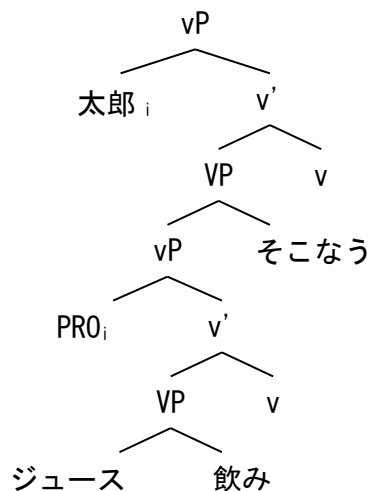
この一般化においては、統語的述語名詞を為す NP が項構造を持つ形式ではないことを示している。この一般化は、統語的述語名詞において NP の語彙的な情報が補文構造を決定しているのではなく、コピュラが主語を導入するか否かによって補文構造が決定されている分析とも整合的である。

一方で、統語的複合動詞の補文構造は、動詞が外項を導入するか否かという動詞に関する語彙的な情報によって決定する点で統語的述語名詞と異なった性質を持っていることを指摘した。(19a) の上昇構造と (19b) のコントロール構造という 2 種類の補文構造は、V2 に位置する動詞が持つ語彙的な情報によって決定されている。

(19)a. ジュースが冷えすぎる。

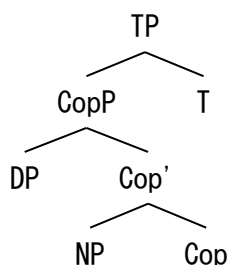


b. 太郎がジュースを飲みそこなう。

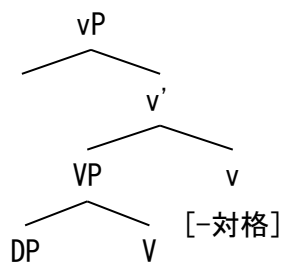


本論文では、名詞述語の補文構造と動詞述語の補文構造の間にある上記の対立に関して、単文の場合の統語構造が補文構造においても反映されているものと結論づけた。単文の名詞述語文においては (20) のように NP ではなく CopP に項が生起する一方で、単文の動詞述語文においては (21) のように vP に外項が生起する否かで非対格自動詞と他動詞が決定する。

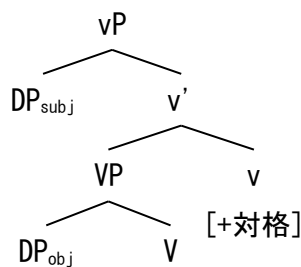
(20) 名詞述語文の構造



(21)a. 非対格自動詞



b. 他動詞



このように、本論文においては述語が持つ形態論的な動詞性や名詞性に基づいて、統語

的複合動詞・統語的述語名詞の補文構造が決定されていることを確認できた。この事実  
は、形態論的な名詞性が複雑述語の統語構造を決定していることを示唆している。

また、統語的述語名詞の意味に関しては、前述の通り、2章において統語的述語名詞  
が状態性を持つことを指摘し、4章においては内項主語構造であれば結果状態の焦点化  
を起こすことを指摘した。更に、5章において上昇構造であれば特殊な意味論的操作を  
起こさないことを指摘した。本論文においては、統語的述語名詞の状態の意味に関して  
[+STATE]の継承を仮定することによって分析を行ったが、複雑述語における名詞性によ  
って動詞句に状態性が付与されることが明らかになった。4章と5章の分析では、付  
与される状態性について外項か内項かの対立ではなく、内項主語構造と上昇構造の対立  
によって異なった状態の意味をあらわすことを示した。

このように本論文の分析では、複雑述語における形態論的な名詞性が、補文構造を決  
定し、状態の意味を付与することを明らかにした。更に、形態論的性質と統語論的性質、  
形態論的性質と意味論的性質だけでなく、統語論的性質と意味論的性質も連動している  
ことを示し、複雑述語における形態論的性質と統語論的性質、意味論的性質が強く結び  
ついていることを確認した。以下に、研究課題 (iii) とそれに対する解答を示す。

#### 研究課題 (iii)

複雑述語における形態論的な名詞性と統語論的性質・意味論的性質の関係を明  
らかにする。

#### 研究課題 (iii) に対する解答

統語的述語名詞の統語論的性質に関して、形態論的な名詞性によって複雑述語  
の補文構造が決定していることを明らかにした。統語的述語名詞の内項主語構  
造と上昇構造はコンピュータによる主語の導入の可否によって決定するが、このよ  
うな統語論的性質はコンピュータが主語を導入する単文の名詞述語文の性質によ  
来するものであることを指摘した。また、意味論的性質に関しても、形態論的  
な名詞性によって状態性が付与されることを明らかにした。更に、統語論的述  
語名詞があらわす状態の意味の性質は統語構造によっても左右されることを  
指摘した。このように、形態論的な名詞性と統語論的性質・意味論的性質は連  
動しており、統語的述語名詞が持つ性質と強く結びついていることが明らかにな  
った。

### 1.4 本論文に残された課題

1.1節～1.3節では、本論文の成果を振り返り、統語的述語名詞という分類の妥当性が  
明らかになったこと、統語的述語名詞に関する統語論的定式化を行ったこと、形態論的  
な名詞性が統語論的性質や意味論的性質と連動していることを明らかにした。しかしな  
がら、本論文の範囲において統語的述語名詞と関連する現象について明らかにできてい

ない点も数多くある。1.4 節では、本論文に残された課題を確認することで、本論文が行った議論の射程をより明確にしておく。

本論文に残された課題として、第一に (22)(23) のように、形容詞を取る述語名詞、動名詞を取る述語名詞について取り扱うことができなかつた点が挙げられる。

- (22)a. 太郎は花子に甘めだ。
- b. 太郎は花子に甘すぎだ。
- (23)a. 太郎は課題を提出済みだ。
- b. 芸能人はテレビ出演を自粛気味だ。

特に、「-済みだ」に関しては (24) のように他動詞の内項が主語となる現象が確認できる。動名詞を取る述語名詞としては、漢語の接尾辞である「-中」(cf.杉岡 2009) との関連も含めて、本論文の分析が動名詞を取る述語名詞においても適用できるか、別の分析が必要となるのか検証を行う必要がある。

- (24)a. 内部の状況は調査済みだ。
- b. あの映画の続編はまだ制作中だ。

第二に、統語的述語名詞を統一的に分析することを目的としているため、個別形式の統語論的性質や意味論的性質、形態論的性質について十分に扱うことができていない点が挙げられる。(25)(26) のように、「-放題だ」は可能や許可に相当する意味を表す場合には、目的語において主格と対格の交替が観察できるが、2章で述べた通りこの現象については本論文では除外して考え、(26) のように他の述語名詞と統一して分析できる既実現の「-放題だ」のみを扱った。

- (25)a. 嘘が誰にもバレないので太郎はいくらでも嘘をつける (ついていい)。
- b. 太郎は嘘 {が/を} つき放題だ。
- (26)a. 特に嘘をつける状況とかは関係なく太郎は嘘をつきまくった。
- b. 太郎は嘘 {が/\*を} つき放題だった。

本論文の議論においては、統語的述語名詞があるレベルで共通したふるまいを見せる点を捉えることができていますが、統語的述語名詞を体系的に取り扱うためには、統語論的に異なったふるまいを見せる (25) のような例をどのように捉えるかも重要な課題となる。

また、(27) のように「-気味だ」においては「し気味」という「する」の連用形を伴った形式が不適格となる。(28) のように「動名詞+する」だけではなく、「静かにする」の

ように「する」が形態的に独立して生起する事例においても「-気味だ」が不適格となることから、「-気味だ」が「する」の連用形を一般に取らないものと思われる。

- (27)a. 太郎は焦り気味だ。
- b. 太郎は緊張気味だ。
- c. \*太郎は緊張し気味だ。
- (28)a. 太郎が黙り気味だ。
- b. 太郎が沈黙気味だ。
- c. \*太郎が静かにし気味だ。

このような現象を踏まえると、統語的述語名詞が一般に共通する特徴を持つことは前提とした上で、「-ばなしだ」「-たてだ」「-すぎだ」「-かけだ」「-まくりだ」のように動詞由来の形式と「-気味だ」「-放題だ」のように名詞由来の形式（あるいは漢語由来の形式）の間に境界を引くことができる可能性もある。この点についても、今後の課題となる。

第三に、本論文の範囲において統語論的性質と意味論的性質の連動関係を捉えることはできたが、統語論と意味論のインターフェイスを構築できたとは言い難い点が挙げられる。特に、結果状態の焦点化と内項主語構造に関しては、動詞句のより深い位置である VP に対する[+STATE]の継承が起きるという操作を仮定して分析を行ったが、そのような分析が本論文の範囲を超えて統語構造と語彙概念構造の対応として普遍的なものとして捉えられるのか、同種の分析が適用できるような現象が存在するのかについては不十分である。本論文の範囲ではモジュール形態論の枠組みを用いたが、藤田・松本(2005)のように語彙概念構造に相当する内容を統語論で取り扱う分析の方向も含めて、本論文に関わる現象に関して統語論と意味論のインターフェイスを明示的に取り扱うことが必要となる。

このように、本論文においては統語的述語名詞に共通する特徴や現象についてその連動関係を捉えるという目的が達成されているものの、個別形式の分析や理論的分析に関しては多くの問題を残している。本論文で提示した基盤的に基づいて、残された問題についても取り扱っていく必要がある。

## 2. 展望

1 節では、序章に提示した 3 つの研究課題に応じて本論文を振り返ることによって、本論文で得られた研究成果と課題を確認した。続いて、2 節では、本論文で得られた研究成果がどのような議論に発展し得るのか、本論文に関わる展望を述べていく。

2.1 節では形態論的な名詞性の位置付けという観点から本論文の分析がどのような研究と関わりを持つか述べていく。2.2 節では文末名詞文・体言締め文との関わりという観点から、本論文の分析が異なった現象の分析とどのように関わるか述べていく。

## 2.1 形態論的な名詞性の位置付け

1節で述べた通り、本論文ではDPを持つ典型的な名詞に対して、述語名詞がDPを持たないという分析を示した。このようにDPとNPを切り離すことで、「ものの名前をあらわす」「名づけ機能を持つ」といった典型的な名詞が持つ名詞性とは異なるレベルで名詞性を捉えることが可能となったが、この分析は述語名詞以外の形式に関する位置付けを行う際にも有効である。

ここでは一例として、動名詞と形容名詞を取り上げる。影山(1993)は、「研究(する)」のように「する」を伴うことが可能な形式を動名詞、「優秀(な/だ)」のように「な/だ」を伴うことが可能な形式を形容名詞(従来的には形容動詞と呼ばれるもの)として取り扱う立場を取っている<sup>1</sup>。表1のように、影山(1993)は動詞性±、名詞性±、形容詞性±によって内容語(語彙範疇)を分類しており、形容名詞と動名詞はそれぞれ形容詞性と動詞性だけではなく、名詞性を合わせ持った形式として扱われる。

表1 動詞性・名詞性・形容詞性による品詞分類

	動詞	名詞	形容詞	形容名詞	動名詞
V (動詞性)	+	-	-	-	+
N (名詞性)	-	+	-	+	+
A (形容詞性)	-	-	+	+	-

影山(1993: 40)

確かに形態論的な活用の観点からは動名詞と形容名詞は共に名詞性を持つと考えることもできるが、動名詞と形容名詞では項として生起するか否かという点で相違がある。(29)のように、動名詞は単独で項として生起することが可能だが、形容名詞は単独で項として生起することができない。

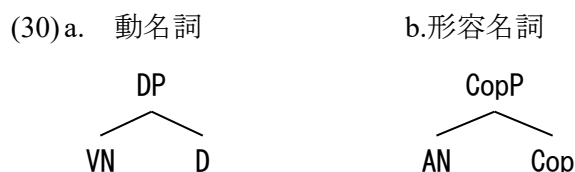
- (29)a. 太郎は次郎の研究を褒めた。  
 b. \*太郎は次郎の優秀を褒めた。  
 (cf. 太郎は次郎の優秀さを褒めた。)

このように、動名詞が典型的な名詞と同様にふるまうことができる一方、形容名詞は典型的な名詞と同様にふるまうことはできない。動名詞と形容名詞が素性として名詞性を持つと仮定したとき、この違いをどのように捉えるかは問題となる。

<sup>1</sup> 形容動詞ではなく名詞的な形容詞と捉える発想は、寺村(1982)にも共通している。寺村(1982)は名詞的形容詞という呼称を用いている。



この動名詞と形容名詞のふるまいの相違に関して、DP を持つ構造と DP を持たない構造という本論文の分析を適用することができる。形容名詞は名詞性を持っていても DP を持たない形式として取り扱うことで、動名詞とは異なった性質を持つと考えられる<sup>2</sup>。



無論、本論文で分析したように、形容名詞としてふるまう「-そうだ」のような複雑述語と述語名詞は異なった性質を持つ<sup>3</sup>。一方で、DP を持たないという点において、述語名詞と形容名詞は共通している事実を捉えることもできる。このように、本論文における形態論的な名詞性に関する分析は、述語名詞を捉えるために *ad hoc* に仮定されるものではなく、応用の余地がある分析と言える。

また、本論文では統語的複合動詞の後項動詞を動詞として捉える立場を踏襲して、統語的述語名詞の後部形式を名詞として捉える立場で研究を行った。しかしながら、統語論研究においては、統語的複合動詞の後項動詞を機能語（機能範疇）として捉える立場も存在する（cf. Fukuda 2012, 阿久澤 2018）。そのような立場を取る研究においては、「-すぎる」「-かける」のような複合動詞は V ではなく Asp として取り扱われることになる<sup>4</sup>。ここからは、本論文と異なる立場の研究に対して、形態論的な名詞性の取り扱いがどのように捉えられるかについて述べる。

「-すぎる」を動詞ではなくアスペクト形式の機能語として捉える分析に対して、本論文の分析を踏まえて再考することで、「-すぎだ」のような形式をどのように捉えるべきかという疑問が提示できる。一つの考え方として、(31) のように、TP が Asp を要求する場合に「すぎ」が形態論的に動詞のように出力され、CopP が Asp を要求する場合に「すぎ」が形態論的に名詞のように出力されるという発想があり得る。この仮定においては、形態論的な名詞性を統語論で確保する必要はない。

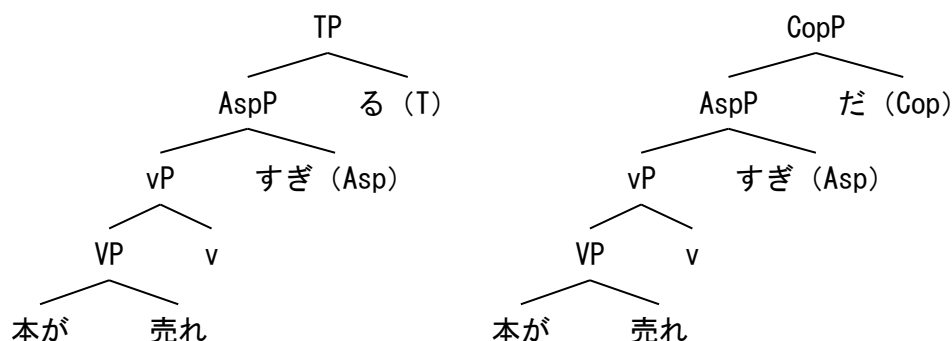
<sup>2</sup> なお、述語名詞の場合と同様に、形容名詞であっても評価や推奨を行う文脈において項として生起できる用例は存在する。

i 子供はやっぱり素直が良いよ。  
(cf. 素直な子供)

<sup>3</sup> 動名詞が「する」を伴う場合には修飾語を取らないのでその場合は DP を持たない構造を仮定するのが自然と思われる。

<sup>4</sup> Fukuda (2012) は典型的なアスペクトをあらわす「-始める」「-続ける」「-終わる」「-終わる」を取り上げている。「-すぎる」「-かける」に関して Fukuda (2012) の分析が適用できるかについては、阿久澤 (2018) を参照。

- (31)a. 本が売れすぎる。                      b. 本が売れすぎだ。



しかしながら、このような分析を採用する場合、本論文では問題とならなかったいくつかの問題点が生じる。端的に述べると、第一に CopP に AspP が生起する要因が不明瞭であり、第二に形容詞と述語名詞の違いを捉えることができなくなり、第三にアクセントも含めた形態論的な名詞性までも CopP の存在によって決定されるものとして良いのかという疑問も生じる<sup>5</sup>。

このように、統語的複合動詞を機能語（機能範疇）として捉える立場の分析を取る場合に、本論文で形態論的な名詞性として捉えたものについてどのように捉えるべきなのかは興味深い課題である。本論文の分析は統語的述語名詞を名詞として取り上げる立場によるものだが、現象同士の連動関係に関しては本論文の立場に必ずしも依存するものではない。よって、本論文の今後の発展の方向性の一つとしては、統語的複合動詞を内容語（語彙範疇）として捉える分析と機能語（機能範疇）として捉える分析に関する検証材料として統語的述語名詞を用いる可能性が挙げられる。

## 2.2 文末名詞文・体言締め文との関わり

最後に、述語名詞と関わりの深いトピックであると思われる文末名詞文・体言締め文との関係について、今後の研究の展望を述べていく。本論文の3章では、「-ばなしだ」と「-ままだ」、「-たてだ」と「-ばかりだ」、「-かけだ」と「-途中だ」の比較を行った。本論文では「-ままだ」「-ばかりだ」「-途中だ」のような形式について名詞性を持つ文末形式として取り上げたが、従来の研究では文末名詞文（新屋 1989）あるいは体言締め文（角田 1996）と呼ばれる文の文末に出現する形式に相当している。「-ままだ」や「-ばかりだ」に関しては単独で名詞として用いられないことがないため、文末名詞文や体言締め文の典型的な例とは見なされないが、述部の形態論的な品詞性のみを評価するのであれば共通した特徴を持つものと考えられる。なお、本論文で取り上げた文末形式のよう

<sup>5</sup> 2章で述べた通り、「-すぎる」と「-すぎだ」においては「すぎ」のアクセントの位置が異なっており、「-すぎだ」における「すぎ」は動詞派生名詞のアクセントを持つ。

に述語名詞として近い機能を果たすものを捉える枠組みとしては、角田（1996）による体言締め文という命名が適切と考えられるため、ここでは名詞性を持つ文末形式について体言締め文と呼称し、述語名詞との関連を述べていく<sup>6</sup>。

体言締め文の中でも本論文で取り上げた述語名詞と近い働きを見せるものは、(32)のようにアスペク的な意味をあらわし、助動詞相当の役割を果たすものである。

- (32)a. 太郎はお金を使い切る寸前だ。  
 b. 太郎は論文を書いている途中だ。  
 c. 太郎は家を出た直後だ。

しかしながら、助動詞相当の役割を果たす体言締め文は、モーダルな意味をあらわす用例が存在する点で、述語名詞と異なっている。(33)において、「つもり」「気」は意志に相当する意味を、「模様」「様子」は推定に相当する意味をあらわしている。

- (33)a. 僕は家に帰るつもりだ。  
 b. 太郎はサークルをやめる気だ。  
 c. 犯人は現場から逃走した模様だ。  
 d. 太郎はパーティに来ていない様子だ。

述語名詞はアスペク的な意味をあらわしていたが、体言締め文の文末形式はアスペク的な意味に限らない。

続いて統語論的な観点に移る。本論文では述語名詞が DP を持たないことを仮定したが、文末名詞にもこの分析が適用できるように見える現象が存在する。(34)のように、体言締め文においては連体節で起きる主格属格交替が起こらず、主語を属格で示すことができない。この現象は、体言締め文の文末形式が NP を持っているが、DP を持たない形式であるために起こる現象として分析できる可能性がある。

- (34)a. 太郎 {が/\*の} 論文を書いている途中だ。  
 b. 太郎 {が/\*の} サークルをやめる気だ。

しかしながら、同時に文末名詞が DP を持っている可能性を示す現象も存在する。(35)や(36)のように、体言締め文においては下線部の文に相当する内容を代用する表現として「その」が生起することが可能である。これは、DP が存在していることを支持する証拠とも言える。

<sup>6</sup> 文末名詞文と体言締め文の関係については、川島（2016）を参照。

- (35)a. 太郎は将来の夢を探している途中だ。  
 b. 次郎もその途中だ。  
 (36)a. 太郎は大学をやめるつもりだ。  
 b. 次郎もそのつもりだ。

ただし、この場合に出現する「その」は文を代用する表現であるため、名詞の定性と関わる決定詞「その」とは異なる可能性もある。いずれにせよ、本論文の分析を体言締め文にも適用できるかに関しては、慎重な議論が必要になる。

3章で取り上げたように、内項主語構造において統語的述語名詞と体言締め文は類似した構造を持っている。ただし、体言締め文の場合には、アスペクト的意味を持つ「-直後だ」「-途中だ」においては内項主語構造が成立する一方で、モーダルな意味を持つ「-気だ」「-様子だ」においては内項主語構造が成立しない。

- (37)a. そのポスターはまだ設置した直後だ。  
 b. その映画はまだ撮影している途中だ。  
 (38)a. \*そのポスターは設置する気だ。  
 b. \*その映画は撮影している模様だ。

その代わりに、モーダルな意味を持つ体言締め文においては、(39)のようにコントロール構造と上昇構造に相当する対立が存在することが竹沢 (2016) によって指摘されている。竹沢 (2016) は「-はずだ」や「-つもりだ」を中心に扱う研究だが、「-気だ」や「-様子だ」のような形式にも議論が適用できることを述べている。また (40) のように体言締め文におけるコントロール構造において補文と主文にそれぞれ主語が生起することも指摘されており、この事実はモーダルな意味を持つ体言締め文の内部に構造的な対立が存在していることを示している<sup>7</sup>。

- (39)a. 太郎は[ $\phi$  主役を演じる]気だ。  
 b. [太郎が主役を演じている]様子だ。  
 (40)a. 太郎は自分自身が主役を演じる気だ。  
 b. 太郎が (\*自分自身が) 主役を演じている様子だ。

統語的述語名詞においては名詞性と補文構造が連動しているが、体言締め文においてはアスペクト的意味をあらわすかモーダルな意味をあらわすかにおいても統語構造が異なる可能性があり、この点に関しても統語的述語名詞に関する議論をそのまま適用する

<sup>7</sup> 体言締め文の内項主語構造において外項が生起可能である事実と関連した現象と思われる。

のは難しいものと思われる。

更に、状態性の継承に関しても、述語名詞と体言締め文は異なっている。体言締め文の内項主語構造においては、(41)のように内部のイベントを回数表現によって数え上げることが可能であり、また(42a)のように内項主語構造であっても結果状態の焦点化を起こさず結果状態以外の意味をあらわすことが可能であり、(42b)の述語名詞とは異なった観察を示す。

- (41)a. 太郎は職を2回失ったままだ。  
 b. この映画は2回見たばかりだ。  
 (42)a. この夜景は前に見たままだった。  
 b. \*この夜景は見っぱなしだった。

前述の通り体言締め文がDPを持たないという分析には懸念点が存在するが、仮に体言締め文についてもDPを持たない分析を適用すると、統語的述語名詞の構造と体言締め文の構造は(43)のように書き分けられる。(43)においては、統語的述語名詞においてはNがvPを要求するのに対して、体言締め文においてはNPがTPを要求する。

- (43)a. 統語的述語名詞の構造                      b. 体言締め文の構造



この統語構造においては、NとNPの違いとvPとTPの違いが存在し、統語的述語名詞と体言締め文の違いはいずれかの影響を受けるものと想定される。状態性の継承に関しては、TPが存在するためvPに状態性が継承できないという分析も可能であり、NPがTPを要求するためにNがvPを要求する場合とは異なり状態性の継承が阻害されるという分析も可能である。

このように、体言締め文に関しては統語的述語名詞よりも大きな構造を持つ形式として位置付けることができる。体言締め文に関しては、日本語文法研究の対象として注目されてきたが、統語論的研究においてその位置付けが明瞭にされているとは言い難い。「-はずだ」「-そうだ」や「-つもりだ」「-気だ」の統語構造を扱う竹沢(2016)でも、それらの形式をM(odal)Pのようなモダリティ形式として扱うのか、本論文のようにNPと

して扱うのかについては明示的に述べられていない<sup>89</sup>。統語的述語名詞という小さい構造を持つ形式の分析を発展させていく形で、統語論的な位置付けが難しい体言締め文についても今後議論を切り開いていくことが期待される。

なお、文末形式としては体言締め文のほかに「-らしい」「-っぽい」「-くさい」や「-ような」「-そうな」のように形容詞性を示す文末形式も存在する。(44)(45)のように、形容詞性を示す文末形式は推定に相当するモーダルな意味をあらわしている。前述の通り、体言締め文のように名詞性を持つ文末形式はアスペク的な意味をあらわすこともあれば、モーダルな意味の中でも推定だけではなく意志をあらわすこともある。重なる部分もあるが、名詞性を持つ文末形式と形容詞性を持つ文末形式において一定程度の意味の棲みわけが存在している点が興味深い。

- (44)a. 太郎はまだ寝ているらしい。  
 b. 太郎は実家に帰ったっぽい。  
 c. アイツ、俺の嘘に気づいたくさい。
- (45)a. 太郎はまだ寝ているようだ。  
 b. 太郎は仕事をやめたそうだ。

形容詞性を持つ複雑述語の場合には、推定に限らず、(46)のようにモーダルな意味である意志や推定、(47a)のようにアスペク的な意味である習慣、(47b)のように実現性 (cf.大江 2014) に関わる難易のように様々な意味をあらわす。アスペク的な意味をあらわす統語的述語名詞も含めて、述語を持つ形態論的な品詞性が意味とどのような関わりを持つのかという点においても、複雑述語と文末形式は異なっている。

- (46)a. ぼくは水を飲みたい。  
 b. 太郎は大学をやめそうだ。
- (47)a. 太郎は仕事をサボりがちだ。  
 b. この国では、水が飲みやすい。

意味の分布に関しては、本論文のように統語論的アプローチを採用する立場でなくても興味深い課題と言える。

<sup>8</sup> 竹沢 (2016) のタイトルには「モーダル述語文」とあり、モーダルではあるが機能語ではなく述語であると読み取ることもできる。

<sup>9</sup> 田川 (2009) においては、従来モダリティ形式とされる形式の中でも「だろう」と「まい」だけが推量をあらわすという三宅 (1995) の分析を参照し、分散形態論の枠組みを用いて「だろう」と「まい」を主要部 M (odal) の具現形と見なす分析を提示している。このような分析を採用する場合、「だろう」と「まい」以外のモダリティ形式については形容詞 (A) や名詞 (N) として取り扱われる可能性もあるが、田川 (2009) にそのような言及は存在しない。

このように、本論文で取り上げた複雑述語の品詞性に関わる問題は、形は異なるものの文末形式にも共通している。文末形式の統語論的位置付け、意味の分布等、本論文の射程は複雑述語の問題から文末形式の問題へと拡大し得るものであり、より小さな構造を持つ統語的述語名詞からより大きな構造を持つ文末形式へと議論の発展が期待される。

## 参考文献

- 秋元美晴 (1998) 「文法化現象の一例：名詞「気味」から接尾辞「-気味」への変遷」『恵泉女学園大学人文学部紀要』10, pp.3-22.
- 阿久澤弘陽 (2018) 『コントロール現象の統語的・意味的分析:主文動詞と補文形式の対応関係』筑波大学博士論文.
- 阿久澤弘陽 (2019) 「複雑述語の述語形式の違いから見る構造と意味の対応関係：「Vすぎる」と「Vすぎだ」の分析」*NEWSLETTER* 28(2), pp. 39-44.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』研究社.
- 上山あゆみ (2006) 「節の構造と judgment タイプ：Where Thetic/Categorical Distinction Meets Grammar」*Scientific approaches to language* 5, pp.107-125.
- 臼杵岳 (2011) 「「ぱなし」構文：語形成と意味のミスマッチ」*KLS 31 : Proceedings of the 35th Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society*, pp.180-191.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 上』大修館書店.
- 井上次夫 (1998) 「傾向を表す表現について：～がちだ・～ぎみだ・～やすい」『奈良教育大学国文:研究と教育』21, pp.62-74.
- 王丹丹 (2008) 「任意の解釈をもつゼロ要素と代名詞の交替」『日本語文法』8(1), pp.20-35.
- 大江元貴 (2014) 『日本語と中国語の可能・難易表現に関する認知論的・語用論的研究』筑波大学博士論文.
- 大野公裕 (2018) 「第4の統語的複合動詞「終わる」：統語的複合動詞の分類再考」『メディア・コミュニケーション研究』71, pp.95-110.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版.
- 影山太郎 (2008) 「語彙概念構造 (LCS) 入門」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.1』 pp.239-264, ひつじ書房.
- 影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136, pp.1-34.
- 影山太郎 (2011) 『日英対照名詞の意味と構文』大修館書店.
- 影山太郎 (2019) 「日本語の述語膠着とモジュール形態論」岸本秀樹・影山太郎 (編) 『レキシコン研究の新たなアプローチ』 pp.1-25, くろしお出版.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社.
- 加藤重広 (2012) 「日本語における名詞性」『日中対照理論言語学の新展望3 語彙と品詞』 pp.51-76, くろしお出版.
- 川島拓馬 (2016) 「「文末名詞文」の構文的位置づけ」『語文論叢』31, pp.60-43.



- 岸本秀樹 (2000) 「非対格性再考」丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』 pp.71-110, ひつじ書房.
- 岸本秀樹 (2005) 『統語構造と文法関係』 くろしお出版.
- 岸本秀樹 (2013) 「統語的複合動詞の格と統語特性」影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端一謎の解明に向けて』 pp.143-183, ひつじ書房.
- 岸本秀樹 (2020) 「統語と語彙の研究の視点」于一楽・江口清子・木戸康人・眞野美穂 (編) 『統語構造と語彙の多角的研究』 pp.2-16, 開拓社.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』 15, pp.48-63.
- 小西正人 (2001) 「現代日本語の「～ばなし」とアスペクトの意味：動詞の意味論への予備的考察として」『京都大学言語学研究』 20, pp.119-137.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト：現代日本語の時間の表現』 ひつじ書房.
- 工藤力男 (2005) 「複合動詞論序説：とれたて・生まれたて」『成城国文学』21, pp.86-104.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店.
- 小泉政利・玉岡賀津雄 (2006) 「文解析実験による日本語副詞類の基本語順の判定」『認知科学』 13(3), pp.392-403.
- 幸田佳子 (2011) 『接尾辞「がち」と「ぎみ」について』『語学教育研究論叢』 28, pp.287-301.
- 杉岡洋子 (2009) 「「-中」の多義性：時間をあらわす接辞をめぐる考察」由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』 pp.85-104, くろしお出版.
- 志波彩子 (2012) 「4つのテキストにおける受身文タイプの分布」『コーパスに基づく言語学教育研究報告 9：フィールド調査, 言語コーパス, 言語情報学IV』 pp.233-294.
- 新屋映子 (1989) 「“文末名詞”について」『国語学』 159, pp.75-88.
- 鈴木彩香 (2017) 『属性叙述文の統語的・意味的分析』筑波大学博士論文.
- 須賀章夫 (2003) 「金田一の動詞分類の再評価：「V-ばなし」「V-ておく」の分析を通して」『人文論究』 72, pp.75-86, 北海道教育大学.
- 田川拓海 (2009) 『分散形態論による動詞の活用と語形成の研究』筑波大学博士論文.
- 田川拓海 (2010) 「連体節における状態のタの統語的分析と否定辞の統語的位置」 *KLS 30: Proceedings of the 34th Annual Meeting of The Kansai Linguistic Society*, pp.192-202.
- 田川拓海 (2017) 「接頭辞「小/大」の副詞修飾的解釈と Root 仮説」『文藝言語研究』 72, pp.83-97.
- 田川拓海 (2019) 「不定(形)としてのル形と「か」選言等位節」『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す第1巻「する」の世界』 pp.1-23, ひつじ書房.
- 竹沢幸一・John Whitman (1998) 『格と語順と統語構造』 研究社.

- 竹沢幸一 (2015) 「「見える」認識構文の統語構造とテ形述語の統語と意味」由本陽子・小野尚之 (編) 『語彙意味論の新たな可能性を探って』 pp.243-273, 開拓社.
- 竹沢幸一 (2016) 「日本語モーダル述語構文の統語構造と時制辞の統語的役割」『文法と語彙への統合的アプローチ』 pp.55-76, 開拓社.
- 谷守正寛 (2018) 「動的事態を表す名詞で締める名詞文とその主題 : 「駅は次の角を左折だ」等を中心に」『言語と文化』 (22), pp.149-171.
- 趙海城 (2016) 「傾向を表す接尾辞「~がち」「~ぎみ」について」『明星国際コミュニケーション研究』 8, pp.31-49.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版.
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」鈴木泰・角田太作 (編) 『日本語文法の諸問題 : 高橋太郎先生古希記念論文集』 pp.139-161, ひつじ書房.
- 外崎淑子 (2005) 『日本語述語の統語構造と語形成』 ひつじ書房.
- 中村愛 (2009) 「「~っぱなし」の意味・用法に関する研究」『実践國文學』 75, pp.99-114.
- 竝木崇康 (2015) 「単語と接辞の境界」『現代の形態論と音声学・音韻論の視点と論点』 pp.115-131.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房.
- 西山國雄・小川芳樹 (2013) 「複合動詞における助動詞化と無他動性」『世界に向けた日本語研究』 pp.103-133, 開拓社.
- 野田高弘 (2011) 「現代日本語の習慣相と一時性」『東京大学言語学論叢』 31, pp.197-212.
- 長谷川信子 (1999) 『生成日本語学入門』 大修館書店.
- 長谷川信子 (2009) 「直接受動文と所有受動文 : little-*v* としての「られ」とその素性」由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』 pp.433-454, くろしお出版.
- 畠山雄二・本田謙介・田中江扶 (2018) 「「放題」構文の統語構造」『日本語文法』 18(2), pp.144-151.
- 八尾由子 (2006) 「傾向を表す接辞ガチ,ギミ,ヤスイ」『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』 21(1), pp.127-139.
- 藤城浩子 (2006) 「-キリ、-ママ、-ツパナシ : その基本義と提示方法」『早稲田大学日本語教育研究』 8, pp.107-121.
- 藤田耕司・松本マサミ (2005) 『語彙範疇 (I) 動詞』 研究社.
- 藤巻一真 (2007) 「慣用句における移動と解釈の問題」 *Scientific approaches to language* 6, pp.1-12.
- 藤巻一真 (2018) 「アスペクト形式の「たて」と「かけ」の名詞的用法について」『神戸外語大学紀要』 (30) pp.93-113.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」『叙述類型論』 pp.3-18, くろしお出版.
- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』 松柏社.

- 三宅知宏 (1995) 「「推量」について」『国語学』 183, pp.86-76.
- 三宅知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェイス』 くろしお出版.
- 宮腰幸一 (2009) 「「かけ」構文と並行事象構造」『日本語文法』 9 (2), pp.36-52.
- 向坂卓也 (2014) 『動詞述語文の脱時間的表現』 関西学院大学博士論文.
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』 ひつじ書房.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店.
- 森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」 仁田義雄・益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ』 pp.57-120, くろしお出版.
- 山田昌史 (2004) 「Event 構造におけるアスペクト転換: 「たて」構文の分析」 *Scientific approaches to language* 3, pp.241-262.
- 山田昌史 (2005) 「結果の焦点化: 「たて」構文の分析」 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.1』 pp.267-293, ひつじ書房.
- 山田昌史 (2016) 「基体述語のアスペクトをきりとる接辞「たて」についての考察」『常葉大学外国語学部紀要』 32, pp.11-28.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』 ひつじ書房.
- 由本陽子 (2012) 「「動詞+過ぎる」と述語名詞としての「動詞+すぎ」」『日中対照理論言語学の新展望 3 語彙と品詞』 pp.123-143, くろしお出版.
- 由本陽子 (2017) 「部分名詞を非主要部とする複合語から見た動詞由来複合名詞の叙述性再考」『言語文化プロジェクト 2016: 自然言語への理論的アプローチ 1』 pp.87-96.
- 渡邊ゆかり (2000) 「「動詞の過去形+ままだ」述語文と「動詞の連用形+っぱなしだ」述語文の意味的相違」『広島女学院大学日本文学』 10, pp.1-20.
- Abney, Steven P. (1987) *The English noun phrase in its sentential aspect*. Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Arad, Maya. (2003) “Locality constraints on the interpretation of roots: The case of Hebrew denominal verbs.” *Natural Language & Linguistic Theory* 21, pp.737-778.
- Endo, Yoshio. (1994) “Stage/Individual nouns.” *Formal Approaches to Japanese Linguistics 1: MIT Working Papers in Linguistics* 24, pp.83-99.
- Fujimaki, Kazuma. (2005) “On the position of nominative NPs in Japanese: The possibility of nominative NPs in-situ.” *Scientific approaches to language* 4, pp.1-32.
- Fukuda, Shin. (2012) “Aspectual verbs as functional heads: evidence from Japanese aspectual verbs” *Natural Language & Linguistic Theory* 30, pp.965-1026.
- Harley, Heidi. (2005) “How do verbs get their names?: Denominal verbs, manner incorporation, and the ontology of verb roots in English.” Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport (eds.) *The Syntax of Aspect: Deriving Thematic and Aspectual Interpretation*, pp.42-64, Oxford University Press.
- Harley, Heidi. (2008) “On the causative construction.” *Handbook of Japanese linguistics*, pp.20-

53.

- Harley, Heidi and Rolf Noyer. (1999) Distributed Morphology. *Glott International* 4(4), pp.3-9.
- Hoji, Hajime, Shigeru Miyagawa, and Hiroaki Tada. (1989) "NP-movement in Japanese." *WCCFL VIII*.
- Homma, Shinsuke, Nobuhiro Kaga, Keiko Miyagawa, Kazue Takeda, and Koichi Takezawa. (1992) "Semantic properties of the floated quantifier construction in Japanese." *Proceedings of the 5th Summer Conference 1991*, pp.15-28.
- Kishimoto, Hideki. (1996) "Split intransitivity in Japanese and the unaccusative hypothesis." *Language* 72 pp.248-286.
- Kishimoto, Hideki. (2006) "Japanese syntactic nominalization and VP-internal syntax." *Lingua*, 116(6), pp.771-810.
- Koizumi, Masatoshi. (1993) "Modal phrase and adjuncts." Patricia M. Clancy (ed.) *Japanese/Korean Linguistics* 2, pp.409-428.
- Kratzer, Angelika. (1995) Stage and individual level predicates. In Gregory N. Carlson and Francis Jeffry Pelletier (eds.) *The Generic Book*, pp.125-175, Chicago: University of Chicago Press.
- Longobardi, Giuseppe. (1994) "Reference and proper names: A theory of N-movement in syntax and logical form." *Linguistic inquiry* pp.609-665.
- Marantz, Alec. (1997) "No escape from syntax: Don't try a morphological analysis in the privacy of your own lexicon," *UPenn Working paper in Linguistics*, 4(2), pp.201-225.
- Miyagawa, Shigeru. (1989) "Light verbs and the ergative hypothesis." *Linguistic Inquiry*, 20(4), pp.659-668.
- Namiki, Takayasu. (2010) "Morphological Variation in Japanese Compounds: The Case of *Hoodai* and the Notion of 'Compound-Specific Submeaning'," *Lingua* 120, pp.2367-2387.
- Nishigauchi, Taisuke. (1993) "Long Distance Passive." In Nobuko Hasegawa (ed.) *Japanese Syntax in Comparative Grammar*. pp.79-114 Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Nishiyama, Kunio. (1999) "Adjectives and the copulas in Japanese." *Journal of East Asian Linguistics*, 8(3), pp.183-222.
- Nomura, Masashi. (2005) *Nominative Case and AGREE(ment)*. Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Postal, Paul. (1969) "Anaphoric islands." *Chicago Linguistic Society* 5.
- Shimamura, Koji and Susi Wurmbrand. (2014) "Two types of restructuring in Japanese— Evidence from scope and binding." In *7th Formal approaches to Japanese linguistics*, pp.203-214.
- Sugioka, Yoko. (1985) *Interaction of Derivational Morphology and Syntax in Japanese and English*. Garland Publishing.

- Takano, Yuji. (2003) Nominative objects in Japanese complex predicate constructions: A prolepsis analysis. *Natural Language & Linguistic Theory*, 21(4), pp.779-834.
- Tsujimura, Natsuko and Iida, Masayo. (1999) “Deverbal nominal and telicity in Japanese” *Journal of East Asian Linguistics* 8, pp.107-130.
- Wurmbrand, Susanne. (2001) *Infinitives: Restructuring and clause structure*. Mouton de Gruyter.

## 既発表論文・口頭発表との関係

### 序章

新規執筆

### 第1章

新規執筆

### 第2章

新山聖也（2020）「統語的に形成される述語名詞について」『日本言語学会第160回大会予稿集』 pp.244-250.

新山聖也（2020）「「-放題だ」における〈可能〉と〈結果状態〉の分析」『日本言語学会第161回大会予稿集』 pp.292-298.

### 第3章

新山聖也（2020）「「-ばなしだ」と「-ままだ」における内項主語構造と外項の削除」*KLS Selected Papers 2* pp.71-85.

### 第4章

新山聖也（2020）「述語名詞「-すぎだ」の内項主語構造における他動詞と非対格自動詞の比較」『日本言語学会第161回大会予稿集』 pp.292-298.

### 第5章

新山聖也（2021）「「-すぎだ」における対格と属格の交替について」関西言語学会第46回大会口頭発表.

### 第6章

新山聖也（2021）「統語的複合動詞の補文構造と名詞化形式」形態論・レキシコン研究会2021（Morphology & Lexicon Forum2021）口頭発表.

### 第7章

新規執筆